板付周辺遺跡調査報告書

(15)

— 高畑遺跡第12次調査地点 —

福岡市埋蔵文化財調査報告書第210集

1989

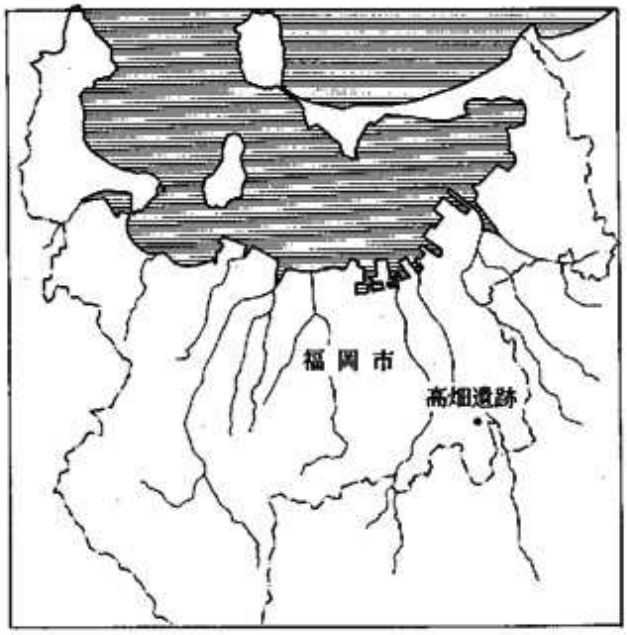
福岡市教育委員会

板付周辺遺跡調査報告書

(15)

— 高畑(たかばたけ)遺跡第12次調査地点 —

福岡市埋蔵文化財調査報告書第210集



1989

福岡市教育委員会

序

古くから大陸文化受窓の門戸として栄えてきた福岡市内には、多くの埋蔵文化財が分布しています。本市では、特に文化財の保護・活用に努めてきています。そのなかでも板付周辺は国指定板付史跡があり、重点地区として、各種の開発事業によって失われる遺跡については、記録保存のための発掘調査を行なっています。

本書もそうした遺跡の一つで、博多区板付六丁目２－９・10の一戸建住宅建設に先だって、板付周辺遺跡として、発掘調査を実施しました高畑遺跡第12次調査地点の報告書です。

発掘調査の結果、弥生時代、古墳時代の大溝が検出でき、貴重な資料を得ることができました。

山内隆氏・中牟田学氏をはじめとする関係各位のご協力に感謝の意を表しますとともに、本書が文化財理解の一助となり、広く活用されることを願っています。

平成元年３月31日

福岡市教育委員会

教育長　佐藤　善郎

例　言

1．本書は、博多区板付六丁目２－９・10の民間による宅地造成に伴う事前調査として、1986年11月17日から翌年２月８日にかけて、発掘調査を実施した高畑遺跡第12次調査の調査報告書である。

2．本書使用の遺構実測図は、山口譲治・吉留秀敏・城戸康利・李弘鐘・上方高弘・牟田裕二があたった。

3．本書使用の遺物実測図は、土器を城戸、木器を山口譲治・井手かすみ・犬丸陽子・木村絹子・藤野洋子が行なった。

4．本書使用の遺構写真は、山口譲治・上方が、遺物写真は、上方・浜石哲也が撮影したものである。

5．本書使用の図面の整図は、土器を城戸、木器・遺構図を山口譲治・山口朱美・石田晴美が行なった。

6．本書使用の方位は磁北である。

7．本書の執筆は、出土土器については城戸、他の執筆および編集は山口譲治があたった。

8．本調査出土遺物および調査記録は、福岡市埋蔵文化財センターで一括収蔵・保管し、公開して活用していく。

本 文 目 次

第1章 序 説
1．はじめに……1
2．板付遺跡とその周辺遺跡の調査……1
3．調査体制……2
第2章 遺跡の位置と歴史的環境
1．遺跡の位置と立地……3
2．周辺の遺跡と歴史的環境……3
第3章 調査の概要
1．発掘区の設定……9
2．調査の概要……9
第4章 調査の記録－弥生時代－
1．第3号溝と付設遺構……11
2．第3号溝出土土器……12
3．第3号溝出土木器……35
4．第3号溝出土石製品……38
5．その他の弥生時代土器……41
第5章 調査の記録－古墳時代－
1．大溝について……43
2．第1号溝上層出土土器……44
3．第1号溝上層出土木器……53
4．第1号溝上層出土石製品……86
5．第1号溝下層出土土器……86
6．第2号溝出土土器……94
7．第2号溝出土木器……95
8．その他の古墳時代遺物……98
9．その他の遺構と出土遺物……99
第6章 結 章
1．出土土器について……101
2．出土木器について……104
3．まとめ……108

挿 図 目 次

Fig. 1　遺跡の位置と周辺の遺跡 …… 4
Fig. 2　板付遺跡および周辺遺跡調査地点位置図 …… 6
Fig. 3　調査地点地形図 …… 8
Fig. 4　検出遺構配置図および第1号溝遺物出土状態 …… (付図)
Fig. 5　第3号溝付設遺構実測図 …… (付図)
Fig. 6　第1～3号溝土層断面図 …… 10
Fig. 7　第3号溝出土土器実測図 (1) …… 13
Fig. 8　第3号溝出土土器実測図 (2) …… 14
Fig. 9　第3号溝出土土器実測図 (3) …… 17
Fig. 10　第3号溝出土土器実測図 (4) …… 18
Fig. 11　第3号溝出土土器実測図 (5) …… 19
Fig. 12　第3号溝出土土器実測図 (6) …… 20
Fig. 13　第3号溝出土土器実測図 (7) …… 21
Fig. 14　第3号溝出土土器実測図 (8) …… 23
Fig. 15　第3号溝出土土器実測図 (9) …… 24
Fig. 16　第3号溝出土土器実測図 (10) …… 25
Fig. 17　第3号溝出土土器実測図 (11) …… 26
Fig. 18　第3号溝出土土器実測図 (12) …… 28
Fig. 19　第3号溝出土木器実測図 …… 36
Fig. 20　第3号溝出土建築材実測図 (折込み) …… 37
Fig. 21　木器計測区分 (1) …… 39
Fig. 22　木器計測区分 (2) …… 40
Fig. 23　第3号溝出土石器実測図 …… 41
Fig. 24　その他の弥生時代土器実測図 …… 42
Fig. 25　第1号溝上層出土土器実測図 (1) …… 45
Fig. 26　第1号溝上層出土土器実測図 (2) …… 46
Fig. 27　第1号溝上層出土土器実測図 (3) …… 47
Fig. 28　第1号溝上層出土土器実測図 (4) …… 49
Fig. 29　第1号溝上層出土土器実測図 (5) …… 50
Fig. 30　第1号溝上層出土土器実測図 (6) …… 51
Fig. 31　第1号溝上層出土土器実測図 (7) …… 52

Fig. 32　第1号溝上層出土鍬類実測図 (1)……54
Fig. 33　第1号溝上層出土鍬類実測図 (2)……55
Fig. 34　第1号溝上層出土鍬類柄実測図 (1)……56
Fig. 35　第1号溝上層出土鍬類柄実測図 (2)……58
Fig. 36　第1号溝上層出土鋤類実測図……59
Fig. 37　第1号溝上層出土杁および大足実測図……60
Fig. 38　第1号溝上層出土槌および竪杵実測図……61
Fig. 39　第1号溝上層出土槌および鉄斧柄実測図……62
Fig. 40　第1号溝上層出土鉄斧柄および鉄鎌柄実測図……64
Fig. 41　第1号溝上層出土槌未製品および目盛り板実測図……65
Fig. 42　第1号溝上層出土編錘実測図……66
Fig. 43　第1号溝上層出土紡織具および加工材実測図……67
Fig. 44　第1号溝上層出土儀器類実測図 (1)……68
Fig. 45　第1号溝上層出土儀器類実測図 (2)……69
Fig. 46　第1号溝上層出土板材実測図 (1)……70
Fig. 47　第1号溝上層出土板材実測図 (2)……72
Fig. 48　第1号溝上層出土板材実測図 (3)……73
Fig. 49　第1号溝上層出土板材実測図 (4)……74
Fig. 50　第1号溝上層出土板材および加工材実測図……75
Fig. 51　第1号溝上層出土加工材実測図……76
Fig. 52　第1号溝上層出土建築材実測図……77
Fig. 53　第1号溝上層出土建築材および杭実測図……78
Fig. 54　第1号溝上層出土削り屑およびその他の木製品実測図……79
Fig. 55　第1号溝上層出土石製品実測図……86
Fig. 56　第1号溝下層出土土器実測図 (1)……87
Fig. 57　第1号溝下層出土土器実測図 (2)……88
Fig. 58　第2号溝出土土器実測図……94
Fig. 59　第2号溝出土木製農具実測図……96
Fig. 60　第2号溝出土木製品実測図……97
Fig. 61　その他の古墳時代土器実測図……98
Fig. 62　本遺跡出土縄文時代土器拓影図……99
Fig. 63　本遺跡出土土器編年図……100
Fig. 64　異形土師器参考資料……103

Fig. 65　鍬類形態分類 …… 104
Fig. 66　農具変遷模式図 …… 106
Fig. 67　高畑遺跡各調査地点検出遺構関連図 …… 108

表　目　次

Tab. 1　第3号溝出土土器一覧表 …… 28
Tab. 2　第3号溝出土木器一覧表 …… 38
Tab. 3　第1号溝上層出土木器一覧表 …… 80
Tab. 4　第1号溝出土土器一覧表 …… 90
Tab. 5　第2号溝出土土器一覧表 …… 95
Tab. 6　第2号溝出土木器一覧表 …… 98

図　版　目　次

PL. 1　(1) 周辺現況(東から)　(2) 調査区全景(西南から)
PL. 2　(1) 第1号溝上層遺物出土状況(南から)　(2) 第1号溝上層遺物出土状況(北から)
PL. 3　(1) 第1号溝上層遺物出土状況近景　(2) 小形模造船出土状況
PL. 4　第1号溝上層出土鍬類
PL. 5　第1号溝上層出土鍬類柄および鋤類
PL. 6　第1号溝上層出土杵・大足・紡織具
PL. 7　第1号溝上層出土編錘・竪杵・工作台
PL. 8　第1号溝上層出土槌・鉄斧柄・鉄鎌柄
PL. 9　第1号溝上層出土小形模造船
PL. 10　第1号溝上層出土武器・樋・板材
PL. 11　第1号溝上層出土板材および加工材
PL. 12　第1号溝上層出土建築材
PL. 13　(1) 第1号溝上層完掘状況(北から)　(2) 第1号溝上層完掘状況(南から)
PL. 14　(1) 第2号溝遺物出土状況(北から)　(2) 第2号溝完掘状況(北西から)
PL. 15　第2号溝出土木器
PL. 16　第2号溝出土把手付容器
PL. 17　(1) 第3号溝護岸および堰検出状況(南から)　(2) 第3号溝護岸および堰検出状況(東から)
PL. 18　(1) 第3号溝護岸施設状況 (東から)　(2) 第3号溝堰杭群状況 (南から)
PL. 19　第3号溝出土木器
PL. 20　出土土器・石製品

第1章　序　説

1．はじめに

博多区板付六丁目２－９・10に、一戸建住宅建設が計画された。この地は、高畑廃寺の東側に隣接する餅田(もちだ)生産遺跡（現在、高畑遺跡に包括）内の中央部に位置している。同地周辺は、標高9.8m前後の沖積地で、周辺も水田が残っている。六丁目２－10・２－９の地権者である山内隆・中牟田学両氏により、1986年２月３日に、遺跡有無の確認申請が埋蔵文化財課（以下、埋文課）に提出され、埋文課では、同年３月11日に試掘調査を実施した。

試掘調査は、山内氏所有地中央部に、周辺の土地区画に平行して東西に長いトレンチを設定して行なわれた。その結果、地表面下約60cmで、２条の平行する大溝が検出され、古墳時代前半期の土師器、木製品が出土した。この大溝は、規模および遺物の出土状態から第４・７・10次調査で検出している古墳時代大溝の連続部と考えられた。大溝は、宅地造成予定地を南北方向に横断すると考えられる。また、高畑廃寺に隣接していることから、同廃寺関連遺構の分布も予想された。以上のことから埋文課では、全面的な発掘調査が必要であると決定した。

以上の調査決定を受け、山内隆・中牟田学両氏と埋文課は協議を重ね、調査費用・調査期間・出土遺物の扱いなどの契約事項が整い、調査契約が成立した。なお、埋文課では、調査成果をあげるため国庫補助も受けることにした。

本調査は、試掘調査結果に基づき、古墳時代大溝の解明および本地における各時期の様相把握を目的として、1986年11月17日から翌年２月８日にかけて約３ケ月間実施した。

遺跡調査番号	8649	遺跡略号	ＴＫＢ－12		
調査地地籍	博多区板付六丁目２－９・10		分布地図番号	24－Ａ－９	
開発面積	910㎡	調査対象面積	910㎡	調査実施面積	600㎡
調査期間	1986年11月17日～1986年２月８日				

2．板付遺跡とその周辺遺跡の調査（Fig. 2）

史跡板付遺跡を含む板付遺跡は、範囲確認および各時代各時期の様相解明のため、また、隣接する高畑遺跡・諸岡遺跡の様相解明のため、公共事業・民間の開発行為を問わず、事前の緊急調査を実施している。

1986年度までの調査地点については、報告されているので、ここでは、1987・1988年度調査地点について、報告しておく。

高畑遺跡第13次調査　板付六丁目１－37他の1,228㎡に瀬戸秀三氏によって共同住宅が建設されることになり、1987年４月28日から５月30日まで約１ケ月間、484㎡について調査を実施した。

板付遺跡Ｈ－８・９調査地点　板付四丁目４－４の1,119㎡に金子久年氏によって共同住宅が建設されることになり、192㎡について、1987年６月12日から７月13日まで約１ケ月間調査を実施した。

板付遺跡Ｈ－５ｄ調査地点　板付二丁目10－13の800㎡に板付北小学校用地が拡張されることになり、127.7㎡について、1987年11月９日から翌年１月30日にかけて約３ケ月間調査を実施した。

史跡板付遺跡　1975年、板付遺跡内の中央台地および西側に広がる水田址（2.7ha）が指定され、本市では1973年以来買収を進め、1985年に終了した。本史跡の整備を行なうに先だち、1988年12月22日から整備に伴う事前調査を開始した。

２．調査体制

調査体制として、以下に示す組織を構成した。緊急調査のため充分なる体制を組むことはできなかったが、調査依託者である山内隆・中牟田学両氏をはじめ、関係各位の協力のもとに発掘調査および整理作業は順調に進行したことを明示して、協力者に謝意を表する。

調査主体	福岡市教育委員会文化部埋蔵文化財課第２係
	教育長　佐藤善郎　文化部長（前）　河野清一　文化部長（現）　川崎賢治
	埋蔵文化財課長　柳田純孝　第１係長　折尾学　第２係長　飛高憲雄
調査担当	山口譲治・吉留秀敏
試掘調査担当	山崎純男（文化財主事）　杉山富雄（現第１係）
事務担当	松延好文
調査補助員	李弘鐘（九州大学大学院）・城戸康利・上方高弘・牟田裕二
調査・整理協力者	星子輝美・尾崎君枝・山崎美枝子・坂井昭美・甲斐田嘉子・松本直子・井手かすみ・木村絹子・犬丸陽子・藤野洋子・石田晴美・山口朱美・屋山洋・大塚恵治

なお、遺物整理および報告書作成にあたって、渡辺誠（名古屋大学教授）・立平進（長崎県立美術博物館学芸員）・山田昌久（筑波大学助手）各氏よりご教示を得た。記して謝意を表したい。

第２章　遺跡の位置と歴史的環境

１．遺跡の位置と立地（Fig.１・２）

福岡平野は、平野東部を北流する御笠川・平野中央部を北流する那珂川によって形成されている。両河川の中流域から上流にかけては多くの支流があり、各支流間には北へ延びる中・低丘陵が多くみられる。御笠川は、中流域で支流である諸岡川と分岐し、大きく東へ蛇行している。御笠・諸岡両河川間には、標高15m前後の帯状の丘陵が北へ延び、さらに北側には島状をなす標高11m前後の板付台地がある。これらの丘陵、台地の東側・西側は標高12.5mから北に向かって８m前後まで下がる沖積地となり、水田地帯となっている。

高畑遺跡は、御笠川中流域の同河川支流諸岡川との間に所在する丘陵北端部（標高12m前後）に位置する高畑廃寺を中心として、丘陵東側沖積地（標高９m前後）に広がる遺跡である。本調査地点は、約15haの広さをもつ高畑遺跡の中央部に位置し、高畑廃寺の40m北の標高9.8mの沖積地にあたる。また、本調査地点は、国土地理院発行の５万分の１地形図（福岡）の北から24cm、東から7.5cmの位置にあたる。

２．周辺の遺跡と歴史的環境（Fig.１・２）

本調査地点では、以下の章で述べるように、弥生時代後半から同時代終末と古墳時代前半期の用水路と考えられる大溝を検出した。ここでは、本遺跡を中心とした歴史的環境について、弥生時代・古墳時代の生産遺跡を中心としてみていくことにする。

(1)　水稲耕作開始前

本調査地点では、後述するように、先土器時代ナイフ形石器文化期の台形石器、縄文時代前期・後期の土器が出土している。先土器時代の遺跡としては、本遺跡と諸岡川を挟んで対峙した諸岡丘陵に所在する諸岡遺跡、本遺跡から約２km西の須玖丘陵先端部に所在する井尻Ｂ遺跡があり、ナイフ形石器文化期・細石刃文化期の包含層が検出されている。また、板付・那珂君休・那珂・井相田Ｃ遺跡でも本時代の遺物が出土している。本時代の遺物は、新期上部ローム層中に包含されている。板付遺跡など、標高10～15mの丘陵地では台地が削平されており、良好な包含状態の出土例はない。しかし、ナイフ形石器文化期・細石刃文化期の人の生活があったことは、これまでの遺物の出土量から想定できる。

本遺跡を含む４km四方内での縄文時代の遺物出土例として、板付遺跡で早期の包含層が検出されているほかは、那珂君休遺跡・諸岡遺跡で早期の遺物が単発的に出土しているのみで希薄であるといえよう。こうしたなかで、本遺跡での比較的摩滅の少ない前期の轟式土器の出土は、

1．高畑遺跡
2．諸岡遺跡
3．諸岡館址遺跡群
4．板付遺跡
5．那珂君休遺跡
6．那珂深ヲサ遺跡
7．那珂八幡古墳
8．那珂遺跡群
9．剣塚古墳
10．比恵遺跡群
11．井尻B遺跡
12．三筑遺跡
13．麦野遺跡
14．井相田C遺跡
15．仲島遺跡
16．南八幡遺跡群
17．永田遺跡
18．唐梨遺跡
19．須玖岡本遺跡
20．岡本四丁目遺跡
21．赤井手遺跡
22．伯玄社遺跡
23．西平塚遺跡
24．臼佐遺跡
25．弥永原遺跡
26．老司古墳
27．野多目拾波遺跡
28．野多目遺跡
29．三宅廃寺
30．博多遺跡群
31．堅粕遺跡群
32．赤穂ヶ浦遺跡
33．宝満尾遺跡
34．金隈遺跡

Fig. 1　遺跡の位置と周辺の遺跡

周辺に同時期の遺跡を想定できる。先土器時代・縄文時代については、良好な資料の検出・増加を待ちたい。

(2) 弥生時代

1978年、板付遺跡G－7a・7b調査地点での突帯文土器期の水田址検出は、日本における水稲耕作史研究の新時代を画するものであった。現在、本地域を中心とする地域では、板付遺跡で突帯文土器期から弥生時代前期・後期前半、野多目遺跡で突帯文土器期から弥生時代前期、那珂君休遺跡で弥生時代後期の水田址が検出されている。

板付遺跡では、G－7a・7b調査地点で突帯文土器期から弥生時代前期の水田址3面が検出されている。突帯文土器期の水田は、用水があり、用水に井堰を設け、取排水施設をもつ技術としても高度なものであった。弥生時代前期の水田址は、板付台地西側台地際を北流する自然流路に井堰を設けており、さらに高度なものとなっている。また、前時期までは、板付中央台地西側の狭い地域のみで水稲耕作が行なわれていたと考えられるが、弥生時代前期になると同台地東側でも水田が営まれている（E－5b調査地点）。また、西側は、台地から約70m離れた地域まで水田が拡大している（1971～1973年の板付遺跡の調査で杭列確認）。弥生時代後期前半になると、H－8・9調査地点で水田址を検出している。板付台地を取り巻く沖積地で水田が営まれていたと考えられる。

那珂君休遺跡では、4次にわたる調査が実施されており、後期の水田およびアーチ状の井堰が検出されている。第3次調査では、水田址と旧河川に直交する6条のアーチ状の井堰や取排水施設に関連すると考えられる杭列、水田址が検出されている。

本遺跡では、後述するように、終末期の旧河川に直交するアーチ状の井堰、井堰を補強すると考えられる護岸施設を検出した。

以上、本地域における弥生時代の水田に関連する水利施設を中心に概観してきたが、まだ、部分的な検出しか行なっていないので、詳細については分からない。現時点で、分かっていることをまとめてみることにする。突帯文土器期は、板付遺跡・野多目遺跡の調査結果から、河川から直接水を水田に入れることができなくて、河川から幅2m前後の用水溝を引き、この用水溝に井堰を設け、水田に水を入れたと考えられる。弥生時代前期に入ると、板付遺跡での調査結果から河川に直交する井堰を設け、水を入れるようになっている。この時期の井堰は直線的なため、水の抵抗を受けやすく、2m前後の幅をもっている。後期になると、那珂君休遺跡・本遺跡でみられるように、旧河川の井堰は流路に対して直交しながらもアーチ状をなし、両岸の井堰取り付け部には護岸施設が設けられている。これは水の抵抗を少なくするためと思われる。

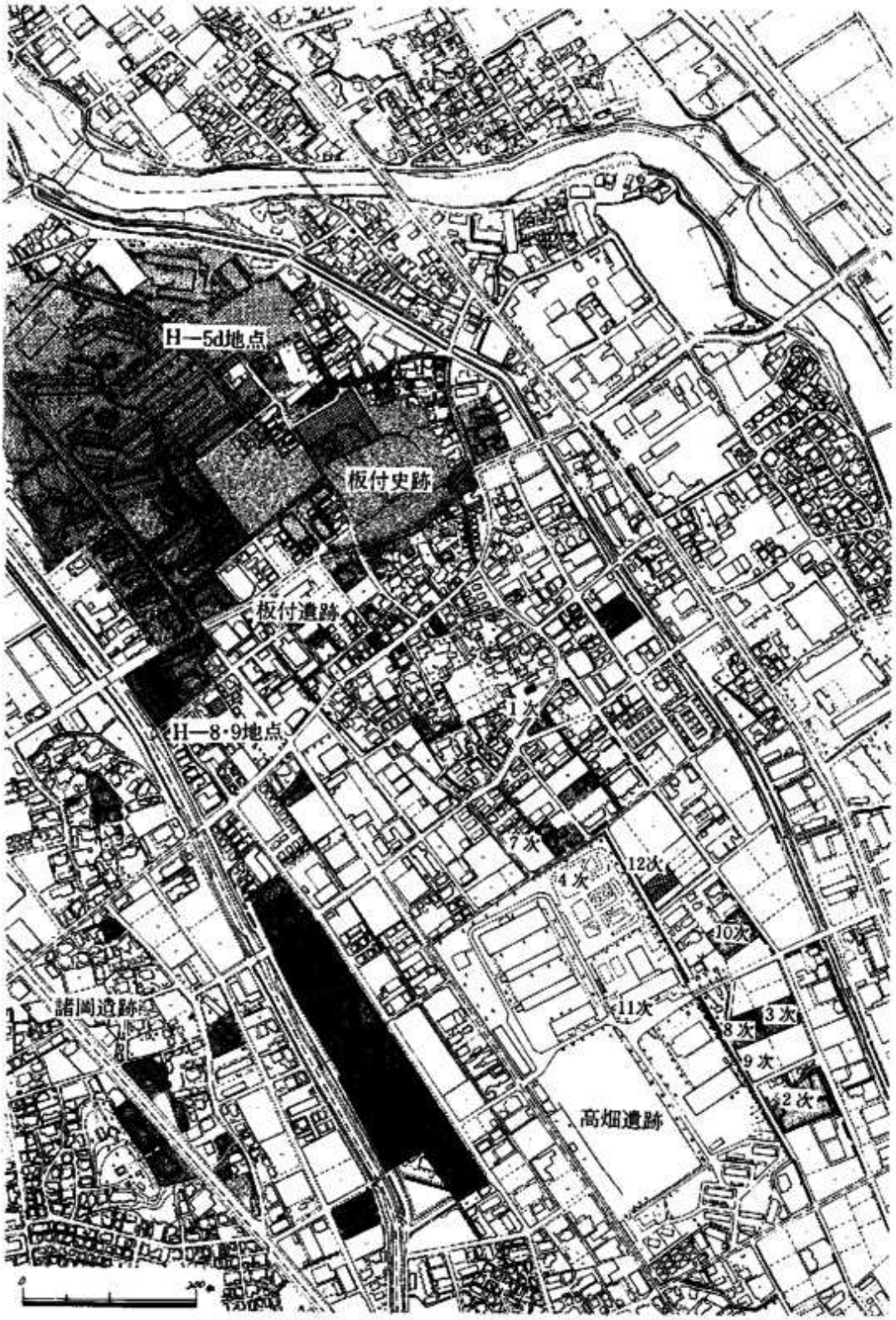


Fig.2　板付遺跡および周辺遺跡調査地点位置図

(3) 古墳時代

本地域では、那珂君休遺跡第２次調査・三筑遺跡で水田址が検出されており、那珂君休遺跡第４次調査では河川を利用した井堰が検出されている。ここでは、本調査地点検出の河川利用の古墳時代大溝について、他調査地点を中心に概要を述していくことにする。

第４・７次調査地点は、隣接しているので、同時に触れる。大溝は、幅５～６ｍで80cm前後の深さをもち、蛇行して北へ延びている。この大溝からは、多量の流木・木製品・土師器が混在して、流れ込んだ状態で出土したが、付属施設はない。木製品としては、二又鍬・三又鍬・竪杵・槌・編錘・樋・斎串状のもの・弓・櫛・ねずみ返し、柄をもつものなどの建築材がある。また、土器は、小形丸底壺・高坏が多く、そのほか壺・甕・鉢がある。

第10次調査では、大溝はＬ字状に東に折れる令制期大溝に切られているが、幅14ｍで北北東に流路をとっている。溝中央部では、1.3mの深さをもっている。遺物は西岸に集中し、多量の流木・木製品・土師器が出土している。遺物は間層を挟み、上下層に分けられる。上層上部では、須恵器も出土している。木製品は鍬類が多く、ナスビ形木製品・鋤・竪杵・槌・柄類などがある。

本調査区は、第４・７次と10次調査地点間が約250ｍあるが、ほぼ中間点に位置している。北側は第７次調査地点での成果から、板付南台地の東側へ抜けていくと考えられるが、まだ、確認されていない。

このほか、本地域では三筑遺跡で弥生時代から古墳時代にわたる幅４～６ｍ、深さ１～1.5mの川、井堰、水田址が検出されている。那珂君休遺跡第４次調査では、アーチ状の堰が検出されている。

以上、本地域での古墳時代における歴史的環境について生産遺跡を中心にみてきたが、ここで、居住地についてみてみることにする。前時代の弥生時代においては、板付台地（板付遺跡）・諸岡台地（諸岡遺跡）・麦野丘陵北端部（高畑遺跡）に住居址・井戸・貯蔵穴・墓地からなる集落が営まれている。しかし、古墳時代に入ると、板付遺跡で住居址が検出されているものの集落としては小規模のものとなっている。本遺跡の東300ｍに位置する仲島遺跡は、御笠川西岸の微高地上に所在し、古墳時代の住居址がみられるが、大集落といえるものではない。以上から本地域では、台地上に小規模の集落が散在し、台地周辺の沖積地は水田が営まれていたと考えられる。

以後、古代に入ると、麦野丘陵北端部に寺があり（高畑廃寺）、本遺跡の東200～300ｍには仲島遺跡・井相田Ｃ遺跡と官道に沿ったと考えられる集落が営まれている。

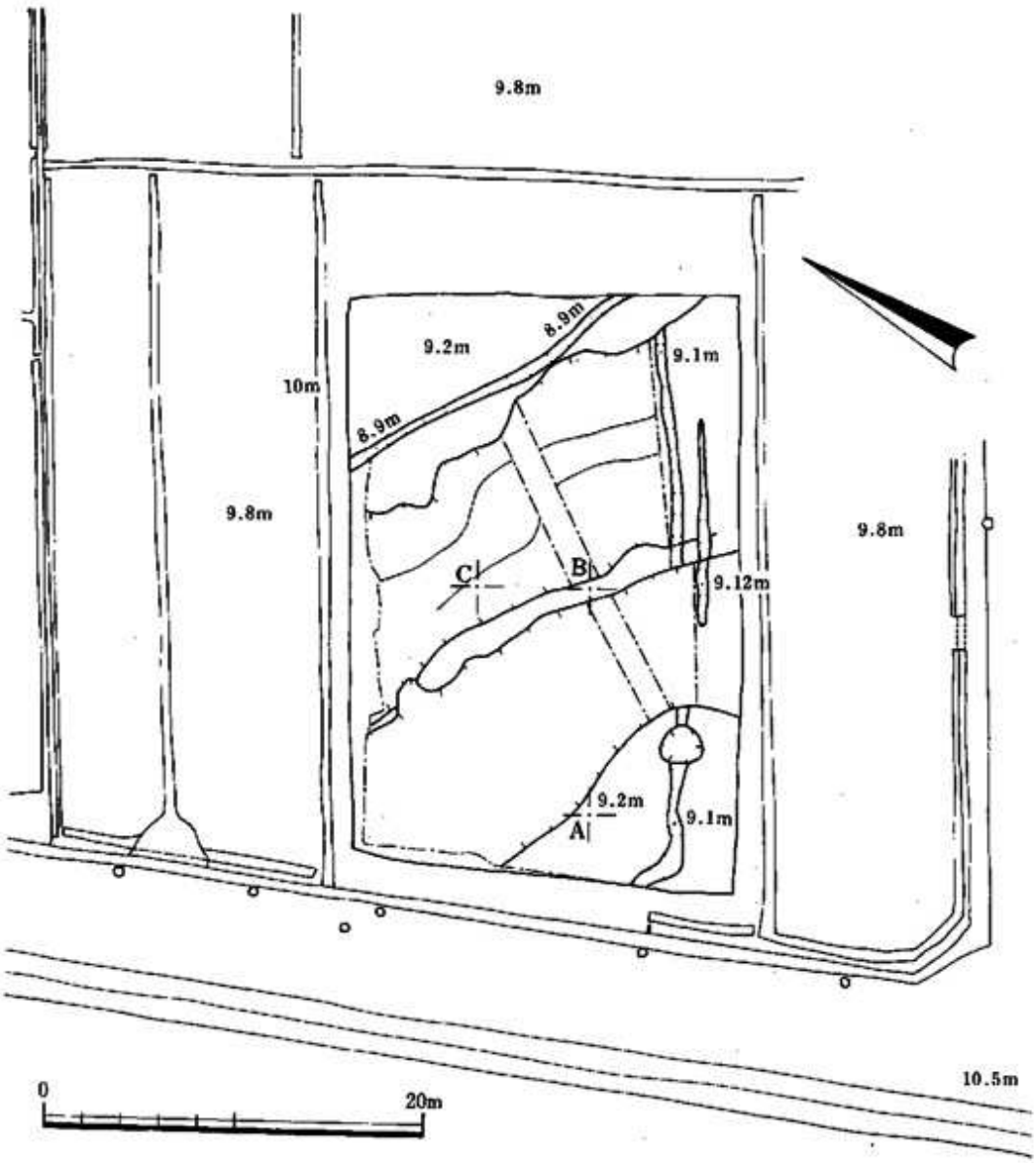


Fig.3　調査地点地形図

第３章　調査の概要

１．発掘区の設定（Fig. 3）

発掘対象地は、試掘調査によって、一戸建住宅建設計画地全域で、南側がやや広い台形状をなしている。また、現状は西側に北北西に走る幅６ｍの道路があり、他の３面は水田となっている。調査対象地は、宅造計画地全域であるが、西側に高畑廃寺が所在する丘陵が延びており、丘陵東台地際の検出が予想できたので、西側を可能な限り調査することにした。しかし、北・南側の水田を結ぶ用水管が本調査地と道路間にあり、道路から２ｍの引きをとった。また、北・南側は、試掘調査結果から大溝が深くなる可能性があったため、それぞれ１ｍの引きをとった。東側は、プレハブ設置および廃土置き場として６ｍの引きを取り、東西南北の限界を設定して、調査区を設定した。調査中、廃土量が多くなり、プレハブは永松好伸氏のご協力により、南側の水田に設置させていただいた。ご協力に感謝したい。

検出遺構については、溝状遺構はSD、土坑をSKとして検出順に通し番号を付した。なお、本文中では遺構名と遺構記号を併記していく。また、出土遺物については、本文中では便宜上、土器を１から、木器を501からの通し番号とし、その他の石器、石製品を901からの通し番号とした。また、土器・木器については、遺構ごとに遺物登録番号順に一覧表を掲載しており、本書使用番号も併記している。なお、遺物登録番号は、土器は864900001～、木器は864910001～となっている。

２．調査の概要（Fig. 4）

発掘は、20cmの現代水田耕土・10cmの床土・30cmの黒灰色粘質土を除去することから始めた。黒灰色粘質土を除去した面は遺構検出面で、調査区南西部は青灰色粘質土（八女粘土層）、北東部は灰色砂層となっている。調査区中央部に、北西に向きをとる幅７ｍと８ｍの２条の溝が検出できた。この遺構検出面の標高は9.5ｍである。

最初の遺構検出面では、前述の２条の溝（SD－１・２）のほか、これに沿った形の幅30cm前後の溝（SD－６）、SD－１・２を直交して切る幅30～40cmの２条の溝（SD－４・５）、SD－４に切られる径１ｍ前後の土坑１基（SK－７）を検出した。第４～６号溝は、出土土器から中・近世の水田に伴う水路と考えられる。第１・２号溝と第７号土坑は、古墳時代の遺構である。第１・２号溝を完掘すると、組合わさった杭群が検出でき、調査を進めていくと溝となり、杭群は護岸施設および堰であることが分かった（SD－３）。第３号溝は出土遺物から、弥生時代終末期から古墳時代初頭期のものであることが分かった。

第1～3号溝層順

第1号溝上層
1．茶褐色粗砂、やや粘質、鉄分多い
2．茶褐色～暗褐色粘土、鉄分多い（上半分）
3．茶褐色粗砂、鉄分多い
4．暗黄褐色粗砂、鉄分多い
5．暗黄褐色粗砂、やや灰色気味、鉄分多い
6．暗灰～黒褐色粘土、下部にしたがい砂質含む
7．茶灰色粗砂
第1号溝下層
23．黒灰色砂混り、粘質土、やや硬くしまっている。木片、炭化物片多く含む
第2号溝
8．茶褐色粗砂、鉄分含む、やや粘質
9．茶褐色粘土、鉄分多く含む
10．暗灰色粘土、強粘質
11．黒灰色土、腐色土下位に漸移する
12．暗灰色粘土、水分多い、べとつく
13．黒色土、やや微砂質11層に類似する
14．暗灰色微砂土、下位にしたがい砂粒大きくなる。木片（流木）多量に含む
15．黄褐色～灰色粗砂、層理状堆積を示す
16．灰～青灰色ラミナ・流木を多く含む
17．暗灰色粘土と灰色粗砂の互層
第2号溝下層
18．灰色粘土（上半部）
暗灰色粘土（下半部）
19．茶色粗砂、層理状堆積を示す
20．灰色粘土と暗灰色、中砂の流理構造
21．灰色粘土と暗灰色、中砂がより少なく、微砂多い。
22a．茶褐色粗砂、鉄分多い層理状堆積を示す
22b．黒灰色粘質土と灰白色中砂の互層
第3号溝
24．暗灰色粗砂、層理状堆積を示す
25．淡灰色粗砂、層理状堆積を示す
26．淡灰色中砂、層理状堆積を示す
27．灰色～灰褐色粗砂、層理状構造を示す
28．暗灰色中砂、ラミナ状堆積を示す
29．灰褐色粗砂、斜めの層理状堆積を示す
30．灰白色粗砂と黒灰色粘土ブロックの混在層（一部）、他は層理状堆積を示す
31．白色粗砂
32．黒灰色粘質土、ラミナ
33．黒灰色粘質土、ラミナ
34．灰～灰白色粗砂、下部で黒色粘土ブロックを含み層理状堆積を示す
35．暗灰色粗砂、上面が鉄分沈着のため茶変
36．灰～灰白色粗砂、層理状堆積を示す
37．灰色中砂と、暗灰色細砂のラミナ、炭化物片や木片、土器片を多量に含む
38．茶褐色粗砂、層理状堆積を示す（水平に近い）
39．灰白色中砂層、「せき」の横木をおおう
40．淡青灰色中砂
41．暗灰色粗砂、1cm前後の小角礫を多く含む。暗青灰色粘土ブロック含む。層理状堆積を示す
基盤層
42．茶褐色粗砂と淡灰色粘土互層（ラミナ）
43．流理構造の暗青灰色粘質土
44．茶褐色粗砂と灰色中砂の互層（層理状堆積を示す）、下位にしたがい白色化する（鉄分減る）

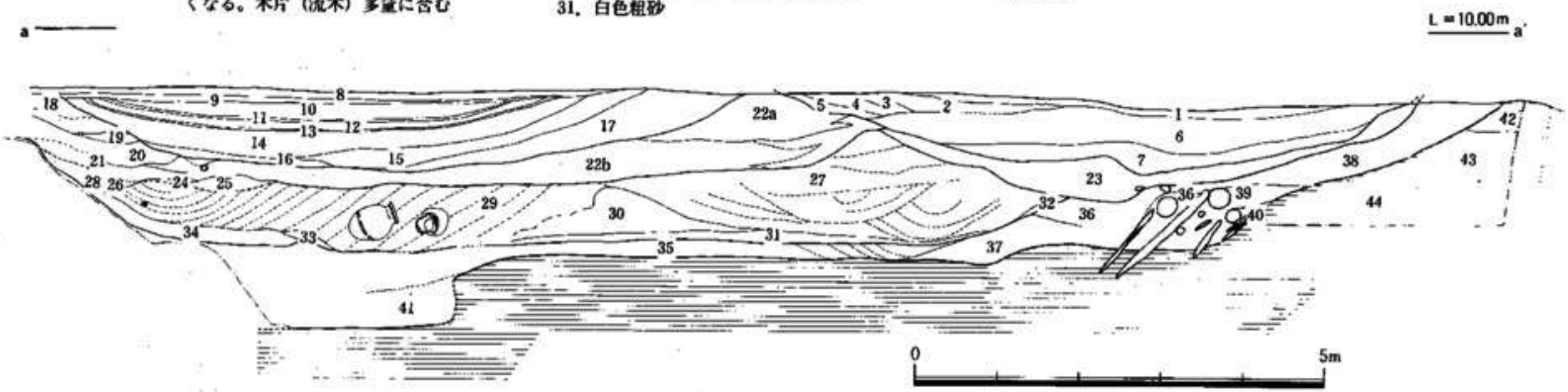


Fig.6　第1～3号溝土層断面図

第4章　調査の記録　－弥生時代－

1．第3号溝（SD－3）と付設遺構（Fig.4～6、PL.17・18）

第3号溝は、第1・2号溝によって切られており、流路底面は少なくとも2面ある。第3号溝上層は、調査区中央部を北西に流路をとり（第1・2号溝よりやや北に寄る）、東側は第2号溝の東肩と同一をなし、西肩は第1号溝の中央部となり、幅14m前後、深さ1.3m前後である。下層は、東肩を検出できなかったが、18m以上の幅をもち、2.2m前後の深さをもっている（Fig.6）。第3号溝の上層は、灰色～暗灰色～灰褐色の粗砂～細砂からなり、その下に黒灰色粘質土があり、青灰色粘土ブロックを含む黒灰色粘質土があり、その下は鉄分が多く堅い面をなし、下層と区分できる。下層は、青灰色粘土および茶褐色～灰白色のしまった粗砂から細砂を基盤として、灰色～暗灰色の粗砂・細砂・シルト・粘質土の互層が堆積している。遺物のなかで土器は、上層中に完形品が多く、木器は、下層および後述する護岸および堰の中から出土した。

付設遺構として、堰と護岸施設がある（Fig.5・6）。これらの施設は、調査区の西側（第3号溝の西肩）から調査区北側にかけて検出された。西肩部は、溝基底部に70cm前後で、溝の傾斜（約25～30°）に沿って径10cm前後の杭を打って並べ、その間に流木を敷きつめている。その上に長さ2.5～3mの丸太材および建築廃材をのせ、25cm前後でこれを止めるような形で丸杭を打って並べ、その間を流木等と粘土・スサで固めている。この行為を3回繰り返し行なって、幅2.5m前後の施設を設けている。一方、これに直交する形で、調査区北側に杭群が広がっている。この杭群はアーチ状をなし、調査区北側の調査区外へ延びている。北側隣接地が水田として使用されているため調査区を1m引きをとったので、この杭群についての解明はできなかった。調査を実施した部分での知見を述すると、径6～10cmで長さ1.8m前後の丸杭、4×15cm前後で長さ1.8m前後の矢板状のものを密に打ち込み、さらに径3～6cmで1m前後の流木・丸杭を横木として、数段にも立杭にかみ合わせている。以上の知見と、那珂君休第3・4次調査例から、第3号溝の付設遺構は、第3号溝に直交する杭群がアーチ状の堰で、西岸の堰を補強するための護岸施設と考えられる。なお、護岸施設は、堰から12m前後まで構築されている。第3号溝の両岸全面に護岸施設はないと考えられる。

第3号溝は、以下に述する出土土器から、上層は弥生時代終末期から古墳時代初頭期のもので、下層は、出土土器の状態および堰中出土土器から弥生時代後期後半から終末期にかけてのものであるといえる。以上から第3号溝は、弥生時代後期後半頃、麦野丘陵の東台地際に沿って北流していた自然流路に手を加え、堰をつくり、水田用水とした大溝で、古墳時代初期まで使用され、洪水を受け、廃棄されたと考えられる。溝の東側に水田址が予想されるため確認調

査を行なったが、水田址は確認できなかった。また、同溝および溝西側の基盤層の中には、弥生時代中期以前の土器が含まれているが、いずれも磨耗している。

2．第3号溝出土土器（Fig. 7～18）

第3号溝の土器は、溝全体より均等に出土している。溝の両壁は、弥生前期からの包含層のため、一部土器が溝に流入している。また、3号溝を切り込んでいる第1・2号溝の混入と思われる遺物も存在している。出土した器種は、壺・甕・鉢・高坏・器台・甑・有孔蓋付土器である。

1は、口縁がほぼ直立する壺である。胴部最大径は、やや上部にあり、底部は平丸底である。外面は、ハケ目調整が全面におこなわれているが、一部、平行タタキ痕が残っている。作りは丁寧であり、焼成時の黒斑が残っている。胎土は、明橙色である。2・3は、大型であり、口縁屈曲部は、2が鋭く稜を持ち、3は、段を有している。4は、2・3にくらべて小ぶりになり、口縁屈曲部は、丸くなっている。頸部の突帯も、4は、鈍くなっている。胴部最大径は、どれも中央付近にあり、2・3が球胴にちかいのにたいし、4は偏球形をなし、張りが弱い。底部は、すべて平丸底である。調整は、ハケ目をおもにおこなっているが、3・4は、外面に平行タタキ痕が一部残り、胴部下半は、ハケ目をナデ消している。2～4は、ともに胴部に焼成時の黒斑を有する。2・3が、白褐色、4が、黄白褐色を呈している。すべて、溝の中央部付近より出土している。5～21は、複合口縁壺の口縁部である。口縁屈曲部に稜を持ち、直線的に内傾するもの（6・7・8・19）と、丸味をもつ屈曲部を有し、肥厚しながら内傾するもの（5・7・10・12）が存在する。また、口縁屈曲部より外に開きながら立ちあがるもの（18・20・21）もある。5は、器壁が厚く、歪んでおり、やや雑な、つくりの印象をあたえる。大型であり、白褐色をしている。6は、頸部が短く、鋭く開くものであり、胴部も張っていることが予想される。口縁端部のつくりは鈍いが、鋭くしようという意識はうかがえる。色調は、明褐色をしている。7は、口縁の屈曲もわるく、全体に鈍くなっている。頸部のしまりも悪いと思われる。外面には、ハケ目による粘土層が残っている。橙褐色を呈する。8は、鋭い口縁屈曲部を持ち、直線的に内傾している。頸部は、しまっている。口縁端部は、外反するように摘み出し、端部面をナデている。色調は、くすんだ白褐色を呈する。9も、口縁屈曲部は稜を持っており、頸部は、直線的につぼまっている。口縁端部は、弱い摘み出しがみられる。口径は、推定復元である。色調は、白灰褐色である。10は、厚い器壁を持ち、全体に丸味を帯びている。口縁屈曲部は、鋭角であり外湾しながら強く内傾している。頸部は、内湾しながらしまっている。口縁端は、丸く仕上げられている。くすんだ黄褐色を呈する。11は、頸部から口縁屈曲部にかけて強く張り出し、外湾しながら弱く内傾しつつ口縁端へとつづいている。口縁端部、頸

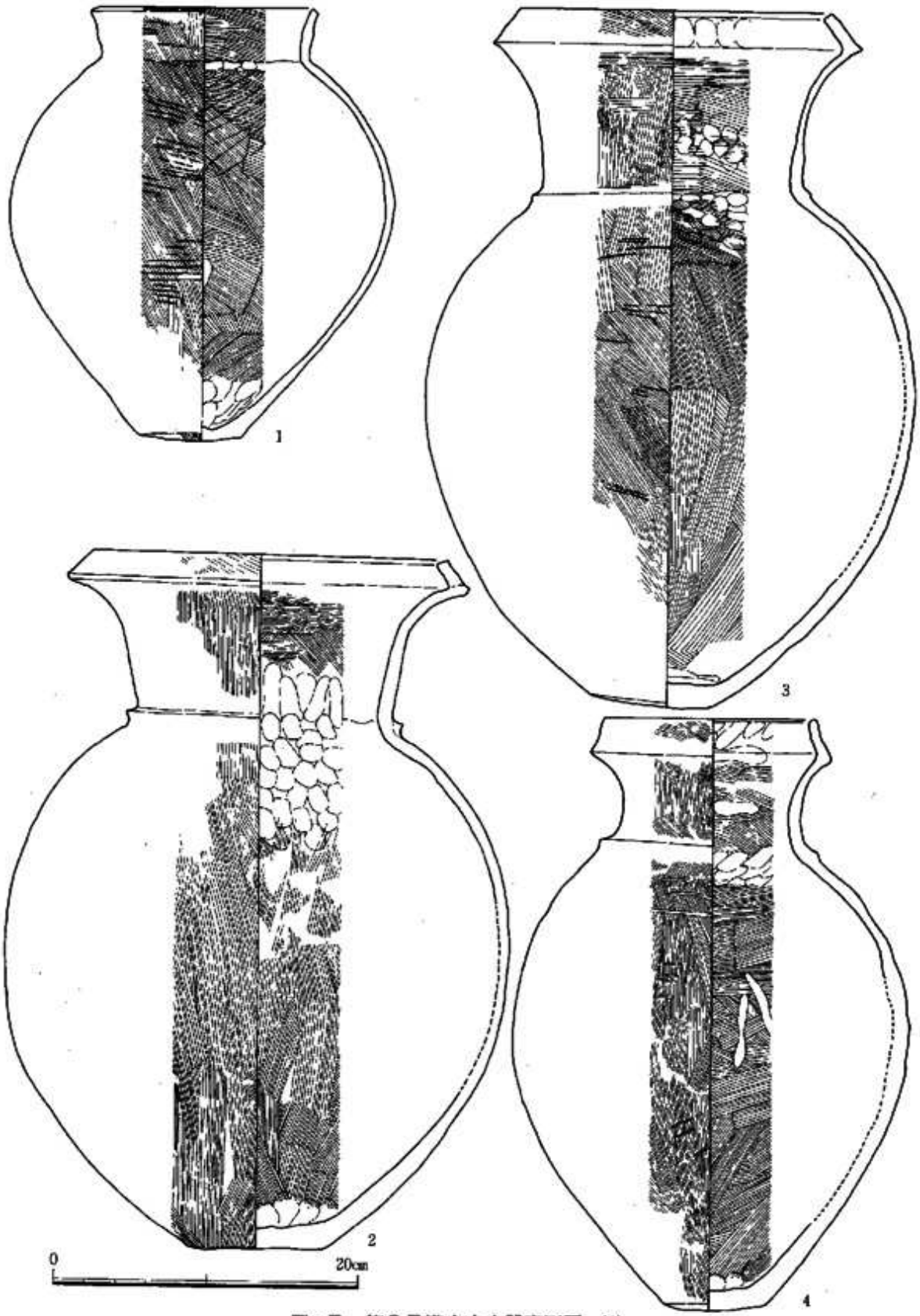


Fig. 7　第３号溝出土土器実測図　(1)

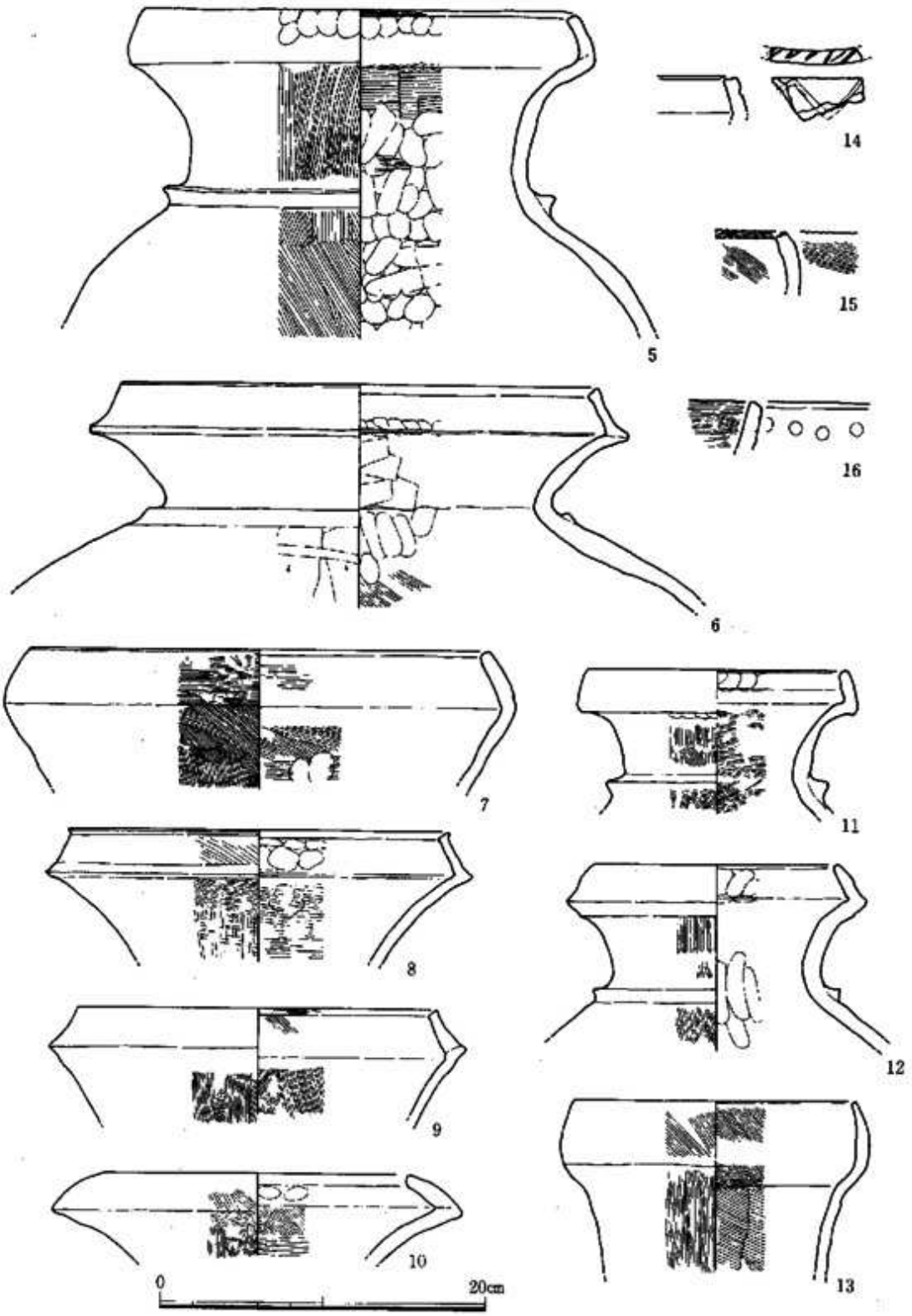


Fig.8　第3号溝出土土器実測図　(2)

部直下の突帯に鋭さは感じられず、丸く仕上っている。胴部のハケ目は、突帯の下半部にかかっており、突帯貼付け後にハケ目調整をおこなったことがわかる。色調は、白褐色である。12は、口縁屈曲部に稜を作るが、器壁の厚さと口縁端部の丸味を持つ仕上りをみると、鋭さはない。白褐色を呈し、口縁部に黒斑を有す。13は、頸部から弛く開きながら口縁屈曲部につながり、そのまま、外湾しつつ縮まらずに口縁端部にいたる。口縁端部は平坦に仕上げられている。白褐色を呈している。14～16は、複合口縁壺の口縁端部片である。14は、外面に棒状工具によると思われる凹線がはいり、また、口縁端平坦面には、ヘラ工具による文様が施されている。色調は、白褐色であり外面に黒斑を持つ。15は、口縁端平坦面に十字の刻み目を持つものである。明灰色を呈する。16は、口縁屈曲部から直線的に外傾すると考えられる。外面に、径8㎜の円筒具による施文がある。白褐色を呈する。17は、頸部からやや内湾ぎみに口縁屈曲部へと開く。屈曲部から口縁端部へは弛く内湾しながら、ほぼ、直立している。口唇部は、平坦面が少し残る。色調は、灰白色である。18は、口縁屈曲部より口縁部にかけて内湾しながら弛く外傾している。口唇部は、丸くおさめている。口縁屈曲部は、弛い稜をなしている。色調は、橙褐色で黒斑を有している。19は、口縁端部を欠くが、口縁屈曲部より直線的に口縁端に向うと思われる。口縁屈曲部には、明瞭な平坦面ができ、縦方向の刻み目が施されている。頸部は、強く内湾している。頸部直下の突帯にも十字の刻み目が施されている。色調は、白褐色である。20は、頸部が強く外反している。口縁屈曲部から口縁端までは、極端に短く、複合口縁とするには疑問が残る。口縁屈曲部は、強く外に摘み出されている。口唇部は、厚く丸く仕上げられている。内面には、ヘラケズリ痕がみられる。淡橙褐色を呈している。21は、頸部より内湾しながら強く外反して、口縁屈曲部にいたる。口縁屈曲部から口縁部にかけては、一度、内傾して外反する。変換点には、口縁端側からの押圧によると思われる皺が水平にはいっている。内面は、弛やかに開いており、明瞭な段を有さない。口縁屈曲部の粘土の接ぎ目は、ほぼ、水平に開いた擬口縁に本来の口縁部を接合し、内面より三角形に補充している。器壁は、全体に薄いが、口縁屈曲部だけが厚いのは、このためである。色調は、白黄褐色である。22～24は、壺の口縁である。22は、頸部は直線的に立ちあがり口縁近くで急に開く。口唇部は、粘土が貼りつけられている。また、頸部直下に突帯を有する。突帯には、不整形な凹線がめぐる。頸部外面は、ハケ目後、ヘラミガキがおこなわれ暗文となっている。全体のつくりは、丁寧である。色調は、暗橙色である。23は、頸部が少し内湾しつつ外反している。口縁端部は、下に引き出されている。頸部直下の突帯には、刻み目が施されている。口径は、歪みがあり長径19cm、短径17cmと考えられる。明褐色を呈し、外面に黒斑を有する。24は、頸部は短く直線的に、やや、開きながら立ちあがる。口縁端部は、厚く上面に広い平坦面を持ち、内面に摘み出している。器壁は、やや、厚手。色調は、暗灰褐色である。25～27は、壺の胴部以下である。すべて、長頸壺だっ

たと考えられる。三点ともに、意識的に口頸部を打ち欠いたと思われ、26には、内面からの底部穿孔がおこなわれている。さらに、25・26には、二次焼成を受けた跡があり、煤の付着もみられることから、煮炊きに使用したと考えられる。何らかの儀器の可能性がある。25は、少し凹凸を残す偏球形の胴を持ち、底部は丸底に近い平底である。最大径は、胴部中央にある。色調は、二次焼成を受け、外面は白灰色を呈する。26は、胴部は楕円形をしており、最大径は、胴部中央にあり、三角の低い突帯がつく。底は、丸底である。調整は、丁寧におこなっている。色調は、茶褐色～白褐色である。27は、整った偏球形の胴部を持っている。底部は、丸味を帯びた平底である。最大径は、ほぼ、胴部中央にあり低い「M」字形の突帯がつく。また、頸部直下には、稜の明瞭な突帯がついている。調整は、たいへん丁寧に行なわれている。色調は、黄褐色を呈し黒斑がある。31・32・34は、直口壺である。34は、やや、大型で外面に平行タタキ痕が残る。口縁部は、31・34が丸味を帯びた平坦面を有するのに対し、32は、丸くおさめている。色調は、31が暗橙色、32が淡橙色、34が明白橙色である。また、31・32は黒斑を有する。33・35・46は、広口壺である。いずれも、口縁端は内面に向けて丸く仕上げている。33・46が、頸部がややしまるのに対し、35はしまりが弱い。調整も、外面ヘラケズリがあるのは35だけと考えられる。色調は、33が明灰橙色、35が黄褐色、46が白褐色である。33は、二次焼成を受けている。36・37は、短頸壺である。36は、頸部が外反しながらそのまま口縁端につながる。胴は、球形に近く丸底である。調整は丁寧である。37は、口縁端を欠損しているが、36と、ほぼ、同様の形態をとると思われる。色調は、36が、明黄褐色で黒斑を有し、37は、灰白色である。39は、壺形土器の胴部以下と思われる。最大径は胴部上位にあり、底は、尖った丸底である。調整は、粘土がやや乾燥した状態でおこなわれたようで、胎土の目がつまっている。橙色を呈し黒斑を有する。40・41・44・45は、小型の壺である。40・41は、平底を持ち、44・45は、丸底になっている。45は、完形品で、とくに丁寧に仕上げられている。色調は、40が淡白褐色、41が淡褐色、44が灰白褐色、45が白褐色である。42・43は、壺である。42は、小型で大きな平底を持つ。器壁は厚く、口縁端部は平坦面をなしている。色調は、白褐色である。43は、調整が荒く、一見すると手捏ねのようである。口縁端は、摘み出した後ヘラケズリをおこなっている。明褐色を呈している。

38・47～59・66～72・281は、甕である。47・48は、「く」の字状に外反する口縁部に球形の胴部を持ち、平底である。ともに、少し粗いつくりをしている。色調は、47が灰褐色、48が灰橙色で頸部に煤を付着させている。49～51は、外面に右上りの平行タタキ痕を残し、内面ヘラケズリを施すものである。49は、直線的に外反する口縁を持ち、いくぶん肩が張っている。50・51は、内湾しつつ外反する口縁部で、51は、肩の張りが小さい。49・51は、煤が付着している。色調は、49が橙褐色、50が白橙色、51が白橙褐色を呈する。52は、口縁部がわずかに外反して

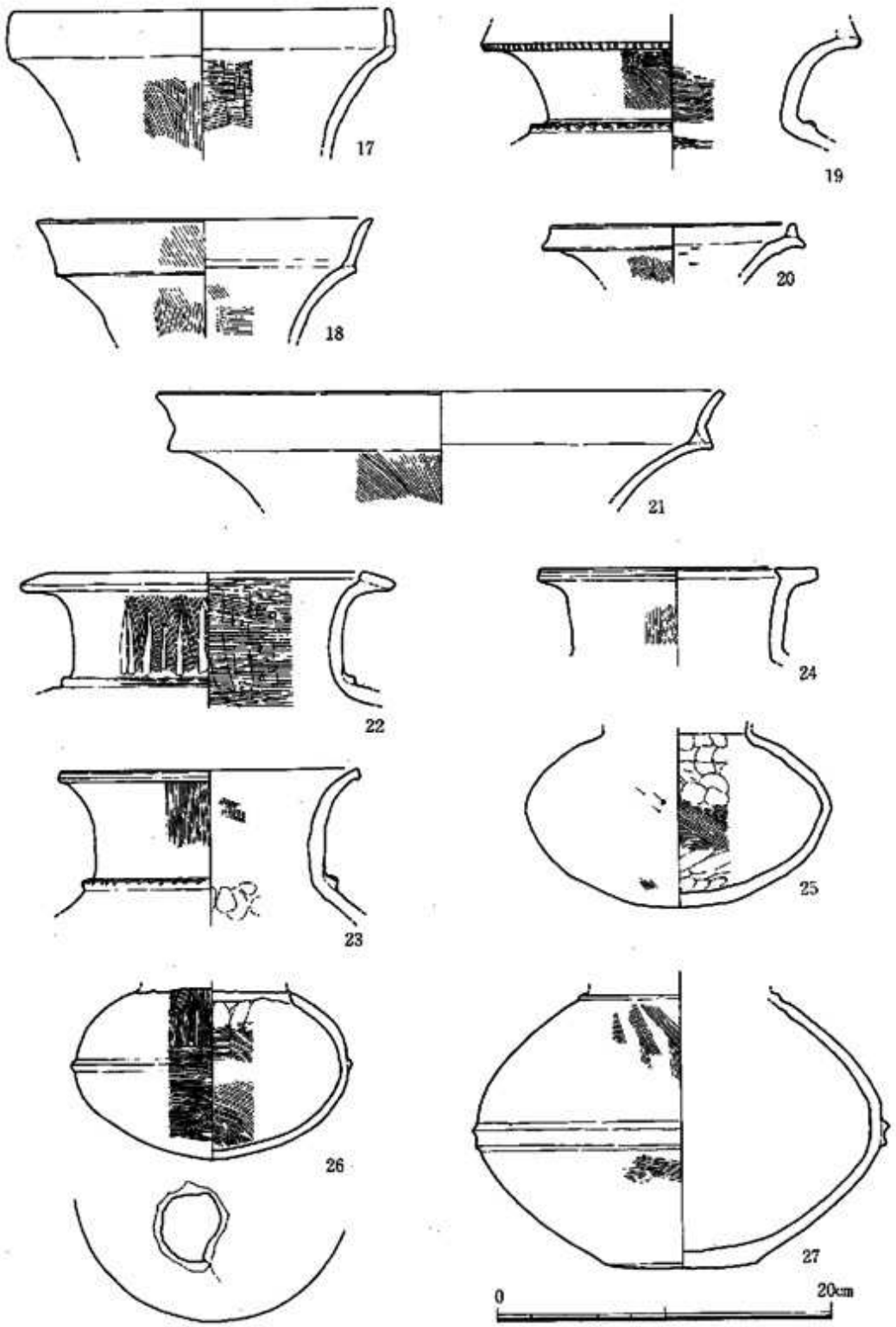


Fig.9　第３号溝出土土器実測図　(3)

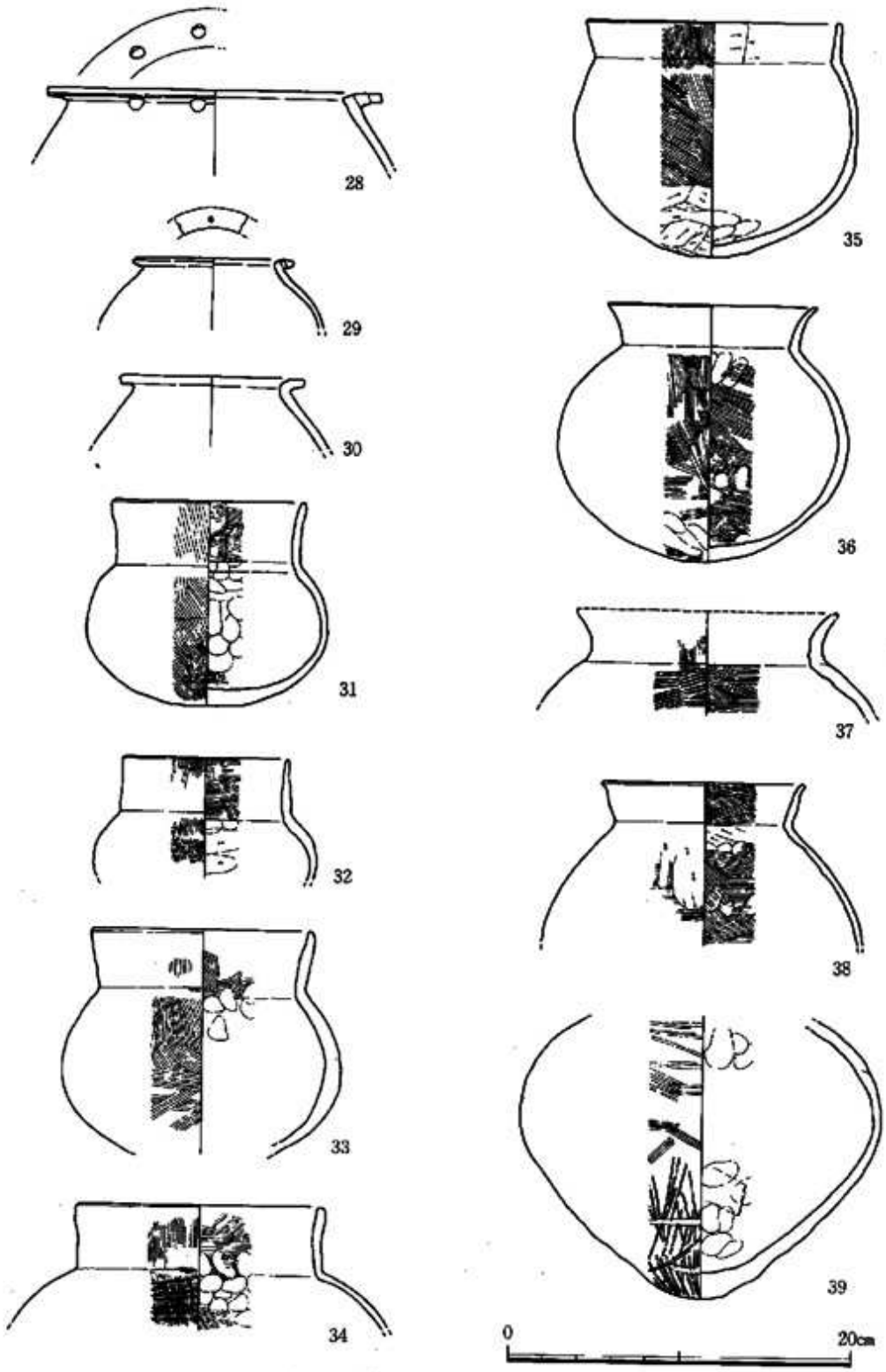


Fig.10　第３号溝出土土器実測図　(4)

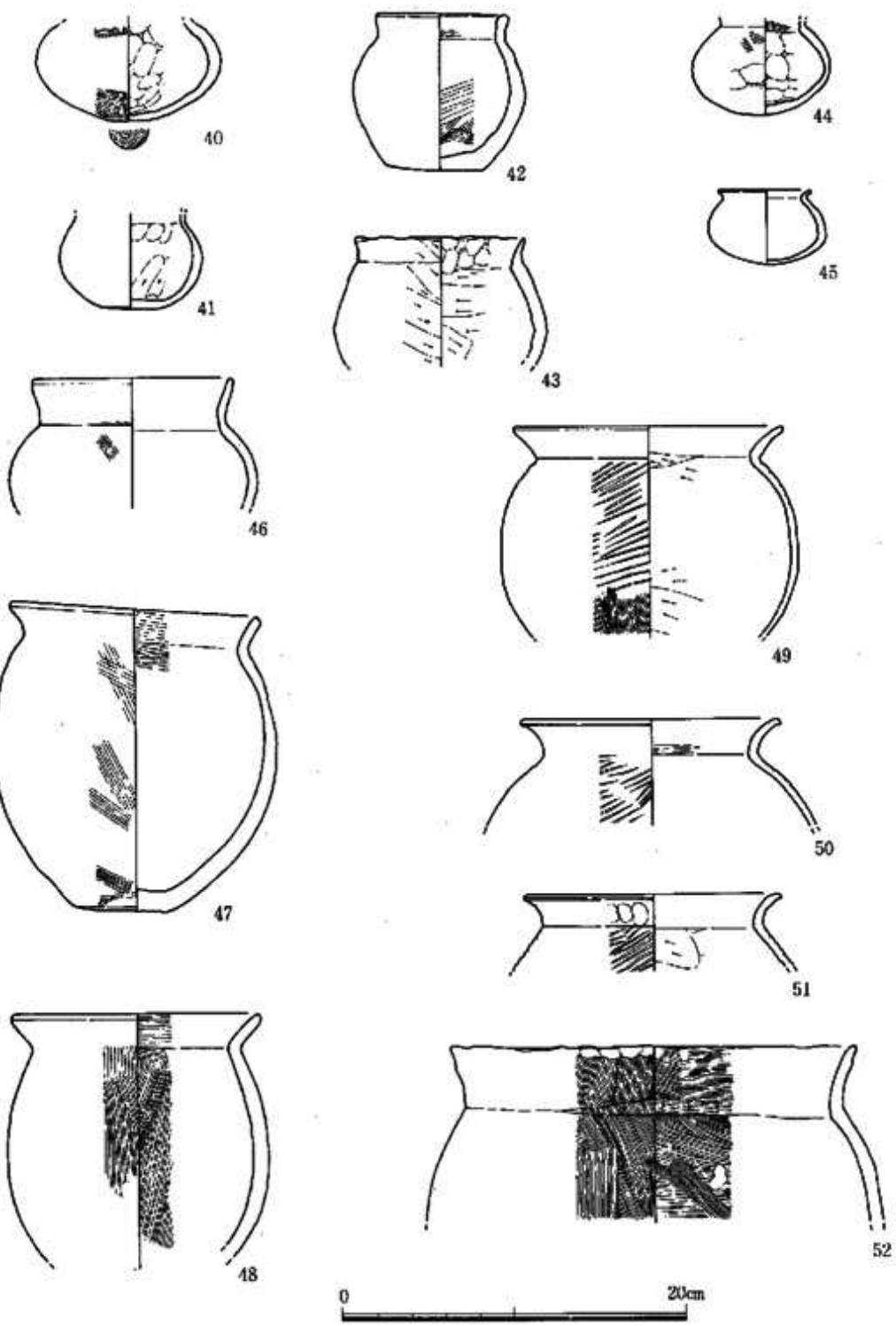


Fig.11　第３号溝出土土器実測図　(5)

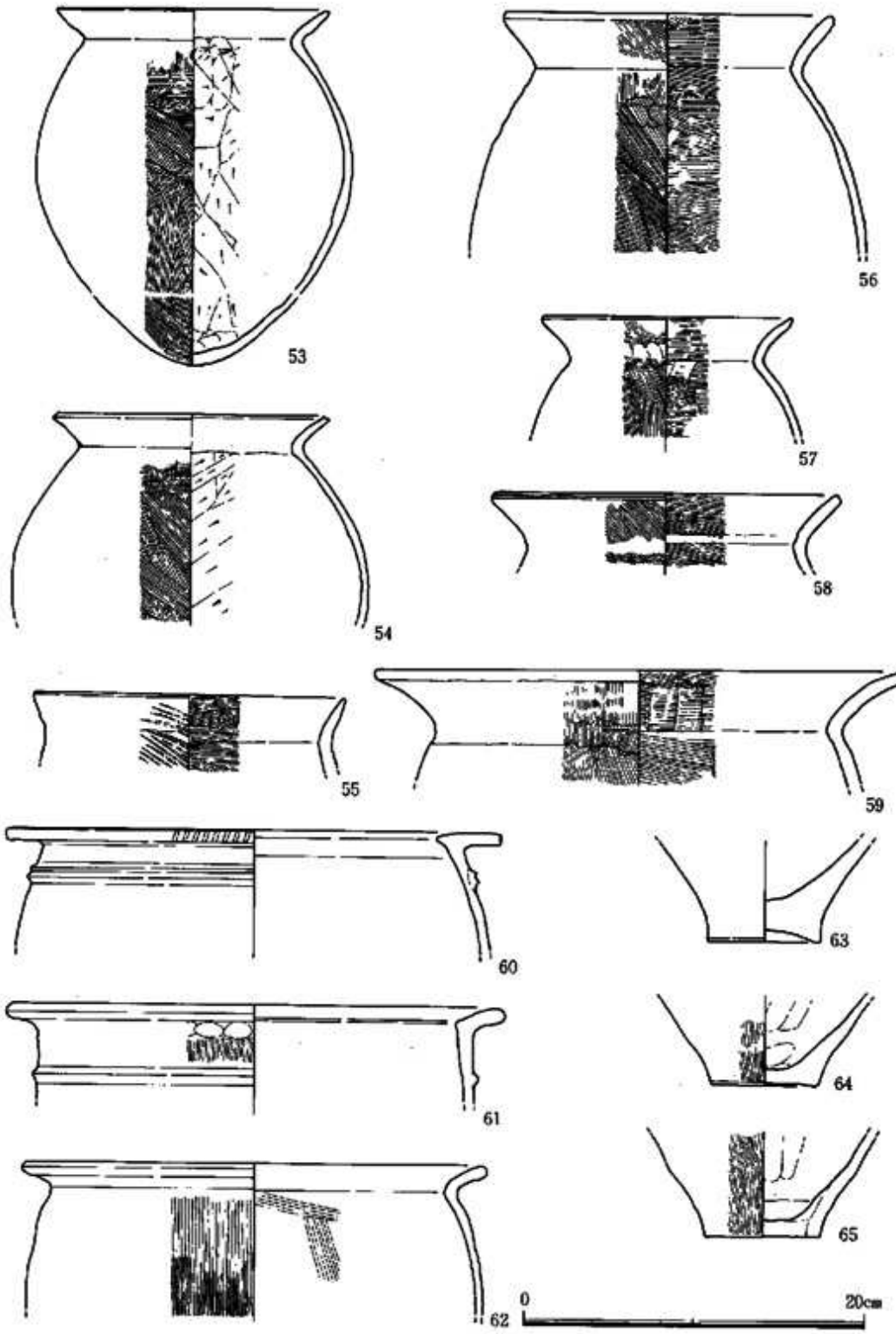


Fig.12　第３号溝出土土器実測図 (6)

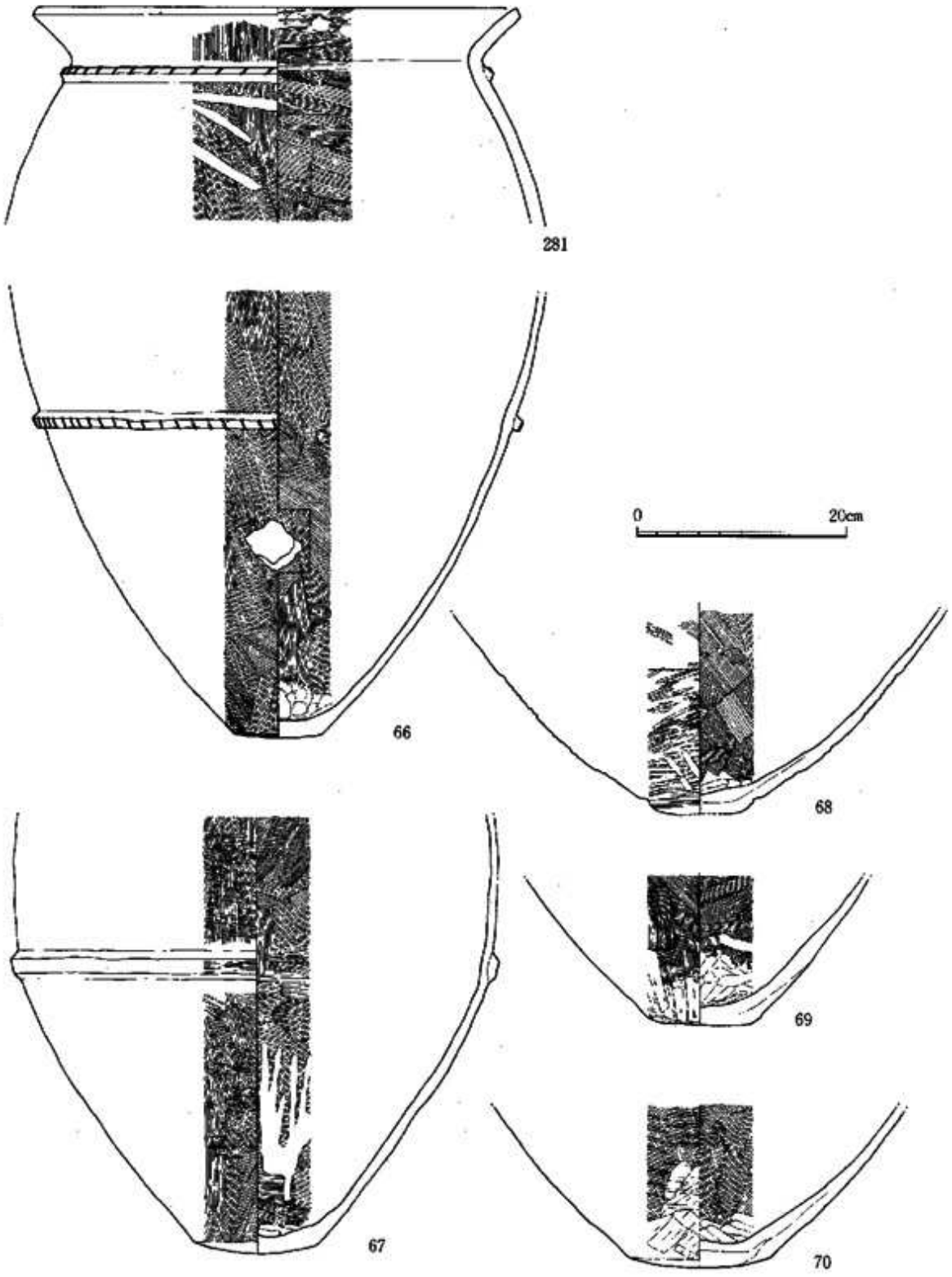


Fig.13　第3号溝出土土器実測図　(7)

いる。しまりのない頸部から張りの弱い胴部を有すると思われる。口唇部は、ハケ目後にユビオサエをおこなっているため凹凸が残る。53・54は、外面ハケ目、内面ヘラケズリを残す。53は、強く外傾する口縁に偏球形の胴部がつく。胴部最大径は、中位から、やや上方にある。底部は、尖った丸底である。頸部は、よくしまっている。54は、53より張りぎみの胴部を持ち、口縁部は、頸部で強くしまり外反する。口唇部は、上向きに抓み上げられている。内面ヘラケズリの始まりには稜を形成する。53は淡褐色、54は白褐色を呈し、どちらも煤の付着がみられる。55は、口縁部から胴部に弛やかにつながる。外面に右下りの平行タタキ痕を残す。色調は、淡褐色で煤が付着している。56は、肥厚し外反する口縁部を有し、あまり張らない胴部を持つ。57も56と同様の形態を有するが口唇部は少し上に抓まれている。58は、しまりの悪い頸部から外反する口縁部を持つ。口唇部には、一条の沈線が巡る。59は、大きく外反する口縁に貧弱な張りの胴部がつく。56～59には、いずれも煤の付着がみられる。色調は、56が白橙色、57が白橙褐色、58が明橙色、59が白黄色を呈する。66～72・281は、大型の甕である。完形復元ができるのは71だけである。71は、しまった頸部から外反する口縁がのびる。口唇部は、弛く下方に抓み出されている。また、口唇部上面は、わずかながら平坦面ができる。胴部は、弱い張りを持つ偏球形をしており、最大径は胴部上位にある。底部は、丸味を持つ平底である。頸部直下と胴部中央のやや下寄りに台形の突帯を有する。突帯には、板状と思われる工具で刻み目が入れられている。281は、直線的にひろがる口縁を有し、頸部直下の台形状の突帯には、ヘラ状工具によるものと思われる刻み目がある。66は、胴部下半のみ残存する。胴部下部に台形の突帯がつき、ハケ状工具の刺突による刻み目を有する。突帯と底部の中間位に外からとみられる焼成後の穿孔がある。67は、66と似た形態を呈すが、突帯の幅が広く、突帯上にハケ目を施している。69・70は、外面底部附近にヘラケズリを、おこなっている。丸味を持った平底である。68は、底部にまで強く平行タタキの痕を残す。底部近くには、平織りとみられる布圧痕が残る。72は、口縁が大きく開き、胴部はあまり張らない。頸部直下に三角突帯、胴部下部に台形の刻み目を持つ突帯を有する。色調は、281・66・72が白黄褐色、66～71が白褐色を呈する。73～85は、壺または甕の底部である。しっかりした平底を示す78・79・83・85、丸味を持つ平底の73・74・76・81・84、丸底の82、上げ底を持つ80、面取りのある75など多種にわたる。

87～106は、鉢である。87～89は、小型で浅いものである。90・92は、少し深く平底を持つ。91・98・101は、器壁が厚く、口縁部は、直立もしくは、わずかに内湾する。96は、口縁部は内湾ぎみであり、大きな平底を有する。99は、胴部下半から口縁部に向かい大きく内湾し、平底である。100も、体部の形態は99に類するが浅く、口縁端部は外側に抓み出されている。97は、荒いつくりで肥厚した底を持つ。口縁部は成形後に外側から押さえられ、少しつぼまっている。94・95は浅く、94は口縁端が外傾、95は内傾している。102・103は、外反する口縁部を持つ。

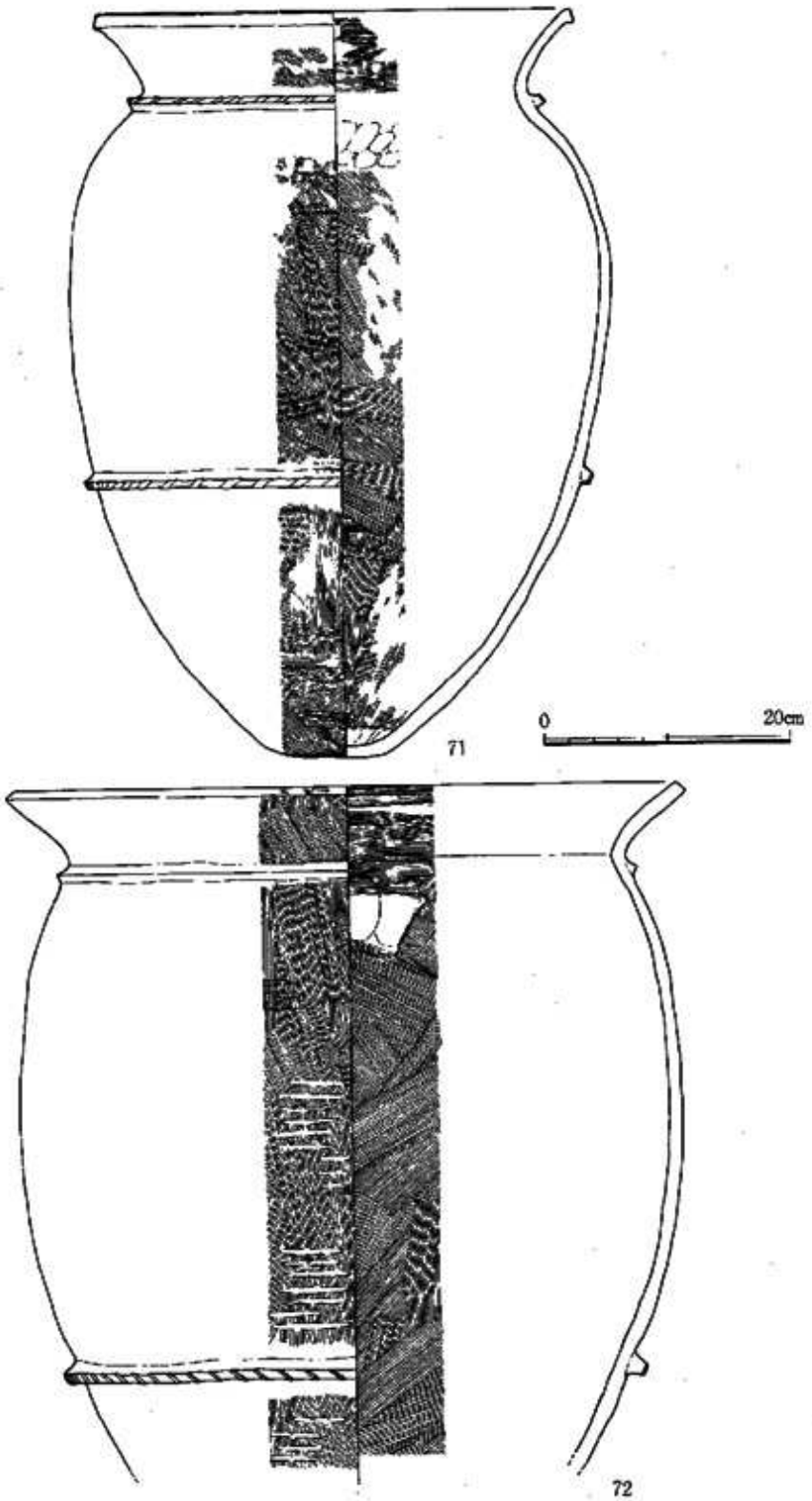


Fig.14　第３号溝出土土器実測図 (8)

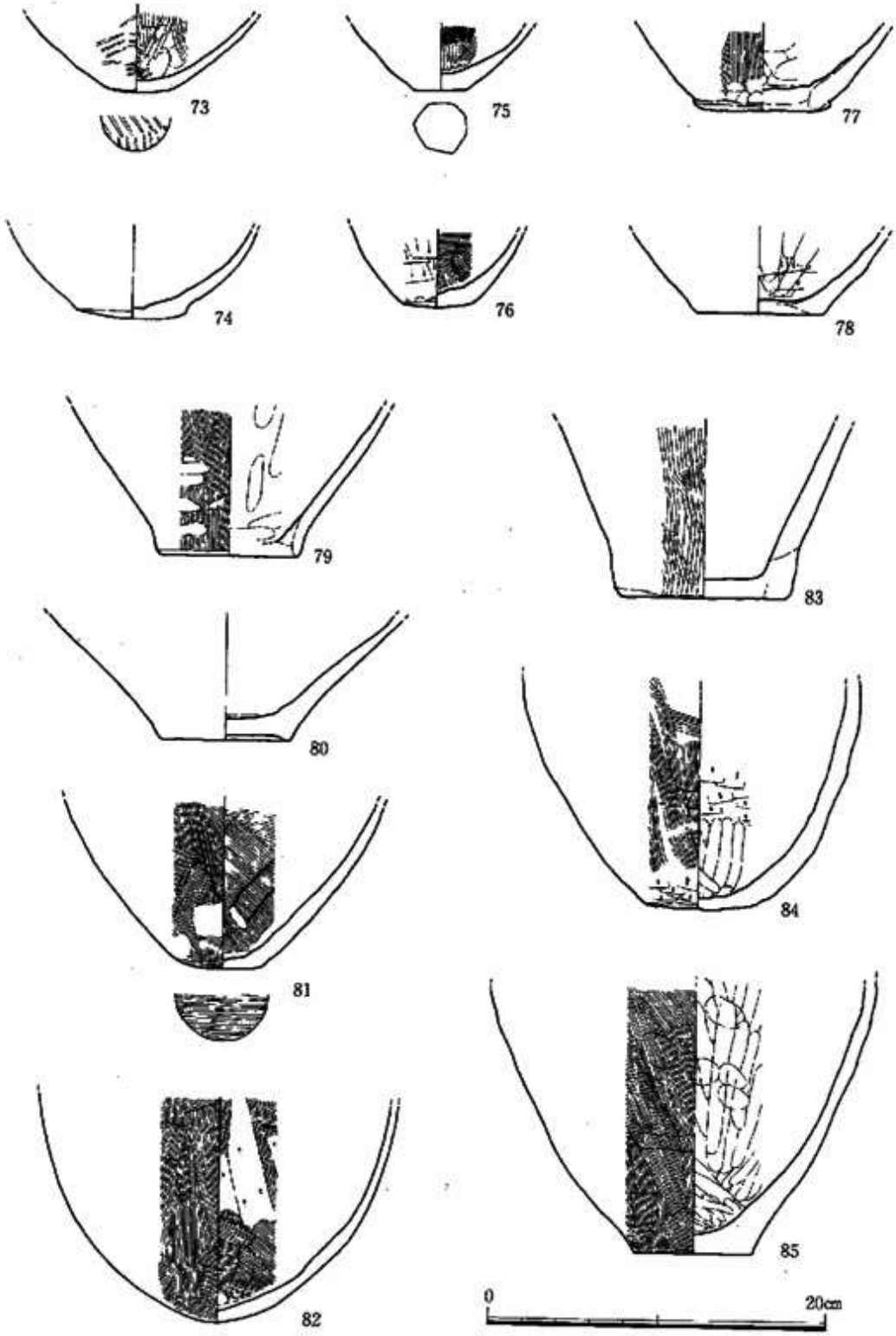


Fig.15　第3号溝出土土器実測図 (9)

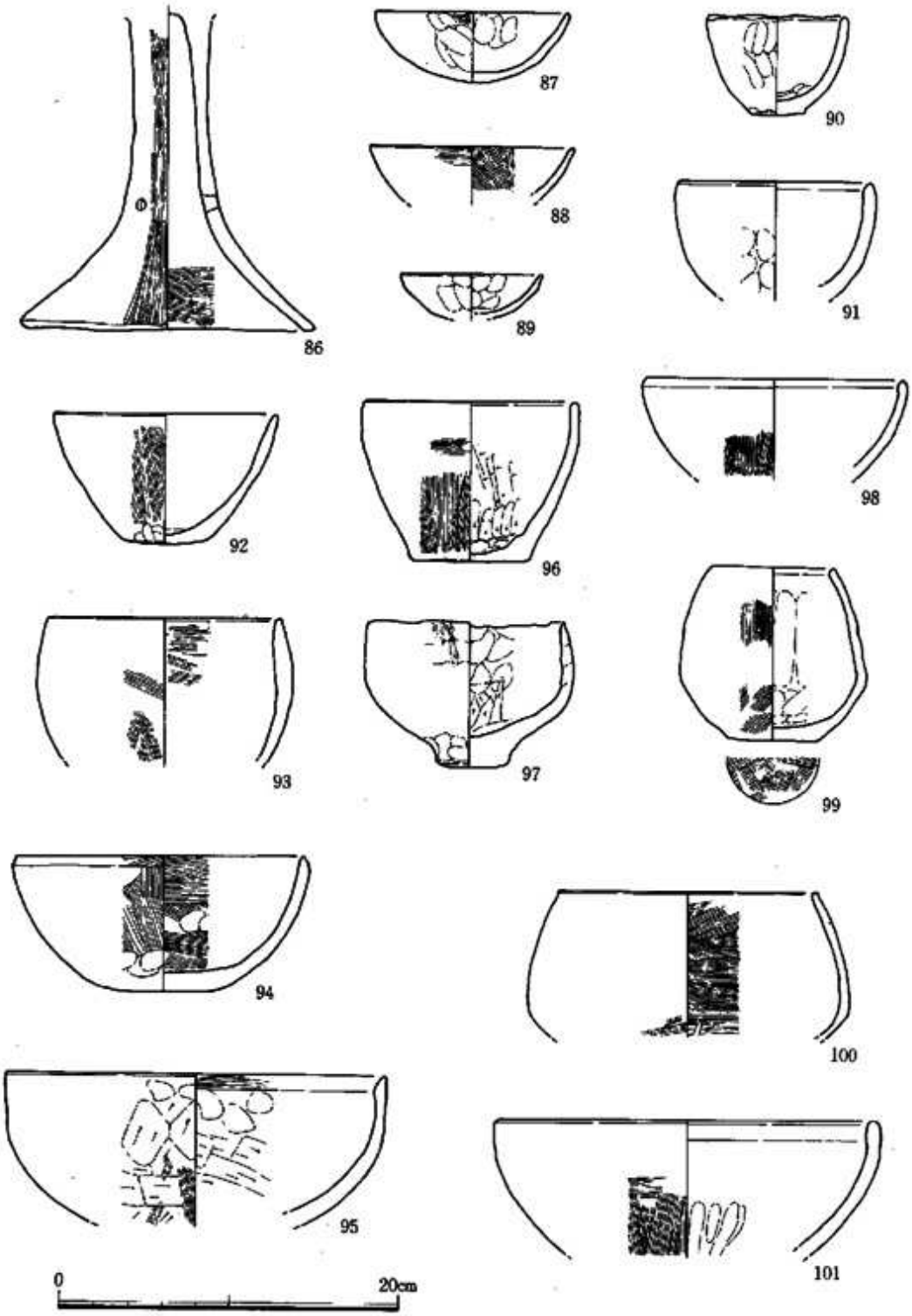


Fig.16　第３号溝出土土器実測図 (10)

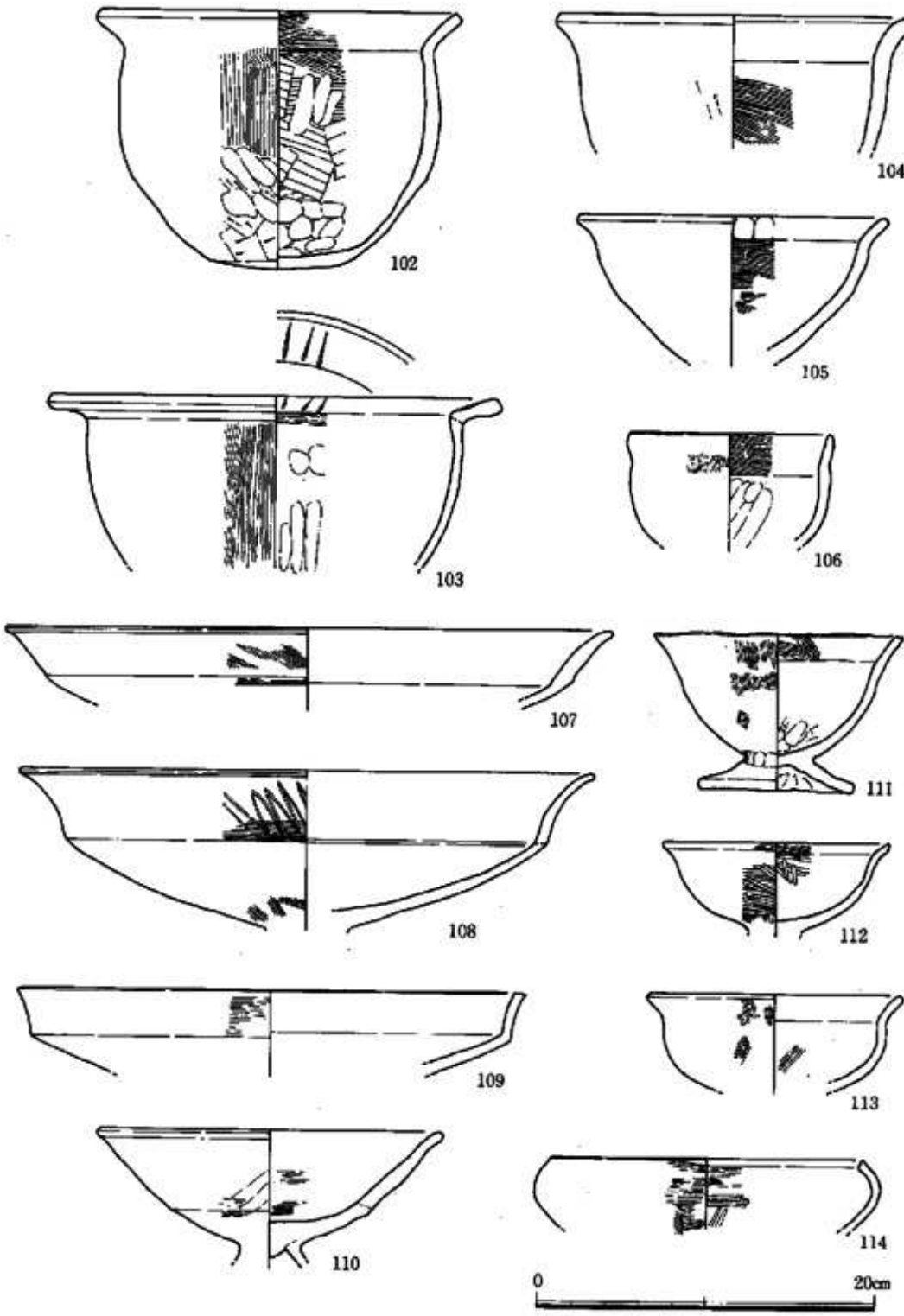


Fig.17　第３号溝出土土器実測図 (1)

103の外反は強く、口縁部内側には刻み目が部分的に入いる。104は、外反する口縁を持つが外反の度合いは小さく、器壁は厚い。105も、弛く外反する口縁を持つ。体部は、張らずに口縁部から底部へとなだらかにすぼまる。台付鉢になる可能性もある。106は、口縁部がわずかに外反している。口縁端部は、丸くおさめられている。111～113は、脚台付鉢と考えられる。111は、体部から口縁部に向かい弛やかに開く鉢に、低く大きくひろがる台が付いている。口縁端部には、沈線状のものが一条巡る。112・113は、半球形の体部に弛やかに外反する口縁がつく。

86・107～110・114は、高坏である。86は、細目の柱状部から大きく広がる裾部を持ち、脚端は、平坦に仕上げている。円形の透かしは3方にある。107は、浅目の坏部を持ち、屈折部から口縁へは肥厚し外反する。108はやや深く、屈折部から大きく外反する。外反部分には、波状の暗文が施されている。109は、屈折部から直立ぎみに外反する。口縁端部は平坦面を有し、外側に少し摘み出されている。114は、大きく内湾しながら口縁端にいたる。口縁端部は、上方に摘み上げられている。110は、屈折部をわずかに残し口縁端へと大きく広がる。器壁は厚い。

115は、器台である。口縁部は強く外反し、口唇部は丸くおさめる。116は支脚であり、粗いつくりである。全面に煤の付着がみられる。

119は、壺形土器である。二重口縁壺となる可能性がある。

120は、甕形土器に復元可能であろう。

121は、甑である。焼成前穿孔は内面からおこなわれている。

122～124は、蓋形土器である。28～30の甕とセットになるであろうが、組み合わされるものはない。123は、外面赤色顔料が塗布してある。

※出土土器計測部位
法量の番号は1.口径、2.体部径、3.器高、4.底部径（脚を持つものは脚端部径）を示す。

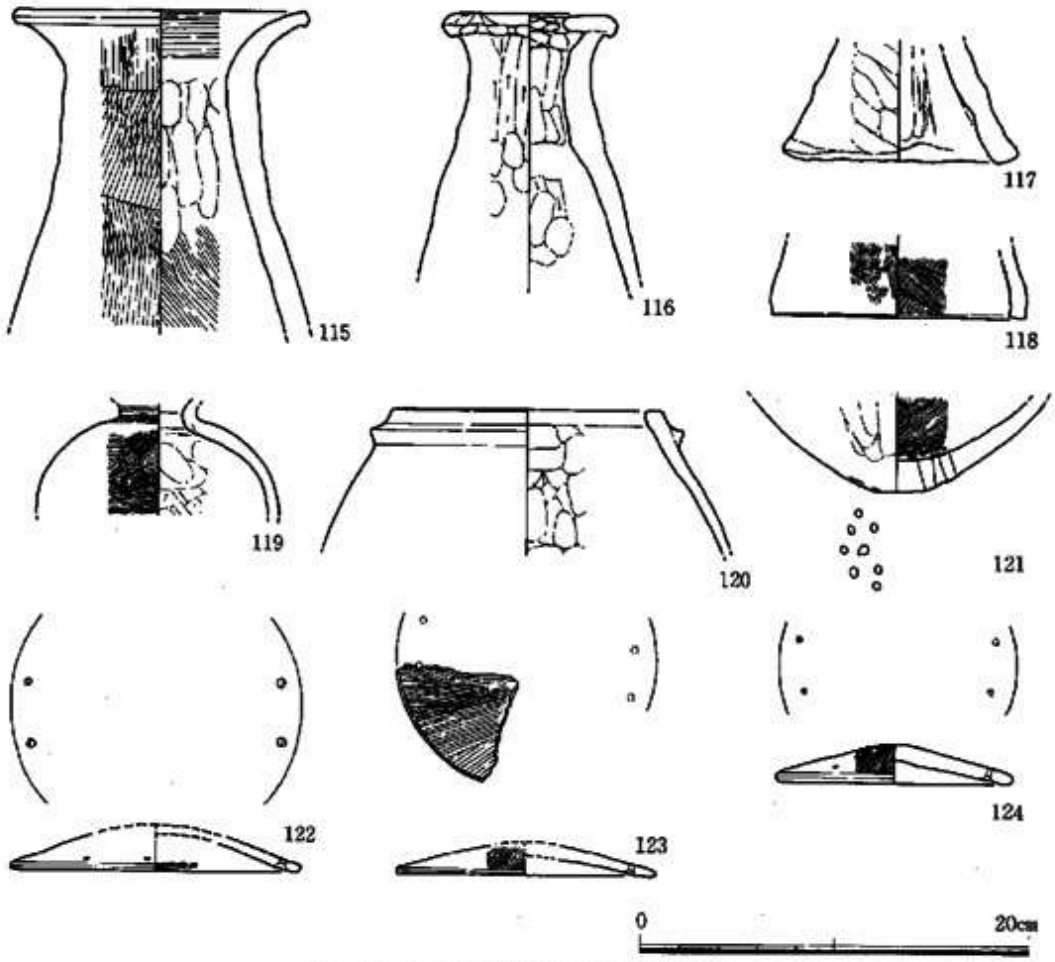


Fig.18　第３号溝出土土器実測図 (1/2)

第３号溝出土土器一覧

遺物登録番号	報告書掲載番号	器種	法量 1	法量 2	法量 3	法量 4	焼成	色調　胎土	調整	備考
00101	2	壺	23.4	33.2	45.9	9.0	やや良好	内面　三褐色 外面　白褐色～灰褐色 1～3mm程度の石英白色粒子を多く含む	口縁部　内面―ヨコ、ナナメハケ目後ナデ 外面―タテハケ目後ナデ 体　部　内面―ナデ、タテハケ目 外面―タテハケ目後ナデ	黒斑有
00102	3	壺	20.8	32.4	45.5	7.7	普　通	内面　褐色 外面　灰白褐色 2～3mmの石英粒を多く含む	口縁部　内面―指オサエ後ヨコナデ 外面―ナナメハケ目後ヨコナデ 体　部　内面―ナナメハケ目 外面―ハケ目後ナデ	黒斑有 （タタキ痕有）
00103	4	壺	14.1	26.3	30.0	6.8	やや不良	内面　濃褐色～くすんだ黄褐色 外面　暗褐色～黄灰褐色 2mm以の石英粒・白色粒子を多量に含む	口縁部　内面―ナナメハケ目、ナデ 外面―タテハケ目、ナデ 体　部　内面―ナナメハケ目後ナデ 外面―タテハケ目後ナデ、タタキ痕有	黒斑有
00105	71	壺	38.3	48.7	60.2	7.4	やや良好	内面　白黄褐色～暗褐色 外面　黄褐色 1～3mmの砂粒を多く含む	口縁部　内面―ヨコハケ目後ナデ 外面―ナナメハケ目後ナデ 体　部　内面―ハケ目後ナデ 外面―ハケ目後ナデ、タタキ痕有	黒斑有
00108	44	壺		8.0	5.5+α		良　好	内外面ともに灰白褐色 精良　白色粒子をわずかに含む	体　部　内面―指オサエ、ナデ 外面―ハケ目後ナデ	
00109	45	壺	5.4	6.8	4.3		やや良好	内外面ともに白褐色 精良　金雲母を含む	口縁部　内外面―ナデ 体　部　内面―ナデ 外面―ハケ目後ナデ	丁寧に作ってある
00104	1	壺	14.9	25.2	28.6	6.7	良　好	内面　白黄灰色 外面　橙色～白黄褐色 1～2mmの砂粒を含む	口縁部　内外面―ヨコナデ後ハケ目 体　部　内面―ユビナデ後ナナメハケ目 外面―平行タタキ後ナナメハケ目	黒斑有
00106	72	大　壺	54.2	53.2	55.0+α		良　好	内面　白褐色 外面　明褐色～灰黄色 2cm程度の割石粒を含む	口縁部　内面―ヨコハケ目 外面―タテハケ、ナナメハケ目 体　部　内面―ナナメハケ目 外面―平行タタキ後タタキハケ目、一部ナデ	黒斑有

遺物登録番号	報告書掲載番号	器種	法量 1	法量 2	法量 3	法量 4	焼成	色調 胎土	調整	備考
00110	41	壺		8.3	5.6+α	3.4	やや良好	内外面ともに灰褐色 1mm以下の石英白色粒子を含む	体部 内面 ナデ 外面 ヘラケズリ後ナデ	
00111	96	鉢	12.6		9.5	6.9	普通	内外面ともに明黄色 3mm以下の石英粒を含む	体部 内面 ヘラケズリ後ナデ 外面 タテハケ目後ナデ	焼成有
00112	86	高坏			19.0+α	17.4	良好	内外面ともに明灰褐色 精良	脚部 内面 ナデ 外面 ミガキ 脚部 内面 ヨコハケ目 外面 ハケ目後ヘラミガキ	透かしは三穴
00113	94	鉢	16.8		8.0	6.2	良好	明黄色～明黄褐色 1～2mm程度の砂粒を多く含む	体部 内外面 不整方向のハケ目 脚部 内外面 不整方向のナデ	
00114	112	高坏	13.5		5.2+α		良好	内外面ともに明黄色～白黄灰色 2mm以下の石英粒、白色粒子を多く含む	体部 内面 ヘラミガキ・ナデ 外面 ハケ目後ヘラミガキ	
00115	99	鉢	7.2		10.3	5.6	良好	内面 暗灰色 外面 明黄色～明灰色 精良 1mm以下の白色粒子を含む	体部 内面 ナデ 外面 タテ、ナナメハケ目	焼成有
00116	35	壺	14.9	16.6	13.8		普通	内面 灰褐色 外面 黄褐色 3mm以下の石英粒・白色粒を含む	口縁部 内面 ナデ 外面 タテハケ目 体部 内面 ナデ 外面 ヘラケズリ、ハケ目	焼成有
00117	36	壺	12.2	16.9	15.0		良好	内面 明灰褐色 外面 明黄褐色 1mm以下の石英・白色粒・黒母を少し含む	口縁部 内外面 丁寧なヨコナデ 体部 内面 ナナメハケ目 外面 タテハケ目後ヘラミガキ	焼成有
00118	26	壺		16.3	10.3+α		良好	内面 暗灰褐色 外面 黄褐色～白褐色 0.5mm以下の白色粒子をわずかに含む	体部 内面 粗オサエ、ナデツケ 外面 ナナメハケ目後タテ方向のヘラミガキ	焼成有 焼成有
00119	39	壺			16.3+α		良好	内面 黄灰色～灰褐色 外面 暗橙色～灰白褐色 1mm程度の白色粒子を少量含む	体部 内外面 ハケ目後ナデ、ヘラミガキ	焼成有
00120	108	高坏	34.4		9.3+α		良好	内面 明黄色 外面 暗黄褐色 2mm以下の石英粒を多く含む	口縁部 内面 ヨコナデ 外面 ヨコハケ目後ヘラミガキ(暗文) 体部 内面 ナデ 外面 丁寧なナデ	
00121	49	壺	15.8	17.4	12.2+α		良好	内面 淡褐色 外面 橙褐色 2mm以下の石英粒・白色粒子を含む	口縁部 内面 ナデ 外面 ヨコナデ 体部 内面 ヘラケズリ、ナデ 外面 平行タタキ後、タテハケ目	焼成有
00122	27	壺		24.1	16.5+α	9.0	良好	内面 暗灰色 外面 灰白色～黄褐色 1～2mmの砂粒を含む	体部 内面 ヨコナデ 外面 ナナメハケ後ナデ	焼成有
00123	122	壺	15.0		20.0+α		良好	内面 白灰褐色 外面 白灰色 精良 0.5mm以下の白色粒を含む	内面 不整方向のナデ 外面 ナデ	外面に赤色顔 料付着
00124	23	壺	18.0		9.0+α		良好	内面 黄褐色～白褐色 外面 明黄色 2mm以下の石英粒を多く含む	口縁部 内面 ヨコハケ目後ナデ 外面 タテハケ目後ヨコナデ	焼成有
00125	53	壺	16.0	18.6	21.0		良好	内面 白褐色～黒褐色 外面 淡褐色～暗褐色 1mm程度の砂粒を多く含む	口縁部 内外面 ヨコナデ 体部 内面 ヘラケズリ 外面 こまかいハケ目	焼付着
00126	54	壺	16.35		12.2+α		良好	外面 明橙色 内面 白褐色～黄色 平均して1～2mmの砂粒を含む 顕著である量 のものは1～5mm程度	口縁部 内外面 ナデ 体部 内面 ヘラケズリ 外面 こまかいハケ目	焼付着
00127	33	壺	9.9		7.5+α		良好	内外面ともに明白褐色 2mm程度の砂粒を含む	口縁部 内面 ヨコハケ目 外面 タテハケ目後ナデ 体部 内面 ハケ目後ナデ 外面 ハケ目後ナデ	焼付着
00128	43	壺	9.9		7.5+α		良好	内外面ともに明黄色 2mm程度の砂粒・白色顔粒子を含む	口縁部 内面 指オサエ 外面 ヘラケズリ 体部 内面 ヘラケズリナデ 外面 ヘラケズリ	焼付は強い 焼成有
00129	93	鉢	13.9		8.5+α		普通	内外面ともに灰白褐色 2mm程度の砂粒を含む	体部 内外面 ハケ目後ナデ	
00130	93	鉢	22.6		8.8+α		普通	内外面ともに明灰褐色 2～3mmの砂粒を多く含む 白色顔粒子も含む	体部 内面 ヨコハケ目、ヘラケズリ後ナデ 外面 ヘラケズリ、ハケ目	
00131	111	台付鉢	14.75		9.4	9.3	普通	内面 黒色 外面 白褐色 2mm以下の砂粒を多く含む	体部 内外面 ナナメハケ目後ナデ 脚部 内面 ヘラナデ 外面 指オサエ	焼み大 焼成有
00132	87	鉢	11.6		4.2		普通	内外面ともに白褐色 精良 黒雲母・石英粒を少量含む	体部 内面 粗オサエ後ナデ 外面 ヨコハケ目後ナデ	焼成有
00133	110	高坏	20.8		7.9+α		やや不良	内外面ともに橙色～明橙色 2mm以下の石英粒を多量に含む	体部 内面 ヨコハケ目後ヨコナデ 外面 ヨコハケ目後ナデ	

遺物登録番号	報告書掲載番号	器種	法量 1	法量 2	法量 3	法量 4	焼成	色調 胎土	調整	備考
00134	97	体	11.0~11.5		8.5		良好	内面 灰褐色 外面 明橙褐色 3mm以下の石英粒・黒雲母を含む	体部 内面 ヘラケズリ、ナデ 外面 細いナデ	蓋み大 黒雲母
00135	88	体	12.2		3.25+α		良好	内外面ともに明橙褐色 2mm程度の石英粒を含む	体部 内面 ナナメハケ目後細いナデ 外面 ヨコハケ目後ヨコナデ	
00136	11	壺	15.8		8.6+α		普通	内面 白灰褐色 外面 白褐色 3mm程度の石英粒を多く含む	口縁部 内面 ヨコハケ目後ナデ 外面 タテハケ目後ナデ	
00137	12	壺	15.0		11.3+α		普通	内外面ともに白褐色 3mm程度の砂粒を含む	口縁部 内面 ナデ 外面 タテハケ目後ナデ	黒雲母
00138	17	壺	22.5		8.5+α		良好	内面 灰褐色 外面 灰白色 1~2mmの砂粒を含む	口縁部 内面 ヨコハケ目後ナデ 外面 タテハケ目後ナデ	
00139	18	壺	20.0		7.2+α		良好	内面 橙褐色 外面 赤褐色 2~3mmの石英粒を多く含む	口縁部 内面 ヨコハケ目後ナデ 外面 ナナメハケ目後ナデ	黒雲母
00140	19	壺			7.5+α		良好	内外面ともに橙褐色 0.5mm程度の砂粒を含む 雲母はも少し含む	口縁部 内面 ヨコハケ目後ナデ 外面 ハケ目後ナデ	
00141	10	壺	18.2+α		5.4+α		普通	内外面ともにくすんだ黄褐色 2mm以下の砂粒を多量に含む	口縁部 内面 ハケ目後ナデ 外面 ハケ目後ナデ	
00142	8	壺	23.3		8.1+α		良好	内外面ともに白褐色 2mm以下の砂粒を多く含む	口縁部 内面 指オサエ後ナデ 外面 ハケ目後ヨコナデ	黒雲母
00143	109	高坏	30.3		5.0+α		良好	内外面ともに淡褐色 2mm程度の砂粒を多く含む	口縁部 内面 ヨコナデ 外面 ヨコハケ目後ヨコナデ	
00144	20	壺	14.8		3.3+α		良好	内外面ともに淡褐褐色 2~3mmの砂粒を含む	口縁部 内面 ヨコナデ、ヘラケズリ 外面 タテハケ目後ナデ	
00145	13	壺	17.2		10.7+α		良好	内外面ともに白褐色 1mm程度の砂粒を含む	口縁部 内外面 ナナメハケ目後ヨコナデ	
00146	7	壺	(推定) 28.2		8.6+α		良好	内面 黄白灰色 外面 くすんだ橙褐色 2mm程度の砂粒、黒雲母を含む	口縁部 内面 ヨコハケ目後ヨコナデ 外面 ハケ目後細いナデ	
00147	22	壺	18.6		8.0+α		良好	内面 灰褐褐色 外面 暗橙褐色 1mm以下の石英粒・長石・黒雲母を含む	口縁部 内面 ナデ後ヘラミガキ 外面 ナナメハケ目後ヘラミガキ(推定)	
00148	14	壺			2.5+α		良好	内外面ともに灰褐色 2mm程度の砂粒を含む	口縁部 内外面 ヨコナデ	白雲母
00149	15	壺			3.5+α		良好	内面 暗褐色 外面 明灰色 1mm以下の砂粒を含む	口縁部 内面 ナナメハケ目後ヨコナデ 外面 ナナメハケ目後ナデ	
00150	16	壺			2.8+α		普通	内外面ともに淡白褐色 2mm程度の石英を含む	口縁部 内面 ヨコハケ目 外面 ナデ	
00151	107	高坏	36.2		4.5+α		普通	内外面ともに白黄褐色 1mm以下の砂粒を含む	口縁部 内面 ナデ 外面 ハケ目後ナデ	
00152	9	壺	(推定) 22.1		7.1+α		普通	内外面ともに白灰褐色 2mm程度の砂粒を含む	口縁部 内外面 ハケ目後ナデ	
00153		壺			6.7+α		普通	内外面ともに乳白黄色 1mm程度の砂粒を含む	口縁部 内外面 ハケ目後ナデ	
00154	132	壺	21.8	19.25	15.4		普通	内面 明灰褐色 外面 明灰褐色~灰褐色 2mm程度の砂粒を含む	口縁部 内面 ハケ目後ナデ 外面 ヨコナデ 体部 内面 横ハケ目、ナデ 外面 ハケ目、ヘラケズリ後ナデ	蓋み大
00155	57	甕	14.75		7.1+α		良好	内外面ともに白橙褐色 1~3mmの砂粒を含む	口縁部 内面 ヨコハケ目後ナデ 外面 ナナメハケ目後 ナデ 体部 内面 ヘラケズリ後ハケ目 外面 ナナメハケ目	
00156	37	甕	15.0+α		5.9+α		良好	内面 明橙色~灰褐色 外面 灰白色~灰褐色 2mm程度の砂粒を含む	口縁部 内面 ヨコナデ 外面 ハケ目後ヨコナデ 体部 内面 ハケ目 外面 平行タタキ後ナデ	金アテ白雲母 黒雲母
00157	34	壺	14.55		7.1+α		良好	内面 白黄色 外面 茶白橙色 2~3mmの砂粒を含む	口縁部 内外面 ハケ目後ヨコナデ 体部 内面 指オサエ、ハケ目 外面 平行タタキ後タテハケ目	丁寧な作りである

遺物登録番号	報告書掲載番号	器種	法量 1	法量 2	法量 3	法量 4	焼成	色調 胎土	調整	備考
00158	52	甕	23.5		10.25+α		良好	内面 明灰色 外面 明灰褐色 2mm程度の砂粒を含む	口縁部 内面 ヨコハケ目 外面 ナテハケ目後指オサエ 体部 外面 ナナメハケ目 内面 ハケ目	口縁部に指オサエ調整で凸回している
00159	38	甕	(推定) 11.75		9.4+α		良好	内面 淡褐色 外面 灰白褐色 1mm以下の石英粒を含む	口縁部 内面 ハケ目後ナデ 外面 ヨコナデ 体部 内面 ヘラケズリ、ヨコハケ目 外面 ヨコハケ目後ナデ	
00160	113	鉢	15.3		5.7+α		良好	内外面ともに白灰褐色 1mm程度の砂粒を含む	口縁部 内面 ナデ 外面 ハケ目後ヨコナデ 体部 内面 ハケ目後丁寧なナデ 外面 ハケ目後ナデ	
00161	50	甕	15.15		6.3+α		良好	内面 黄褐色 外面 白褐色 2～3mmの石英粒を少し含む	口縁部 内面 ハケ目後ヨコナデ 外面 ヨコナデ 体部 内面 丁寧なナデ 外面 平行タタキ後ナデ	
00162	101	鉢	22.8		8.0+α		良好	内面 明白褐色 外面 灰白色やや黄味がかる 1mm程度の砂粒を多く含む	体部 内面 ナデ 外面 ハケ目後ヨコナデ	
00163	92	鉢	(推定) 13.3		7.65	5.0	普通	内外面ともに灰白黄色 1～3mmの石英粒を多く含む	体部 内面 ナデ 外面 ナテハケ目後ナデ	黒斑有
00164	120	壺	14.0		7.3+α		良好	内面 淡灰色 外面 淡褐色 精良 白色粒子金雲母を少量含む	口縁部 内外面 ヨコナデ 体部 内面 指とサエ後ナデ 外面 ナデ	精製
00165	100	鉢	15.4		8.65+α		良好	内面 明灰色 外面 灰～黒灰色 精良 白色粒子を少し含む	体部 内面 ヨコハケ目後ヘラミガキ 外面 丁寧なナデ	黒斑有
00166	32	壺	9.7		7.05+α		良好	内面 白灰褐色 外面 淡褐色～黄灰色 精良 黒雲母を少し含む	口縁部 内面 ヨコハケ目 外面 ナテハケ目後ナデ 体部 内面 指とサエ後ナデ 外面 ナナメハケ目後ナデ	黒斑有
00168	119	壺			5.65+α		良好	内外面ともに明白黄褐色 2～3mmの砂粒を含む	口縁部 内面 ヨコナデ 外面 ヘラミガキ 体部 内面 ヘラケズリ後ナデ 外面 ハケ目後ヘラミガキ	
00169	40	壺		10.8	5.75		普通	内外面ともに明白褐色 2mm程度の砂粒を含む	体部 内面 指オサエ後ナデ 外面 ハケ目後ナデ	黒斑有
00170	91	鉢	11.75		6.75+α		普通	内外面ともに白灰褐色 1mm程度の砂粒を含む	体部 内外面 指オサエ後ナデ	
00171	106	鉢	12.15		6.7		良好	内外面ともに白灰褐色 1～2mmの石英粒を含む	体部 内面 ハケ目、ナデ 外面 ハケ目後ヨコナデ	
00172	89	鉢	8.4		2.61+α		普通	内外面ともに白灰褐色 2mm程度の砂粒を多く含む	体部 内外面 指オサエ、ナデ	
00173	98	鉢	15.8		5.8+α		普通	内外面ともに白灰褐色 1～2mm程度の砂粒を少し含む	体部 内面 ヨコナデ 外面 ハケ目後ナデ	
00174	118	器台			3.81+α	13.1	良好	内外面ともに灰白色 白色黄粒子、黒雲母を少し含む	内外面 ハケ目	
00175	76	壺			4.8+α		良好	内面 白灰色 外面 乳白灰色 1mm程度の砂粒を少し含む	体部 内面 ハケ目 外面 ヘラケズリ後ナデ	
00176	114	高坏	18.6		4.2+α		良好	内外面ともに淡褐色 2～3mmの砂粒を含む	体部 内面 ヨコハケ目、ヘラミガキ 外面 ハケ目、ナデ	
00177	90	鉢	8.4		5.9	3.3	普通	内外面ともに灰褐色～黒色 2mm程度の砂粒と石英粒を含む	内面 ヘラケズリ後ナデ 外面 ナデ	黒斑有
00178	42	壺	7.8		9.05	5.6	やや不良	内面 白明色～明褐色 外面 白褐色 2～3mmの砂粒を多量に含む	口縁部 内面 ハケ目後ヨコナデ 外面 粗いナデ 体部 内外面 粗いナデ	黒斑有
00179	31	壺	11.4	14.0	11.9		良好	内面 白褐色 外面 明褐色～白褐色 1～2mmの砂粒を含む	口縁部 内外面 ハケ目後ナデ 体部 内面 ナデ 外面 不整方向ハケ目	黒斑有
00180	25	壺		18.3	10.7+α		普通	内面 黄灰褐色 外面 白灰色 1mm以下の砂粒を含む	体部 内面 ヘラケズリ、ハケ目、ナデ 外面 ヘラケズリ後ナデ	黒斑有
00181	47	甕	14.55		17.55	5.6	やや良好	内面 白黄褐色 灰褐色～白褐色 2mm以下の砂粒を多く含む	口縁部 内面 ヨコハケ目後ヨコナデ 外面 ヨコナデ 体部 内面 ヘラミガキ、ナデ 外面 ハケ目後ナデ	
00182	56	甕	19.55		14.11+α		やや良好	内面 白黄褐色 外面 白褐色 1mm程度の砂粒を含む	口縁部 内面 ヨコハケ目後粗いナデ 外面 ナナメハケ目後ヨコナデ 体部 内面 ヨコハケ目 外面 ナナメハケ目	黒斑有

遺物登録番号	報告書掲載番号	器種	法量 1	法量 2	法量 3	法量 4	焼成	色調 胎土	調整	備考
00184	115	器台	15.3		16.5+α		良好	内面 灰褐色～灰白褐色 外面 明褐色～灰黄色 2mm程度の砂粒を多く含む	口縁部 内面 ヨコハケ目後ナデ 外面 タテハケ目後ヨコナデ 体部 内面 ナデ、ハケ目 外面 ハケ目	
00185	116	支脚	9.0		14.4+α		普通	外面 黒色～淡黄色 内面 灰褐色 2mm程度の砂粒と黒雲母の微粒子を含む	口縁部 内面 コビ調整 外面 ナデ 体部 内面 ユビナデ 外面 ヘラケズリ後ナデ	傾付者
00186	117	器台			6.15−α	12.15	不良（内面は生焼け）	内面 灰黄褐色 外面 灰茶褐色 1～2mmの砂粒を含む	内外面 ユビオサエ、ナデ	
00187	85	鉢			16.5+α	7.2	普通	内面 黒色 外面 白褐色 2mm以下の砂粒を含む	内面 ユビオサエ後ナデ 外面 ナチメハケ目	黒変有
00188	84	壺			13.8+α		普通	内面 淡褐色 外面 淡褐色～黄褐色 2～3mm程度の砂粒を多く含む	内面 ヘラナデ、ユビナデ 外面 ハケ目後粗いナデ	
00189	6	壺	（推定）29.4		12.8+α		やや良好	内外面ともに白灰黄色 5～6mm以下の石英粒と2mm以下の砂粒を多く含む	口縁部 内面 ナデ 外面 ヨコナデ 体部 内面 ナナメハケ目後ナデ 外面 ナデ	黒変有
00190	82	甕			13.4+α		普通	内面 淡褐色～黒褐色 外面 黒褐色～灰褐色 1mm以下の砂粒と白雲母を含む	内面 ハケ目後ナデ、一部ヘラケズリ 外面 タテおよび不整方向ハケ目後粗いナデ	二次焼成有 張付者
00191		壺			4.7+α	8.6	普通	内面 白灰褐色 外面 白黄色 1～3mmの砂粒を多く含む	体部 内外面 ハケ目後ナデ 底部 内面 ユビオサエ、ユビナデ 外面 ナデ	
00192	46	壺	11.75		7.5+α		やや良好	内面 淡黄灰色 外面 灰黄色 1mm程度の砂粒・雲母粒を含む	内面 丁寧なヨコナデ 外面 ハケ目後丁寧なナデ	
00193	58	壺	20.7		4.4−α		普通	内面 白黄褐色 外面 灰褐色 1～2mm程度の砂粒を含む	口縁部 内面 ヨコナデ 外面 ナチメハケ目後ヨコナデ	二次焼成有 張付者
00194	54	甕	15.05		4.3+α		やや良好	内外面ともに白褐褐色 1mm程度の白色粒子・砂粒を含む	口縁部 内面 ヨコナデ 外面 ナデ 体部 内面 ヘラケズリ後ナデ 外面 平行タタキ	
00195	55	甕	（推定）18.5		4.45+α		やや良好	内面 黄白色 外面 淡黄色 0.3mm程度の砂粒を含む	内面 ヨコハケ目 外面 平行タタキ後ヨコナデ	張付者
00196	104	鉢	21.2		8.1+α		良好	内外面ともに淡灰褐色 1～2mmの制石粒を含む	口縁部 内外面 ヨコナデ 体部 内面 ハケ目後ナデ 外面 ヘラケズリ後ナデ	
00197		甕	（推定）15.2		4.9+α		普通	内外面ともに淡白褐色 1～2mmの砂粒を含む	内外面 ハケ目、ナデ	
00198		甕	19.4		2.2+α		普通	内外面ともに黄褐色 1～2mmの砂粒を含む	内外面 ナデ	
00199	48	壺	14.5−α	15.2	14.4−α		普通	内面 灰褐色 外面 灰黄褐色 4mm以下の砂粒を多く含む	口縁部 内面 ヨコハケ目 外面 ヨコナデ 体部 内面 強いハケ目 外面 ハケ目、ナデ	二次焼成有 張付者
00200	105	鉢	18.6		8.8−α		普通	外面 灰褐色 内面 灰黄色 1mm以下の砂粒を含む	内面 ヨコハケ目後ナデ 外面 ナデ	
00201	124	鉢	12.2		2.1		良好	内外面ともに白黄褐色 1～2mmの砂粒をわずかに含む	内面 ナデ 外面 ヘラミガキ	外面に赤色顔料塗布
00202		壺	9.0		1.5+α		良好	内面 黒灰色 外面 淡灰褐色 3mm程度の制石粒をわずかに含む	内外面 ナデ	
00203	123	壺	13.4		1.6+α		良好	内外面ともに白褐色 2mm以下の砂粒を含む	内面 ナデ 外面 ハケ目	外面に赤色顔料塗布
00204		壺			1.2+α		良好	内面 暗灰色 外面 淡灰褐色 1mm以下の砂粒を少量含む	内外面 ナデ	
00205	28	甕	19.4		4.7+α		やや良好	内面 灰白褐色 外面 灰褐色 2mm以下の砂粒を含む	体部 内外面 ヨコナデ	
00206	29	甕	9.5		4.1+α		良好	内面 黄白褐色 外面 白黄色 1mm以下の砂粒をわずかに含む	体部 内外面 ナデ	赤色顔料塗布
00208	24	壺	16.7		5.7−α		良好	内面 明褐色 外面 暗灰褐色 1mm程度の砂粒を含む	口縁部 内面 ナデ 外面 タテハケ目後ナデ	

通物登録番号	報告書掲載番号	器種	法量 1	法量 2	法量 3	法量 4	焼成	色調 胎土	調整	備考
00209	60	甕	29.1		7.2+α		やや良好	内面 淡白褐色 外面 白褐色 雑良 1mm以下の砂粒を含む	口縁部 内面 ナデ 体部 内外面 ナデ	
00210	61	甕	29.4		5.7−α		やや良好	内面 明灰褐色 外面 明灰褐色 1mm程度の砂粒を多く含む	口縁部 内面 ナデ 外面 ハケ目後ナデ	
00211		甕	37.0		6.5+α		やや良好	内面 白灰褐色 外面 淡褐色 1～2mmの砂粒を多く含む	口縁部 内面 ハケ目後ナデ 外面 ナデ 体部 内面 ナデ（おもにヨコ方向） 外面 タテハケ目後ナデ	
00212	103	鉢	27.0		10.2+α		普通	内外面ともに淡褐色 1～2mmの砂粒を多く含む	口縁部 内外面 ナデ 体部 内面 ヨコハケ目後ナデ 外面 タテハケ目後ナデ	
00213		甕	35.6		5.1+α		やや良好	内外面ともに淡白褐色 2mm程度の砂粒を少し含む	口縁部 内外面 ヨコナデ 体部 内面 指オサエ後ヨコナデ 外面 ヨコナデ後タテ方向ハケ目	
00215	62	甕	27.4		8.8+α		やや良好	内面 白褐色 外面 明灰色 3mm以下の石英粒を含む	口縁部 内外面 ヨコナデ 体部 内面 ハケ目後ナデ 外面 タテハケ目	
00216		甕	27.7		7.1+α		普通	内面 灰白色 外面 白褐色 2mm程度の砂粒を含む	口縁部 内面 ハケ目後ナデ 外面 ヨコナデ 体部 内面 ナデ 外面 ナナメハケ目	
00217		甕	30.0		5.75+α		普通	内外面とも明灰色 1～2mm程度の砂粒を多く含む	口縁部 内面 指オサエ後ヨコナデ 外面 ハケ目後ナデ	黒斑有
00218		甕	33.2		3.0+α		普通	内外面ともに明灰褐色 微砂粒・雲母片を含む	口縁部 内面 指オサエ後ヨコナデ 外面 ヨコナデ	
00219		甕	33.2		6.0+α		やや良好	内面 白灰色 外面 淡白褐色 1～2mmの砂粒を含む	口縁部 内面 ナデ 外面 タテハケ目後ナデ	黒斑有
00220	59	甕	31.2		6.85+α		良好	内面 白黄褐色 外面 白黄色 2mm程度の製石粒を含む	口縁部 内面 ヨコハケ目後ナデ 外面 タテハケ目後ナデ 体部 内面 ヨコハケ目 外面 タテハケ目	黒斑有
00221	63	甕			6.2−α	6.8	良好	内面 黄白色 外面 淡褐色 1～2mm程度の砂粒を多く含む	内外面 ナデ	
00222	80	甕			7.5+α	7.8	普通	内面 白褐褐色 外面 白灰褐色 0.5mm以下の白色粒子を多く含む	調整不明	黒斑有
00223	54	甕			5.3+α	6.45	普通	内面 白黄灰色 外面 明灰褐色 1mm程度の砂粒を多く含む	内面 ナデ 外面 タテハケ目	黒斑有
00224	65	甕			6.2+α	6.8	普通	内面 灰褐色 外面 白褐色 1mm以下の砂粒を少し含む	内面 ナデ 外面 タテハケ目	黒斑有
00225	79	甕			9.0+α	8.7	普通	内面 白褐色 外面 乳白灰色 1～2mmの制石粒を多く含む	内面 ナデ 外面 タテハケ目後ナデ	
00226		甕			3.35+α		普通	内面 灰色～淡褐色 外面 淡灰褐色 1mm程度の砂粒を多く含む	内外面 ナデ	
00227		甕			2.5+α		やや良好	内面 淡灰色 外面 淡赤褐色 2mm以下の製石粒を含む	内面 不明 外面 ナデ	
00228	182	甕			1.75+α	6.55	普通	内外面ともに黒灰色～淡褐色 粒が3mm以下の石英粒を多く含む	調整不明	
00229	146	甕			1.8+α	5.7	普通	内外面ともに淡白褐色 2mm程度の砂粒を多く含む	調整不明	
00230	143	甕			1.1+α	5.45	普通	内外面ともに淡褐色 2mm以下の砂粒を多く含む	調整不明	
00231	145	甕			1.35+α		普通	内外面ともに淡褐色 3mm以下の砂粒を多く含む	調整不明	
00232	147	甕			2.6+α		普通	内面 灰褐色 外面 淡褐色 3mm以下の砂粒（おもに石英）を含む	内面 ナデ 外面 指オサエ後ナデ	
00233		甕			4.8+α		やや良好	内面 淡灰褐色 外面 淡赤灰色 3mm以下の砂粒を多く含む	内面 不明 外面 ナデ	

遺物登録番号	報告書掲載番号	器種	法量 1	法量 2	法量 3	法量 4	焼成	色調	胎土	調整	備考
00234	83	甕			11.0+α	9.65	良好	内面 灰白褐色 外面 明褐色 5mm以下の模粒子を含む		内面 ナデ 外面 ナナメハケ目	
00235	78	壺			5.7+α	7.4	良好	内面 淡灰色 外面 暗灰色 1mm以下の白色粒子を少量含む		内外面 ナデ	
00236		壺			4.0+α	5.3	良好	内面 明褐色 外面 白褐色 3mm以下の砂粒を含む		内面 ナデ 外面 ヨコハケ状後ナデ	黒斑有
00237	81	壺			10.0+α	4.7	良好	内面 明褐色 外面 灰褐色～暗灰褐色 2mm以下の側石粒を少し含む		内外面 ハケ目後ナデ	黒斑有
00238	74	壺			5.7+α	6.4	普通	内外面ともに乳灰白色 2mm以下の側石粒（おもに石英）を多量に含む		内外面 ナデ	黒斑有
00239	75	壺			4.6+α	3.1	良好	内面 暗灰色 外面 暗灰褐色 2mm以下の石英粒をわずかに含む		内面 ハケ目後ナデ 外面 ナデ	
00240	77	壺			5.0+α	8.1	普通	内外面ともに乳白灰色 2mm以下の側石粒（おもに石英・長石）を多く含む		内面 粗いナデ 外面 ハケ目後ナデ	粗製
00241	73	壺			5.0+α	3.8	やや良好	内外面ともに淡灰褐色 1～2mmのおもに石英・長石を含む		内面 ナデ、ナナメハケ目 外面 平行タタキ後ナデ	黒斑有
00242	69	甕			14.2+α	9.85	やや良好	内面 乳白灰色 外面 白褐色～橙色 4mm以下の石英・長石粒を多く含む		内面 ハケ目、ナデ 外面 ハケ目、ヘラケズリ	黒斑有
00243	70	甕			15.7+α	13.4	やや良好	内外面ともに白褐色 2mm以下の側石粒を多く含む		内面 ハケ目後ナデ 外面 平行タタキ後ハケ目、ヘラケズリ	黒斑有
00244	68	甕			19.6+α	9.0	やや良好	内面 黄白褐色 外面 灰白褐色 2mm以下の砂粒（石英・長石）をやや多く含む		内面 ハケ目、ナデ 外面 タタキ後ナデ、ハケ目	赤斑無有 黒斑有
00245	67	甕		44.6	41.0+α	11.5	やや良好	内面 白灰色 外面 黄灰褐色 2mm程度の石英粒を多く含む		内面 ハケ目、ナデ 外面 平行タタキ後、タナハケ目	黒斑有
00246	121	甑			5.0+α		良好	内外面ともに黄褐色 1mmの石英を多量に含む		内面 ハケ目 外面 ナデ	
00247	125	甕	23.35		7.0+α		やや良好	外面 暗灰色 内面 暗灰褐色 1mm以下の石英・長石粒を含む		内外面 条痕、ナデ	
00248	136	甕	19.9		4.35		普通	内面 灰褐色 外面 黒褐色～暗橙色 1mm程度の砂粒（おもに石英）を多く含む		内面 ヨコ方向のナデ 外面 ナナメ方向のナデ	二次焼成有 炭化物付着
00249	128	甕					普通	内面 灰褐色 外面 凸線部分は黒色以外は暗褐色 1.5mm程度の石英粒を多く含む		内外面ともナデ	
00250	130	甕					良好	内外面ともに黒灰色 2mm以下の石英、長石粒を多く含む		指ナサエ、ナデ	
00251	133	甕					普通	内面 灰褐色 外面 灰褐色～暗灰褐色 金雲母もごくわずかに含む 2mm以下の砂粒（おもに石英）を多く含む		条痕、ナデ	二次焼成有 炭化物付着
00252	134	甕					やや不良	内面 白灰色 外面 白黄色 3mm程度の石英粒を含む		口縁部 内外面 ナデ	
00253	129	甕					良好	内面 黒灰色 外面 灰黄褐色 2mm程度の石英粒を多く含む		口縁部 内外面 指ナサエナデ	
00254	127	甕	22.2		10.5+α		普通	内面 灰褐色～黒褐色 外面 灰褐色 1.5mm以下の石英粒を多く含む		口縁部 内外面 ヨコナデ 体部 内面 ハケ目後ナデ 外面 ナデ	
00255	137	甕					普通	内面 灰褐色～暗褐色 外面 白灰褐色 2mm以下の石英粒を多く含む		口縁部 内外面 ヨコナデ 体部 内外面 ナデ	
00256	136	甕					良好	内面 黄白灰色 外面 灰白褐色 2.5mm以下の石英を多く含む		口縁部 内外面 ナデ	黒斑有
00257	138	壺					良好	内外面ともに乳白灰色 1.5mm以下の砂粒を多く含む		内外面 丁寧なナデ	

遺物登録番号	報告書掲載番号	器種	法量 1	法量 2	法量 3	法量 4	焼成	色調　胎土	調整	備考
00258	282	壺					やや不良	内面 暗灰褐色 外面 灰褐色～明灰褐色 2.5mm以下の砂粒を多く含む	内外面…ナデ	
00259	132	甕					良好	内外面ともに暗褐色 1.5mm以下の砂粒を多く含む	内外面ともヨコハケ目後ナデ	
00260	141	壺					良好	内外面ともに明灰褐色 2mm以下の石英粒をおもに含む	内外面 ナデ	ヘラ状工具による文様有
00261		甕	21.9		4.0+α		やや良好	内外面ともに淡灰褐色 2mm以下の砂粒を含む	口縁部 内外面ともヨコハケ目後ナデ 体部 内面 ナデ 外面 タテハケ目後ナデ	
00262	140	壺					やや不良	内面 明灰褐色 外面 灰白色 2mm以下の砂粒を多く含む 金雲母もわずかに含む	内面 ナデ 外面 調整不明	
00263	139	貫坏					良好	内外面ともに灰白色 2mm以下の砂粒を多く含む	内面 ナデ 外面 調整不明	
00264	279	鉢					普通	内外面ともに暗灰色～灰色 3mm以下の雲母粒を多く含む	内面 指オサエ 外面 ナデ	
00265	281	鉢					良好	内外面ともに明灰黄色 1.5mm以下の石英・雲母を多く含む	内外面 ナデ	
00266	266	深鉢					普通	内外面とも黄褐色 1mm以下の白色粒子・石英粒を含む	内外面ともにナデ	刺突文有
00267	5	壺	26.45		20.4+α		普通	内外面ともに赤黄灰色 4mm以下の砂粒（石英粒を主とする）を含む	口縁部 内面 ヨコハケ目、ナデ 外面 タテハケ目 体部 内面 ナデ 外面 ナナメハケ目	
00268	281	甕	45.05		20.1+α		普通	内面 淡灰褐色 外面 明黄褐色 5mm以下の砂粒（おもに長石・石英）を多く含む	口縁部 内面 ヨコハケ目 外面 タテハケ目、ナデ 体部 内面 ヨコハケ目 外面 タテハケ目後ナデ	
00269	66	甕		45.0	40.2+α	8.5	やや良好	内面 明灰褐色 外面 明黄褐色 2mm以下の砂粒を含む	内面 ナナメハケ目、ナデ 外面 ナナメハケ目	焼成後穿孔を高度有
00271	21	甕	34.0		6.7+α		やや不良	内外面ともに明黄灰色 1mm以下の白色粒子を含む	内面 ハケ目後ナデ 外面 ナナメハケ目後ナデ	
00207	30	壺	10.9−α		4.2+α		良好	内外面ともに白褐色 1.5mm以下の砂粒を含む	内外面 ナデ	

3．第3号溝出土木器（Fig.19・20）

第3号溝の付設遺構中からは、鍬・鋤・杓文字のほか、加工材・未製品・板材・割材・柱材など建築材・杭などが出土した。上層からは、少量の板材・加工材が出土したが、ほとんどが下層相当層からの出土であり、弥生時代終末期までのものである。加工材・板材・建築材・杭は多量出土しているが、図化できなかった。板材・加工材・建築材の図化できなかった分については、何らかの機会をみつけ報告することにする。

農耕具（501・502）としては、鍬と鋤がある。鍬は、方形柄孔をもち、比較的刃部の長い三又鍬で、刃部の切り込みはV字状をなし、中央刃は横断面方形で、端刃は五角形をなしている。鋤は、柄部・刃部を欠損しているが一木造り鋤と考えられ、肩部にはコの字状の張り出しがあり、刃部の肩部から下半部の端部は一段高く整形している。汁器類として杓文字（505）がある。柄部および身部の大半を欠失しているが、表裏に黒漆を塗布している。

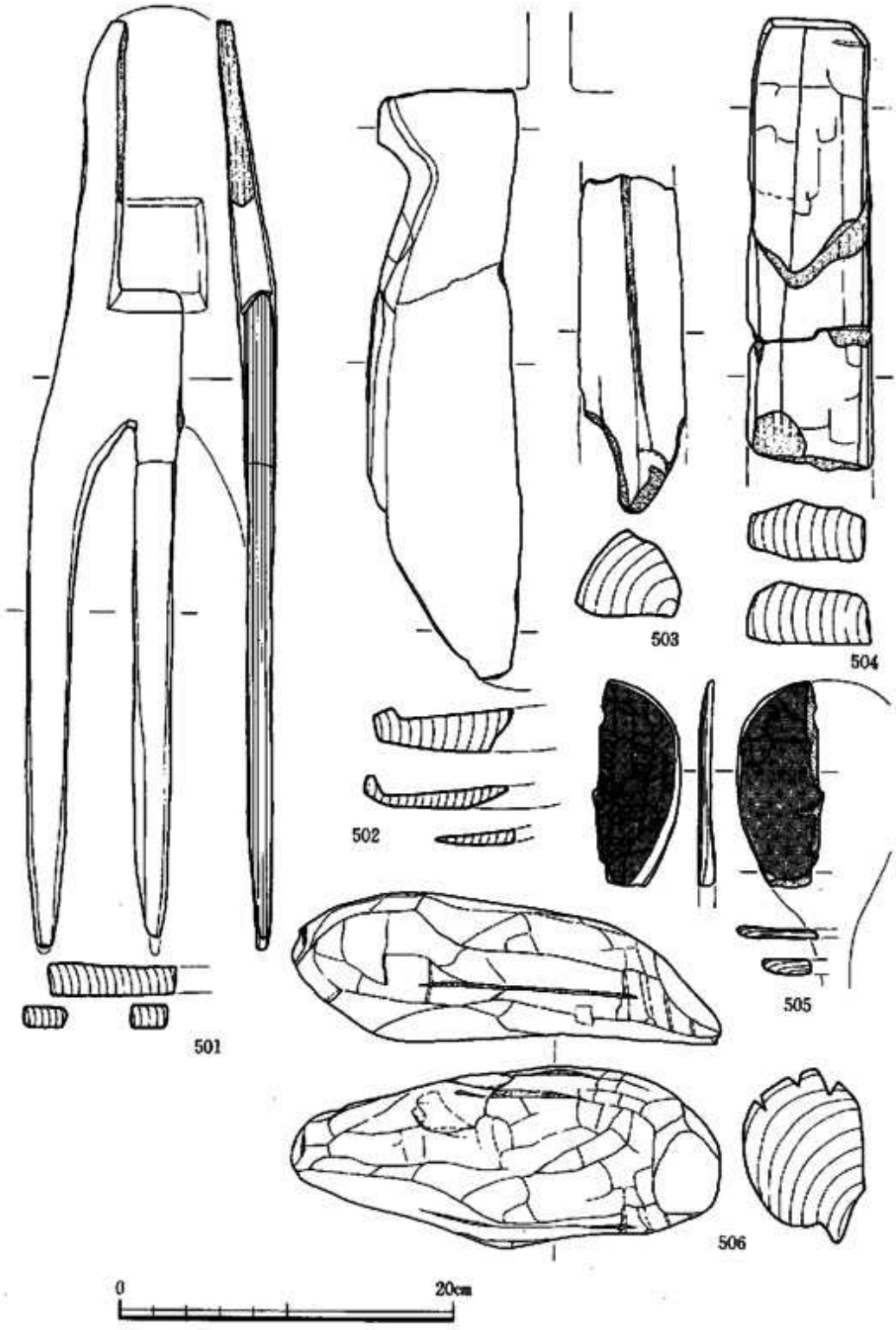


Fig.19　第３号溝出土木器実測図

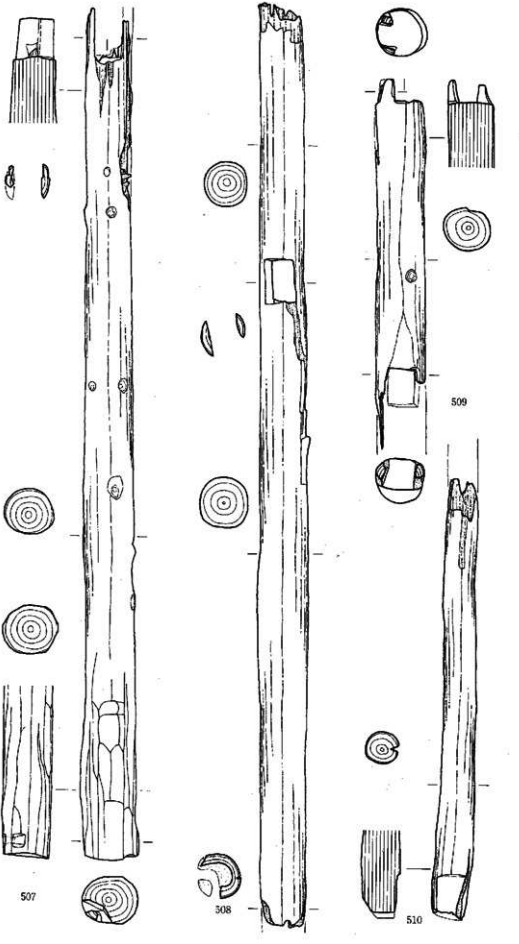


Fig.20　第３号溝出土建築材実測図

建築材としては、遺存状態の良い4点（507～510）の柱材を図化報告しておく。いずれも広葉樹の芯持ち材を用いている。507は、基部近くに連結する7cm前後の方形孔を穿ち、残存端部は幅15cm前後の切り込みが入っているが、枘の可能性がある。基部から切り込み部までは4.35cmである。508は、基部および先端部を欠失しているが、基部は507と同様の構造をもっていると考えられる。基底部から3.35mのところに25×15cmの方形枘が穿たれている。507・508の基部の穿孔は、柱を運ぶ時の縄がかり部と考えられる。509は、上端部と考えられ、幅6cm、長さ12cmの相対する凸起部が設けられており、上端部から1.57mに幅15cmの枘が設けられている。510は、基部と考えられる。

第3号溝出土木器一覧表

遺物番号	挿図番号	図版	器種	樹種	遺存状態	法量 (cm) A	B	C	D	E	F	G	H	I	J	K	L	M	N	O	備考
10055	Fig.19 505	PL.19	針葉樹		板 目	22.25+α	5.21+α	1.8													樹脂道観察用薄片
10057			広葉樹	ヤブツバキ	芯持ち材	42.2+α	3.45+α	0.35													
10058	Fig.19 502	PL.19	柱	ク ン	板 目	33.2+α	3.4+α	2.5+α					角孔1ヶ所								穿孔にコウヤの木の当り付と思われる。一本柱か
10059	Fig.19 503	PL.19	柱 材		割 材	30.1+α	6.3	5.15													円柱状木を二分に割している
10077	Fig.19 504	PL.19	板 材	ン イ	板 目	39.6+α	2.55	2.2													
10082	Fig.19 506	PL.19	未製品		割 材	29.75+α	10.6	7.15													
10085	Fig.19 508	PL.19	三又柱	ク ン	芯 持	60.5+α	8.65+α	2.4	6.6+α	6.6+α	17.45+α	6.4	方孔 15.5+α 8.4孔				13孔	14孔			
10086	Fig.20 509		柱 材		芯持ち	89.7+α	29.0		平 面 29.0×α				断 面	4.0							基部近くに連結部のクセがやや斜め違りがしている
10089	Fig.20 506		柱 材		芯持ち	90.5+α	27.0		断 面 22.0				幅	16.0							現地から下地は、ているが、基部には切り込まれているものと考えられる。切り込まれてから下端を切り落している
10090	Fig.20 509		柱 材		芯持ち	99.6+α	29.5+α		断 面 30.2×α				幅	14.0							柱脚にこの方向の枘穴を掘ると考えている
10091	Fig.20 510		柱 材		芯持ち	126.5+α	37.5+α														

4．第3号溝出土石製品（Fig.23）

901は、石包丁破片である。穿孔部・背縁・両端部は欠損する。石材は凝灰岩ホルンフェルスである。刃部は両面から研ぎ出されている。研ぎ出しの稜線は明瞭でない。現存長6.5cm、現存幅2.8cm、厚さ0.6cmである。902は、石包丁未製品破片である。板状のホルンフェルスを敲打し、剥離調整している。研磨痕は認められない。厚さ0.8cm、現存最大幅6.2cmである。

903は、砥石片である。研砥面は3面に認められ、上下面は浅くくぼみ、側面は湾曲している。下面には凸部があり、それに沿って浅い溝状のくぼみがある。現存で長さ7.3cm、幅3.0cm、厚さ2.4cmである。

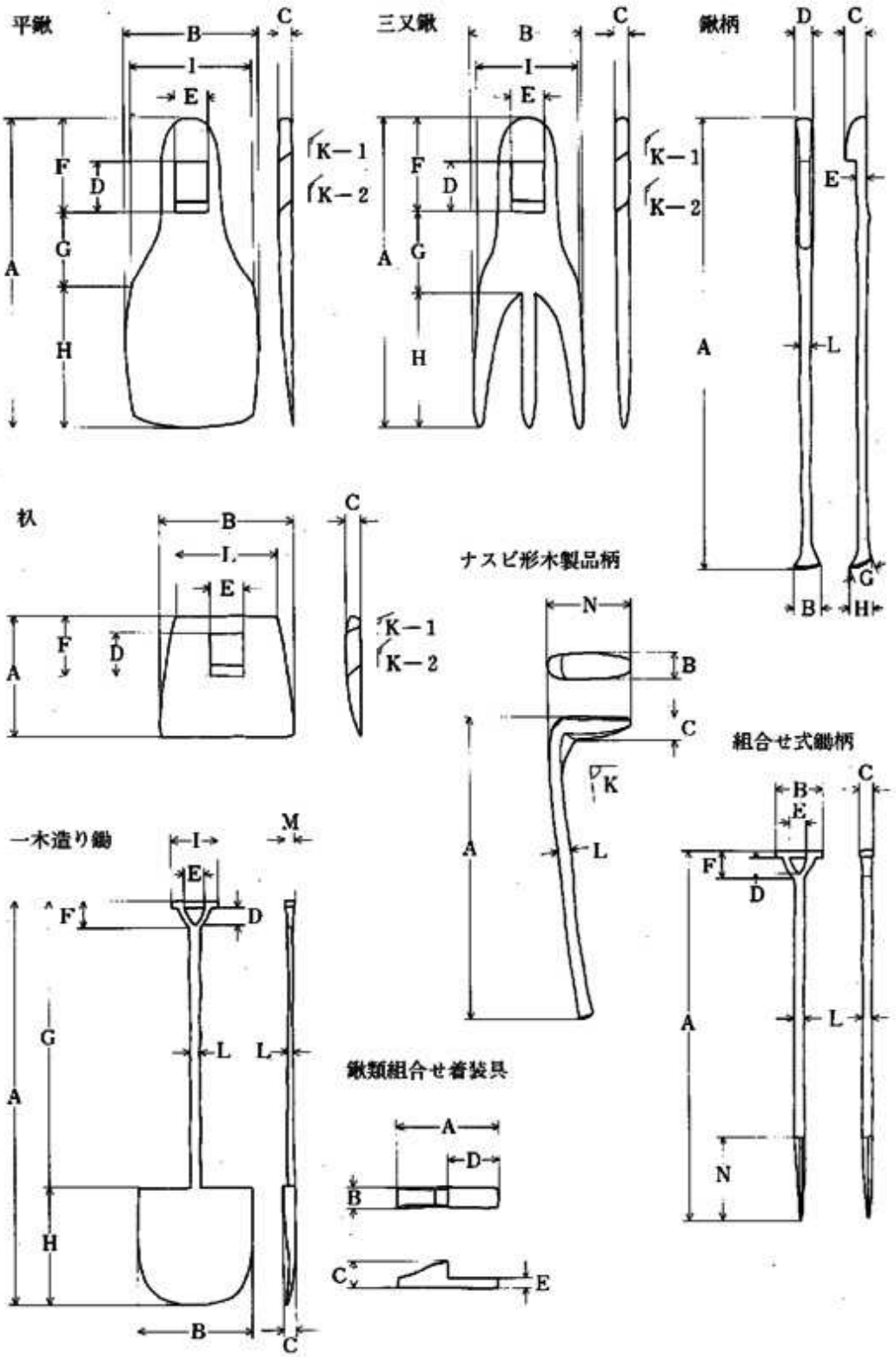
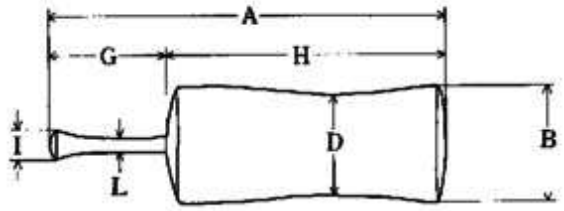
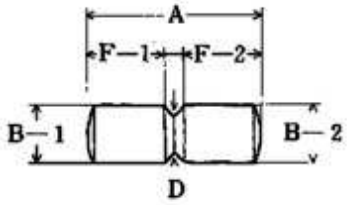


Fig.21 木器計測区分 (1)

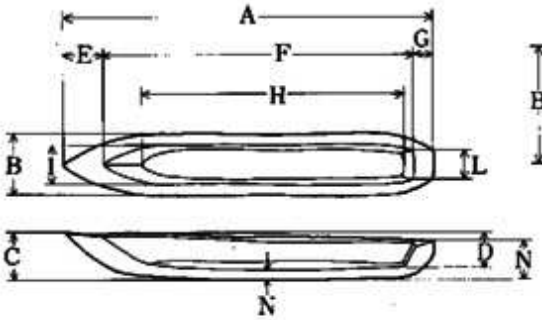
櫂



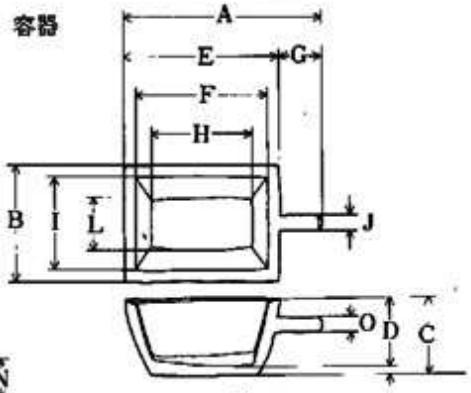
編錘



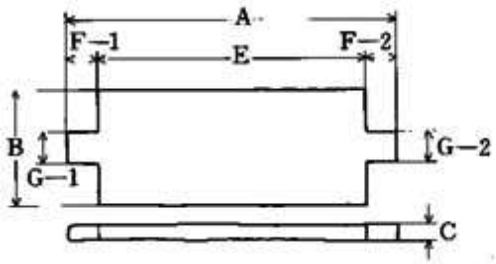
小形構造船



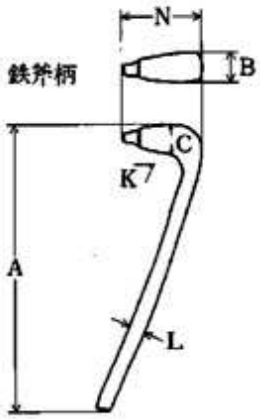
容器



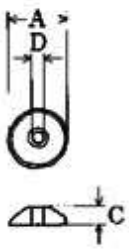
大足



鉄斧柄



紡錘車



凡例　出土木器法量計測位置
A：器長　B：最大幅（最大径）　C：最大厚
敲類　D：柄孔長　E：柄孔幅　F：頭部長　G：基部長　H：刃部長　I：基部幅　K：柄孔角
敲類柄　B：柄端部幅　C：組合わせ部厚　D：組合わせ部幅　E：組合わせ部最小厚　G：柄端部長　H：柄端部厚　L：柄部径
杭　D：柄孔長　E：柄孔幅　F：頭部長　L：頭部幅　K：柄孔角
鍬類　D：握部孔長　E：握部孔幅　F：握部長　G：柄部長　H：刃部長　I：柄孔部幅　L：柄部径　M：柄端部厚　N：組合わせ部長
ナスビ形木製品柄　B：台部幅　C：台部厚　K：柄角　L：柄部径　N：台部長
鍬類組合わせ着装具　D：組合わせ部長　E：組合わせ部厚
鎌　D：穂部最小径　G：柄部長　H：穂部長　I：柄部端径　L：柄部最小径
編錘　B：体部径　D：紐がかり部最小径　F：体部長　G：紐がかり部長
小形模造船　C：最大高（船首高）　D：器内高　E：船首長　F：器内長　G：船尾長　H：船底部長　I：器内幅　L：船底部幅　M：船尾高　N：船底部最小高
容器　C：器高　D：器内高　E：容器長　F：器内長　G：柄部長　H：器底部長　I：器内幅　J：柄部幅　L：器底部幅　N：器底部最小高
大足　E：体部長　F：組合わせ部長　G：組合わせ部幅
鉄斧柄　B：台部厚　C：台部幅　K：柄角　L：柄部最小径
紡錘車　A：最大径　C：最大厚　D：穿孔部最小径

Fig.22　木器計測区分（2）

5．その他の弥生時代土器（Fig.24）

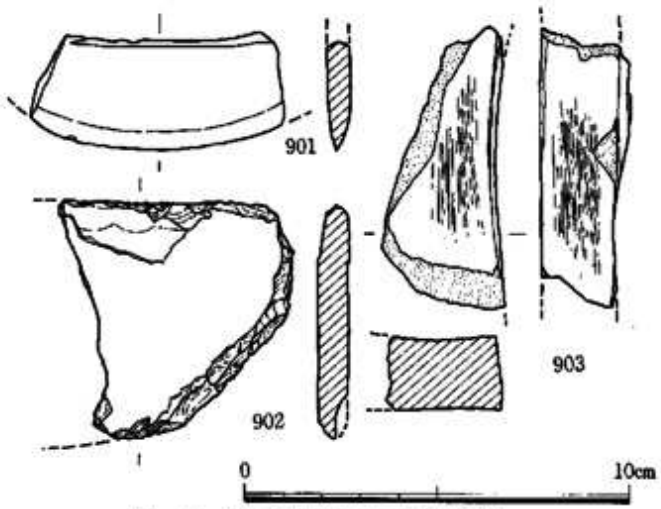


Fig.23　第３号溝出土石器実測図

125～131・133～138・142～147は、甕である。125・126・128・129は胴部から直線的に立ちあがった口縁端に、水平に刻み目を持つ貼り付け突帯がつく。125・126・129は棒状工具による刻み目で、128は板状工具によるものと思われる。130・133は直線的に立ち上がる口縁に、端部よりわずかに下った所に刻み目突帯がつく。133には外面に煤の付着がみられる。134は口縁直下と、さらに４cm下方に刻み目突帯がつく。口縁端近くは、少し外反している。127・131・136・137は如意形の口縁を有する。127は端部を摘んでいるため、波状にみえる。端面には細い刻み目がランダムにはいる。136は口縁端面の下部を中心に刻み目がはいる。137は口縁端面の下部のみに、浅く小さな刻み目が施されている。138は大型の甕の口縁部片である。口縁端面の上部と下部のそれぞれに、細かな刻み目がはいる。142～147は甕の底部片である。144は弛い上げ底になっている。他は平底である。

132・141・282は壺である。132は如意形の口縁を持っている。胴部へ鈍く開いていくと考えられる。282は口縁片である。外反しつつ肥厚している。肥厚部分は粘土の貼り付けによるものである。口縁端は面をなさず丸く仕上がっている。141は壺の胴部片である。上位にヘラ描き沈線が間隔をおいて２条巡り、その直下に胴部最大径に向かって、同じヘラ描き沈線による鋸歯文が施されている。

以上の土器は、風化が激しく器壁が荒れている。色調は138・141が明黄色を呈し、他はくすんだ灰褐色をしている。

125～136・142～145・282は前期前半、137・138・141・146・147は前期後半から前期末、139・140は中期前半のものと考えられる。

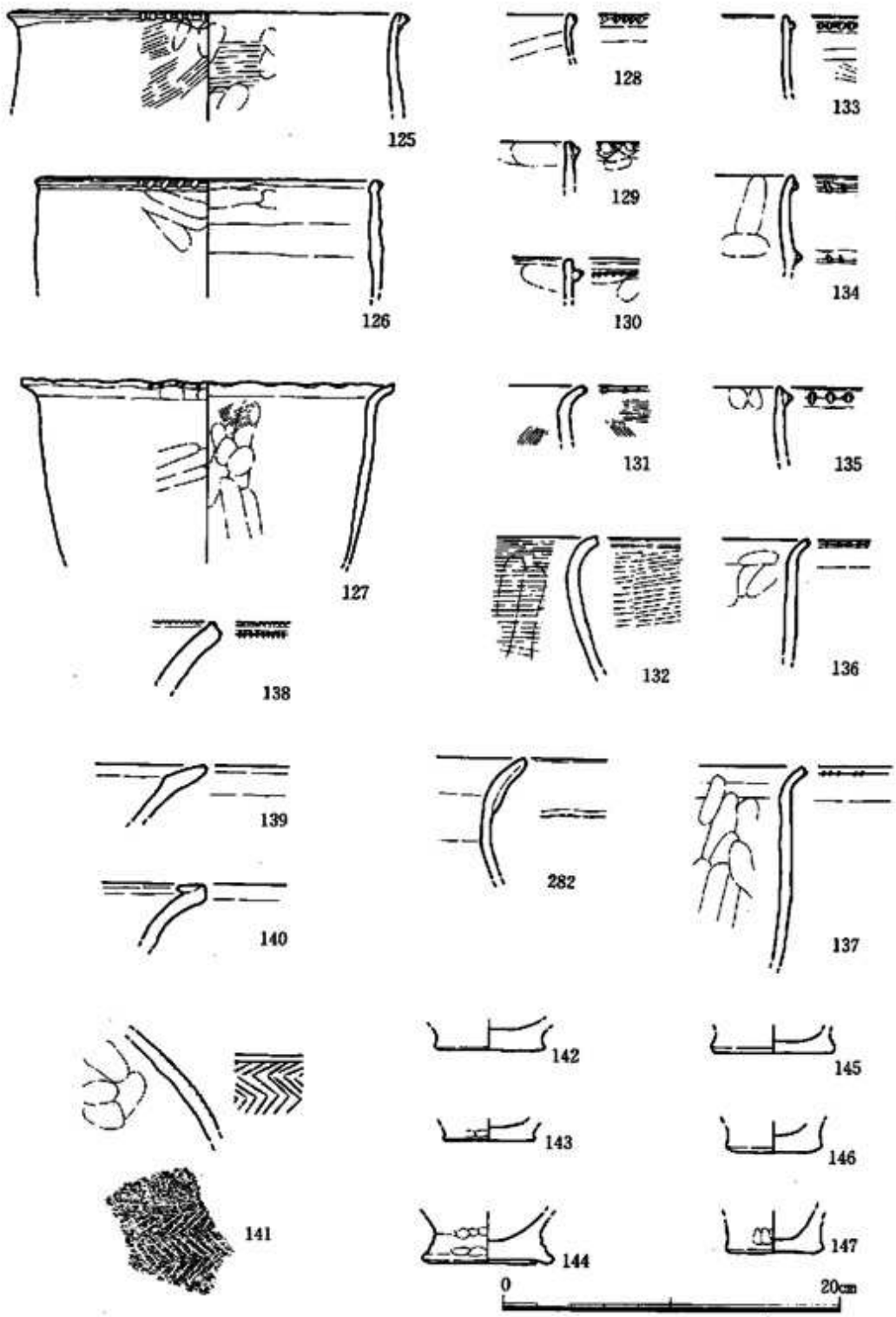


Fig.24　その他の弥生時代土器実測図

第５章　調査の記録－古墳時代－

１．大溝について（Fig. 4 ・ 6）

本調査地点では、北西に流路をとる平行した２条の大溝を検出した。便宜上、西側に位置するものを第１号溝（ＳＤ－１）、他を第２号溝とする。

第１号溝は、南側で７ｍ前後、北側で10ｍの幅をもっている。最上部の東肩寄りに、鉄分を含む茶褐色～暗褐色粘土・茶褐色～暗黄褐色の粗砂が20cm前後堆積し、その下に30～40cmの厚さをもつ暗灰色～黒色粘質土が堆積している。この層から多量の土器・木製品・流木が出土した。その下は、遺物を含まない茶灰色粗砂が10～35cm堆積し、土器や少量の流木を含む黒灰色の粘質土～シルトが堆積している。無遺物層を挟み、上を上層、下を下層とした。したがって、第１号溝の上層は90cmの深さをもち、下層は、1.2ｍの深さをもっている。上層の遺物のほとんどは、暗灰色～黒色粘質土層中から出土し、しかも遺物は溝中央部の幅３ｍ前後に集中して出土した。遺物の出土状態をみていくと、比較的厚く、しかも板材や10cm以上の径をもつ流木を外側に置き、その間に小枝等の流木や木製品を重ねながら敷きつめ、さらに不規則的に径６cm前後で長さ60cm前後の丸杭を打って、流木・木製品群を止めている。上層出土の土器の完形品は、小形丸底壺・高坏が多く、流木・木製品群の上に据えられた状態で出土した。

第２号溝は幅８ｍ前後で、灰色～黄褐色の粗砂・細砂、黒色・茶褐色・暗灰色の粘質土～シルトが互層となって堆積しており、１ｍ前後の深さをもっている。遺物は、少量の土器片・木製品・流木が上から下まで不変的に出土した。

出土土器から、第１号溝下層は５世紀初頭から前半、上層は５世紀前半から中頃、第２号溝は第１号溝上層と同時期と考えられる。両溝の切り合い関係は、調査区の北側でみる限り、第２号溝が第１号溝を切っている。第１号溝上層の遺物の出土状態および切り合い関係・出土土器の時期から、第２号溝は、第１号溝の水路改修と考えられ、第１号溝上層の遺物出土状態は改修時の祭祀行為と考えられる。第４・７・10次調査地点検出の古墳時代大溝は、それぞれ蛇行部の調査であり、本調査地点の第２号溝の延長部と考えられる。今後の本調査地点隣接地の調査を待ちたい。

2．第1号溝上層出土土器（Fig.25～31）

第1号溝は上下2層の文化層より成る。上層出土の土器は、おもに多量の木製品・流木群の上に乗るような形で出土した。

出土した器種は、壷・甕・小型丸底壷・鉢・器台・手捏ね土器・匙形土製品・須恵器甕である。

148～174は小型丸底壷である。調整は、すべてハケ目、ヘラケズリ、ナデにより構成されている。148は、楕円形の体部に、よくしまった頸部から直線的に長い口縁がつづく。口縁端は少し外反し、シャープに整える。172は楕円形の体部に複合口縁がつく。頸部は強くしまり、弱く内湾しながら広がる。屈折部は突帯ようになっている。器壁は内面ヘラケズリにより薄く仕上げてある。149・153・154・158・159・164は口径と体部径が、ほぼ等しくなる。149・164は頸部のしまりが弱い。口縁部は直線的に広がるもの（149・158）、直線的に広がり端部で外反するもの（158・159）、短く内湾ぎみに立ちあがるもの（154）がある。160は口径が体部径より大きくなる。大きく直線的に広く口縁を持つ。頸部内面は明瞭な稜をなす。150・165・167～171・173は口径を体部径が上回る。150は頸部がしまり、口縁は一度内湾し、さらに外反しつつ立ちあがる。体部は149と似て最大径は、やや上位にあり鋭く張っている。165・168・171はしまった頸部より外反する口縁を有する。165・171は器壁が厚く楕円形の体部を持つ。168は球形にちかい。169・170は頸部より直線的に広がる口縁を持ち、頸部内面は稜を有する。170は頸部から体部は肥厚している。167は鋭くしまった頸部より、細目の口縁が直線的にのびている。体部はよく張った楕円形である。173は内湾する短い口縁を持つ。155・162・163は頸部がしまらず、体部は胴が張らず、ビーカー様の器形を示す。

176～185は鉢である。177～179は椀としても良いかもしれないが、鉢として一括する。3点とも平底を持つ。179はつくりが荒い。底部から内湾しながら大きく開く。口縁部はユビオサエ痕が明瞭に残り、凹凸が激しい。177・178は底部から外反しつつ立ちあがり、そのまま内湾して口縁へいたる。口縁は177が直立しているのに対し、178は開いたままである。底部は、ともに肥厚している。178は底部を貼り付けた痕跡が認められる。180～184は丸底をなす。180・182は器壁が厚く、口縁へ向かって底から素直に立ち上がり、口縁は直立している。182の口縁端部は、わずかだが外反している。181・183は口縁部が内湾している。184は口縁部と体部を意識しているのか、口縁部下にごく弱い屈曲部がある。176・185は小型で、丸型の底部から内湾しつつ立ちあがる。口縁部下で一度屈曲外反し、口縁端部は再び内湾する。これにより口縁部と体部は明瞭に区分される。

186～215は高坏である。数量は多いが、完形復元可能なものはほとんどなく、脚部または坏

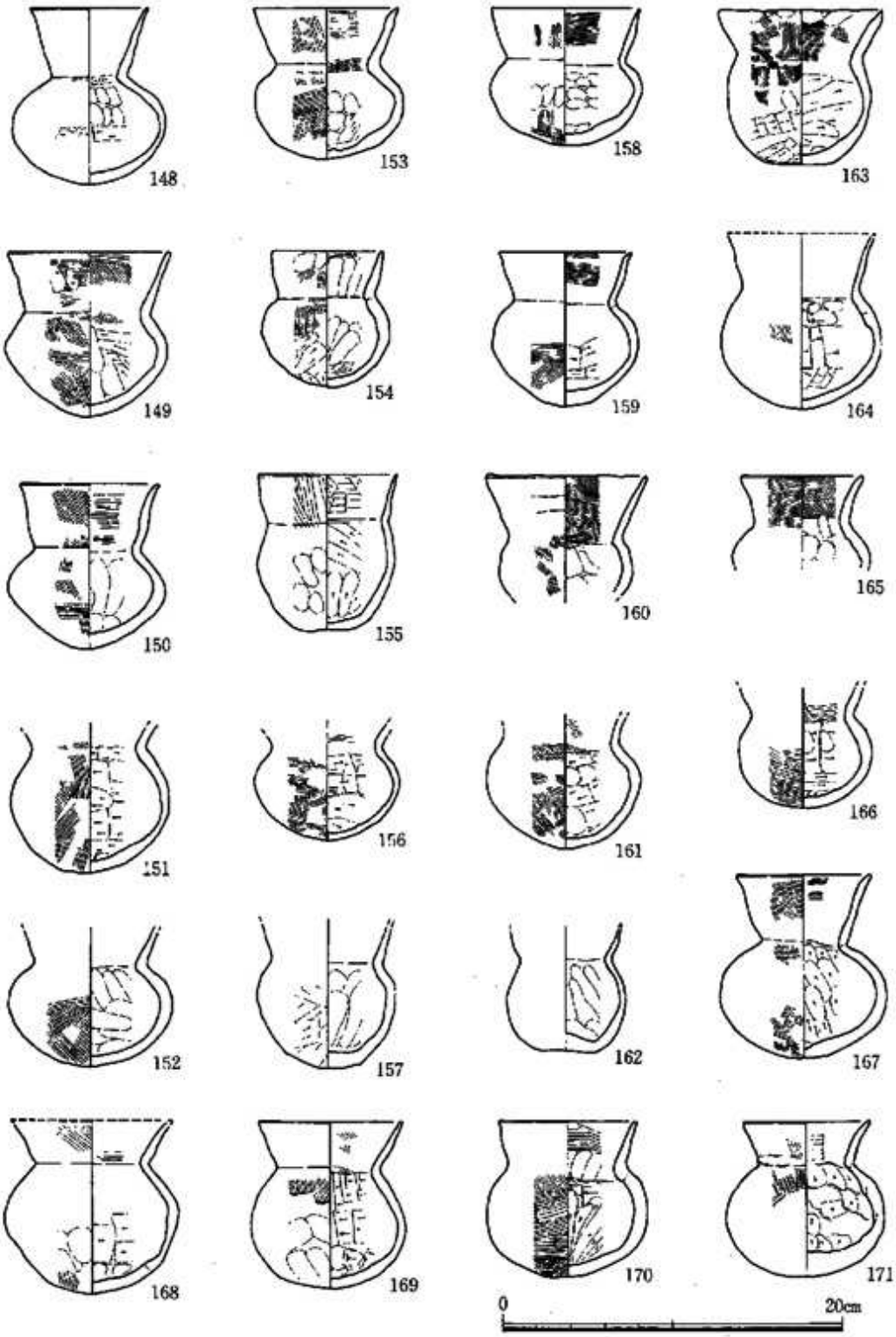


Fig.25　第1号溝上層出土土器実測図 (1)

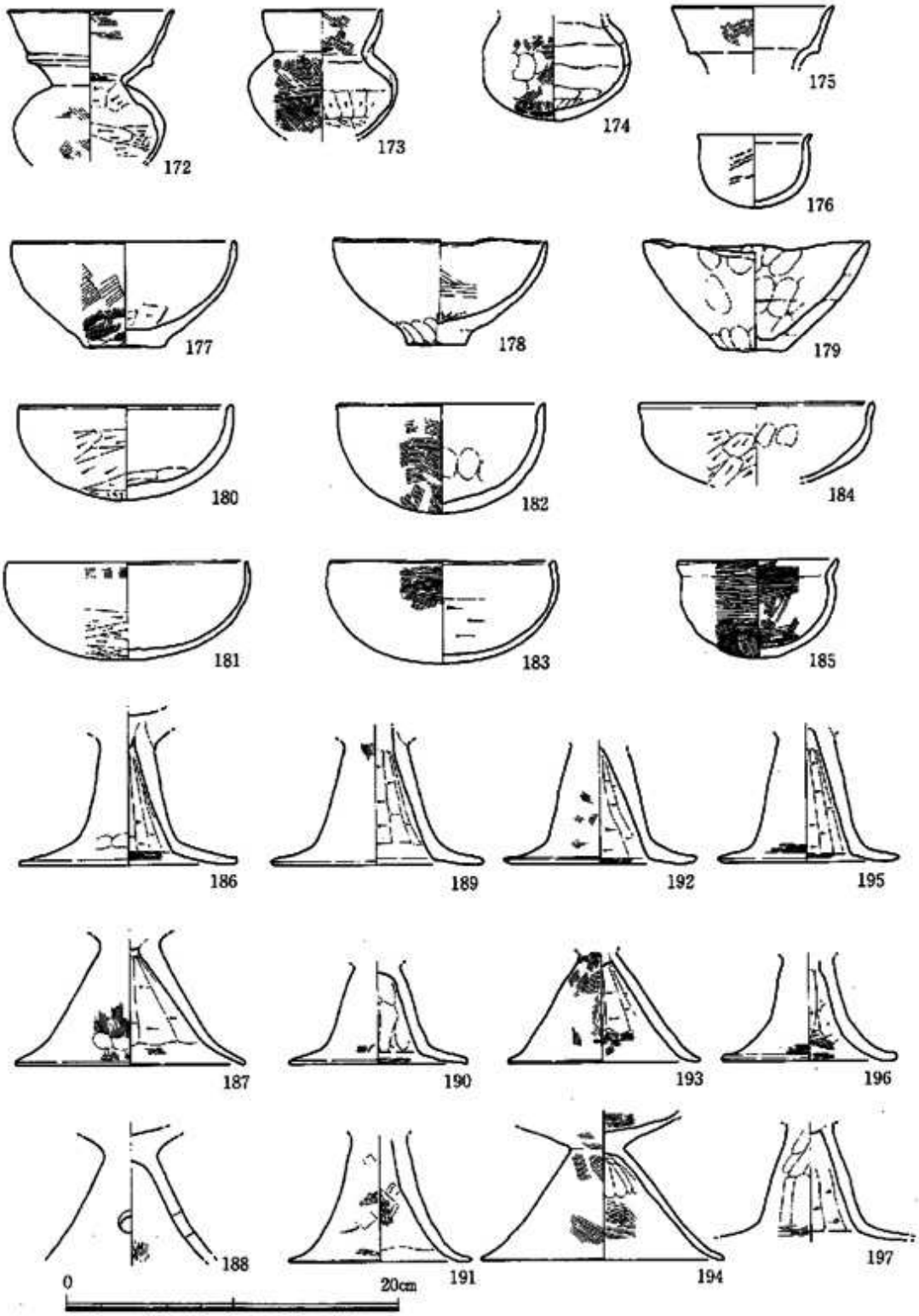


Fig.26　第1号溝上層出土土器実測図 (2)

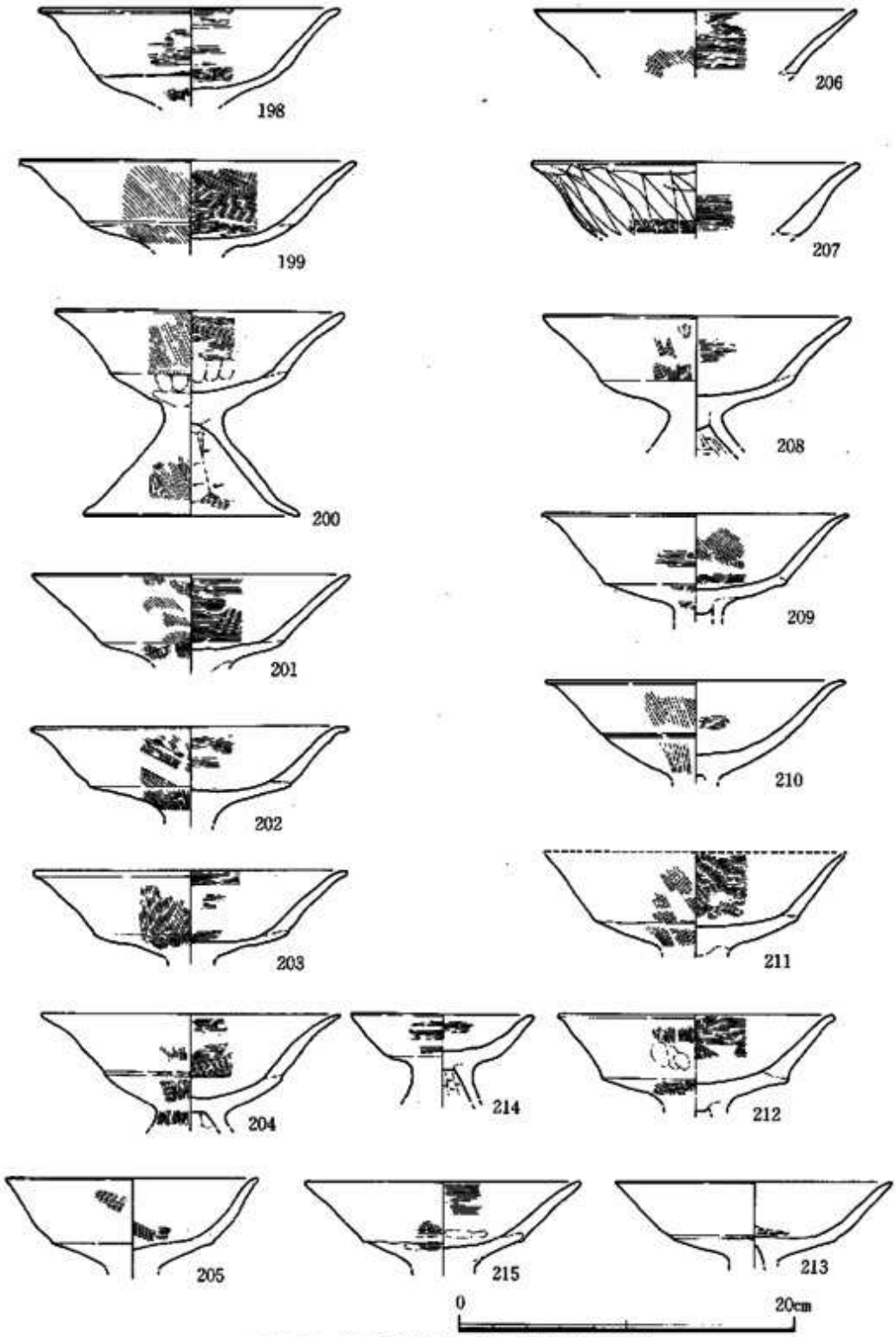


Fig.27　第1号溝上層出土土器実測図 (3)

部のみの破片が大部分を占める。186～197は脚部のみのものである。脚の開き具合から大きくラッパ状に開くもの（187・191・193・194・196）と「ハ」の字状に開くもの（186・189・190・192・195・197）に分かれる。

187は坏部より直線的に大きく開き、さらに脚部近くで外反する。脚端は平坦に仕上げ、均整のとれた形をしている。

191・196は坏部直下より外反しながら広がり、脚端近くで強く外反する。191は脚端を外側へ引き出すように薄く仕上げているが、196は軸部とあまり変化のない厚さのまま、丸くおさめている。194は坏部直下より内湾ぎみに開き脚端近くで外反する。脚端は丸く仕上げる。脚部の器壁は薄く、ほぼ均一である。「ハ」の字に開く脚は190を除いて内面にヘラケズリ痕を残している。ヘラの動きは圧倒的に時計廻りが多い。軸部はどれも直線的に広がり屈曲部にいたる。屈曲部から脚端にかけては、直線的に伸びるもの（186・190・197）、外反するもの（189・192・195）がある。脚端は、外反するものは接地せずめくれたようになっている。直線的に伸びるものは端面を有して接地し、ふんばる形になっている。188は唯一円形の透かし穴がみられる。透かし穴は対向２穴と思われる。穿孔後、丁寧に粘土屑を取り除いている。穿孔径は1.5cmである。200は完形復元できる一点である。坏部は屈曲部を持ち稜をなす。屈曲部から口縁へは弛やかに外反する。口唇部は丸く仕上げる。脚部はラッパ状に大きく開き、脚端近くで外反する。209・212は屈曲部に明瞭な稜を形成する。201～203・211・213・215は屈曲部に弛やかな稜をなす。202は口縁端が強く外反する。211・215屈曲部に接合時の粘土のハミ出しがある。213は、稜は消えかけている。204・205・208は屈曲部の稜が目立たない。他に較べて坏部は少し深い。

198・199・210は屈曲部に稜を持たず弛やかに傾斜が変化する。199・210には屈曲部の位置に浅い凹線を巡らせている。特に210は脚部との接合面から内湾しながら立ちあがり、口縁部で外反し、屈曲部を持たない。207は外面にヘラ描きで施文している。214は小型のもので、坏部の屈曲を意識している。坏部に比べて脚部は大きいと思われる。脚部上方には坏部との接合時についた爪痕が残る。

216・217・221・227は壺である。221は二重口縁壺の口縁部である。器壁は厚く擬口縁部の屈曲はなまっている。216は球形の体部を持つ。頸部はよくしまり内湾しつつ広がる口縁部がつく。口縁端部は内側に段を有する。217は口縁部を欠損する。最大径が胴部中央より、やや上位にある球形である。227は大型の二重口縁壺である。ほぼ完形に復元できた。球形の体部に小さい口縁部がつく。頸部のしまりは強く、口縁屈曲部の稜も明瞭である。口唇部は平坦に仕上げている。底部は剥離している。焼成時の焼き膨れのためと思われる。

218～220・222～224・228・229は甕である。222・229を除いて調整は外面がハケ目、内面ヘラケズリである。218はあまり張らない胴部に直立する口縁がつく。底部は丸底である。器壁は

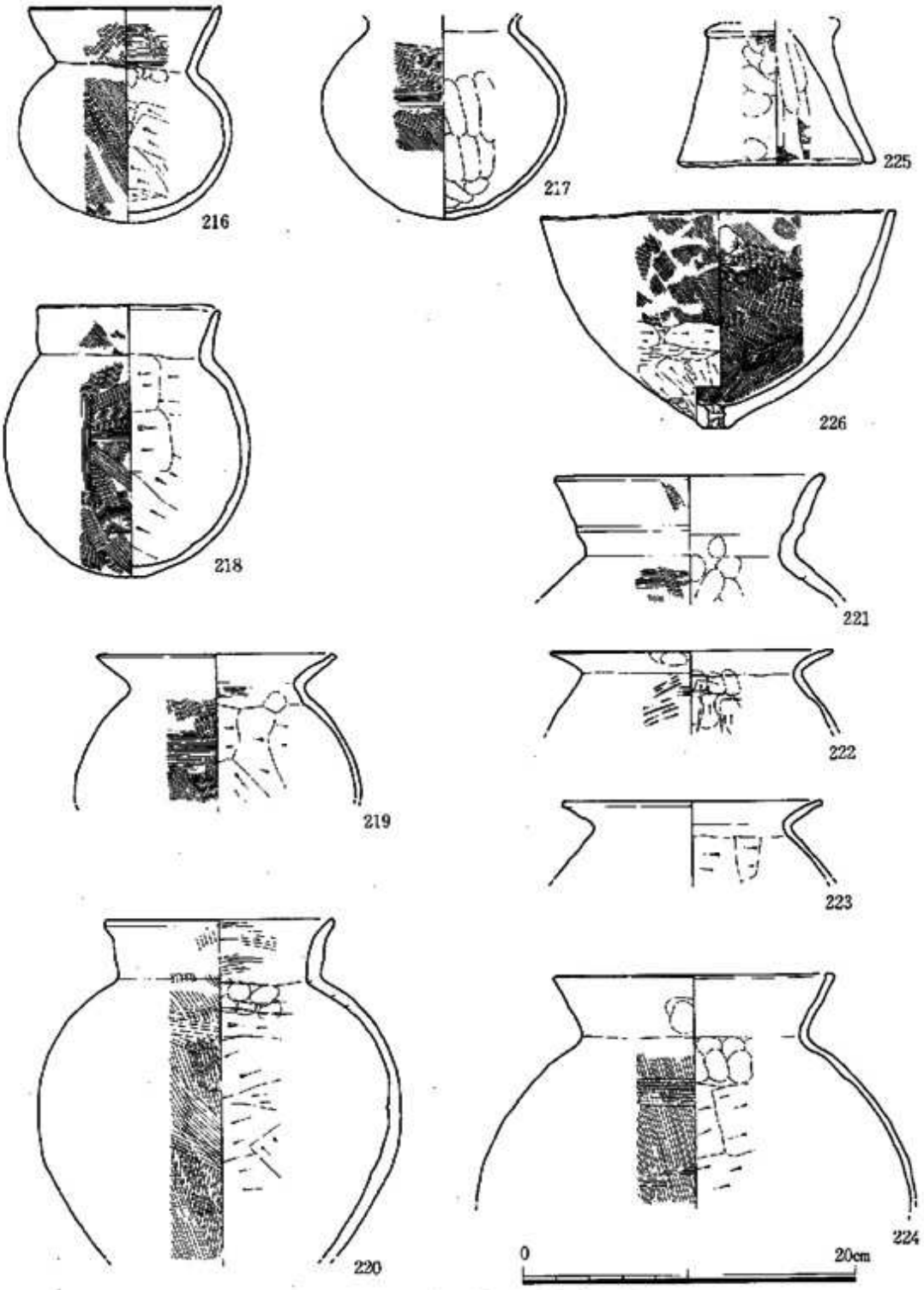


Fig.28　第1号溝上層出土土器実測図 (4)

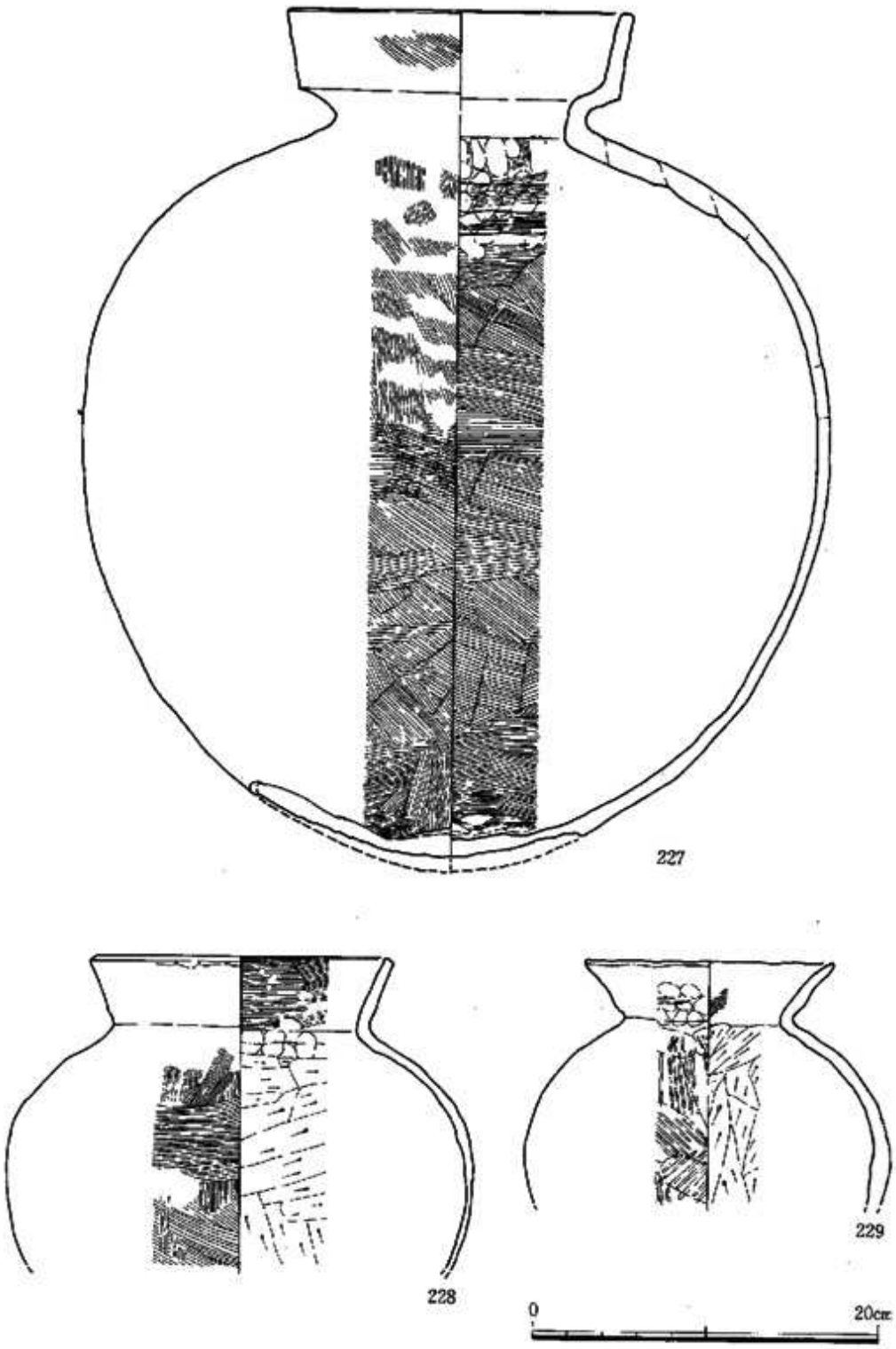


Fig.29　第１号溝上層出土土器実測図 (5)

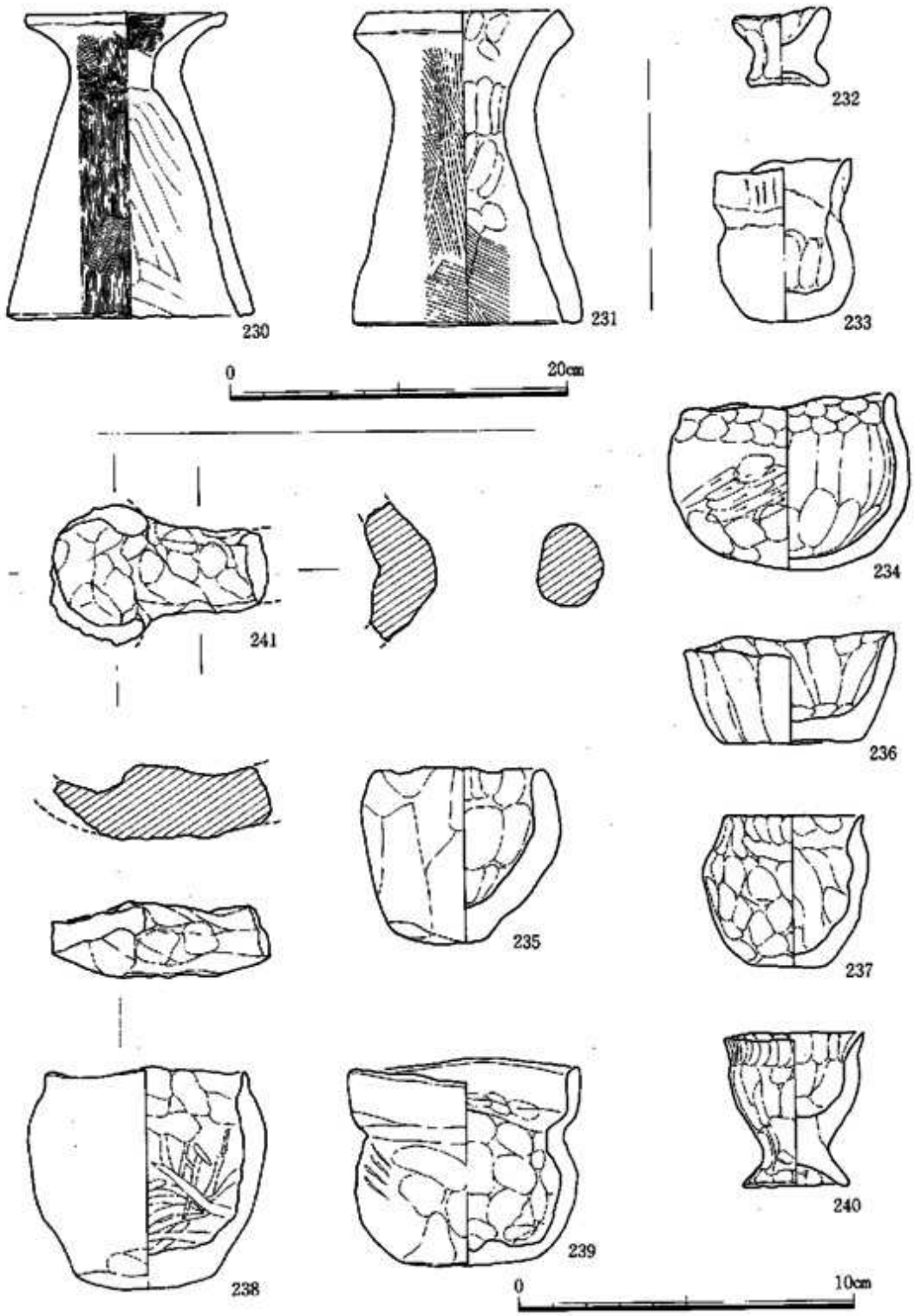


Fig.30　第１号溝上層出土土器実測図 (6)

Fig.31　第1号溝上層出土土器実測図 (7)

全体に厚い。220は最大径を胴部上半に持ち、やや外反する口縁を有する。器壁は厚い。229は球形の体部を持つ。よくしまった頸部から大きく直線的に広がる口縁部を有する。器壁は厚い。外面調整の平行タタキは不整方向におこなわれている。219は球形の体部から大きく広がる口縁を持つ。口縁端は少し内側に抓みあげられている。内面のヘラケズリは強く境目に段を有する。222はしまった頸部から強く外反する口縁を持つ。口唇部は丸くおさめる。223はよくしまった頸部から直線的に大きく広がる口縁を有し、端部は面をなす。内面ヘラケズリの境目は稜をなす。224・228はしまった頸部から直立ぎみに開く口縁を持つ。端部は平坦面をなし、少し内側に抓み出している。224にみられる肩部のヨコハケ目は文様を意識している。

225は支脚で、短く太い形態を示す。226は甑である。底部に1ケ所約1cmの穿孔をおこなっている。口縁端部は平坦面をなす。丁寧なつくりをしている。

230・231は器台である。230は屈曲部が上位にある。屈曲部から口縁部にかけて大きく外反する。231は器壁が厚く、口縁、裾部、ともに大きく開かない。

232～240は手捏ね土器である。壷（233・239）、鉢（234・240）、器台（234）などを意識して作っている。ほとんどが指による調整であるが、一部タタキやケズリの痕跡が残るものもある。

241は匙形土製品である。現存長6.4cmである。儀器であろう。

242～245は須恵器の甕である。242～244は胴部破片である。242は外面に縦方向の平行タタキ後にカキメを施す。内面は青海波タタキをナデ消している。タタキの痕跡は残る。243の外面のタタキ痕は完全にナデ消されている。内面もナデ消しているが、青海波タタキ痕が少し残る。244は大型の甕と推定できる。外面は縦方向の平行タタキをおこない、内面のタタキは完全にナデ消されている。外面は、全面激しい灰かぶりである。245は小ぶりの甕、または壷の口縁部である。強く外反するものと考えられる。三角突帯がつく。3点とも古相をしめし、小田氏編年の1期のものと考えられる。

3．第1号溝上層出土木器（Fig.32～54）

第1号溝上層からは、流木から混じった状態で、約350点の木製品が出土した。出土木器のうち杭を除き、90%を報告する。未報告分は、建築材・加工材・板材・割材・削り屑で合わせて20点ほどである。なお、未報告分については今後、機会をみつけて報告することにする。

本遺溝出土の木器は、農具・工具・紡織具・祭祀具・建築材・板材・加工材・割材・削り屑・杭類と多種多様である。

(1) 農具（Fig.32～39、511～552）

農具としては、起耕具・整地具・収穫具・補助具などがある。まず、起耕具からみていくことにする。起耕具としては、鍬類が13点（511～521）、鍬類柄が6点（527～530・532・534）、

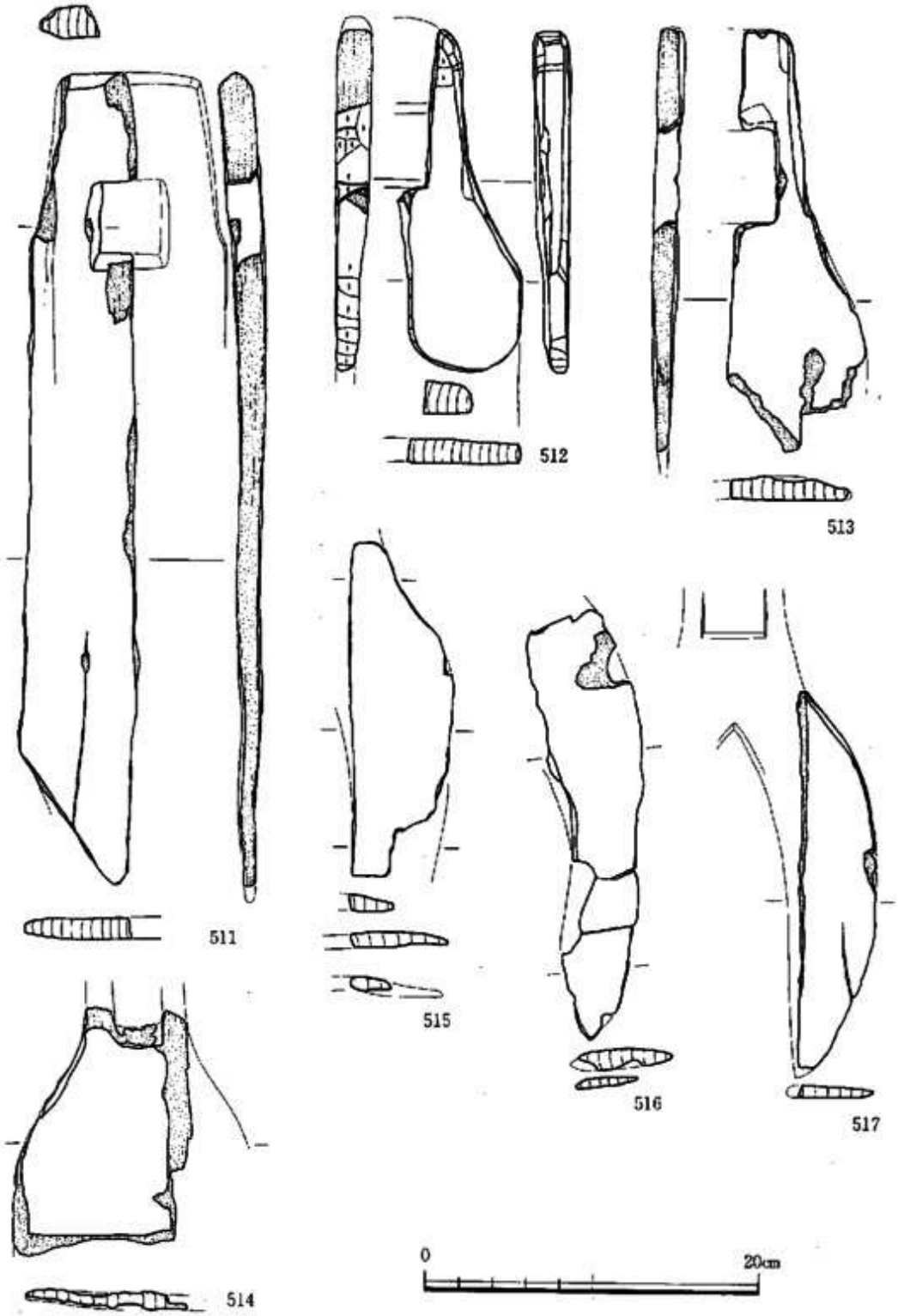


Fig.32　第1号溝上層出土鍛類実測図 (1)

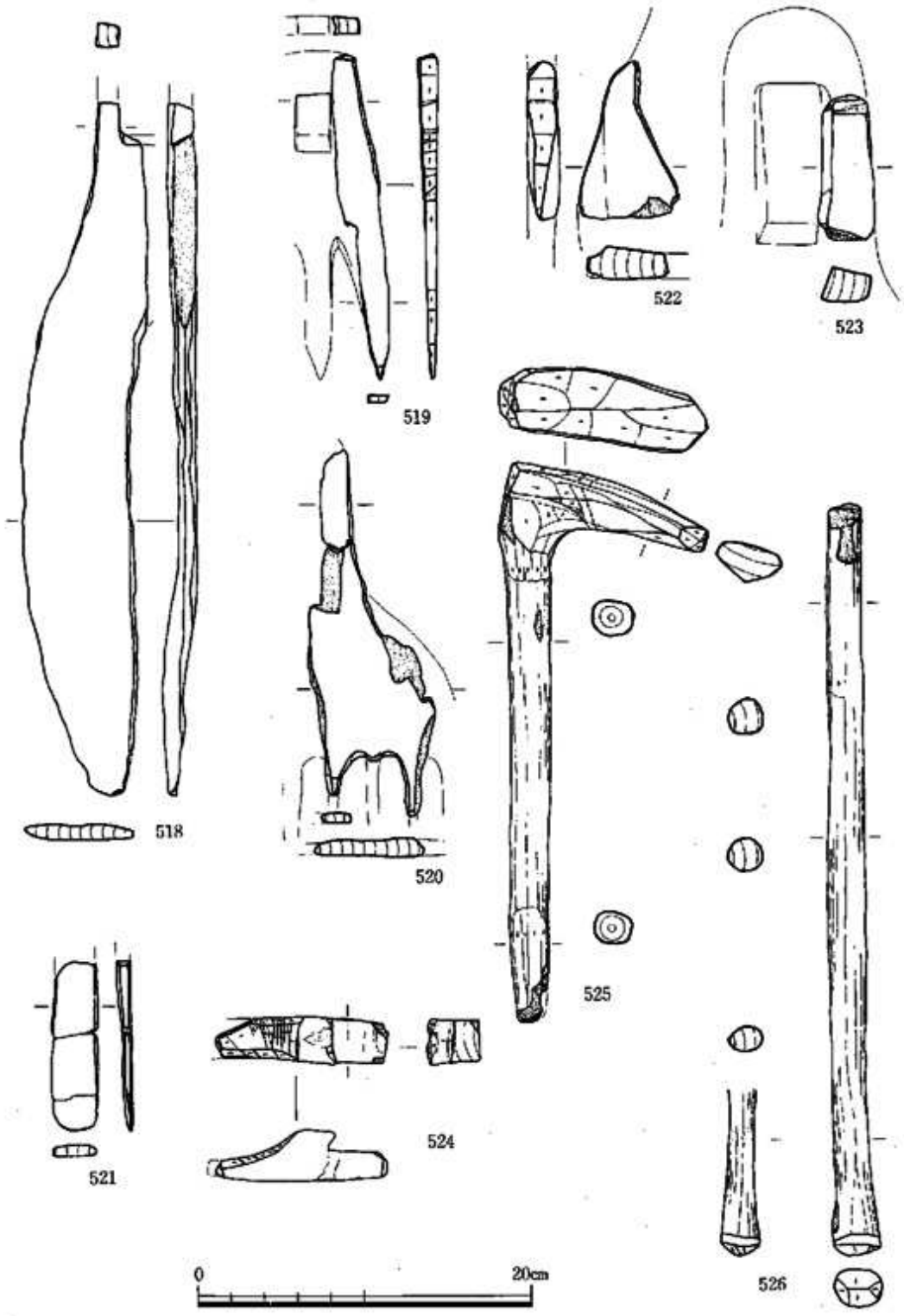


Fig.33　第1号溝上層出土鉄類実測図 (2)

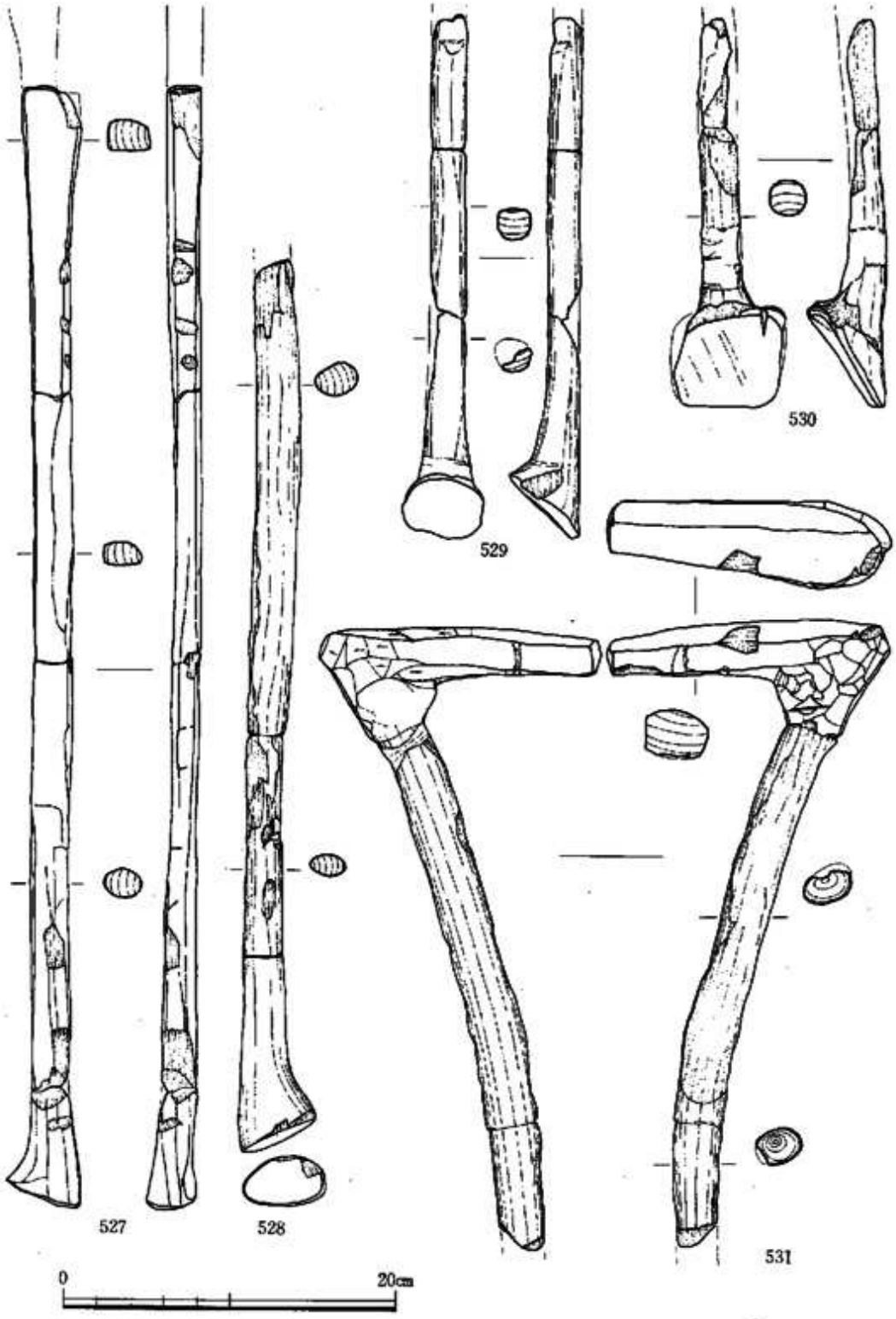


Fig.34　第1号溝上層出土鉄製柄実測図 (1)

ナスビ形木製品柄が2点（525・531）、鍬類組合わせ着装具が1点（524）、鋤が1点（537）、鋤類柄が2点（535・536）、起耕具柄が2点（526・533）、櫂状木製品が1点（538）出土した。鍬類は、柄孔部が遺存しているものは5点であるが、いずれも方形柄孔をもつものと思われる。器種別にすると、平鍬が5点（511～514）、二又鍬が3点（516～518）、多又鍬が1点（520）、三又鍬が1点（519）となり、521は又鍬の刃部で、他の2点については器種は分からない。鍬類はいずれもカシの柾目取り材を用材としている。521・523は破損後、破損部に削り加工を加えている。512は、ナスビ形木製品柄を用い、再度、鍬として使用された可能性がある。鍬柄は、二種類の型がある。534は、組合わせ部が柄部より縦長状の長方形に仕上げられており、組合わせ部に鍬の圧痕がみられる。527・532は、柄部端に楕円形状に返しをつけ、鍬類組合わせ着装具・鍬類との組合わせ部を作り出している。528～530も柄部端に返しがあり、後者の型の鍬類柄か。534を除いて他は、カシの柾目取り材を用材としている。532は、器表面に黒漆を塗布しており、祭祀に使用したものか。524は、短い型の鍬類組合わせ着装具で、カシの板目取り材を用材としている。鋤類としては、刃部と柄と櫂状木製品がある。537は、刃部下半に金属刃を着装したと考えられる圧痕がみられる。一木造りの鋤と考えられる。535は、組合わせ式鋤の柄で、組合わせ部を杭状に尖らせている。握部は欠損しているが、スコップ柄状になると考えられる。538は、削り加工によって幅広で薄く整形している。掘り棒か。鋤類は、いずれもカシの柾目取り材を用材としている。533も鋤柄か。525・531は、ナスビ形木製品柄で枝分かれ部を用い、枝部を柄部としている。組合わせ部は、蒲鉾形の断面形に仕上げており、525は、組合わせ部基部に、531は組合わせ部中ほどと柄部の基部に縄縛痕がみられる。526は、鍬類か鎌の柄と考えられる。

整地具としては、杁が3点（539～541）出土した。いずれも方形柄孔をもつものである。539は、柄孔が小さく、他の製品とも考えられる。540・541は、カシの柾目取り材を用材としている。収穫具としては、竪杵2点（550・551）が出土した。いずれも握部に造り出しをもたない型で、搗部と握部の境は不明瞭で、551の搗部端は凸レンズ状をなしている。芯持ち材を用材としている。補助具としては、大足2点（542・543）が出土した。542は、長方形の両端に方形の枠との組合せのための造り出し部を設けており、枠との組合わせに木製の目釘を使用したと考えられ、目釘が詰まった状態である。なお、側沿に2個対の小孔がみられ、小孔間には縄縛痕がみられる。スギの柾目取り材を用材としている。543は、両端に組合わせのための方形孔をもつ型で、カシの柾目取り材を用材としている。

(2) 工具（Fig.38～43、544～549・552～570・528）

工具としては、槌類・鉄斧柄・鎌柄・編具・工作台がある。槌類は8点(544～549・552・558)あり、5型に分けることができる。544・545は、槌部端・柄部に明瞭な加工痕を残し、槌部中

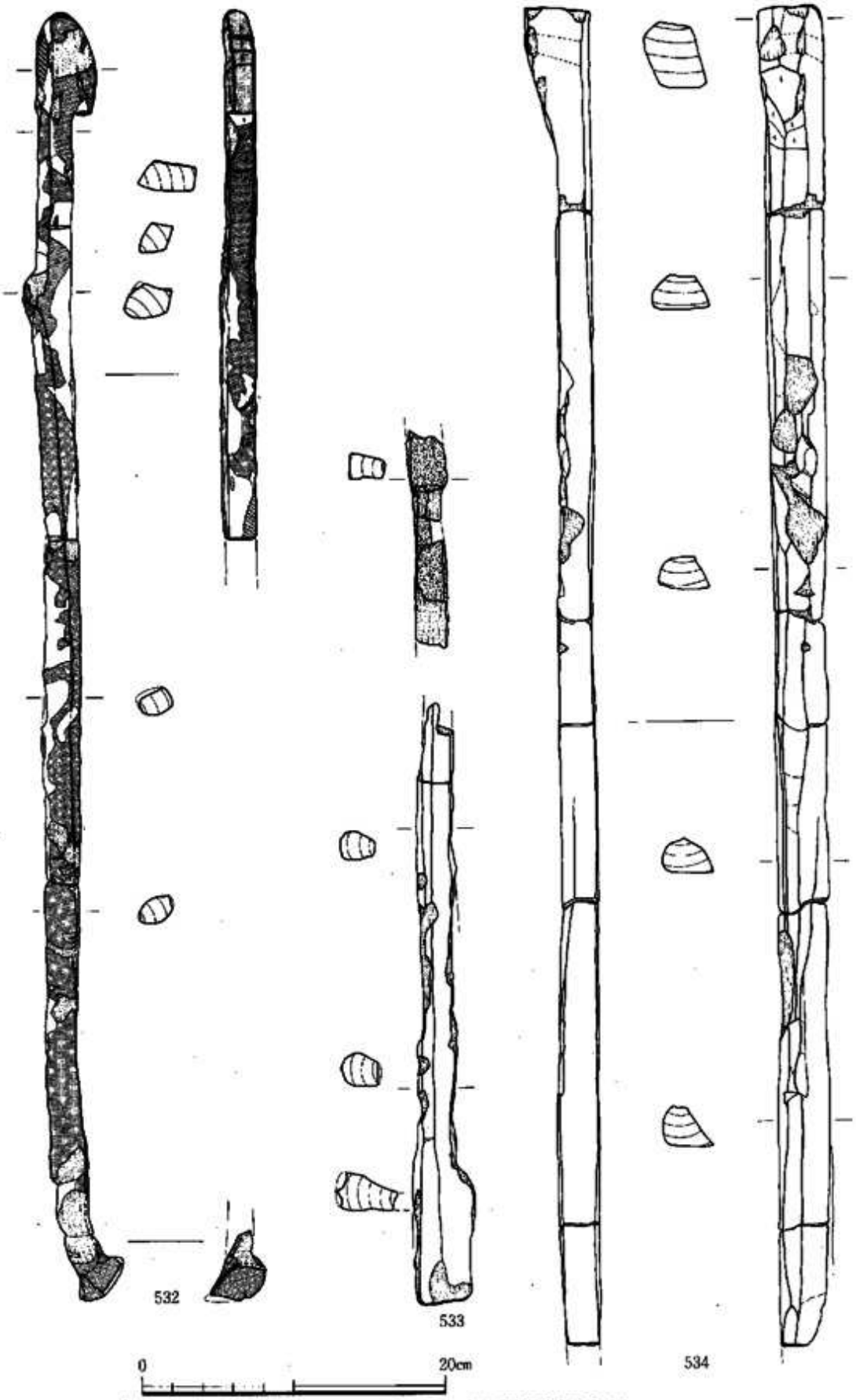


Fig.35　第1号溝上層出土鍬類柄実測図（2）

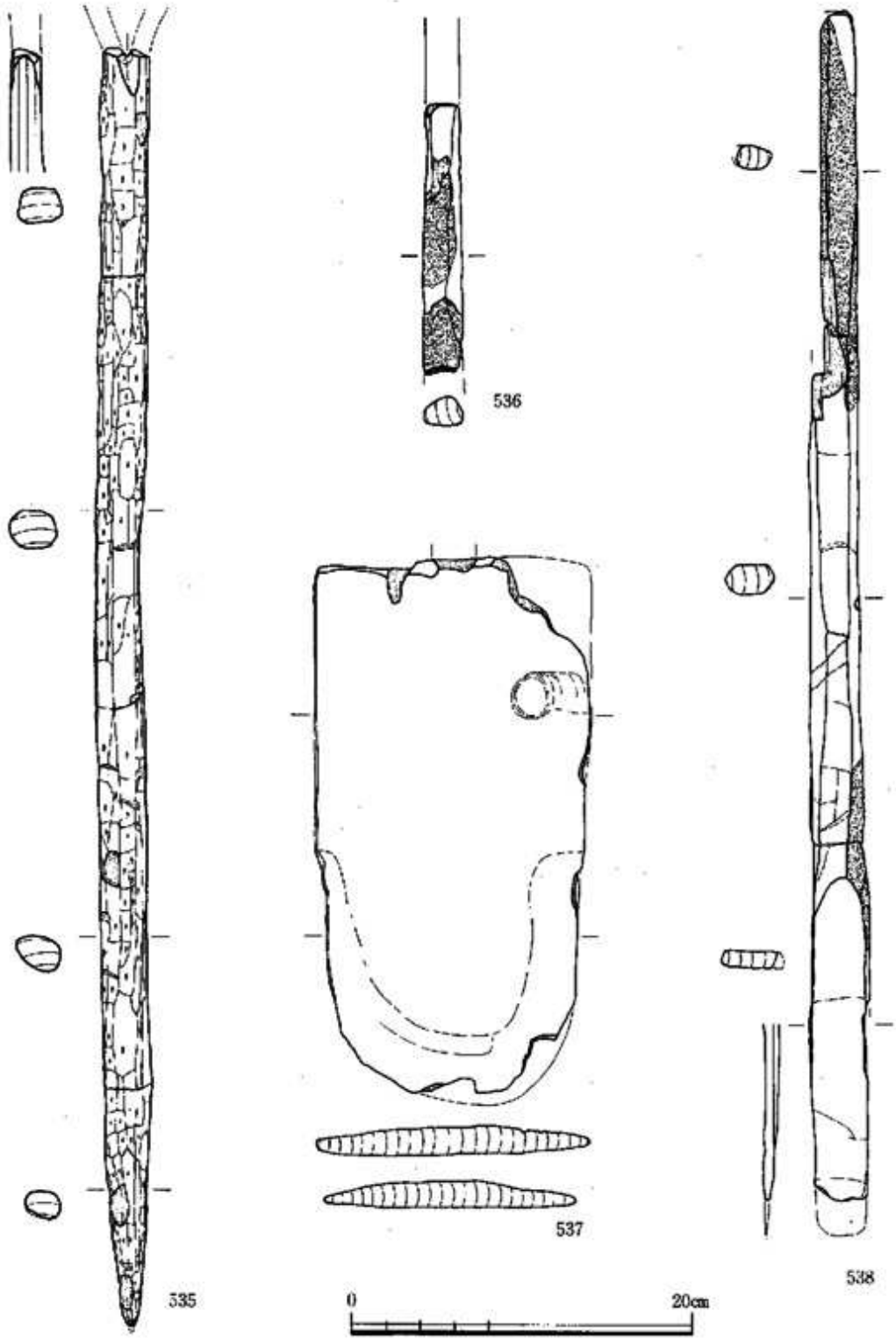


Fig.36　第1号溝上層出土鋤類実測図

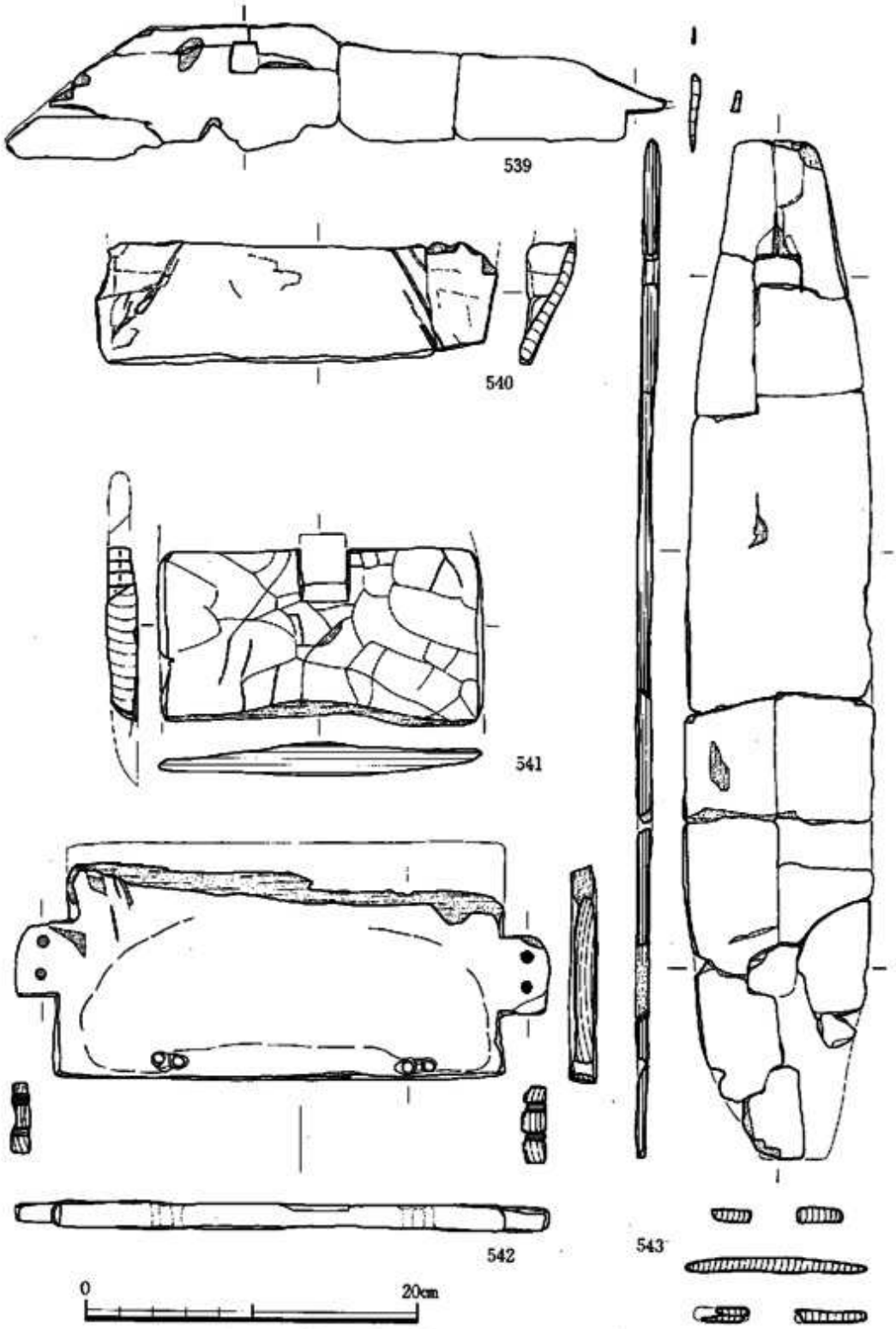


Fig.37　第1号溝上層出土杭および大足実測図

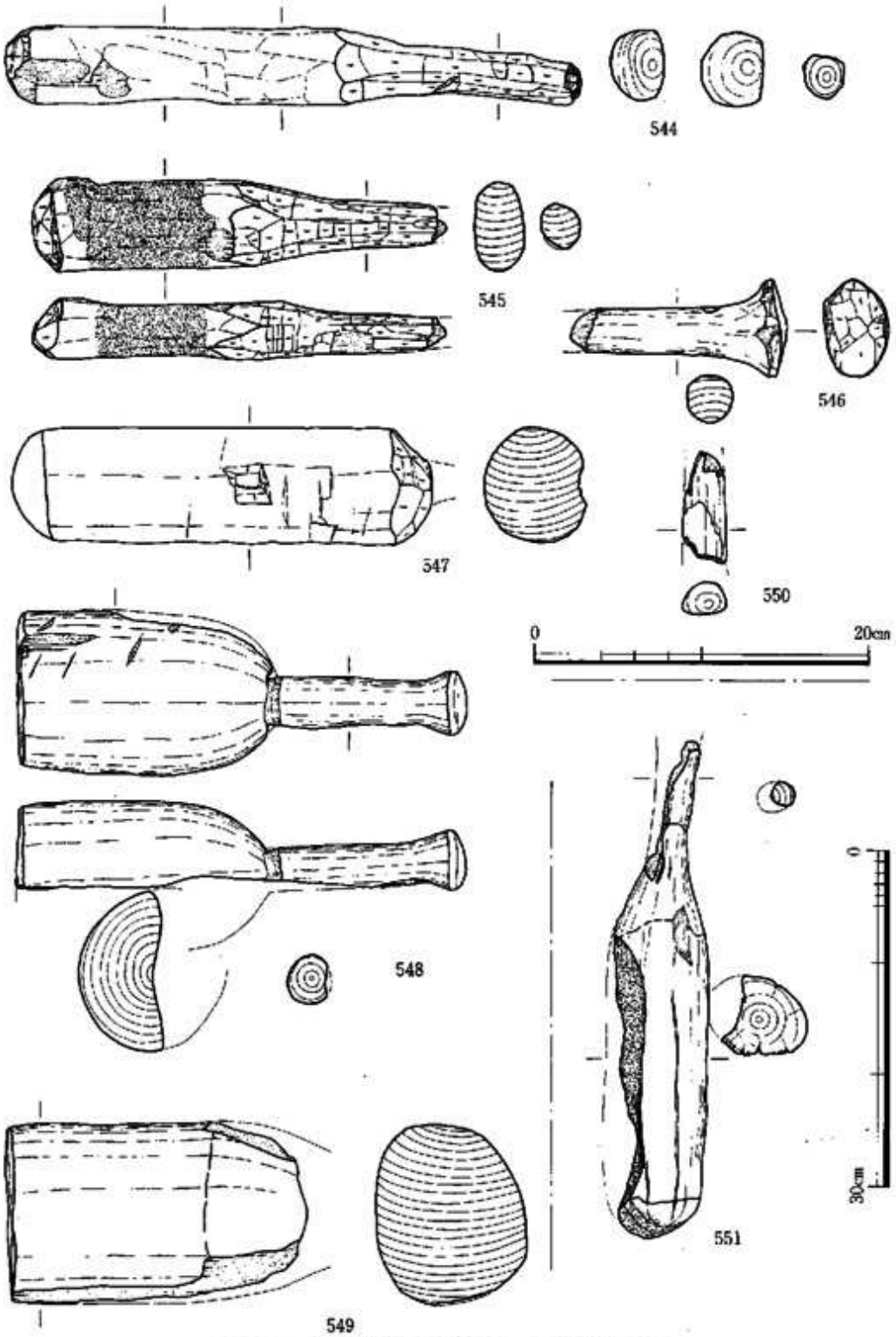


Fig.38　第1号溝上層出土鎚および竪杵実測図

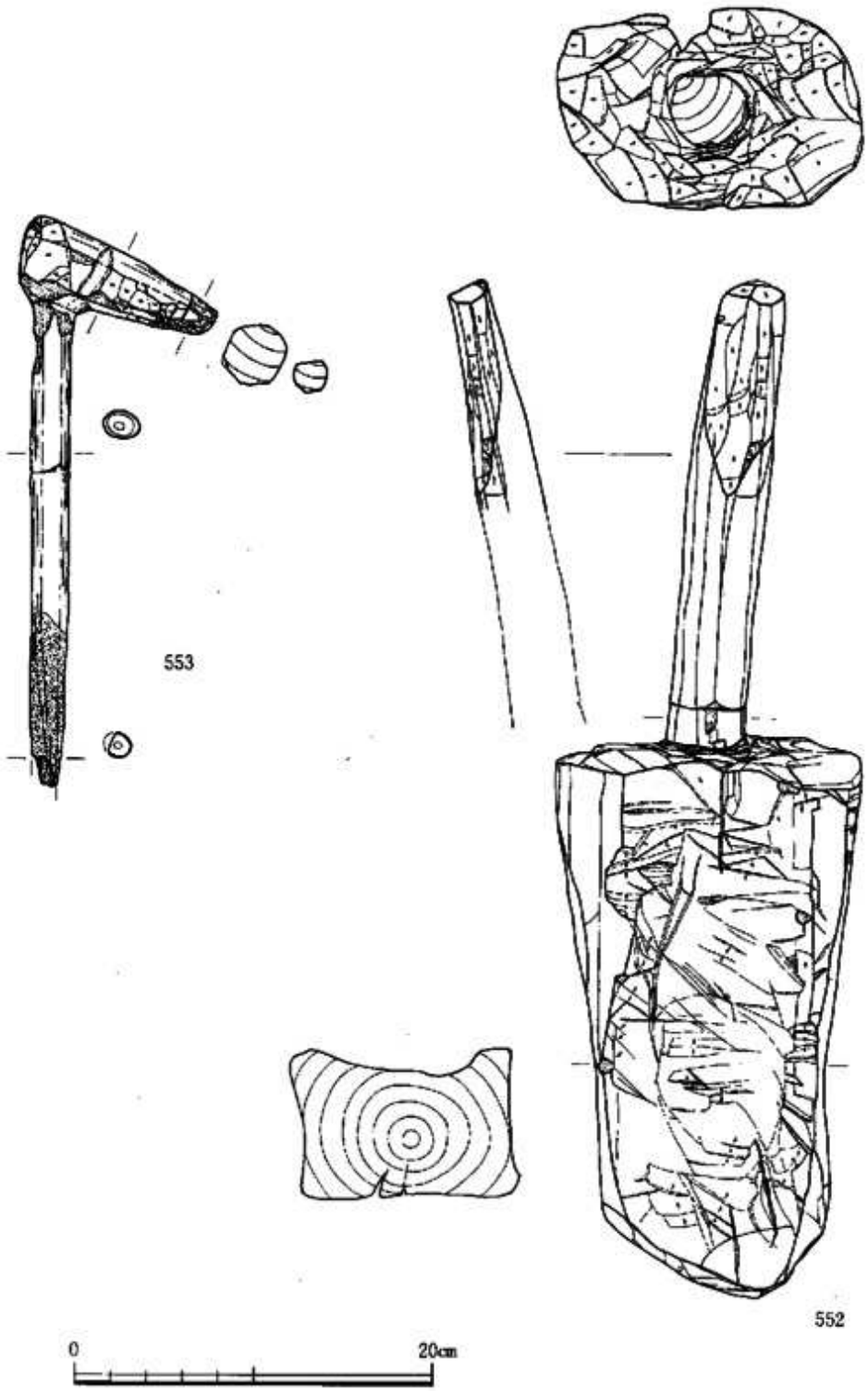


Fig.39　第１号溝上層出土槌および鉄斧柄実測図

央部に使用痕がみられる。547は、柄部に加工痕が残り、槌部端に使用痕がみられ、凸レンズ状をなしている。548・549は、器面に削り痕はみられないが、槌部端を平らにしている。552は、槌部断面を方形に整形し、加工痕が明瞭に残っている。また、槌部の各面には鋭い刃物痕が残っており、槌というより柄つきの工作台か。558は、丸太を切断し、体部中央に加工を加え、抉れているが、柄を穿つ途中の未製品で、カケヤ的なものの製作を試みたものであろうか。545～547・549が割材、他は芯持ち材を用材としている。

鉄斧柄は、4点（553～556）あり、いずれも袋状鉄斧の柄で、組合わせ部を細くしている。554が柾目取り材を、他は枝分かれ部を用材としている。鉄鎌柄（557）は、幅4.5mm、長さが5.9cmの組合わせ柄を60°の角度をもって穿っている。柄部端は、円形の凸レンズ状をなしている。カシの柾目取り材を用材としている。

編具は、薦俵を編むもので、編機・コモ・コマなどと呼ばれているものである。目盛り板（コモ桁）1点（559）と編錘（槌の子・コマ）12点が出土した。559は、スギの板目取り材を用材として、幅6.5cm、厚さ2.3cm前後の横断面形蒲鉾形に整形し、両縁辺に目盛りを刻んでいる。両端とも欠損しているが、片方端部（図面下）はほぼ端部と考えられる。縁辺には7.3cm、7.5cm、6.3cm、10cm、他辺は14.8cm、18.6cmと目盛りを刻んでいる。一辺は畚（ツボ）編み用、他辺は俵編み用と考えられる。編錘は、いずれも広葉樹の芯持ち材を用材としているが、紐がかり部をコの字状に切り込むもの（560～565）と、V字状に切り込むもの（566～570）がある。前者は、比重の高い材を用材としており、15cm前後の器長をもち、後者は、シイなど比較的比重の低い材を用材として、器長も17cm前後と揃っている。後者は1点欠失しているが、6個1対のものと考えられる。571は未製品か。

578は、杉の丸太材を輪切りにしたものである。工作台と考えられるが、他の製品の未製品か。

(3) 紡織具（Fig.43、572～574）

紡織具としては、機織機の部材1点（572）と紡錘車2点（572・574）がある。572は、径2.2cmの芯持ち材を用材として、長さ53cm強で両端を切断し、両端近くに紐がかりのための切り込みを入れている。機織の部材と考えられる。紡錘車は、2点とも同じ型で、574は、回転軸が残っている。573は、カシの柾目取り材を用材としている。

(4) 祭祀具（Fig.43～45、579～583・585・586・588・593）

祭祀具としては、儀器類と武器類がある。儀器には、小形模造船・鳥形・槌模造品がある。小形模造船は4点（580～582・586）あり、580が構造船で、581・586が準構造船の可能性がある。580は、スギの柾目取りを用材として、舟形に整形し、先方部を浅く、船尾に近い方を深く抉っている。船首下半部に船つなぎのための小孔の穿孔があり、船側から船尾にかけて、内側に向かって24個の小孔の穿孔（2孔は未完通）が施され、9個は木製目釘が詰まっている。こ

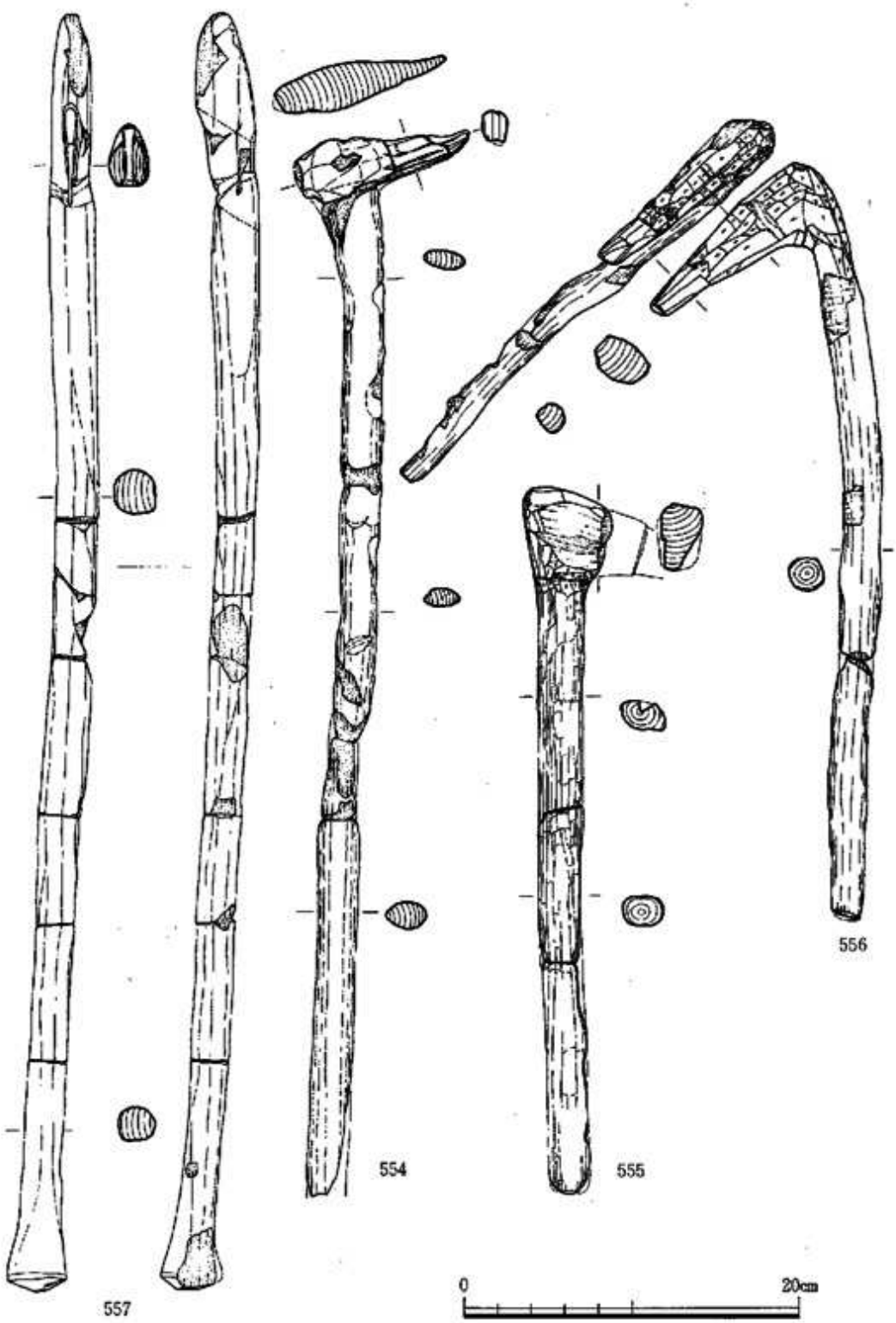


Fig.40　第１号溝上層出土鉄斧柄および鉄鎌柄実測図

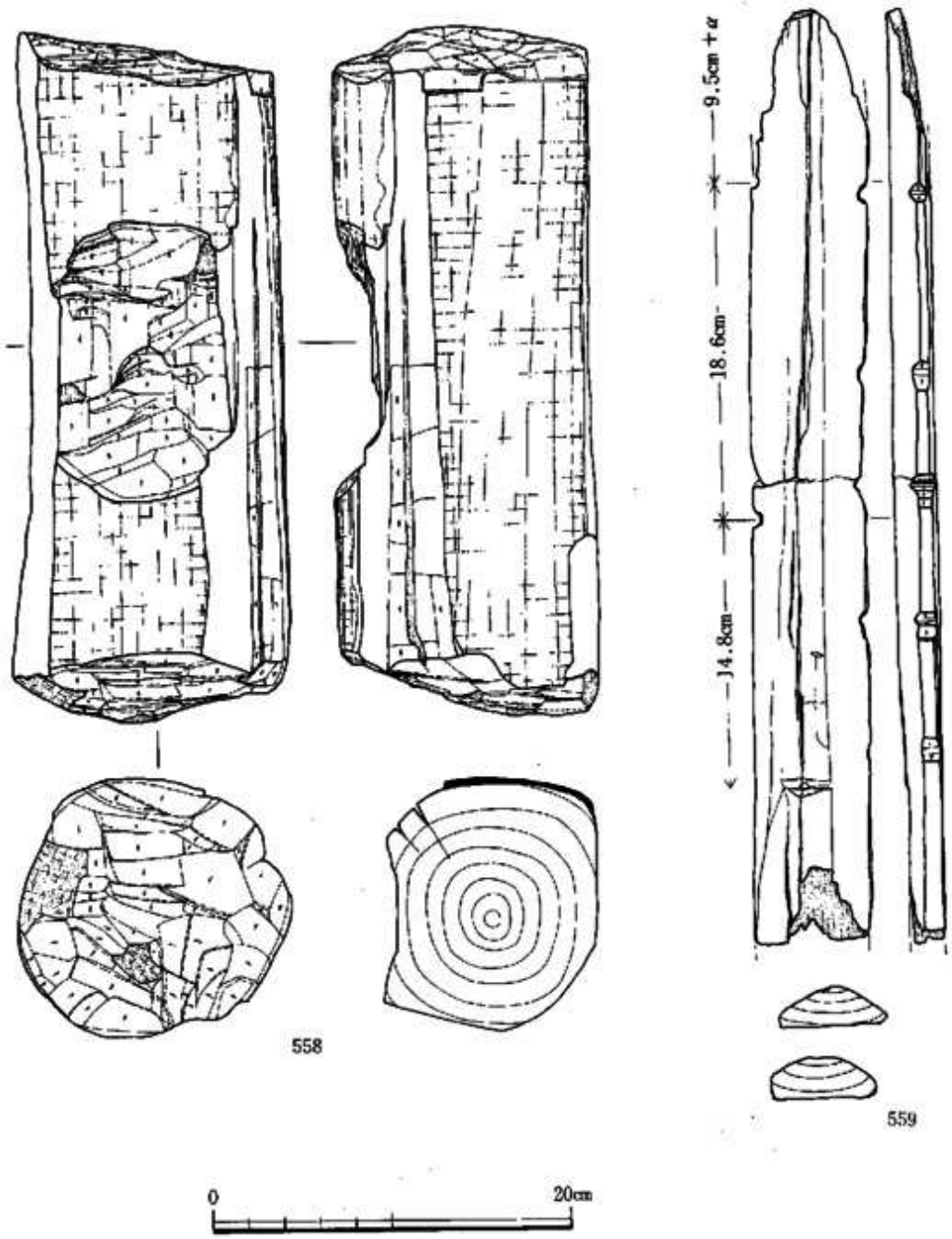


Fig.41　第1号溝上層出土槍未製品および目盛板実測図

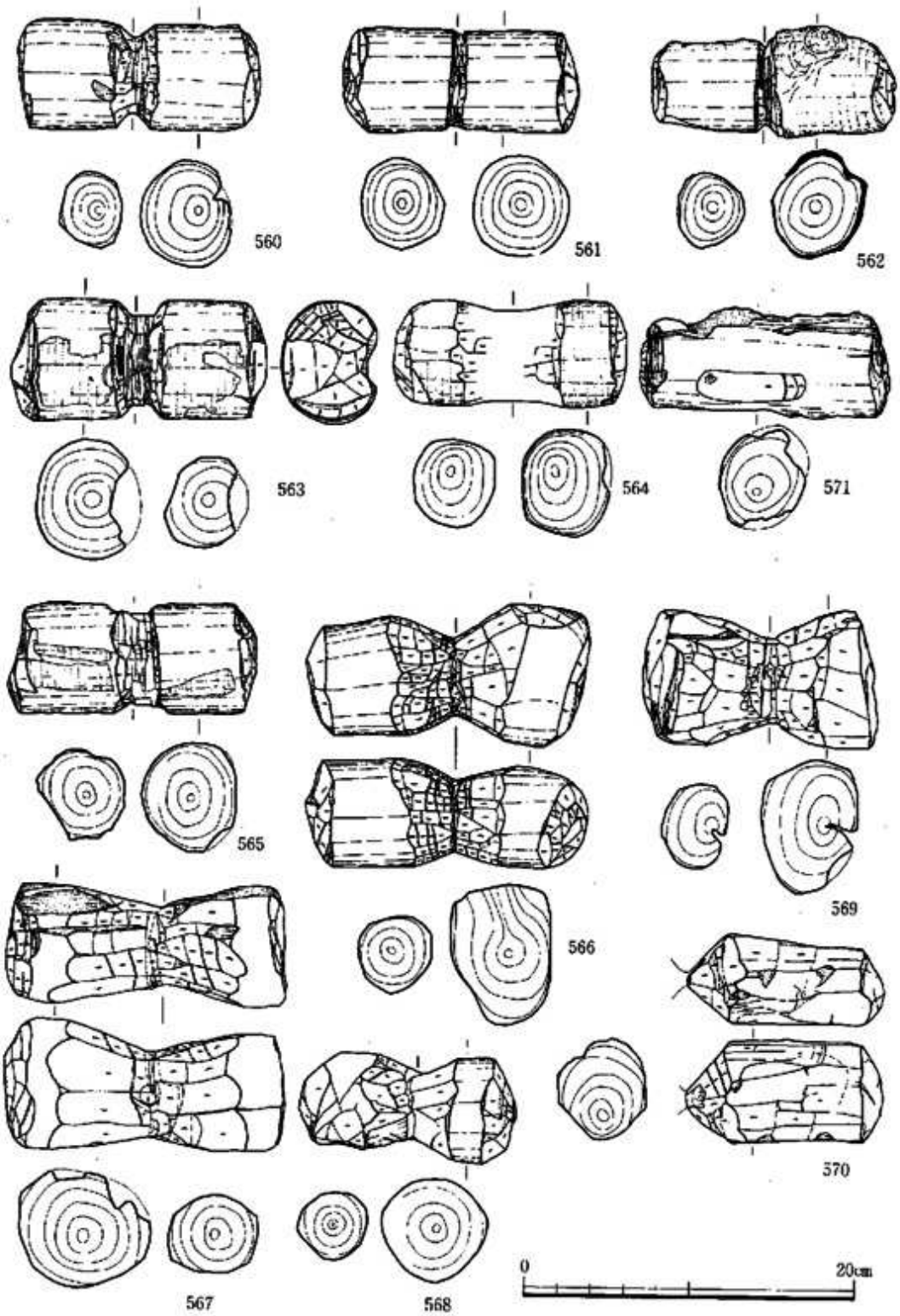


Fig.42　第1号溝上層出土編錘実測図

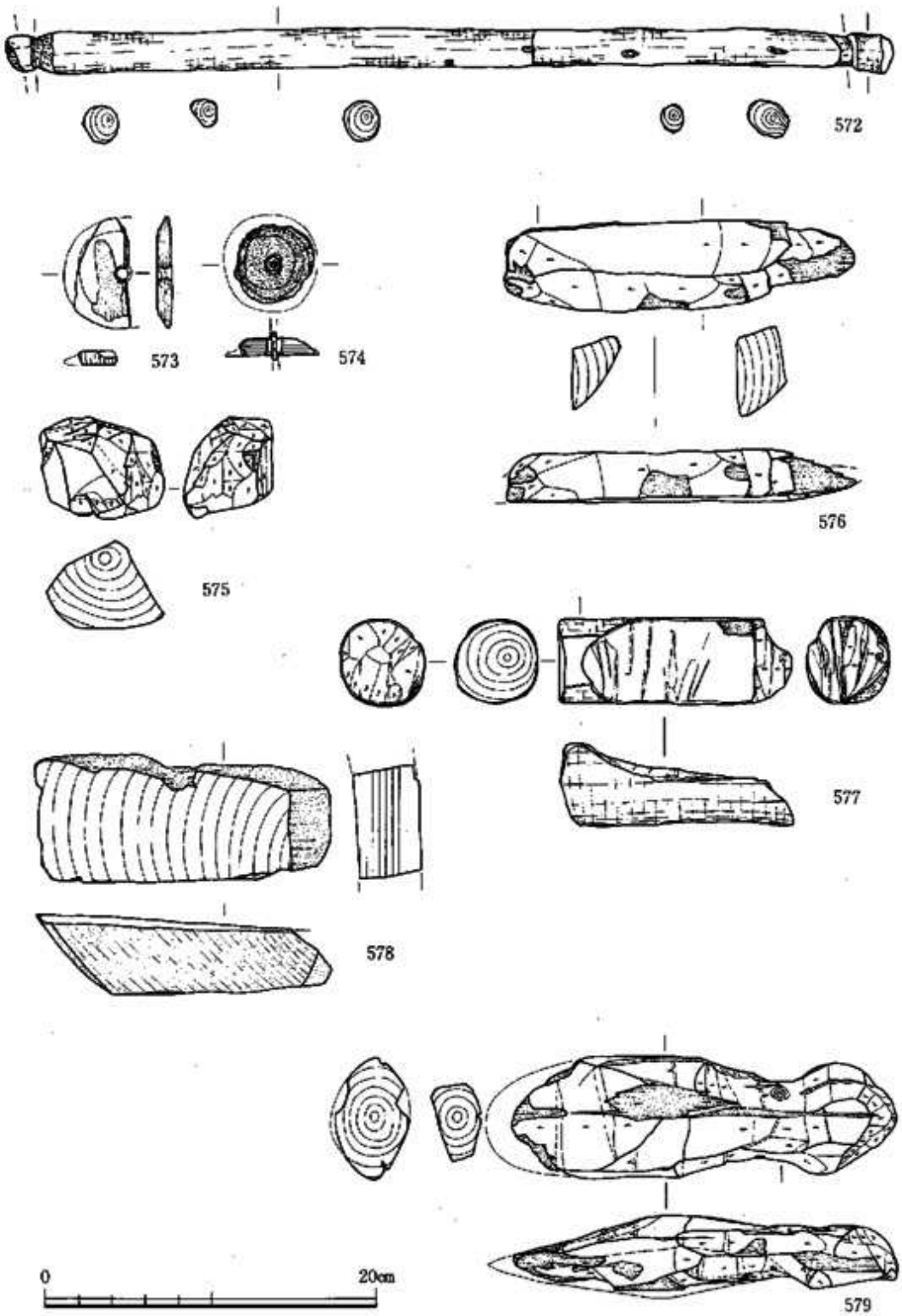


Fig.43　第1号溝上層出土紡織具および加工材実測図

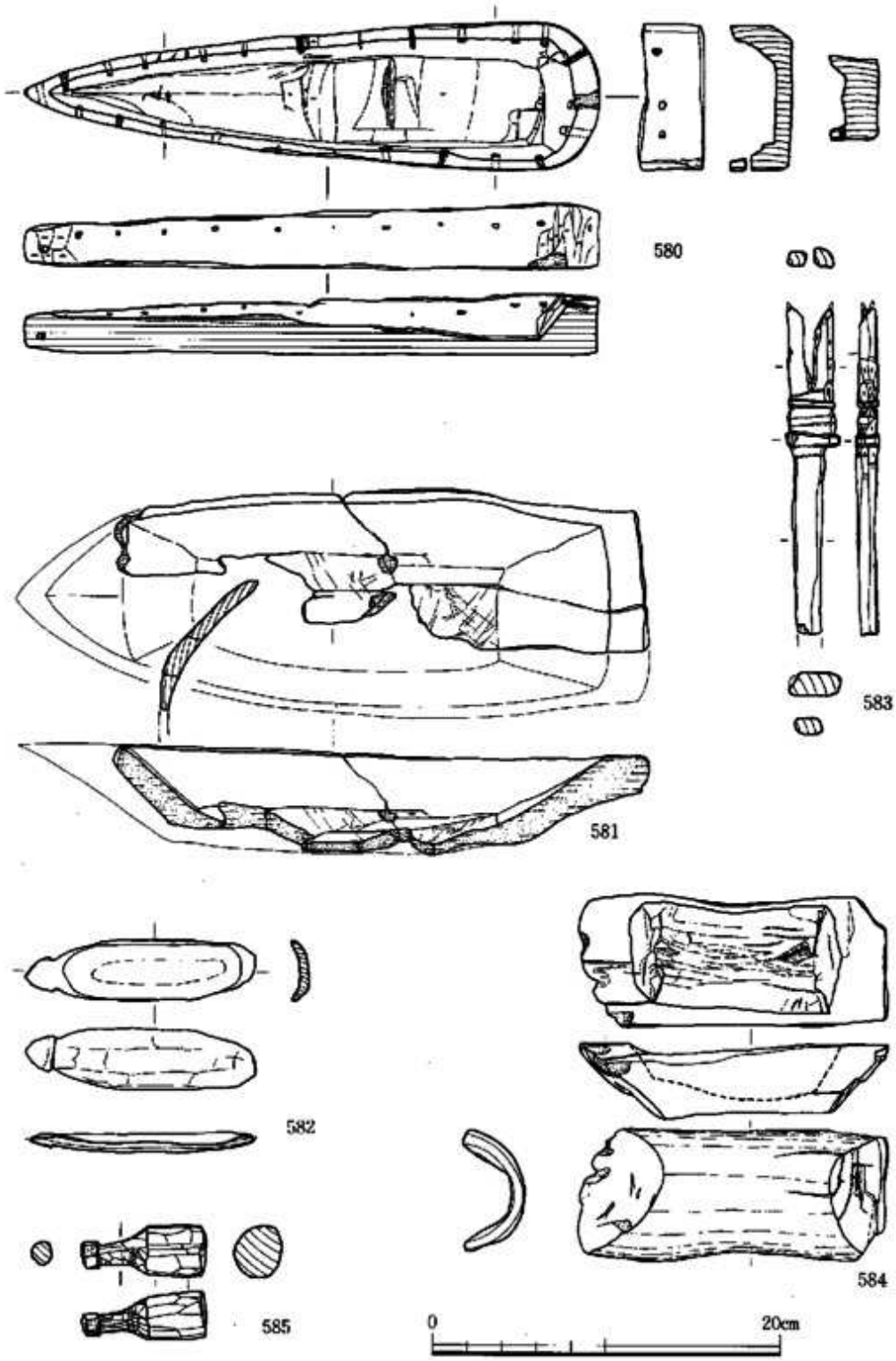


Fig.44　第1号溝上層出土遺物実測図 (1)

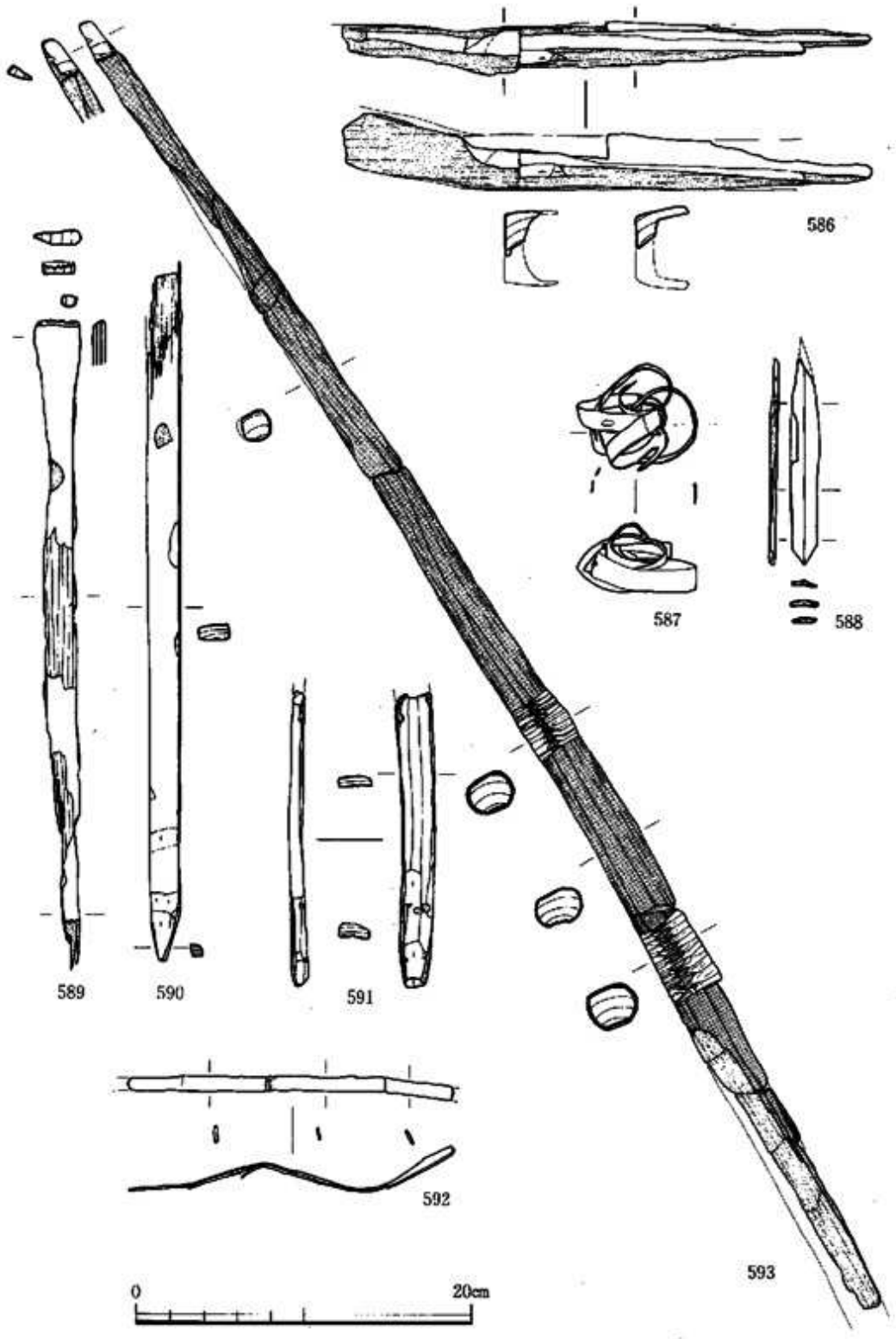


Fig.45　第1号溝上層出土遺物類実測図 (2)

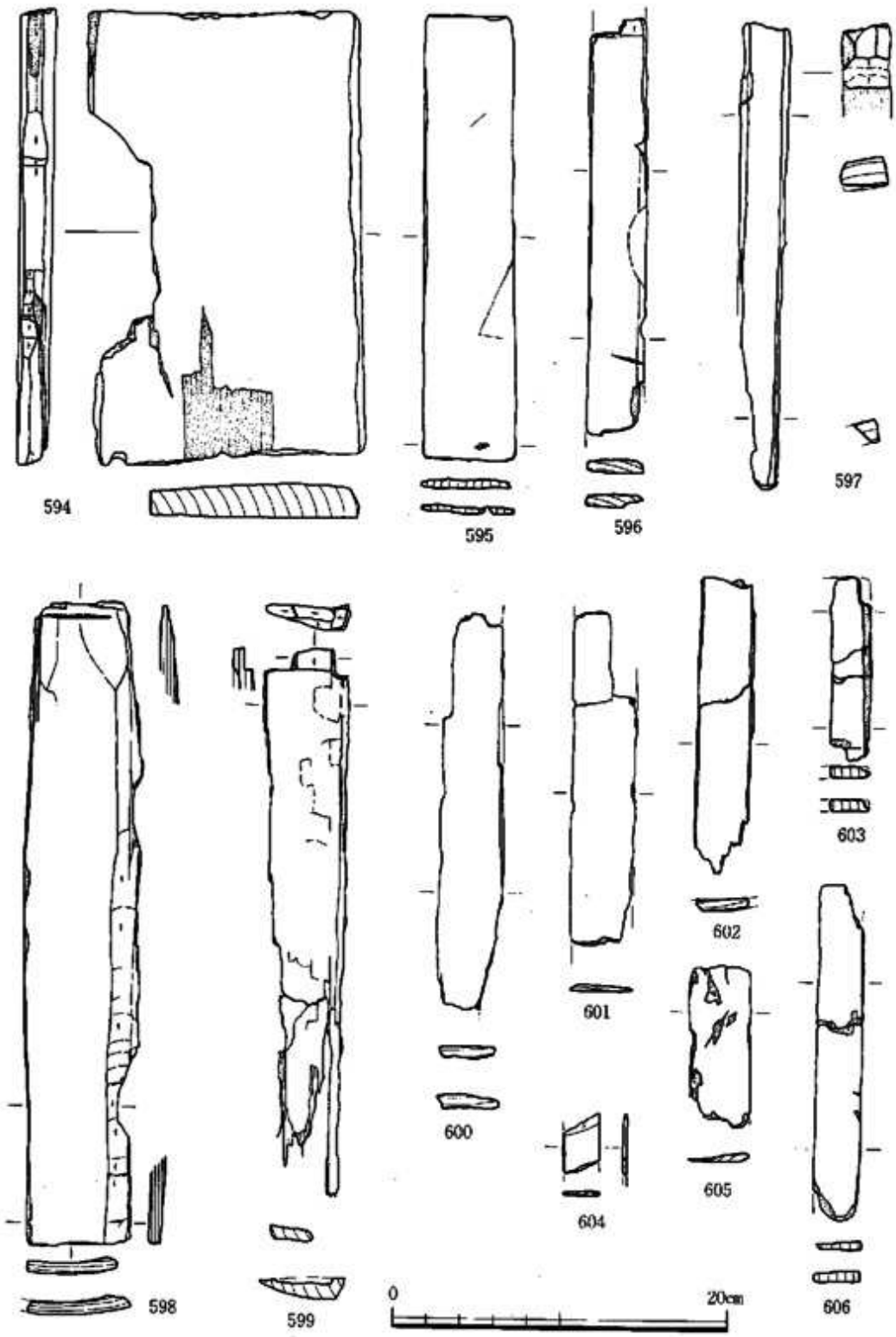


Fig.46　第1号溝上層出土板材実測図 (1)

れは、船内に構造物があったことを示している。582は、スギのナナメ取り材を用材として、船首を亀頭状に造り出し、船内を浅く抉っている。刳り船の模造と考えられるが、男根状木製品の可能性がある。585はスギの割材を用材として、槌形に整形している。器表面には、削り加工の痕が明瞭に残っている。579は鳥形木製品と考えられ、器表面はいたんでいるものの削り加工痕が明瞭に残っている。武器類としては、鏃欠形木製品1点（583）、木鏃1点（588）、弓1点（593）がある。583は、スギの柾目に近いナナメ取り材を用材として、二又の鏃を矢柄と組合わせた状態で整形している。588は、スギの板目取り材を用材として、平面形柳葉形に整形し、器表面には稜線が通り、横断面は五角形を呈している。593は、割材を用材とした弓で、推定長は115cm前後と考えられる。端部には弦縄縛部を造り出し、中央部は上面を浅く凹ませ、握部両側に桜皮を組みながら巻いている。なお、器表面には黒漆を塗布している。

(5) 建築材（Fig.52・53、698～707・709・711・718・719）

建築部材を建築材と総称したが、ねずみ返し1点（701）と格子枠状のもの（702）、組合わせ部材12点（698～700・703～707・709・711・718・719）が出土した。701は、板目取り材を用材として、隅丸方形に近い円盤状に整形し、中央に一辺9cm前後の方形枘を造り出し、断面にはソリがみられる。702は、シイ？の柾目取り材を用材として、横断面台形に整形し、中央に一辺2cm前後の方形枘を7～8cm間隔で9個並べて穿っているが、両端は欠損している。窓等の格子枠と考えられる。698・699は、端部から10cm前後のところにコの字形と思われる切り込みがみられる。700は、シイ？の芯持ち材を用材として、端部から13cmL字状の切り込みを入れている。704はシイ、705はカシの芯持ち材を用材として、頭部端近くにL字の切り込みを入れ、前者は他端を枕状に尖らせている。後者は、他端に面取り加工を加えている。706は端部をV字状におとし、707は頭部に面取り加工、709・711は、頭部近くに組合わせ用と考えられる切り込みがみられる。718は頭部に面取り加工、719の端部は枕状をなしている。704等は、梁等の組合わせ部材と考えられる。

(6) その他の木製品（Fig.43、45～51・53・54）

板材が最も多く75点、加工材29点、角材11点、削り屑32点、杭7点と桜皮の束1点を図化した。板材のうち、ヒノキの板目取り材を用材としたものが6点、スギの板目取り材を用材としたものが9点、ナナメ取り材を用材としたものが6点、柾目取り材を用材としたものが7点、マツ？のナナメ取り材を用材としたものが1点、カシの柾目取り材を用材としたものが2点ある。削り屑でみると、スギの板目取りが3点、ナナメ取りが4点、柾目取りが6点である。加工材・板材・削り屑の数点について少し触れることにする。

575は芯持ち材を用材として、一部が未加工であるだけで、荒い削り加工を加え、多面体を形づくっている。577は芯持ち材を用材とし、上下を切断し、面取り加工を加え、斜め方向で削っ

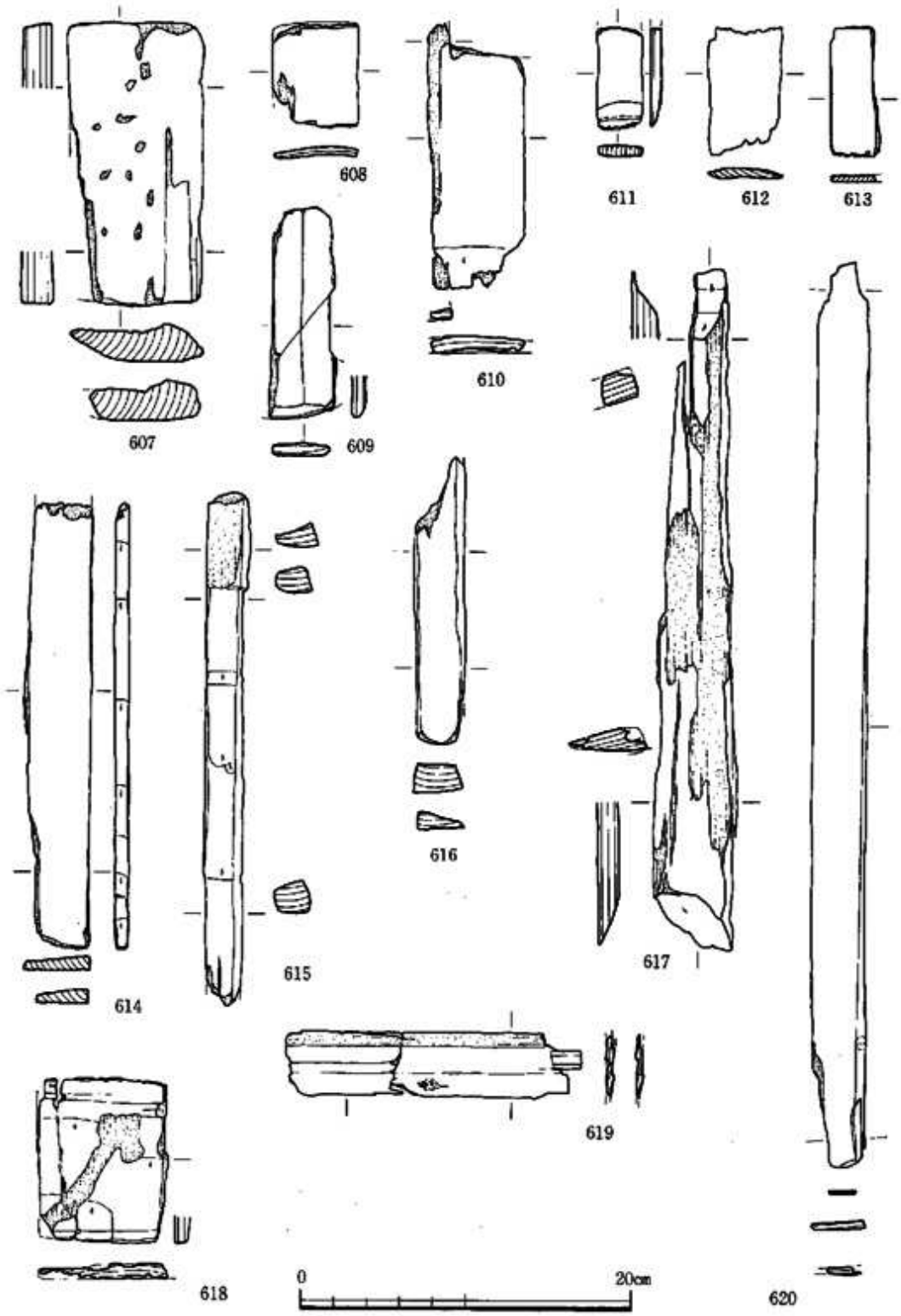


Fig.47　第1号溝上層出土板材実測図 (2)

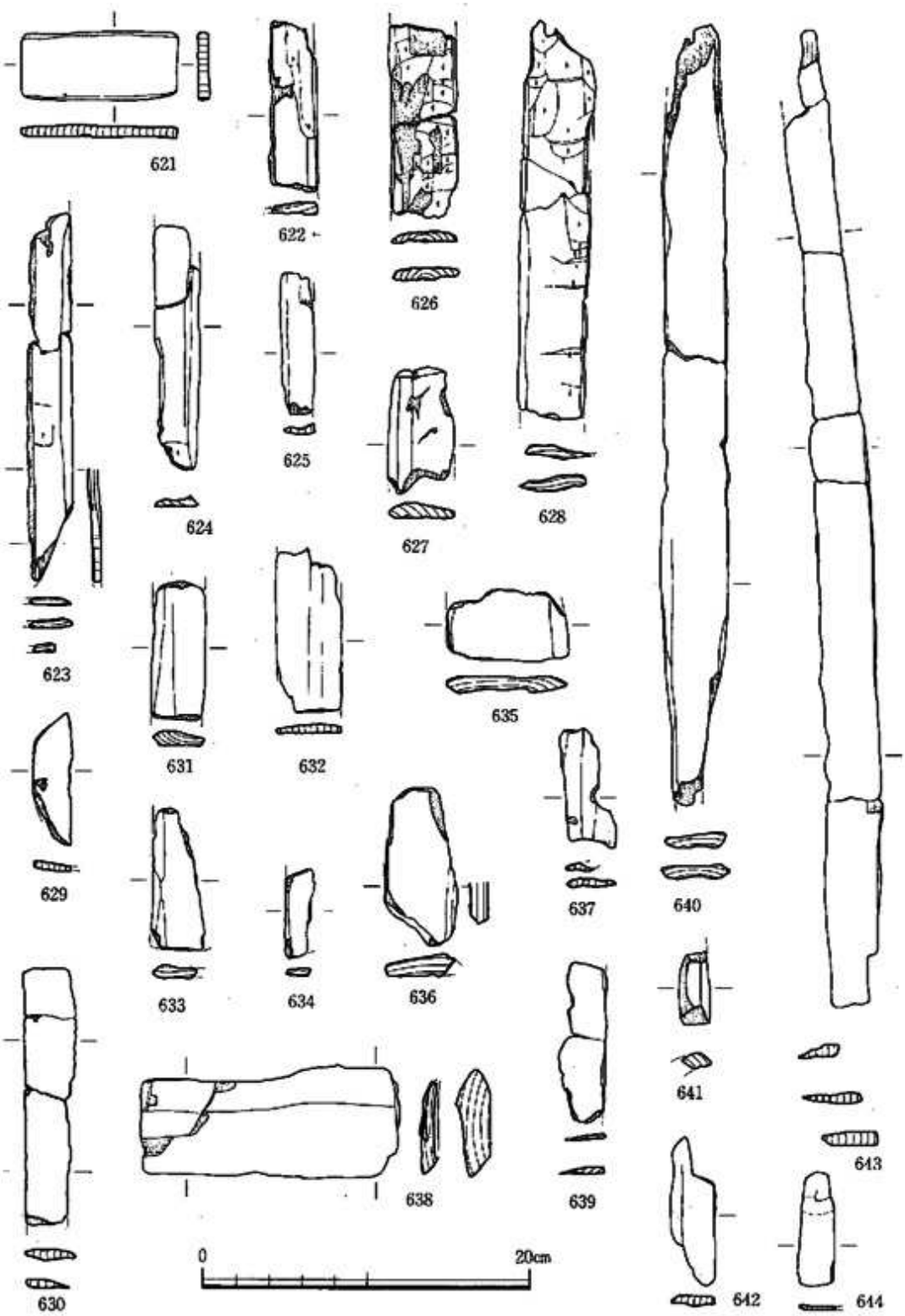


Fig.48　第1号溝上層出土板材実測図 (3)

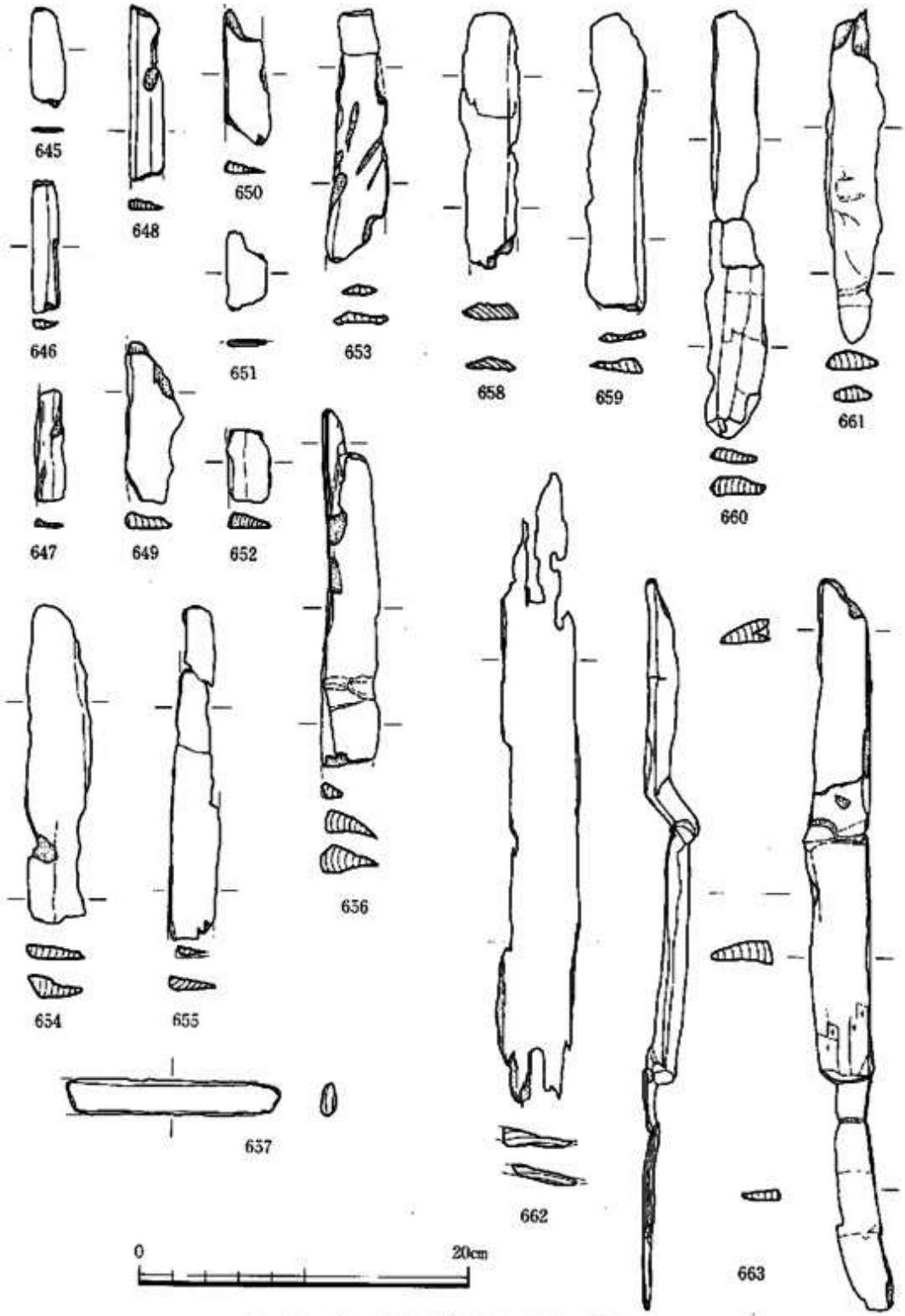


Fig.49　第１号溝上層出土板材実測図 (4)

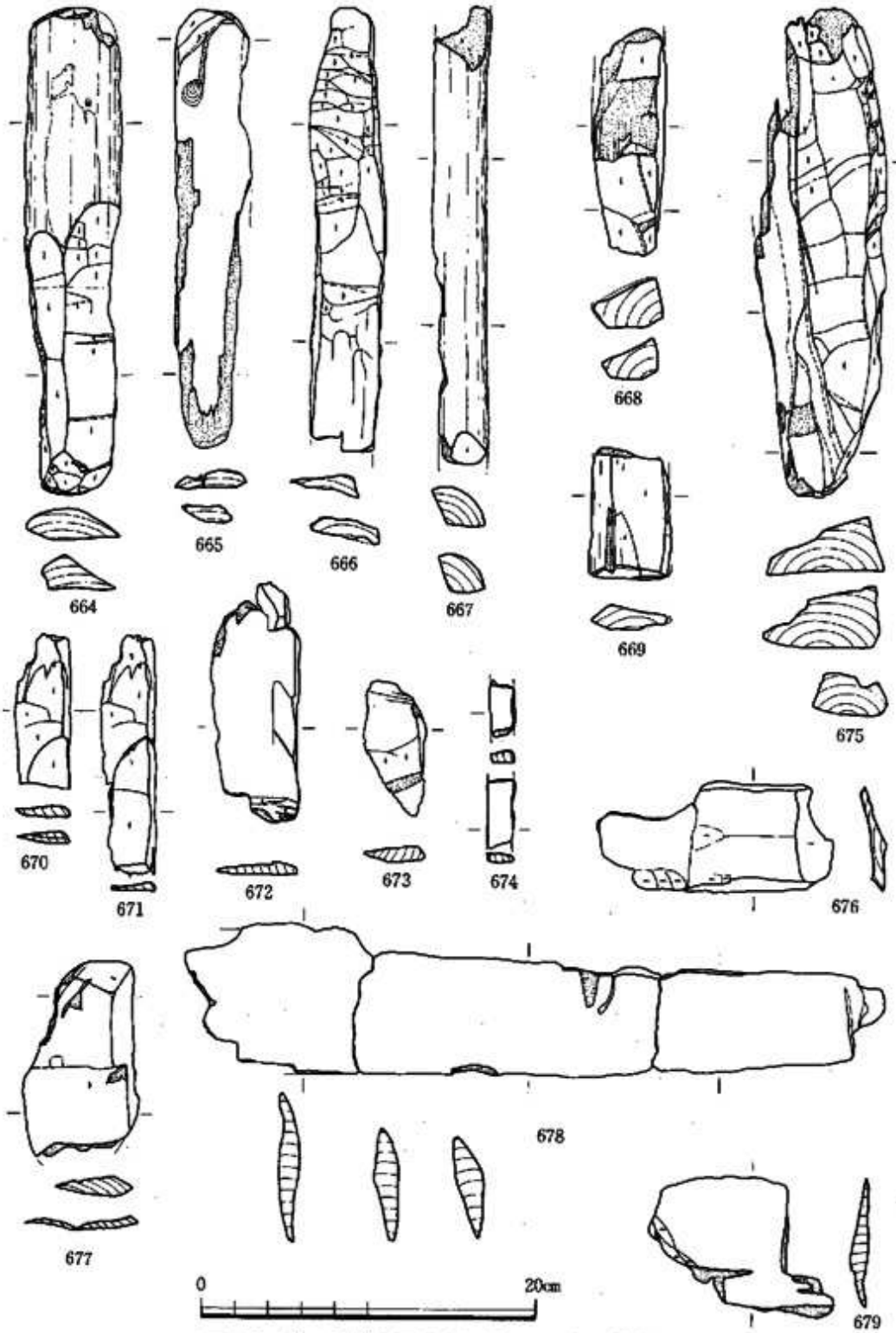


Fig.50　第１号溝上層出土板材および加工材実測図

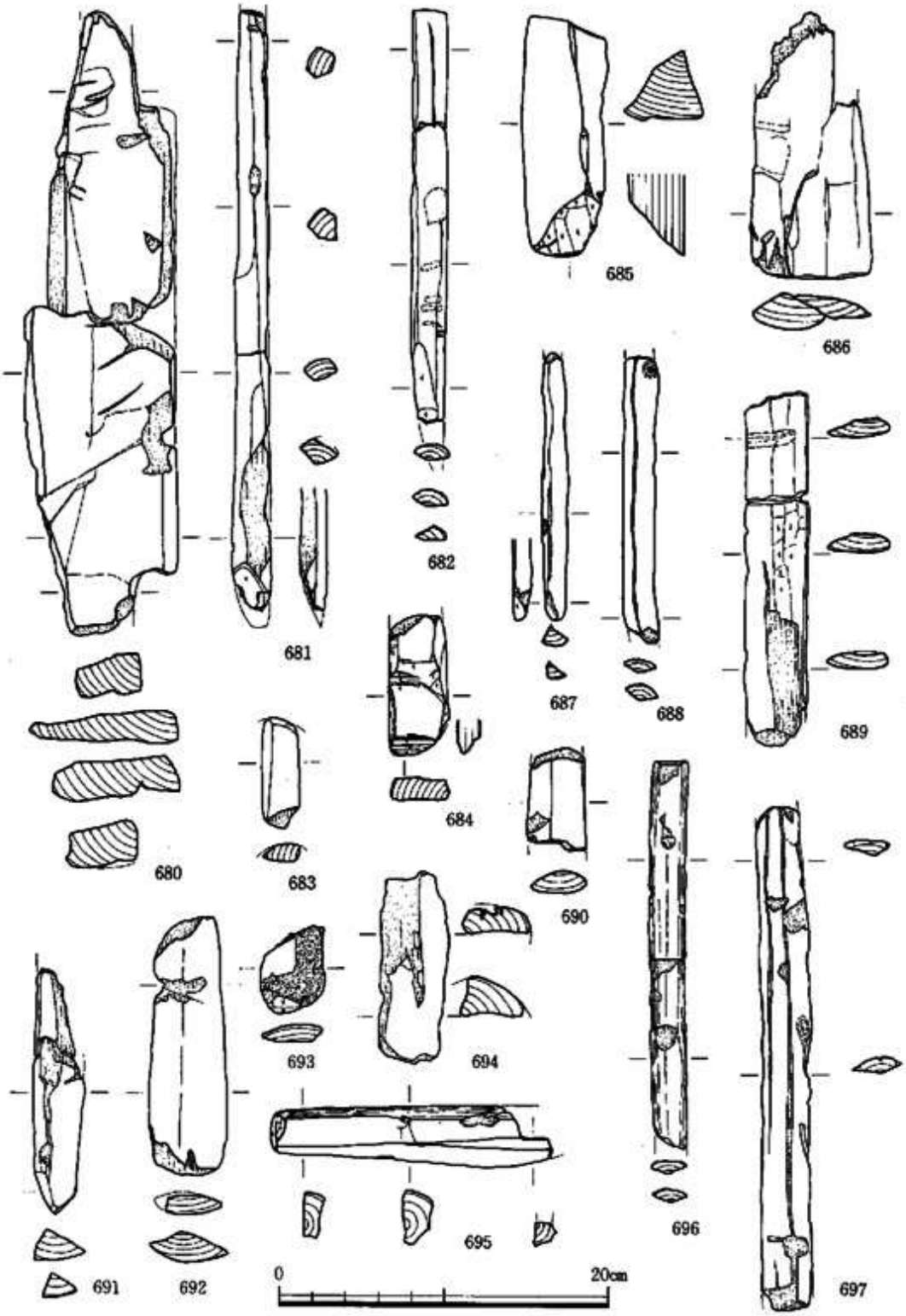


Fig.51　第1号溝上層出土加工材実測図

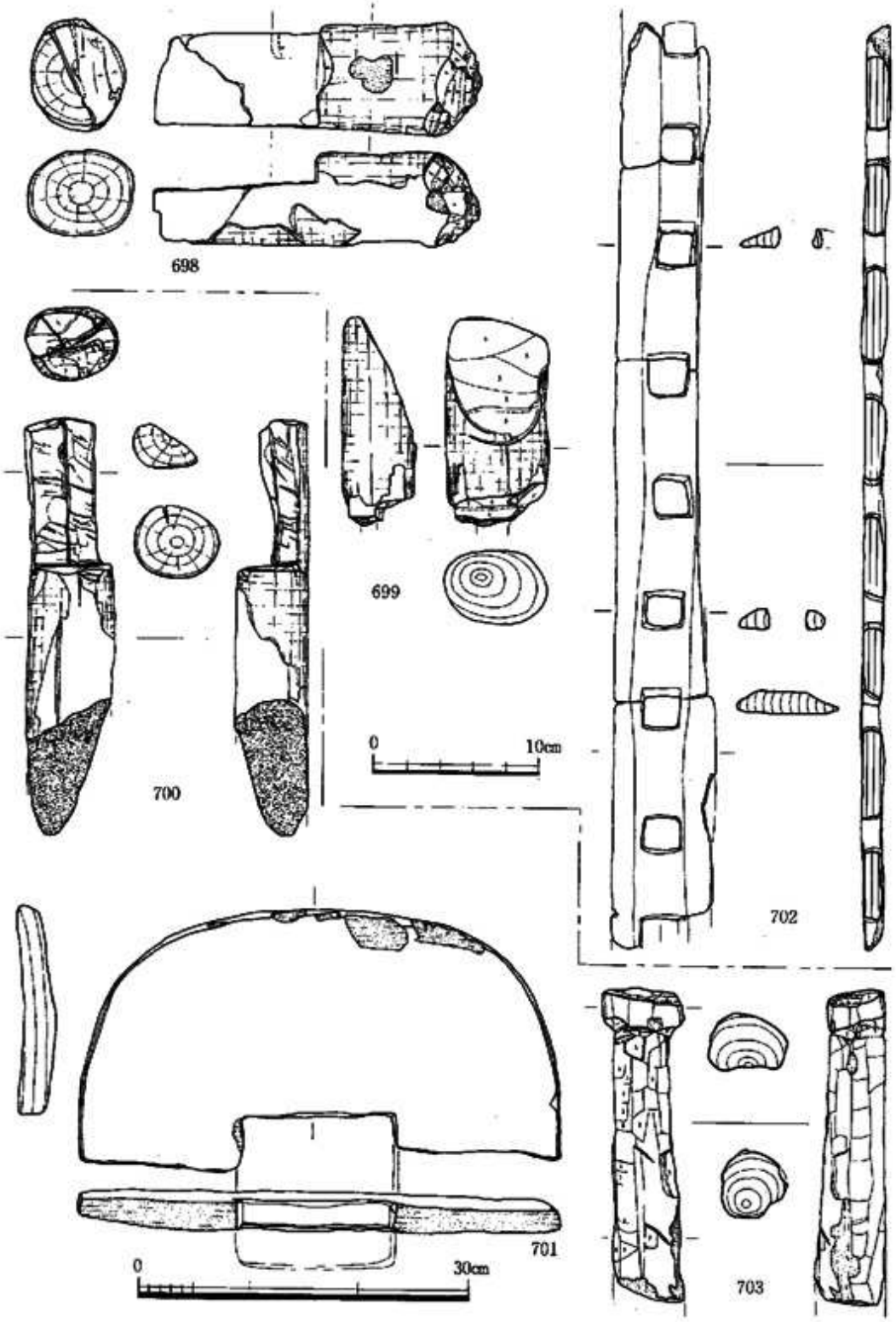


Fig.52　第1号溝上層出土建築材実測図

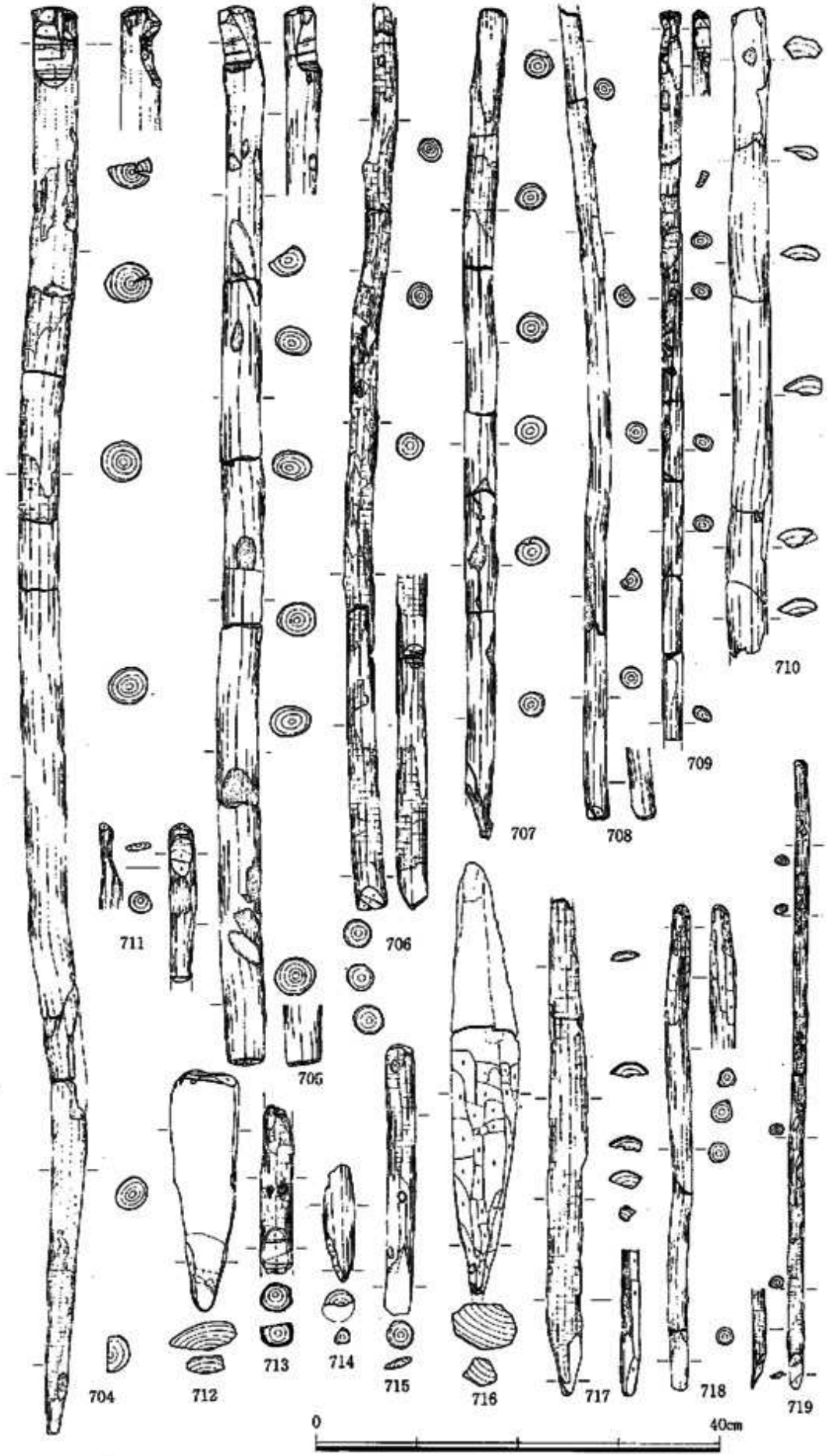


Fig.53　第１号溝上層出土建築材および杭実測図

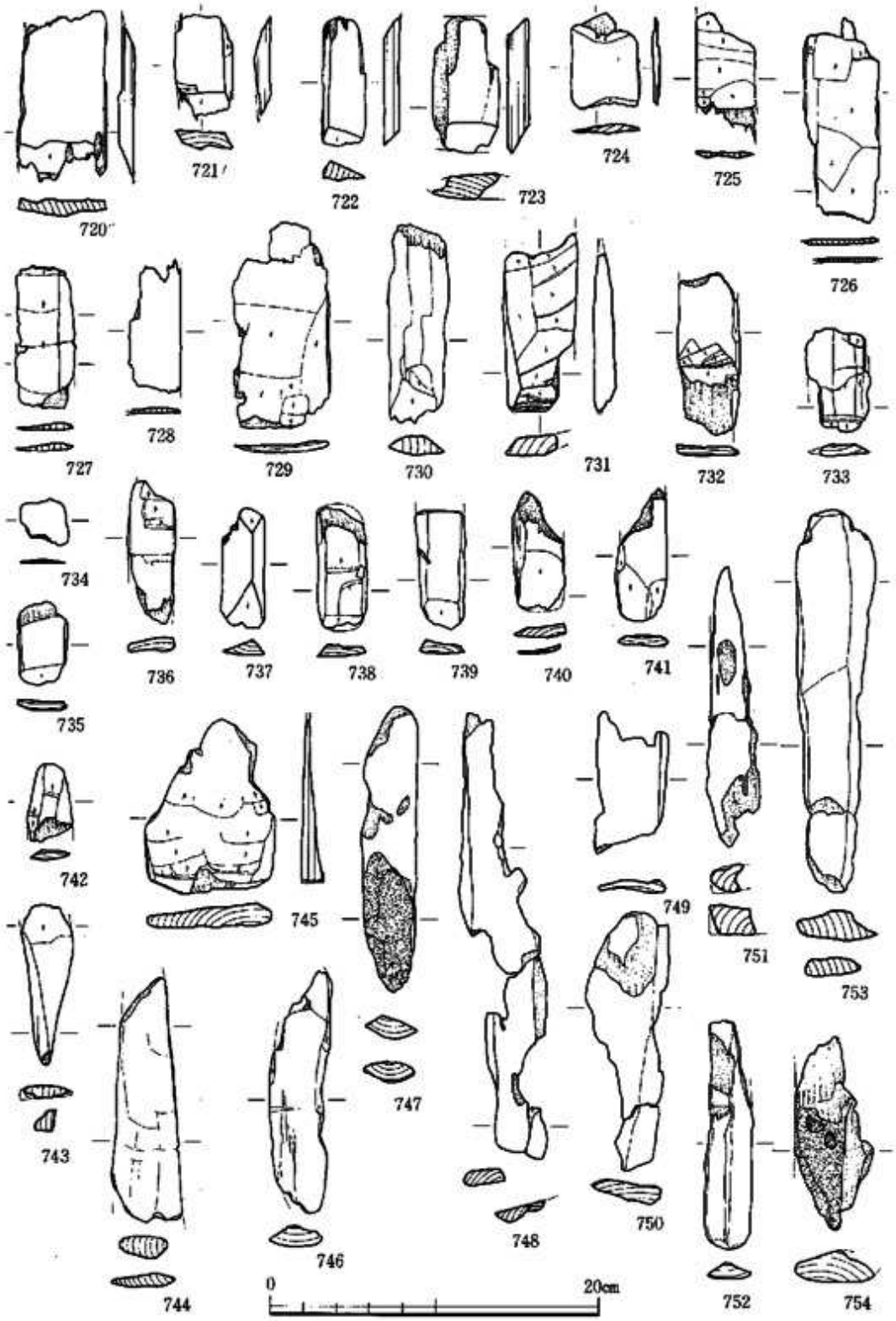


Fig.54　第１号溝上層出土削り屑およびその他の木製品実測図

ている。未製品か。587は桜皮を2cm前後の幅で束にしている。591は板目取り材を用材として、比較的丁寧な加工を加えている。589・590はそれぞれスギの柾目取り材・板目取り材を用材として、横断面長方形に整形し、後者は端部を尖らせている。594はスギのナナメ取り材（柾目に近い）を用材として長方形に整形し、片縁辺に台形の切り込みを入れている。598はヒノキ？の板目取り材を用材として、長方形に整形している。599はスギのナナメ取り材を用材とし、片方端部にコの字の造り出し部を設けている。618はスギの柾目取り材を、621はシイの柾目取り材を長方形に整形している。前者の器表には鋭い刃物痕がみられる。664・666は割材を用材として、丁寧な削り加工を加えている。670・671はスギの削り屑の接合例である。

Tab.3　第1号溝上層出土木器一覧表

遺物C註番号	報告書掲載番号	PL版	器種	樹種	木取り	法量(cm) A	B 1	B 2	C	D	E	F 1	F 2	G 1	G 2	H	I	J	K 1	K 2	L	M	N	O	備考
10001	Fig.33 524	PL.4	組合せ鋤具	カシ	板目	13.45+α	2.75		3.0	3.1	1.6														短い型
10002	Fig.52 698	PL.12	建築材	ヒノキ?	芯持ち材	19.8	6.8		5.7																端部下にコの字の切込みあり
10003	Fig.52 700	PL.12	建築材	シイ	芯持ち材	57.8+α	8.5		6.6																端部にL字の切込みあり大半は焼失している
10004	Fig.48 643		板材	シイ	柾目	59.3+α	3.5		0.8																
10005	Fig.45 592		板材	ヒノキ?	板目	30.5+α	0.95		3.25																
10006	Fig.46 599	PL.10	板材	スギ	柾目に近いナナメ取り	22.7	5.2		1.5																端部にコの字の造り出しあり
10007	Fig.42 564	PL.7	編錘	シイ?	芯持ち	14.1	6.45	6.5×5.3		5.5×4.9		3.75	3.4	6.95											
10008	Fig.45 587	PL.10	桜皮束				1.4		0.1																
10009	Fig.34 529	PL.5	鉄鎌柄	カシ	柾目	31.0+α	3.6							5.5		4.2					2.05×1.9				
10010	Fig.34 530	PL.5	鉄鎌柄	カシ	柾目	23.4+α	6.4−α							7.1		4.65					2.3×2.1				
10011	Fig.43 577	PL.6	加工材		芯持ち	14.1	5.25		5.0																未製品か
10012	Fig.37 540	PL.6	杖	カシ	柾目	7.35+α	24.35+α		0.8																
10013	Fig.42 570	PL.7	編錘	シイ?	芯持ち	12.05+α	4.3×5.2			1.1+α			9.85	2.7+α											
10014	Fig.54 714		板材	シイ?	板目	14.5+α	4.05		1.35																
10015	Fig.34 527	PL.5	鉄鎌柄	カシ	柾目	67.8+α	3.0				3.1			4.7		4.4					2.1×3.5				
10016	Fig.55 702	PL.12	建築部材	シイ?	柾目	55.5+α	6.25		1.5																格子枠か 一辺2cm前後の方形枘あり
10017	Fig.42 563	PL.7	編錘	シイ?	芯持ち	15.45	7.4	7.2		5.3		6.03	6.4	3.0											
10018	Fig.40 552	PL.8	鉄鎌柄	カシ	柾目	26.7	3.55		3.6	2.3	2.3			3.35		3.56					2.52×2.2				組合部枘長5.9cm・組合部枘幅0.45cm
10019	Fig.44 584	PL.10	小形槽		芯刳貫	17.9	7.5		4.4+α	3.3		12.3				9.2	6.7				2.5		0.8		
10020	Fig.34 531	PL.5	ナスビ型未製品柄		板目	37.9+α	5.2		2.8+α										65°		3.1−α		17.2		台部中央と柄基部に縄痕あり 枝分れ部を利用
10021	Fig.37 547	PL.4	二又鍬	カシ	柾目	22.6+α	4.8+α		0.75+α							22.6+α									
10022	Fig.34 528	PL.5	鉄鎌柄	カシ	柾目	30.8+α	3.0							4.9		4.7					2.7×1.8				
10023	Fig.42 568	PL.7	編錘		芯持ち	13.2	5.9	6.4		4.2		4.9	4.1	4.15											
10024	Fig.45 598	PL.10	弓		割材	(15.0)	3.3		3.1																[illegible]
10025	Fig.32 516	PL.4	平鍬	カシ	柾目	14.9+α			1.1+α	1.4+α	2.9−α	2.35−α		7.2		5.35+α									
10026	Fig.40 556	PL.8	鉄斧柄		板目	45.4	3.2		3.2										65°		2.2×2.0		12.85		袋状鉄斧柄 枝分れ部を利用
10027	Fig.46 594	PL.10	板材	スギ	柾目に近いナナメ取り	27.3	14.4		2.0																[illegible]
10028	Fig.37 539	PL.6	杖?		柾目	8.1−α	37.1+α		3.6+α	1.9	1.75	2.9									2.5				
10029	Fig.44 583	PL.10	武器形木製品	スギ	柾目に近いナナメ	10.85−α	3.1		1.4																[illegible]

遺物登録番号	報告書掲載番号	図版	器種	樹種	木取り	法量(cm) A	B 1	B 2	C	D	E	F 1	F 2	G 1	G 2	H	I	J	K 1	K 2	L	M	N	O	備考
10030	Fig.43 574	PL.6	紡錘車		軸	4.85 +α			1.1	0.85	軸長 1.7+α 軸径 0.4														火を受け炭化している 回転軸あり
10031	Fig.44 582	PL.9	小型模造船	スギ	板目に近いナナメ	13.25	3.55		0.6	1.15	1.7	10.2		0.9		7.8	3.2				1.4	1.0	0.6		男根状木製品か
10032	Fig.44 585	PL.10	船模造品	スギ	板目	7.25	3.0			3.0				2.8		4.45	1.4				1.4				櫂の栓か
10033	Fig.32 512	PL.4	平鍬	カシ	柾目	20.45 −α	8.3+α		2.15	5.45	2.45 +α	9.45+α		4.95		6.45 +α	8.25 +α		(100°)	115°					破損後,ナスビ型木製品として再利用か
10034	Fig.32 513	PL.4	平鍬	カシ	柾目	25.4 +α	8.3+α		1.61	6.85	1.8 +α	6.25		7.0		6.1 +α	8.3 +α		145°	145°					
10035	Fig.49 555	PL.8	鉄斧柄		板目	42.3	2.5+α		4.05 −α												2.7 ×1.75		5.3 −α		袋状鉄斧柄 枝分かれ部利用
10036	Fig.42 562	PL.7	編錘	カシ	芯持ち	14.75	6.85	5.65 ×6.5		4.6×4.0		6.4	6.9	1.45											
10037	Fig.38 547	PL.8	槌	カシ	割材(柾目)	25.05 +α	6.9		5.9	6.8						23.2									槌部端は凸レンズ状をなしている
10038	Fig.37 543	PL.6	大足	カシ	柾目	61.1	11.2		1.05																両端に2.6×1.6cm,3.1×2.8cmの方形孔あり
10039	Fig.42 560	PL.7	編錘	カシ?	芯持ち	14.6	6.7 ×5.6	8.4 ×8.5		3.7 ×4.8		5.4	5.6	2.6											
10040	Fig.42 559	PL.7	編錘		芯持ち	14.25	6.25 ×5.8	6.75 ×5.85		5.1 ×4.1		2.55	2.7	9.0											
10041	Fig.44 581	PL.9	模造船?		板目	30.95 +α	8.1+α			5.2		27.8		2.5		17.3	8.6 +α				5.6 −α	5.9	0.5		
10042	Fig.42 561	PL.7	編錘	カシ	芯持ち	14.2	6.2 ×5.2	6.4		4.6 ×5.6		6.3	6.45	0.85											
10043	Fig.38 546	PL.8	槌柄	カシ	柾目	12.9 +α	5.85		3.25								2.15 ×1.85				2.7 ×2.9				
10044	Fig.43 572	PL.6	紡織具		芯持ち	53.1	2.5																		両端部近に紐掛用の切り込みあり 機織機の部材か
10045	Fig.42 566	PL.7	編錘		芯持ち	17.1	7.3× 6.65	8.65 ×6.1		4.4 ×4.7		5.7	5.1	6.3											
10046	Fig.42 565	PL.7	編錘		芯持ち	15.3	6.8	6.7× 5.75		5.2 ×5.5		6.1	6.0	2.9											
10047	Fig.46 598	PL.11	板材		板目	38.55	6.95+α		0.95																
10048	Fig.42 567	PL.7	編錘		芯持ち	17.5	8.0× 7.7	7.15 ×7.3		5.2 ×4.7		4.0	3.0	10.0											
10049	Fig.33 518	PL.4	二又鍬	カシ	柾目	49.3 +α	7.4+α		1.3	2.8 +α	1.4 +α					2.5 +α			120°						
10050	Fig.38 548	PL.8	槌		芯持ち	38.9	9.6+α		4.45 +α					11.5		15.4	3.9				2.55 ×2.9				
10051	Fig.26 551	PL.7	竪杵		芯持ち	44.3 +α	9.3×7.0		搗部長 27.5																搗部端は凸レンズ状をなしている なお、搗部は火を受け、炭化している
10052	Fig.44 580	PL.9	小型模造船	スギ	柾目	33.15	8.5		1.9	2.5	1.5	30.0		1.5		27.2	7.0				4.8	3.8	0.85		[illegible]
10056	Fig.52 701	PL.12	ねずみ返し		板目	34.0	43.7		2.85		軸 13.5 ×(13.5)														
10060	Fig.37 542	PL.6	大足	スギ	板目	32.05 −α	13.1−α		1.6		25.75	3.3	3.0	4.5	4.7										[illegible]
10061	Fig.42 571	PL.7	編錘		芯持ち	15.1		6.4 ×5.2																	未製品か
10062	Fig.36 535	PL.5	組合わせ式鋤柄	カシ	柾目	75.35 −α	2.9		2.2	3.5 +α		1.0+α					0.6 +α				2.9 ×2.2				握部透り割し部は欠失している
10063	Fig.46 596	PL.11	板材	スギ	板目	94.8 +α	3.45		0.5																
10064	Fig.49 654		割材	シイ	柾目	19.1	3.85		1.35																部材?
10065	Fig.46 597	PL.11	角材	スギ	板目	27.85 +α	2.9		1.75																
10066	Fig.52 703	PL.12	建築材		芯持ち	38.55 +α	7.3×5.2																		端部近くに切り込みあり
10067	Fig.36 537	PL.5	鋤	カシ	柾目	31.5 +α	16.0+α		1.55							18.5 +α									身部U字形鋤先着装の一木造りの鋤か
10068	Fig.38 545	PL.8	柄	カシ	割材	31.05 +α	5.55		3.0	5.4 ×3.8				9.75+α		14.9					2.4 ×2.7				柄部中央に使用痕あり 火を受け、端部は炭化している
10069	Fig.45 595	PL.10	板材	スギ	柾目	26.5	5.5		0.6																小孔あり
10070	Fig.32 515	PL.4	平鍬?	カシ	柾目	20.0 +α	6.25+α		1.0							2.2 +α									二又鍬か
10071	Fig.48 640	PL.11	板材	スギ	板目	47.65 +α	4.2		1.0																
10072	Fig.50 665		加工材	シイ	板目	26.2 +α	4.4		1.65																
10073	Fig.49 660		板材	カシ?	板目	25.8 +α	3.6		1.15																
10074	Fig.33 520	PL.4	多又鍬	カシ	柾目	21.9 +α	7.7−α		1.35			(9.3+α)		8.7−α		3.8 +α									
10075	Fig.51 694		割材		割材	11.65 −α	4.1−α		2.3																
10076			丸太材	カシ	芯持ち	36.6 −α	12.85 ×10.35																		柱材、または木器製作用の用材か 枝は丁寧に落している
10078	Fig.32 516	PL.4	二又鍬	カシ	柾目	25.7 +α	6.0+α		1.2					8.5−α		17.2 −α									
10079	Fig.50 676	PL.11	削りクズ		板目	14.25	6.7		1.0																
10080	Fig.35 533		農具柄?	カシ?	板目	30.45 +α	4.1+α		2.4																本報告3点11組は火を受け、炭化している 農柄か

遺物登録番号	報告書実測番号	図版	器種	樹種	木取り	A	B		C	D	E	F		G		H	I	J	K		L	M	N	O	備考
							1	2				1	2	1	2				1	2					
10081	Fig.45 600		板材		板目	23.8+α	3.7		0.85																
10083	Fig.38 544	PL.6	槌		芯持ち	34.4				4.2×3.2				16.4		24.3	2.4				3.5×2.4				槌部中央に使用痕あり
10084	Fig.38 543		槌	カシ	割材	17.9+α				16.75×8.85						17.9+α									
10085	Fig.37 541	PL.6	鍬	カシ	柾目	30.7+α	19.7		1.65	3.2+α	2.85	3.2−α							125°		18.3−α				
10086	Fig.35 521	PL.4	又鍬	カシ	柾目	30.1+α	2.7		0.85+α							10.1+α									
10088	Fig.43 573	PL.6	紡錘車	カシ	柾目	6.7			0.9	0.6															
10092	Fig.46 602	PL.11	板材	スギ	板目	17.75	3.35		0.85+α																
10093	Fig.46 601		板材	スギ	板目	19.85+α	3.8		0.43																
10094	Fig.50 667	PL.11	加工材		割材	27.3−α	3.3		2.3																
10095	Fig.50 664	PL.11	加工材		割材	28.8+α	5.7		2.1																
10096	Fig.50 669	PL.11	加工材		割材	8.0+α	4.9		1.5																
10097	Fig.51 695		加工材		割材	19.1+α	3.7		1.85																
10098	Fig.51 680	PL.12	角材	シイ?	ナナメ	37.6+α	9.1		2.3																両端に切り込みあり 建築材か
10099	Fig.54 753		板材	シイ	柾目	23.35	4.83		1.85																
10100	Fig.45 586	PL.9	小型横槌		柾目	33.1+α	3.2		4.5+α	4.0		24.7−α				19.7+α	0.8				0.9	4.5+α	1.15		
10101	Fig.33 519	PL.4	三又鍬	カシ	柾目	19.4+α	3.45+α		1.1			(6.0)		(5.0)		(8.6)									
10102	Fig.50 668		加工材		割材	13.55	4.25		2.8																角材
10103	Fig.46 606		板材	スギ	柾目	20.2+α	2.8		0.7																
10104	Fig.46 603		板材	スギ	板目	11.05	2.45−α		0.8																
10105	Fig.45 588	PL.10	木簡	スギ	板目	12.38−α	1.7		0.35																木中央に稜線が通り、横断面は五角形をなす
10106	Fig.46 604		削りクズ	スギ	板目	3.6−α	2.2		0.3																
10107	Fig.43 578	PL.7	加工材	スギ		17.65−α	7.8		4.15																工作台か 木口取り
10108	Fig.50 674		板材	スギ	柾目	3.4+1.2+α	1.7		0.25																
10112	Fig.45 590	PL.10	板材	スギ	板目	42.0	2.0		1.0																端部を杭状に尖らせている
10113	Fig.46 605	PL.11	板材	シイ?	柾目	9.72	3.7		0.6																
10114	Fig.50 670/671	PL.11	削りクズ	スギ	板目に近いナナメ	14.55+6.35	3.3		0.7																削り木片 2点接合有
10115	Fig.50 675	PL.12	杭?		割材	23.2+α	7.8		3.65																角材
10116	Fig.49 563		板材	スギ	柾目	40.0	3.85		1.5																
10117	Fig.50 673	PL.11	削りクズ	シイ?	ナナメ	8.05	3.55		0.9																
10118	Fig.49 655	PL.11	割材		板目	18.0+α	3.5		3.85																
10119	Fig.49 658		割材			15.05−α	3.65		1.05																
10120	Fig.50 666	PL.11	加工材		板目	26.6−α	4.2		1.2																
10121	Fig.54 751		板材		柾目	17.05−α	3.2		1.3																
10122	Fig.54 748		板材		板目	27.25	4.0		0.95																
10123	Fig.54 750		板材		板目	15.75	4.9		1.15																
10124	Fig.54 749		板材		板目	8.7	4.4		0.8																
10125	Fig.53 716	PL.12	杭		割材	42.65+α	6.5		4.4																頭部は火を受け、炭化している
10126	Fig.48 662	PL.11	板材	スギ	板目	34.25	4.65		1.1																
10127	Fig.47 620	PL.11	板材	ヒノキ?	板目	34.6	3.3		0.5																
10128	Fig.50 577	PL.11	削りクズ		ナナメ	11.75+α	6.8		1.2																
10129	Fig.50 572		削りクズ		柾目	14.1+α	5.5		0.8																
10130	Fig.49 652		割材		割材	4.5−α	2.65		0.95																
10131	Fig.32 511	PL.4	平鍬	カシ	板目	48.3−α	7.2+α		2.2	5.5	3.0+α	11.9				16.7			105°		115°				
10132	Fig.50 678/679	PL.12	板材		板目	45.85+11.35+α	9.0		1.2																

遺物登録番号	報告書掲載番号	図版	器種	樹種	木取り	A	B	C	D	E	F	G	H	I	J	K	L	M	N	O	備考
10133	Fig40 554	PL.8	鉄斧柄		柾目	62.9−α	2.6	2.65								105°	1.6×1.65		10.3+α		袋状鉄斧柄
10137	Fig49 656		割材	シイ?	柾目	21.6−α	3.55	1.55													
10138	Fig47 619		板材	ヒノキ?	板目	17.85	3.98	0.5													
10139	Fig45 589	PL.10	板材	スギ	柾目	[illegible]	2.85	0.9													
10141	Fig35 534		鉄鎌柄		板目	37.7	4.25	4.3		1.55							3.65×2.2				
10144	Fig53 704		建築材	シイ?	芯持ち	146.1+α	4.5×3.9														柄端部は面取り加工を加えており、削り加工が明瞭に残っており、つぶれてはいない 梯材か
10146	Fig53 719		杭?		芯持ち	62.36+α	1.7×1.25														建築材か
10147	Fig51 689		板材		板目	21.4−α	3.8	1.2													
10148	Fig51 696		加工材		割材	23.3−α	2.1	0.85													
10149	Fig48 626		板材		柾目	11.9+α	4.15	3.8													
10150	Fig53 717		杭	シイ	割材	49.2+α	3.85	1.38													
10153	Fig53 718		加工材		芯持ち	48.04+α	2.3×2.18														建築材または農耕具柄か
10154	Fig39 553		鉄斧柄		板目	21.8+α	3.2	3.53								75°	2.1×1.8		11.7		袋状鉄斧柄、枝分かれ部利用 柄部は火を受け炭化している
10155	Fig53 709		杭?		芯持ち	72.15+α	2.1×1.6		くびれ部最小幅 1.5 くびれ部最小厚 0.6												建築材か
10156	Fig52 699		建築材		芯持ち	12.6−α	6.22×4.4														端部近くにコの字の切り込みか
10157	Fig48 641		板材	カシ	柾目	4.45−α	1.9	0.98													農具か
10158	Fig51 697		加工材	シイ?	割材	30.58+α	3.05	1.0													
10159	Fig51 698		加工材	シイ?	割材	17.28+α	2.0	0.98													
10160	Fig51 682		加工材	シイ?	割材	25.1+α	2.2	1.05													
10161	Fig53 713		杭?		芯持ち	36.65+α	3.25×2.8														頭部は消失したと考えられる
10162	Fig33 522		手斧?	カシ	柾目	9.4+α	5.95+α	1.9													
10163	Fig43 579		鳥形木製品?		芯持ち	23.35−α	7.4	4.5+α	くびれ部最小幅 4.57 くびれ部最小厚 2.7												樹種で比重が軽ければウキと考えられる
10164	Fig43 575		加工材		芯持ち	5.7	6.5	5.5													多面体に整形
10165	Fig48 637		板材	シイ?	柾目	7.3	2.95	0.58													
10166	Fig48 632		板材	シイ?	柾目	10.0+α	4.05	0.56													
10167	Fig48 644		板材	シイ?	柾目	6.93	2.22	0.3													
10168	Fig48 642		板材	シイ?	板目	9.0	2.7	0.7													
10169	Fig48 622		板材	ヒノキ?	板目	10.4−α	2.95	0.78													
10170	Fig48 633		板材	スギ	板目	5.7+α	3.25	0.89													
10171	Fig54 740		削りクズ		板目	7.06+α	3.2	0.7													
10172	Fig48 625		板材		柾目	8.66+α	3.05	0.6													
10173	Fig51 690		加工材		板目	6.3−α	3.58	1.4													
10174	Fig54 737		削りクズ		板目	7.3	2.7	1.0													
10175	Fig51 684		加工材		柾目	8.48+α	3.65	1.4													
10176	Fig54 743		削りクズ		柾目	9.7+α	3.0	1.3													
10177	Fig38 550		竪杵	カシ	芯持ち	6.5+α	2.65×1.96														杵の握部か
10178	Fig51 683		加工材	シイ?	柾目	6.75	2.25	1.1													
10179	Fig54 735		削りクズ		板目	5.[illegible]	2.95	0.6													
10180	Fig54 693		加工材		板目	5.25	3.88	1.1													
10181	Fig33 523		加工材	カシ	柾目	8.55+α	3.45	2.1													鋤柄孔部の縦割面の両端に加工を加えている
10182	Fig47 609		板材	ヒノキ?	板目	12.8	4.15+α	0.79													裏面は火を受け焼失している
10183	Fig51 692		加工材	シイ?	割材	15.66	4.75	1.86													
10184	Fig48 634		板材	シイ?	板目	5.4+α	1.8+α	0.5													
10185	Fig49 648		板材	シイ?	柾目	10.7−α	2.1	0.88													

遺物登録番号	報告書掲載番号	図版	器種	樹種	木取り	法量 (cm)															備考
						A	B	C	D	E	F	G	H	I	J	K	L	M	N	O	
10186	Fig.49 650		板材	シイ?	板目	8.2+α	2.8	0.7													
10187	Fig.48 629		板材	シイ?	板目	8.0+α	2.35	0.5													
10188	Fig.49 646		板材	シイ?	板目	8.0+α	1.75	0.55													
10189	Fig.49 645		板材	シイ?	板目	6.0	2.12	1.28													
10190	Fig.49 647		板材	シイ?	ナナメ	6.85+α	1.9	0.5													
10191	Fig.47 618		板材	スギ	板目	10.0+α	7.85−α	0.9													器面に鋭い刃物による刃物痕がみられる
10192	Fig.48 621		板材	シイ?	板目	4.2	9.5	0.75													長方形をなしており、鉄製農耕具の木質部の可能性がある
10193	Fig.48 610		板材	スギ	板目	36.7+α	5.35−α	1.0													方形物をもつと考えられ、建築材か
10194			板材	スギ	柾目	9.4+α	1.7	0.67													
10195	Fig.54 722		削りクズ	スギ	ナナメ	7.84+α	2.62	1.32													
10196	Fig.48 631		板材	シイ?	板目	8.45+α	3.25	0.55													
10197	Fig.47 611		板材	スギ	板目	6.25+α	2.75	0.65													
10198	Fig.49 657		板材	シイ?	板目	12.0−α	2.25	0.55													
10199	Fig.51 691		加工材	シイ?	板目	14.8−α	3.1	1.8													
10200	Fig.48 624		板材		ナナメ	14.85−α	2.75	0.68													
10201	Fig.48 639		板材	シイ?	板目	9.75+α	2.83	0.43													
10202	Fig.47 614		板材	スギ	ナナメ	26.9+α	3.98	0.9													
10203	Fig.47 613		板材	スギ	ナナメ	7.87+α	2.9+α	0.45													
10204	Fig.47 612		板材	スギ	柾目に近いナナメ	7.7+α	4.5	0.6													
10205	Fig.48 635		板材	シイ?	板目	4.36+α	7.32	1.05													
10206	Fig.54 726		削りクズ	スギ	ナナメ	12.4+α	4.62	0.36													
10207	Fig.54 727		削りクズ	スギ	板目	8.65+α	3.55	0.5													
10208	Fig.49 653		板材		柾目	15.2+α	3.3	0.68													
10209	Fig.53 711		加工材		芯持ち	15.8+α	2.7×2.13		最小厚 0.35												建築材か
10210	Fig.54 731		削りクズ		柾目に近いナナメ	10.8+α	4.5	1.26													
10211	Fig.48 627		板材		板目	7.7+α	3.98	0.98													
10212	Fig.53 714		杭		芯持ち	11.65+α	3.0+α	1.6													
10213	Fig.54 745		削りクズ		板目	10.3	7.9	1.35													製品か
10214	Fig.47 607		板材	マツ?	ナナメ	17.2	8.21	2.4													
10215	Fig.54 747		杭	シイ?	割材	17.4	3.15	1.3													割材使用のため焼いて固くしたか
10216	Fig.53 712		板杭		板目	23.5	6.7	2.79													
10217	Fig.54 741		削りクズ	シイ?	板目	8.0+α	3.15	0.7													
10218	Fig.54 752		加工材	シイ	板目	13.95	2.6	1.0													
10219	Fig.36 536		曲物柄	カシ	柾目	15.95+α	2.3	1.73													火を受け炭化している
10220	Fig.48 636		板材	シイ?	板目	9.61	4.4	1.3													
10221	Fig.54 723		削りクズ	スギ	板目	8.2+α	4.0	1.5													
10222	Fig.54 736		削りクズ		板目	8.7+α	2.85	0.9													
10223	Fig.54 742		削りクズ		板目	4.7+α	2.75	0.6													
10224	Fig.54 738		削りクズ	シイ?	板目	7.3+α	3.0	0.7													
10225	Fig.54 754		加工材		板目	11.7+α	4.8	1.88													
10226	Fig.5. 687		加工材		板目	16.2+α	1.65	1.1													
10227	Fig.54 746		加工材		板目	14.7−α	3.3	1.35													
10228	Fig.54 739		削りクズ		板目	7.25−α	3.32	2.8													
10229	Fig.54 730		削りクズ	スギ	板目	12.12	3.68	1.2													

遺物登録番号	報告書掲載番号	図版	器種	樹種	木取り	A	B	C	D	E	F	G	H	I	J	K	L	M	N	O	備考
10230	Fig49 649		板材		柾目	5.7+α	3.45	0.56													
10231	Fig54 733		削りクズ		板目	6.3+α	3.7	0.8													
10232	Fig54 732		削りクズ		板目	9.8+α	3.85	0.6													
10233	Fig53 710		加工材	シイ?	板目	74.08	3.82	3.8													
10234	Fig45 591		加工材		板目	17.7+α	2.2	0.84													器種不明
10235	Fig51 685		加工材		割材	14.45	5.06	4.05													
10236	Fig54 720		削りクズ	スギ	ナナメ	10.35+α	5.4	1.06													
10237	Fig47 608		板材	ヒノキ?	板目	6.1+α	5.15	0.55													
10238	Fig49 651		板材	ヒノキ?	板目	4.78	2.42	0.45													
10239	Fig54 729		削りクズ	スギ	板目	12.45	3.7	0.8													
10240	Fig54 734		削りクズ	スギ	板目	2.85	2.73	0.25													
10241	Fig54 728		削りクズ	スギ	板目	8.13+α	3.15	0.35													
10242	Fig54 725		削りクズ	スギ	板目	8.0+α	3.65	0.4													
10243	Fig54 721		削りクズ	ヒノキ?	板目	6.5−α	3.5	1.02													
10244	Fig54 724		削りクズ	スギ	板目に近いナナメ	5.85	4.2	0.58													
10245	Fig53 707		加工材	シイ?	芯持ち	61.85−α	3.25×2.68														胴部を面取り加工　建築材か
10246	Fig48 630		板材	カシ	板目	16.75−α	3.08	0.7													
10247	Fig48 623		板材		板目	22.4−α	2.65	0.59													
10248	Fig49 661		板材	スギ	柾目	20.2	3.4	1.2													
10249	Fig48 628		板材	シイ?	板目	34.3+α	4.35	0.9													
10250	Fig43 576		加工材		板目	21.2	3.45	3.0													
10251	Fig47 616		板材	スギ	板目	17.3+α	3.1	1.8													
10252	Fig48 638		板材		板目	15.7	6.9	2.1													
10253	Fig51 686		加工材		板目	16.0	7.25	2.2													
10254	Fig47 615		角材	スギ	板目	31.06	2.8	1.95													
10255	Fig33 325		ナスビ形木製品柄		板目	33.36	4.2	2.2								85°	3.2×2.55		12.5		柄部は面取り加工を加えている。火を受け炭化している。[illegible]
10256	Fig50 681		加工材		割材	38.25+α	2.36	1.8													一端を杭状にしている。
10257	Fig35 532		紡織具	カシ	板目に近いナナメ	84.3	2.5	3.6	2.0	2.35		3.75					2.4				表面には黒漆を塗布しており、儀器と考えられる。
10258	Fig53 706		組合わせ部材	カシ	芯持ち	101.6	3.4														両端とも面取り加工を加えている 片方端部にはL字状の切り込みあり 建築材か
10259	Fig53 715		杭？		芯持ち	26.8	2.9×2.7														片方端部をヘラ状にしており、掘り棒か
10260	Fig49 655		板材	シイ?	ナナメ	20.1−α	3.0	3.8													
10261	Fig47 617		板材	スギ	板目	41.3	5.0	1.9													
10262	Fig33 526		農具柄	カシ	柾目	44.2+α	2.9						2.3				2.9×1.5				頭部は楕円状に削り出し、面取りを加えている 鍬柄か
10263	Fig36 538		棒状木製品	カシ	柾目	59.71+α	3.38	2.01													部分的に火を受け炭化している 農具？（掘り棒か）
10264	Fig52 706		建築材？	シイ?	芯持ち	89.55+α	2.9×2.35														端部をV状に整形し、途中にもV字状の切り込みがある
10265	Fig41 559		目盛り板	スギ	板目	51.8+α	6.6	2.3													両側縁にU字状の浅い切り込みがあり、片方は横編み用で他方は縦編み用と考えられる
10266	Fig41 558		槌未製品		芯持ち	38.5	15.0×14.4														体部中央を抉り、欠けており、カケヤの未製品か
10267	Fig39 552		柄	カシ	芯持ち	(52.3)	17.0×11.6		12.65×8.8			126.2	21.9	3.2							柄部断面は方形をなし、側部各面には加工痕がみられ、把手付工作具か

4．第１号溝上層出土石製品（Fig.55）

滑石製剣形品である。緑黄色の滑石を使用している。先端と刃部の一部を欠くが、ほぼ完存している。現存長4.6cm、身幅1.8cm、厚さ0.4cm、穿孔径0.2cmである。刃部は両面から研ぎ出される。研ぎ出しの稜線は明瞭である。穿孔は片端から垂直におこなわれている。

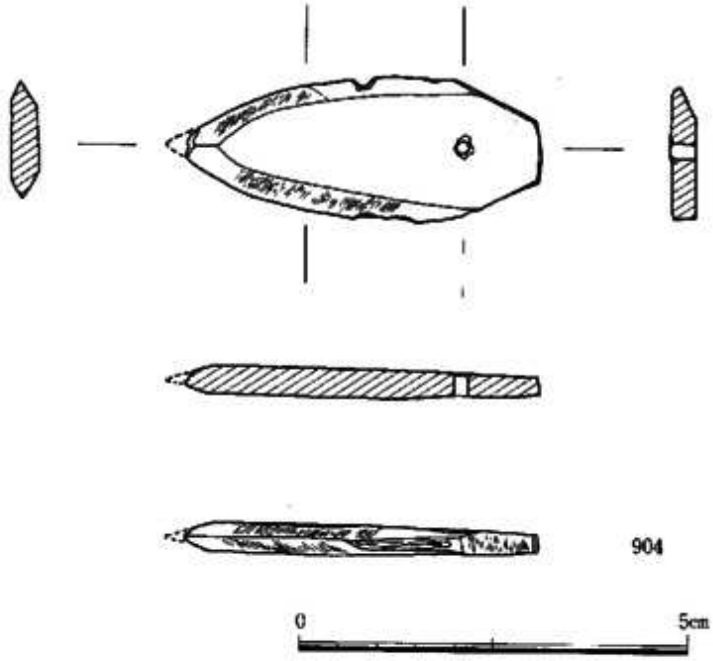


Fig.55　第１号溝上層出土石製品実測図

5．第１号溝下層出土土器（Fig.56・57）

出土土器の量は、上層に比べて少なく、おもに溝の中央部より出土している。器種は壺、甕、高坏、鉢、支脚、手捏ね土器である。

248は口頸部を欠くが長頸壺と思われる。胴部はつぶれた楕円形を呈し、丸底である。頸部はしまり、直立した口縁が付く。頸部内面はほぼ直角に屈曲し、明瞭な稜をなす。頸部外面には小さな突帯が付く。胴部下半から底部全面には、丁寧なヘラケズリがおこなわれ、さらに底部には散漫にヘラミガキが施してある。内面底部には炭化米が付着していた。器壁に多量の煤が付き、二次焼成の跡があることから、この壺で煮炊きされたと思われる。口縁部はこの時点で打ち欠かれたと考えられる。268・269は二重口縁壺である。268は球形の胴部を持つと考えられる。頸部から外反しながら開く。屈曲部は明瞭な稜を形成しており、意識的に強く外側へ引き出されている。口縁端部に向かって少し内傾する。口唇部は上向きに端面を有する。外面調整はハケ目であり、肩部に波状文を施す。薄手である。269は頸部から大きく外反して広がり、稜を持つ屈曲部で外反しながら内傾する。口唇部は、少し外側上方へ摘みあげられている。246・247は、小型丸底壺の体部である。246はやや平たい底をなし、肩が張る。247は球形を呈し、底部は肥厚する。265は、壺の底部と思われる。胴部は張らず、丸味を持つ平底を呈する。

249は高坏である。口縁部を欠失する。坏部は内湾しながら開き、屈折部で鋭く外反する。屈

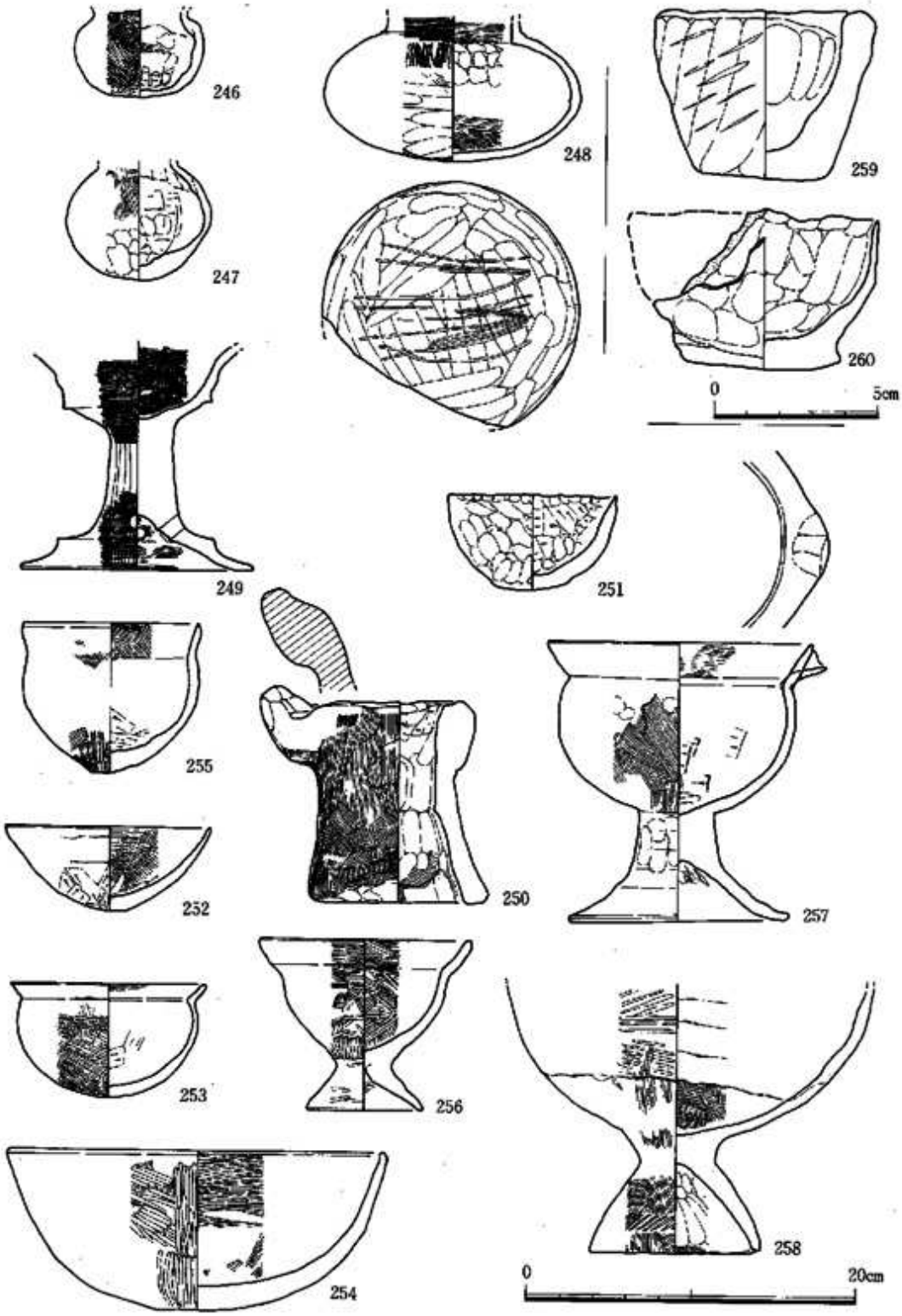


Fig.56　第1号溝下層出土土器実測図 (1)

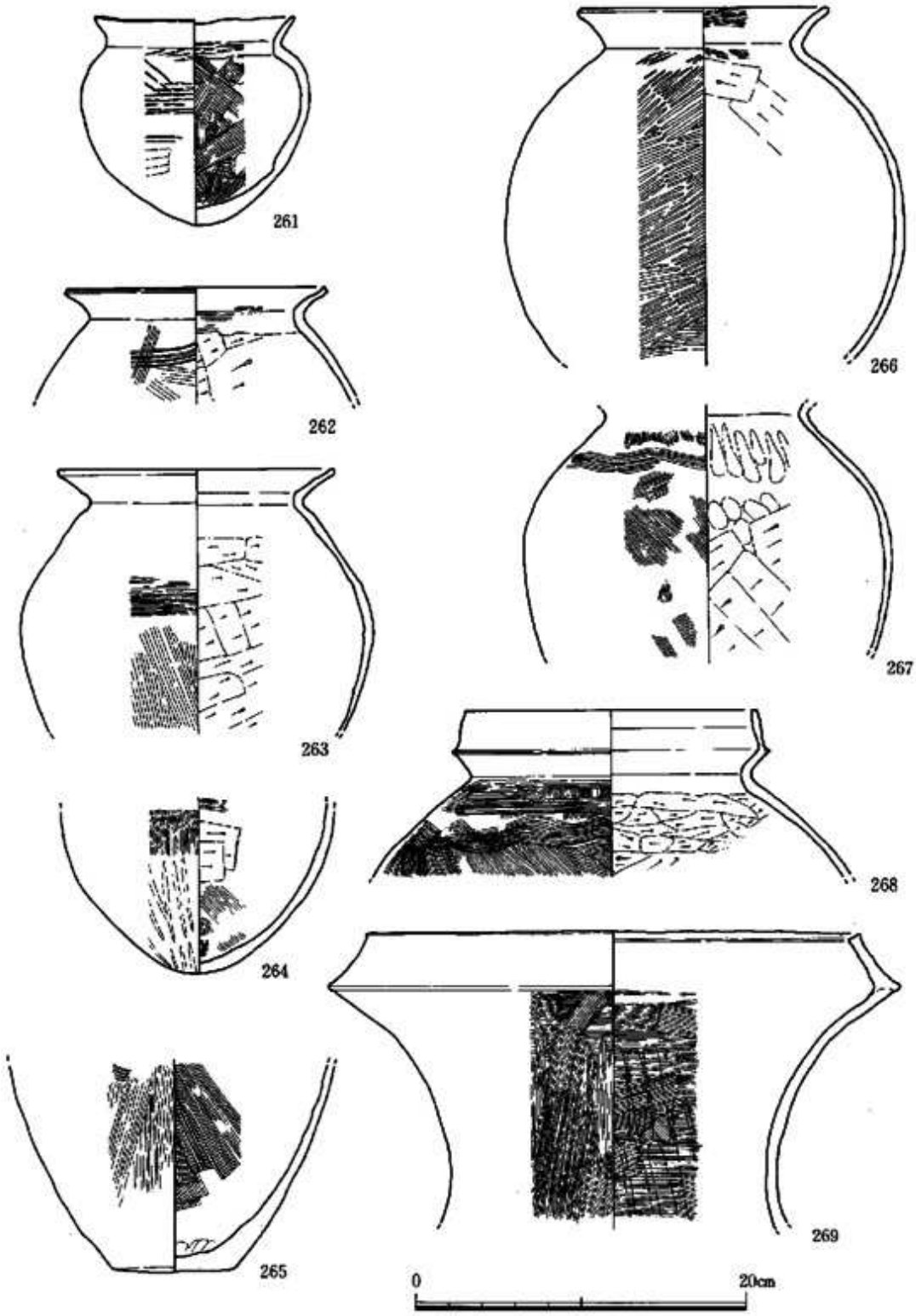


Fig.57　第1号溝下層出土土器実測図 (2)

曲部は外に突出して明瞭な稜をなす。口縁部に向かって外反する。軸部は粘土が充填されており太い。裾部は外反して大きく開き、段を有する。段には稜線が明らかである。脚端は丸く仕上げられている。裾部上位には円形の透かし穴があく。穿孔径は1cmである。ほぼ90°毎に4方向にある。内面にめくれた粘土屑が残る。調整は、細かい不整方向へラミガキが密におこなわれる。

251～257は鉢である。256・257には脚台が付く。251は丸味を持つ平底を有し、内湾しつつ開く。口唇部は抓みあげられ、鋭く上を向く。252は丸底で、そのまま口縁端まで開く。粘土の接ぎ目がよく見える。254は口径が大きく、平丸底で、内湾しつつ立ちあがる。口縁端部はわずかに内湾する。器壁は厚手で、底部は肥厚する。253・255は、体部と口縁部にくびれを持つものである。253は、丸底で内湾して立ち上がり、強くくびれる。口縁部は直線的に開く。くびれ部内面は稜をなす。255は、尖りぎみの底部から内湾して強く立ち上がる。くびれは弱い。口縁部はほぼ直立する。253に比べると深い。

256は、付根から直線的に広がる脚台を有する。脚台の器壁は厚い。端部が内湾ぎみに接地する。体部は、内湾しながら立ち上がり、強いくびれを持ち、内湾して開く。くびれ部内面には、強い稜が形成される。257はいくぶん高い脚台を持つ。軸は太く中空でない。裾部で外反し大きく開き、ふんばっている。体部は、よく張った球形をしており、頸部はよくしまっている。口縁は内湾しながら開く。片口がついている。

258は、脚台付の鉢、もしくは壺と考えられる。内湾する脚台は体部に比べて小さい。端部より2cm程上部に、平行タタキが施してあるが、これは文様を意識していると思われる。体部は球形を示し、下から約1/3のところで一度乾燥させている。上位との調整の相違、接合面内へハケ目が伸びていることがそれを示している。内面調整は粗く、粘土接合痕がわりあい明瞭に残っていることから、内面の見られることの少ない壺に復元できる可能性が高い。

250は支脚である。短い円筒に親指様の突起を1個持つ。外面は、全面に煤が付着するが、突起のある側は特に激しい。

261～264、266・267は甕である。261は尖り底をなし、胴部上位に最大径がある。頸部はしまり、口縁は直線的に短く開く。262・263は大きく開く口縁を持ち、262は内面上方に口唇部を抓み出す。262は、肩部にハケで施文する。266は球形の体部を持ち、しまった頸部から少し外反する口縁を有する。267は体部の破片である。肩部には5条の浅い凹線が波状にめぐる。煮こぼれの痕が明瞭に残る。

Tab. 4 第1号溝出土土器一覧表

遺物登録番号	報告書掲載番号	器種	法量 1	法量 2	法量 3	法量 4	焼成	色調・胎土	調整	備考
00001	158	小型丸底壺	8.8	8.95	8.0		普通	内外面ともに灰黄色 精良	口縁部 内面…ヨコハケ目後ナデ 外面…タテハケ目後ナデ 体部 内面…ナデ 外面…タテハケ目後ナデ	黒斑有
00002	155	小型丸底壺	8.2	8.1	9.2		やや不良	外面 灰褐色、内面 灰黄褐色 精良	口縁部 内面…ヨコハケ目後ナデ 外面…タテハケ目後ナデ 体部 内面…ナデ 外面…指オサエ、ナデ	黒斑有
00003	159	小型丸底壺	7.8	8.55	9.0		良好	外面黄橙色～黒褐色、内面 灰黄色 精良	口縁部 内面…ヨコハケ目後ナデ 外面…ヨコナデ 体部 内面…ヨコ方向ヘラケズリ 外面…不整方向ハケ目後ナデ	黒斑有
00004	148	小型丸底壺	6.95	8.9	10.4		良好	外面 明橙色～灰褐色 内面 明橙色～灰白色 精良	口縁部 内外面…ヨコナデ 体部 内面…指オサエ後ヘラケズリ、ナデ 外面…タテハケ目ヘラケズリ後ナデ	
00005	153	小型丸底壺	8.6	8.7	8.9		普通	外面 灰褐色、内面 明黄灰色 3mm程度の石英粒を含む	口縁部 内面…ヨコハケ目後ヨコナデ 外面…ナナメハケ目後ナデ 体部 内面…指オサエ、ヘラケズリ 外面…不整方向ハケ目後ナデ	
00006	164	小型丸底壺	8.6 +α	9.6	10.2 +α		普通	外面 灰褐色、内面 浅橙灰色 2mm以下の砂粒を含む	口縁部 内外面…ヨコナデ 体部 内面…ヘラケズリ 外面…タテハケ後ナデ	黒斑有
00007	233	手捏	4.15	4.1	4.7		普通	内外面ともに黒色 微粒砂を少量含む		
00008	230	器台	11.8		18.2 +α	14.65	普通	内外面ともに白橙色 3mm以下の砂粒を多く含む	上部 内面…ヨコハケ目 外面…タテハケ目 下部 内面…ナデ 外面…タテハケ目	黒斑有
00009	213	高坏	16.4		5.0 +α		良好	外面 灰白橙色、内面 白褐色 精良 赤色粒子を含む	坏部 内面…ハケ目後ナデ 外面…タテハケ目後ナデ	
00010	212	高坏	16.45		5.8 +α		良好	内外面ともに黄褐色 1mm程度の白色粒子を含む	坏部 内面…ヨコハケ目後ナデ 外面…タテハケ目後ナデ	
00011	204	高坏	17.7		6.8 +α		やや不良	内外面ともに灰白褐色 1mm程度の砂粒を含む	坏部 内面…ヨコハケ目後ナデ 外面…タテハケ目後ナデ	黒斑有
00012	202	高坏	18.85		5.8 +α		良好	外面 白褐色、内面 白褐色～褐色 精良 少量の砂粒を含む	坏部 内面…ヨコハケ目後ナデ 外面…ナナメ・タテハケ目後ナデ	黒斑有
00013	203	高坏	18.6		5.1 +α		良好	外面 淡橙色、内面 淡橙褐色 2mm程度の砂粒を含む	坏部 内面…ヨコハケ目後ナデ 外面…タテハケ目後ナデ	
00014	215	高坏	16.4		5.1 +α		良好	内外面ともに白橙色～白黄色 1mm以下の白色粒子を含む	坏部 内外面…ヨコハケ目ナデ	黒斑有
00015	208	高坏	18.4		8.3 −α		普通	内外面ともに浅橙色 1mm程度の白色粒子を含む	坏部 内面…ヨコハケ目後ナデ 外面…タテハケ目後ヨコナデ	
00016	201	高坏	18.8		5.2 −α		普通	内外面ともに灰白褐色 精良	坏部 内面…ヨコハケ目後ナデ 外面…ナナメハケ目後ヨコナデ	黒斑有
00017	205	高坏	14.8		5.3 −α		やや不良	内外面ともに橙色～白黄色 白色微粒子を含む	坏部 内面…ヨコナデ 外面…ナナメハケ目後ナデ	黒斑有
00018	210	高坏	17.8		5.8 −α		良好	外面 乳白灰色、内面 灰黄褐色 微白色微粒砂を少量含む	坏部 内面…ヨコハケ目後丁寧なナデ (内線1条) 外面…タテハケ目後ヨコナデ	
00019	211	高坏	18.0 +α		5.7 −α		やや不良	内外面ともに白褐色 2mm以下の砂粒を多量に含む 赤色粒子も少し含む	坏部 内面…不整方向のハケ目後ナデ 外面…ナナメハケ目後ヨコナデ	黒斑有
00020	200	高坏	17.1		12.3	12.85	普通	内外面ともに白褐色～橙褐色 1mm以下の石英・白色粒子を多く含む	坏部 内面…ヨコハケ目ナデ 外面…ナナメハケ目後ヨコナデ 脚部 内面…ナナメハケ目後ナデ後ヘラケズリ 外面…タテナナメハケ目後ナデ	
00021	214	高坏	10.8		5.3 −α		やや不良	内外面ともに橙白色 1mm程度の石英・雲母・白色粒子を含む	坏部 内外面…ヨコハケ目後ヨコナデ 脚部 内面…ヘラケズリ後ナデ 外面…ヨコナデ	
00022	186	高坏			9.4 −α	13.2	良好	内外面ともに明灰褐色 精良 白色粒子を少量含む	脚部 内面…ヘラケズリ 外面…丁寧なナデ 裾部 内外面…ヨコハケ目後ナデ	黒斑有
00023	196	高坏			6.3 −α	10.55	やや良好	内外面ともに白褐色 精良 白色粒子を少量含む	脚部 内外面…ヘラケズリ後ヨコナデ 裾部 内外面…ヨコハケ目後ヨコナデ	
00024	189	高坏			8.4 −α	12.8	良好	外面 白褐色、内面 明橙褐色 1～2mmの砂粒を含む	脚部 内面…ヘラケズリ 外面…丁寧なナデ 裾部 内面…ヨコハケ目後ナデ 外面…ヨコナデ	
00025	193	高坏			6.7 −α	11.8	良好	内外面ともに橙褐色 1mm以下の砂粒を含む 微細な白色粒子、黒雲母が目立つ	脚部 内面…ヘラケズリ後ナデ 外面…タテナナメハケ目後ナデ	黒斑有
00026	192	高坏			17.0 −α	11.65	やや良好	外面 黄褐色、内面 灰褐色 2mm以下の砂粒を多量に含む	脚部 内面…ヘラケズリ後ナデ 外面…ハケ目後ナデ 裾部 内面…ヨコハケ目後ナデ 外面…ヨコナデ	
00027	190	高坏			16.0 −α	10.8	普通	外面 灰白色、内面 明灰白色 2mm以下の砂粒を多量に含む	脚部 内面…ヘラケズリ後ナデ 外面…タテハケ目後ナデ 裾部 内面…ヨコハケ目後ヨコナデ 外面…タテハケ目後ナデ	
00028	195	高坏			8.1 −α	11.0	良好	外面 灰黄色～灰褐色 内面 淡橙色～灰褐色 1mm程度の白色粒子を含む	脚部 内面…ヘラケズリ 外面…ナデ 裾部 内外面…ヨコハケ目後ヨコナデ	
00029	191	高坏			7.7 −α	11.0	普通	外面 明橙色～白黄色、内面 明橙色 1mm以下の砂粒含む 白色粒子が目立つ	脚部 外面…ナナメハケ目後ナデ 内面…ヘラケズリ後ハケ目後ナデ	
00030	187	高坏			7.8 +α	13.9	良好	内外面ともに淡橙色 白色粒子目立つ 1～2mmの砂粒を多量に含む	脚部 内面…ヘラケズリ後ナデ 外面…タテハケ目、ナデ 裾部 内面…ヨコハケ目後ナデ 外面…タテハケ目後ナデ	
00031	188	高坏			8.0 +α		普通	内外面ともに明灰褐色 3mm以下の砂粒を多量に含む	脚部 内外面…不整方向ナデ	透かし穴有(2穴)
00032	163	小型丸底壺	9.7	8.5	9.1	3.9	普通	内外面ともに暗灰色～暗灰褐色 少量であるがあずき大の小石を含む	口縁部 内面…指オサエ、ヨコハケ目 外面…指オサエ、タテハケ目 体部 内面…ヘラケズリ、ナデ 外面…タテハケ目後ヘラケズリ	

遺物登録番号	単位番号	器種	法量 1	2	3	4	焼成	色調・胎土	調整	備考
00033	151	小型丸底壺		9.2	8.7 +α		良好	外面 白褐色，内面 明褐色 1mm以下の砂粒を多量に含む	体部 内面…ヘラケズリ 外面…タテハケ目後ナデ	
00034	160	小型丸底壺	9.5	7.9	7.3 +α		普通	外面 赤味がかった灰色～明灰色 内面 赤味がかった灰色～明褐色 1mm以下の白色粒子を多量に含む	口縁部 内面…ヨコハケ目後ナデ 外面…ヨコナデ 体部 内面…指オサエ，ナデ 外面…ハケ目後ナデ	黒斑有
00035	253	鉢	11.8		6.9		良好	内外面ともに黄褐色 雲母を少量含む 石英粒を多量に含む	口縁部 内面…ヨコハケ目後ナデ 外面…ヨコナデ 体部 内面…ヘラケズリ後，丁寧なナデ 外面…タテナデ，ハケ目	
00036	252	鉢	12.45		5.2		普通	外面 明灰色～白褐色，内面 3mm以下の石英を主とした砂粒を含む	内面…ハケ目後ナデ 外面…ナデ後ヘラケズリ	粘土接合痕有 黒斑有
00037	268	壺	17.6		10.2 +α		良好	内外面ともに白褐色 1.5mm以下の石英・長石を含む	口縁部 内外面…ナデ 体部 内面…ヨコ方向ヘラケズリ 外面…タテヨコハケ目	波状のハケ目が肩部を巡る 黒斑有
00038	170	小型丸底壺	8.2	9.5	9.2		良好	外面 褐灰色，内面 白褐色 1mm以下の砂粒を含む	口縁部 内面…ヨコハケ目後ナデ 外面…ヨコナデ 体部 内面…ヘラケズリ後ナデ 外面…不整方向ハケ目	
00039	171	小型丸底壺	7.5	9.4	9.2		普通	外面 暗灰色～灰褐色，内面 灰褐色 微細な雲母・長石を含む	口縁部 内面…ヨコハケ目後，丁寧なヨコナデ 外面…タテハケ目後ヨコナデ 体部 内面…ナデ 外面…タテハケ目後ナデ	
00040	167	小型丸底壺	8.0	9.9	10.8		良好	外面 黄灰色，内面 白褐色 精 良	口縁部 内面…ヨコハケ目後ナデ 外面…タテハケ目後，丁寧なナデ 体部 内面…強いナデ，ヘラケズリ 外面…不整方向ハケ目，ナデ	黒斑有
00041	168	小型丸底壺	9.0 +α	10.2	10.0 +α		普通	外面 明褐色～淡橙色，内面 淡褐色 0.5mm以下の砂粒を含む	口縁部 内面…ヨコハケ目後ナデ 外面…ナナメハケ目後ナデ 体部 内面…ヨコナデ 外面…ハケ目後ナデ	
00042	173	小型丸底壺	7.7 +α	9.0	7.7 +α		普通	内外面ともに明褐色 3mm以下の石英粒を含む	口縁部 内面…ヨコナメハケ目後ナデ 外面…ヨコナデ 体部 内面…ナデ，ヘラケズリ 外面…不整方向ハケ目	黒斑有
00043	174	小型丸底壺		8.9	6.4 +α		普通	外面 灰色～明白褐色 内面 暗灰色～灰褐色 3mm以下の石英粒を多く含む	体部 内面…ナデ 外面…不整方向ハケ目，指オサエ	歪み大 黒斑有
00044	247	小型丸底壺		8.8	7.0 +α		良好	外面 白褐色～灰褐色 内面 暗灰色～淡白色 1mm程度の砂粒をわずかに含む	体部 内面…指オサエ・ナデ，ヘラケズリ 外面…ナナメハケ目後ナデ	
00045	246	小型丸底壺		7.8	3.4 +α		良好	内外面ともに黒色～褐色 0.5mm以下の白色粒子を含む	体部 内面…ヘラミガキ，ヘラケズリ，ナデ 外面…ヘラケズリ，ヘラミガキ	
00046	169	小型丸底壺	8.4	9.1	9.8		普通	外面 灰褐色，内面 灰色～暗灰色 微砂粒を含む	口縁部 内面…ナナメハケ目後ヨコナデ 外面…ヨコナデ 体部 内面…ナデ，ヘラケズリ 外面…タテハケ目，ヘラケズリ，ナデ	黒斑有
00047	172	小型丸底壺	10.0	9.1	9.2 +α		良好	内外面ともに暗橙色 1mm以下の砂粒を含む	口縁部 内面…ヨコハケ目，ナデ 外面…ヨコナデ 体部 内面…ナデ後ヘラケズリ 外面…不整方向ハケ目後，丁寧なナデ	器壁薄い 反転復元
00048	251	鉢	10.2 +α		5.8		やや不良	内外面ともに灰橙色～白黄色 2mm程度の砂粒を多く含む	体部 内面…指オサエ，ヘラケズリ 外面…ナデ，指オサエ	黒斑有
00049	259	手捏	6.8 +α		5.1	3.9 +α	普通	内外面ともに淡い橙褐色 3mm以下の石英・長石粒を含む		歪み大
00050	235	手捏	4.8～5.2		5.3	2.4	普通	内外面ともに白褐色～明灰色 4～3mmの石英粒を多く含む		歪み大
00051	234	手捏	6.3		5.2		普通	内外面ともに淡い灰褐色 2mm以下の砂粒を含む		
00052		高坏			9.5 −α		やや不良	内外面ともに明灰褐 1mm以下の砂粒を含む	脚部 内外面…ナデ 裾部 外面…タテハケ目後ナデ	
00053	260	予備			4.9	4.7	やや良好	外面 黒灰色～灰色 内面 明灰色～黄灰色 1～2mmの砂粒を含む		焼成前のヒビ割れが多い
00054	257	脚台付鉢	16.2		17.1	13.4	普通	外面 灰黄褐色 内面 明灰褐色～明灰色 3mm程の砂粒を多く含む	口縁部 内面…ヨコハケ目後ナデ 外面 ナデ 体部 内面…ヘラケズリ，ナデ 外面…ナナメハケ目 台部 外面…ナデ 内面…ヘラケズリ後ナデ	カタクチを持つ 黒斑有
00055	250	支脚			13.0	10.9	やや良好	内外面ともに黒褐色～明褐色 1～3mm程度の砂粒を多く含む	体部 内面…ヘラケズリ，ナデ，ハケ目 外面…ナデ後ハケ目	煤付着
00056	261	壺	12.1～12.6	13.8	12.4		普通	外面 暗橙色～白黄色 内面 黄白色～明褐色 2～4mm程度の砂粒を多く含む	口縁部 内面…平行タタキ後ナデ 外面…ヨコナデ 体部 内面…ナナメハケ目，ナデ 外面…平行タタキ後ナデ	煤付着内面にタタキのあて具痕有
00057	225	支脚			8.6 +α	12.1	普通	内外面ともに暗褐色 3mm以下の砂粒を含む	脚部 内面…ヨコハケ目後ナデ 外面…ハケ目後ナデ 裾部 内外面…ハケ目後ナデ	黒斑有
00058	226	甑	21.4		13.0		やや良好	内外面ともに淡褐色～暗黄褐色 1mm以下の砂粒を含む	体部 内面…細かいハケ目後ナデ 外面…ヘラケズリ後，細かいハケ目	底部穿孔は1ヵ所 黒斑有
00059	197	高坏			7.2 +α		やや不良	内外面ともに黄褐色 1mm程度の砂粒を含む	脚部 内面…ヘラケズリ 外面…ナデ 裾部 内外面…ハケ目	
00060	255	鉢	10.8		9.1		普通	内外面ともに橙色～灰褐色 1mm以下の砂粒を含む	口縁部 内面…ナナメハケ目 外面…ナデ 体部 内面…ヘリケズリ後ナデ 外面…平行タタキ後ナデ	二次焼成有
00061	218	壺	10.9	14.7	16.4		普通	外面 灰黄色，内面 淡褐色 2cm程度の砂粒を多く含む	口縁部 内面…ナデ 外面…ハケ目後ナデ 体部 内面…ヘラケズリ 外面…粗いハケ目後ナデ	煤多量に付着
00062	178	鉢	13.0		6.3	3.6	普通	内外面ともに褐色 1mm以下の砂粒(おもに石英粒と長石)を多く含む	内面…ハケ目後ヨコナデ 外面…ナデ	黒斑有
00063	216	壺	11.4	12.7	12.9		普通	内外面ともに灰橙色～白黄色 1mm程度の砂粒を多く含む	口縁部 内面…ヨコハケ目後ナデ 外面…ナナメハケ目後ナデ 体部 内面…ヘラケズリ 外面…ナナメハケ目後ナデ	煤付着
00064	256	台付鉢	12.9		10.3	7.0	普通	外面 灰褐色～明灰色 内面 灰褐色～明褐色 1mm以下の砂粒を含む	内面…ヘラミガキ，丁寧なナデ 外面…タテハケ目後ヘラミガキと丁寧なナデ	

遺物登録番号	報告書掲載番号	器種	法量				焼成	色調・胎土	調整	備考
			1	2	3	4				
00065	227	壺	20.05	43.6	48.7		良好	内外面ともに明白褐色 1mm程度の砂粒を少量含む	口縁部 内面…ナデ 外面…ハケ目後ナデ 体部 内面…ハケ目 外面…ハケ目、ナデ	黒斑有
00066	249	高坏			13.6 +α	14.15	良好	内外面ともに橙褐色 1.5mm以下の砂粒を含む	坏部 内面…ハケ目後ヘラミガキ 脚部 外面…ヘラミガキ 裾部 外面…タテハケ目後ヘラミガキ	脚部穿孔4ヶ所
00067	248	壺		15.6	8.7 +α		良好	外面 白褐色～黒褐色 内面 淡褐色～黒褐色 胎 良	頸部 内面…ヨコハケ目後ナデ 外面…ヨコハケ目 体部 内面…ナデ、ハケ目 外面…ヘラミガキ、ヘラケズリ	頸部内面に炭化物付着 煤付着
00068	229	甕	14.4	21.2	14.1 +α		やや良好	外面 橙褐色～白褐色、内面 白橙色 2mm程度の砂粒を少量含む	口縁部 内面…ハケ目後ヨコナデ 外面…ヨコハケ目後ヨコナデ 体部 内面…ヘラケズリ 外面…タテ後ナデ	煤付着
00069	264	甕			10.7 +α		良好	内外面ともに灰褐色 2mm以下の石英粒を含む	内面…ヘラケズリ、ハケ目後ナデ 外面…タテハケ目、粗いナデ	炭化物付着 二次焼成有 煤付着
00070	263	甕	16.7	21.4	15.9 +α		良好	外面 灰褐色、内面 灰褐色 2mm以下の砂粒を含む	口縁部 内外面…ヨコナデ 体部 内面…ヘラケズリ 外面…ヨコハケ目・ナナメハケ目後ナデ	黒斑有
00071	262	甕	15.9		7.0 −α		良好	外面 淡褐色～灰褐色、内面 明橙褐色 4mm以下の石英粒を含む	口縁部 内外面…ヨコハケ目後ヨコナデ 体部 内面…ヘラケズリ 外面…ハケ目後ヨコナデ	肩部に波状にハケ目有 煤付着
00072	269	甕	29.9		18.2 +α		良好	内外面ともに灰褐色 2mm以下の砂粒を含む	口縁部 内面…ヨコハケ目、指オサエ 外面…ヨコナデ、不整方向ハケ目	
00073	265	壺			12.7 +α	7.5	普通	外面 淡褐色～灰褐色、内面 明橙褐色 3mm程度の石英粒を多く含む	内外面…ナナメハケ目後ナデ	黒斑有
00074	207	高坏	19.6		4.4 +α		普通	内外面ともに白黄色 1～2mmの石英粒を少量含む	坏部 内面…ヨコハケ目後ヨコナデ 外面…ヨコハケ目後、丁寧なナデ	外面にヘラ描文有
00075	228	甕	17.6	27.0	18.2 +α		普通	外面 黄白色、内面 褐色 1mm程度の砂粒を含む	口縁部 内面…ヨコハケ目後ヨコナデ 外面…ヨコナデ 体部 内面…ヘラケズリ 外面…ハケ目後ナデ	煤付着
00076	199	高坏	20.2		5.4 +α		やや不良	内外面とも淡褐色～白橙色 2mm程 の石英粒をわずかに含む	内面…ヨコハケ目後、軽いナデ 外面…ナナメハケ目後ヨコナデ	
00077	198	高坏	17.7		5.9 −α		やや不良	内外面ともに白橙黄色 精 良	内外面…ヨコハケ目後ヨコナデ	黒斑有
00078	266	甕	15.2	24.2	21.3 +α		良好	内外面ともに灰褐色 1mm以下の白色粒子・雲母を含む	口縁部 内外面…ヨコハケ目、ナデ 体部 内面…ヘラケズリ後、丁寧なナデ 外面…平行タタキ後、軽いナデ	煤付着
00079	206	高坏	19.2		4.9 +α		良好	内外面ともに淡白橙色～橙褐色 1mm程度の砂粒を含む	坏部 内面…ヨコハケ目後ヨコナデ 外面…ナナメハケ目後ヨコナデ	黒斑有
00080	194	高坏			8.9 +α	14.65	良好	内外面ともに白灰褐色 精良 1mm程度の砂粒をわずかに含む	内面…ヨコハケ目後ナデ 外面…ナナメハケ目後ナデ	黒斑有
00081	267	甕		22.3	15.1 +α		良好	外面 白褐色～黒褐色、内面 明白橙色 2mm程の石英粒を含む	内面…ヘラケズリ後ナデ 外面…ハケ目後ナデ	5条の波状凹線有る。 煤付着
00082	254	鉢	23.0		9.8		良好	内外面ともに明白橙色 精良 1mm以下の砂粒を含む	内外面…ハケ目後ナデ、ヘラミガキ	黒斑有
00083	258	台付壺			16.3 +α	10.4	普通	外面 灰褐色～灰橙色 内面 白褐色～灰褐色 2～3mmの砂粒を含む	内面…ハケ目ナデ 外面…ハケ目後ナデ(一部タタキあり)	煤付着
00084	166	小型丸底壺			7.9	7.1 +α	やや良好	外面 乳白色～暗白橙色 内面 淡灰白色 良好 砂粒をわずかに含む	口縁部 内外面…ハケ目後ナデ 体部 内面…ヘラケズリ後、指オサエ 外面…不整方向ハケ目後ナデ	黒斑有
00085	165	小型丸底壺	7.2	8.2	5.2 −α		良好	内外面ともに暗灰色～黒灰色 白色微粒子をわずかに含む	口縁部 内外面…ヨコハケ目後ナデ 体部 内面…指オサエ後ナデ 外面…ナデ	
00086	238	手捏		7.1	6.5 +α	4.1	普通	内外面ともに白橙色 1～2mmの石英粒を含む		
00087	239	手捏	推定 7.0		5.8 +α	4.2	普通	外面 白黄褐色、内面 明橙色 2mm以下の砂粒を多く含む		歪みがはげしい
00088	156	小型丸底壺			6.9 +α		普通	外面 明黄橙色、内面 褐褐色 2mm程度の石英粒を含む	体部 内面…ヘラケズリ後ナデ 外面…ハケ目後ナデ	黒斑有 ケズリも無く、丁寧に仕上げてある
00089	182	鉢	推定 12.6		6.6		やや良好	外面 赤味をおびた白色 内面 白黄褐色 2mm以下の砂粒を多量に含む	内面…指オサエ、ナデ 外面…ヨコハケ目後ナデ	
00090	176	鉢	6.8		4.4		やや良好	内外面ともに乳白色 2～3mm程度の石英粒を少量含む	内面…ナデ 外面…ナデ(一部タタキ痕あり)	
00091	185	鉢	9.8		5.9		良好	外面 淡褐色～明橙色、 内面 淡褐色～橙褐色 1mm以下の砂粒を含む	内面…ナデ後ヘラミガキ 外面…ハケ目後ヘラミガキ	黒斑有
00092	236	手捏			最大高 3.2	4.3	普通	内外面ともに白黄色 1mm以下の白色粒子を含む		
00093	237	手捏	4.3		4.5	2.3	やや良好	外 明灰色～白橙色、内 明白橙色 微細な白色粒子と雲母を含む		
00094	177	鉢	13.6		6.4	4.8	良好	内外面ともに暗褐色 1mm程度の石英・白色粒子を少量含む	内面…ヘラケズリ後、丁寧なナデ 外面…ナナメハケ目後ナデ	
00095	181	鉢	14.4		5.9		良好	外面 橙色～橙褐色 内面 白橙色～明橙色 1mm程の白色粒子・赤色粒子を含む	内面…丁寧なヨコナデ 外面…ヨコハケ目、ヘラケズリ、ナデ	
00096	183	鉢	13.6		6.2		やや良好	外面 乳白色 内面 やや赤味をおびた乳白色 1～2mmの石英粒を多量に含む	内面…ナデ、ヘラケズリ 外面…ヨコハケ目後ナデ	煤付着

遺物登録番号	報告書掲載番号	器種	法量 1	法量 2	法量 3	法量 4	焼成	色調・胎土	調整		備考
00097	180	鉢	13.0		5.8		普通	内外面ともに白褐色 1mm以下の白色粒子を含む		内面…ナデ 外面…ヘラケズリ後ナデ	
00098	184	鉢	14.2		4.8 +α		普通	外面 淡褐色、内面 白褐色 1mm程度の白色粒子・赤色粒子を含む		内面…ヘラケズリ、ナデ 外面…ヘラケズリ	
00099	231	器台	13.0		18.6	13.6	普通	内外面ともに黄味がかった淡褐色 2～3mm程度の砂粒を多量に含む		内面…ナデ、ハケ目 外面…ハケ目後ナデ	黒斑有
00100	217	壺		14.8	12.0 +α		やや不良	外面 白黄色～淡褐色、内面 乳白色 2mm程度の砂粒を含む		内面…ナデ 外面…ヨコ、ナナメハケ目後ナデ	黒斑有
00275	278	坏身	10.6		4.1		良好	内面 灰色～淡青灰色 外面 灰色～暗灰色 1mm以下の長石を少し含む		内面…回転ナデ 外面…回転ナデ、底部に回転ヘラケズリあり	須恵器、灰かぶり有 内面にタタキあて具痕有
00276	277	坏蓋			2.5 +α		良好	内面 明るい青灰色、外面 青灰色 2mm以下の石英粒を含む		内面…回転ナデ 外面…回転ナデ、回転ヘラケズリ	須恵器 灰かぶり有
00277	245	甕					良好	内面 暗青灰色～灰色、外面 暗青灰色 精良		内外面…ヨコナデ	須恵器
00278	242	甕					良好	内面 明灰色、少し青味帯びる 外面 濃暗青灰色、黒っぽい 精良 0.5mm以下の長石を含む		内面…青海波タタキ、ナデ消し 外面…カキ目、タテ位の平行タタキ	須恵器
00279	243	甕					良好	内面 明青灰色、外面 暗青灰色 密ごくまれに1cm程度の石英粒が入る		内面…青海波タタキ後ナデ消し 外面…丁寧なナデ消し	須恵器
00280	244	甕					良好	内面 明灰色、外面 灰白色 1mm以下の長石をやや含む		内面…丁寧なナデ消し 外面…タテ位の平行タタキ	須恵器 灰かぶり有
00281	241	鳥形土製品					普通	内外面ともに灰色～黒色 1cm程度の砂粒を多く含む		手捏	黒斑有
00282	240	手捏	4.2		4.4	3.2	普通	内面 暗灰色～橙灰色、外面 暗褐色 0.5mm以下の白色粒子を含む			黒斑有
00283	232	手捏	3.5		2.1	2.4	普通	内外面ともに明褐色～白黄色 0.2mm以下の白色粒・石英粒を少し含む			
00284	131	甕					良好	内面 明灰褐色、外面 明灰褐色 3cm程度の割石粒を多く含む		内面…ナデ、わずかにハケ目痕有 外面…ハケ目後ナデ	
00285	135	甕					普通	内面 灰褐色、外面 黒灰色 2mm以下の砂と粒を多く含む		内面…指オサエ 外面…ナデ（刻み目は棒状工具により下から口縁側に押し上げる）	
00290	221	甕	14.0		8.0 +α		やや不良	内面 明橙黄色、外面 黄白色 2mm以下の砂粒が多い		内面…指オサエ後ナデ 外面…ハケ目後ナデ	黒斑有
00291	223	甕	17.0		5.0 +α		良好	内外面ともにくすんだ白褐色 1.5mm以下の石英粒を含む		内面…指オサエ後ヨコナデ、ヘラケズリ 外面…丁寧なヨコナデ	
00292	222	甕	16.0		5.0 +α		普通	内面 黒褐色、外面 白褐色 3mm以下の砂粒を含む		内面…ヘラケズリ後、指オサエ、ナデ 外面…口縁部は指オサエ後ヨコナデ 平行タタキ後ナデ	黒斑有
00293	293	甕	14.0	17.4	9.0 −α		良好	内面 白灰色、外面 白褐色 0.5mm以下の砂粒を含む		内面…ヘラケズリ（一部ハケ目後ナデ） 外面…ハケ目	煤付着
00294	224	甕	16.2	26.4	14.0 α		やや良好	内面 乳白褐色、外面 乳白褐色 3mm以下の石英粒を多く含む		内面…指オサエ後ナデ、ヘラケズリ 外面…タテハケ目後ヨコハケ目	煤付着
00295	220	甕	13.6	21.6	20.5 −α		普通	内面 乳白灰色、外面 白褐色 5mm以下の砂粒を含む	口縁部 体部	内面…ヨコハケ目後ヨコナデ 外面…ハケ目後ヨコナデ 内面…ヘラケズリ、ナデ 外面…細いハケ目	煤付着
00296	209	高坏	18.2		7.0 +α		良好	内面 白橙褐色、外面 灰褐色 1.5mm以下の砂粒を多く含む		内面…ハケ目後ナデ 外面…ハケ目後ヨコナデ	黒斑有
00297	175	壺	9.6		4.0 +α		良好	内外面ともに明橙色～白褐色 精良 白色微粒子を含む		内面…丁寧なヨコナデ 外面…ハケ目後、丁寧なヨコナデ	黒斑有
00299		高坏			6.0 +α	9.2	普通	内外面ともに明橙褐色 1mm以下の白色粒子を含む		内面…ヘラケズリ後ナデ 外面…指オサエ、ナデ（脚部はヨコナデ）	黒斑有
00300	154	小型丸底壺	6.5	7.5	8.0		良好	内面 灰黄橙色、外面 灰黄色 1mm以下の砂粒を含む	口縁部 体部	内外面…指オサエ、ハケ目、ヨコナデ 内面…ナデ後指オサエ 外面…ハケ目、底部にヘラケズリ	
00301	179	鉢	13.7	4.2	6.4		不良	内外面ともに黄褐色 0.5mm以下の白色粒子を含む		内面…ナデ、指オサエ、一部ハケ目有 外面…ナデ、指オサエ、底部ナデ	
00302	157	小型丸底壺	7.9	8.2	8.8 +α		不良	内外面ともに灰黄橙色 3mm以下の砂粒を含む		内面…指オサエ、ヨコナデ 外面…ヨコナデ、ヘラケズリ	黒斑有
00303	150	小型丸底壺	8.2	9.2	9.6		普通	内面 灰白色、外面 明灰色 1mm以下の砂粒を含む	口縁部 体部	内面…ヨコハケ目、指オサエ 外面…ナナメハケ目後ヨコナデ 内面…ナデ 外面…ハケ目後ナデ	黒斑有
00304	162	小型丸底壺	6.6 +α	7.0	7.2 +α	3.5	不良	内面 灰白色、外面 淡白黄色 1mm以下の赤色粒子を含む		内面…ナデ 外面…調整は不明	
00305	149	小型丸底壺	9.4	9.5	9.7		普通	内面 赤褐色、外面 明黄褐色 3mm以下の白色粒子を含む	口縁部 体部	内面…ナナメハケ目後ナデ 外面…ヨコハケ目後ナデ 内面…ナデ、ヘラケズリ 外面…ハケ目後ナデ	
00306	152	小型丸底壺	7.4 −α	9.6	6.2 +α		やや良好	内面 暗白黄色 外面 淡橙色 微砂粒を含む		内面…ナデ、ヘラケズリ、口縁はヨコナデ 外面…不整方向ハケ目、ヨコナデ	
00307	161	小型丸底壺	7.2 −α	9.1	8.0 +α		普通	内面 灰褐色、外面 黄橙色 5mm以下の砂粒を含む	口縁部 体部	内面…ナナメハケ目後ナデ 外面…ナデ 内面…ヘラケズリ、指オサエ 外面…ナナメハケ目後ナデ	

6．第２号溝出土土器（Fig.58）

第２号溝は、１・３号溝に比べると出土遺物は極端に少ない。

270・271は広口壺である。胴部は強く張り、球形または楕円形をなす。口縁は270が直立し、271はやや外に開く。口唇部は丸く仕上げる。頸部内面は２点とも明瞭な稜を有する。272は右上りの平行タタキを施す甕である。体部下半はタタキ後にヘラケズリをおこなう。ほぼ球形の体部から大きく広く口縁を持つ。275は大型の浅い鉢である。丸底で内湾しつつ開く。口縁端部は外向きの平坦面を持つ。端面には凹線ようの窪みが巡る。274は「ハ」の字に開く高坏の脚部である。脚端を欠くが、裾部で大きく広がり端部で接地し、ふんばる形になるものと思われる。276は手捏ね土器である。

273は二重口縁を有する鉢形土器である。全体に薄く、丁寧に仕上げてある。底部は丸底をなし、最大径は胴部上半にある。強くしまった頸部から外反しつつ屈曲部にいたる。屈曲部は明瞭な稜をなす。屈曲部から直線的に立ちあがり、口縁端近くで外反する。口唇部は外側に狭い平坦面を有する。穿孔は、ナデの状態から焼成前のものと考えられる。初期須恵器を模したものであろう。

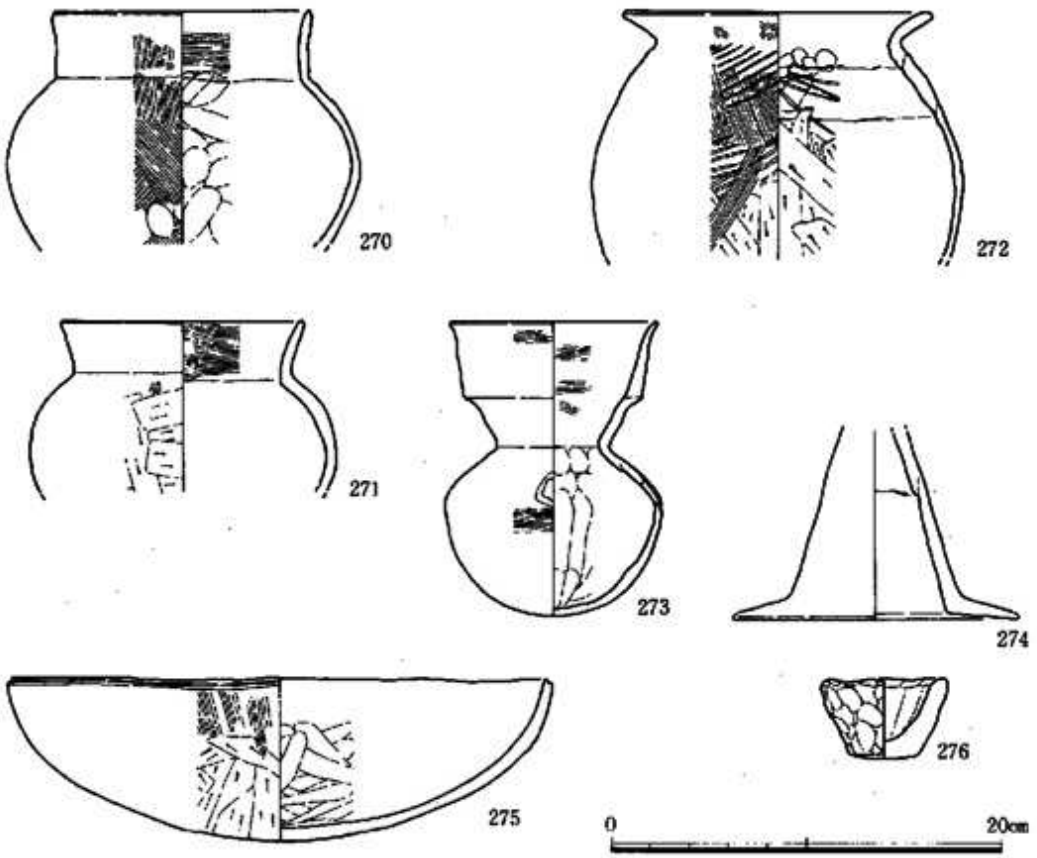


Fig.58　第２号溝出土土器実測図

Tab.5 第２号溝出土土器一覧表

遺物登録番号	報告書掲載番号	器種	法量 1	法量 2	法量 3	法量 4	成形	色調・胎土	調整	備考
00107	273	鍋形土器	10.7	11.2	15.2		普通	内面 明橙色～暗灰色 外面 白橙色～明灰色 C.5mm程度の白色粒子・石英粒を多く含む	口縁部 内面…ヨコハケ目後ナデ 外面…ヨコハケ目後ヨコナデ 体部 内面…ナナナデ（穴の付近だけ指オサエ有） 外面…ヨコハケ目後ナデ	
00167	271	壺	12.5		8.9 +α		普通	内外面ともに淡白色やや黄味を帯びる 胎土 白色微粒・白雲母の微粒を含む	口縁部 内面…ハケ目後、軽いナデ 外面…ヨコナデ 体部 内面…丁寧なナデ 外面…ハケ目、軽いヘラケズリ後ナデ	
00183	276	手捏	6.6		4.2		普通	内外面ともに白灰褐色 2mm以下の砂粒を含む		
00214		壺	37.0		4.3 +α		普通	内外面ともに白黄色 内面はやや灰味を帯びる 1mm以下の砂粒を含む	内外面…ヨコナデ	SD-3
00270	270	壺	13.1	18.2	12.0 +α		良好	内面 赤白灰色 外面 明橙灰色 2.5mm以下の砂粒を含む	口縁部 内面…ヨコハケ目後ナデ 外面…ナデハケ目後ヨコナデ 体部 内面…部オサエ後ナデ 外面…ナデ、ナデメハケ目	
00272	272	壺	16.0	19.2	12.5 +α		良好	内面 白灰褐色 外面 白灰橙色 胎土 2mm程度の長石を含む	口縁部 内面…ヨコナデ 外面…ハケ目後ヨコナデ 体部 内面…ヘラケズリ 外面…下行タタキ後ハケ目、ヘラケズリ	煤付着
00273	275	鉢	27.4		8.4		やや良好	内外面ともに白灰褐色 胎土 2～3mmの石英粒をわずかに含む	内面…ナデ 外面…ナデハケ目後ヘラケズリ	黒斑有
00274	144	壺			3.2 +α	7.8	普通	内外面ともに暗灰色 1～3mm程度の石英粒を多く含む	内外面…指オサエ後ナデ	
00298	274	高坏			9.8 +α	14.8	普通	内外面ともに白黄橙色 良好	内面…ヘラケズリ後ナデ 外面…ナデ	

7．第２号溝出土木器（Fig.53・59・60）

第２号溝からは、農具・工具・容器・加工材・板材・建築材・流杭などが出土した。杭を除いて、板材・建築材の少量が図化できなかった。今後、機会をみつけて報告することにする。

農具としては、鍬類が３点（755～757）、鍬類柄が１点（758）、鋤が１点（759）、大足が１点（761）出土した。鍬類は、いずれもカシの柾目取り材を用材とした方形柄孔をもつ型で、755が二又鍬、他は三又鍬である。758はカシの柾目取り材を用材とし、鍬類、鍬類組合わせ着装具との組合わせ部を造り出している。759はカシの柾目取り材を用材とした鋤で、肩にコの字の張り出し部をもっている。一木造りの鋤と考えられる。761はカシの柾目取り材を用材として、両端に枠組合わせのためのコの字の造り出し部をもっている。

工具としては、槌が１点（760）出土した。カシの芯持ち材を用材として、槌部断面は方形に整形しているが、使用痕はみられない。

汁器類としては、把手付き容器１点（763）が出土した。芯を刳り貫いて容器部を造り出し、幅広の鍔状の把手をもっている。

762は芯持ち材を用材として、上下を切断し、面取り加工を加えている。未製品か。

764は、第１号溝上層出土の594と同じ型の板材で、板目に近いナナメ取り材を用材としている。他に板材５点（765～768・770）と建築材２点（708・769）を図化した。

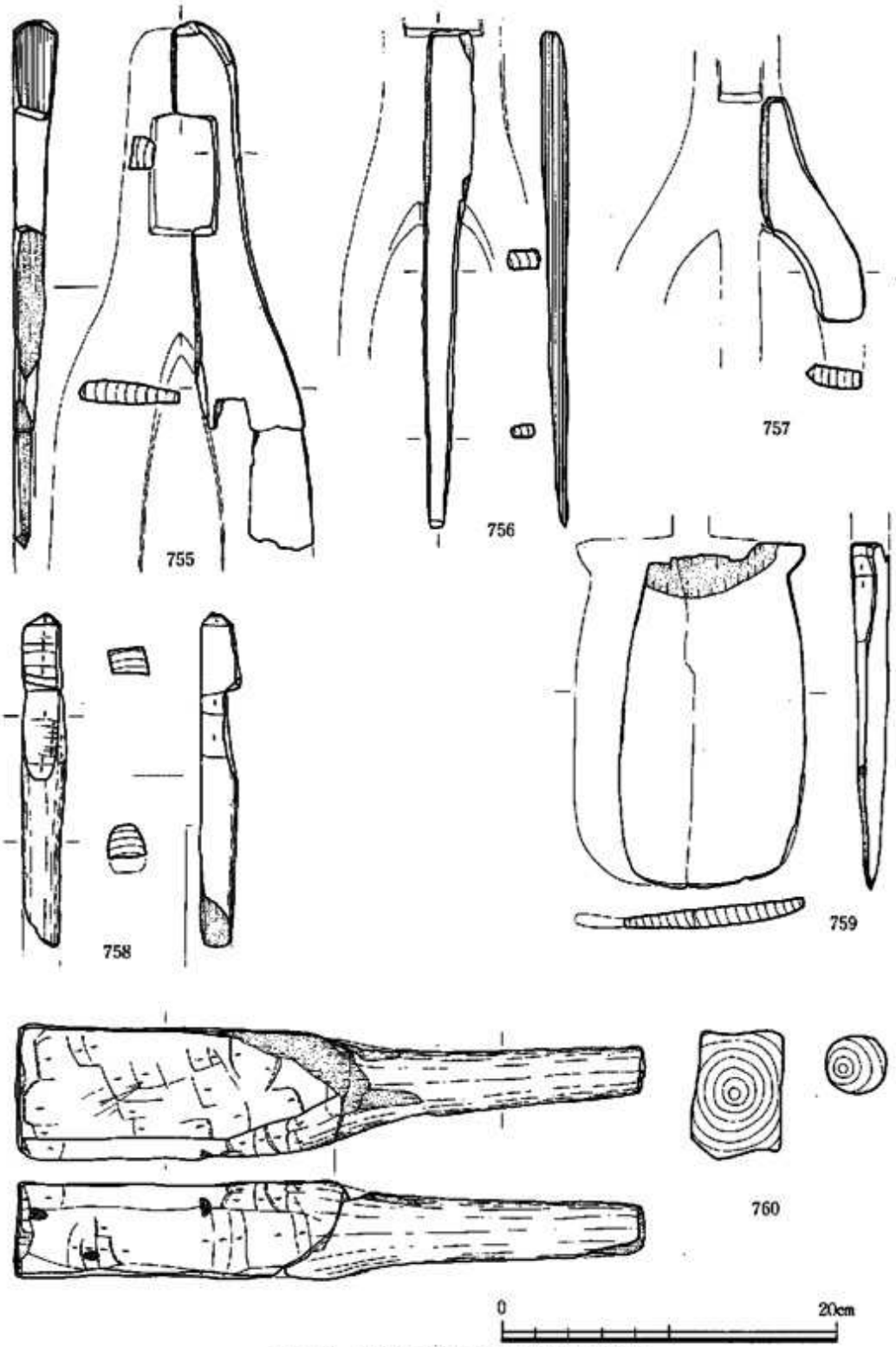


Fig.59　第２号溝出土木製農具実測図

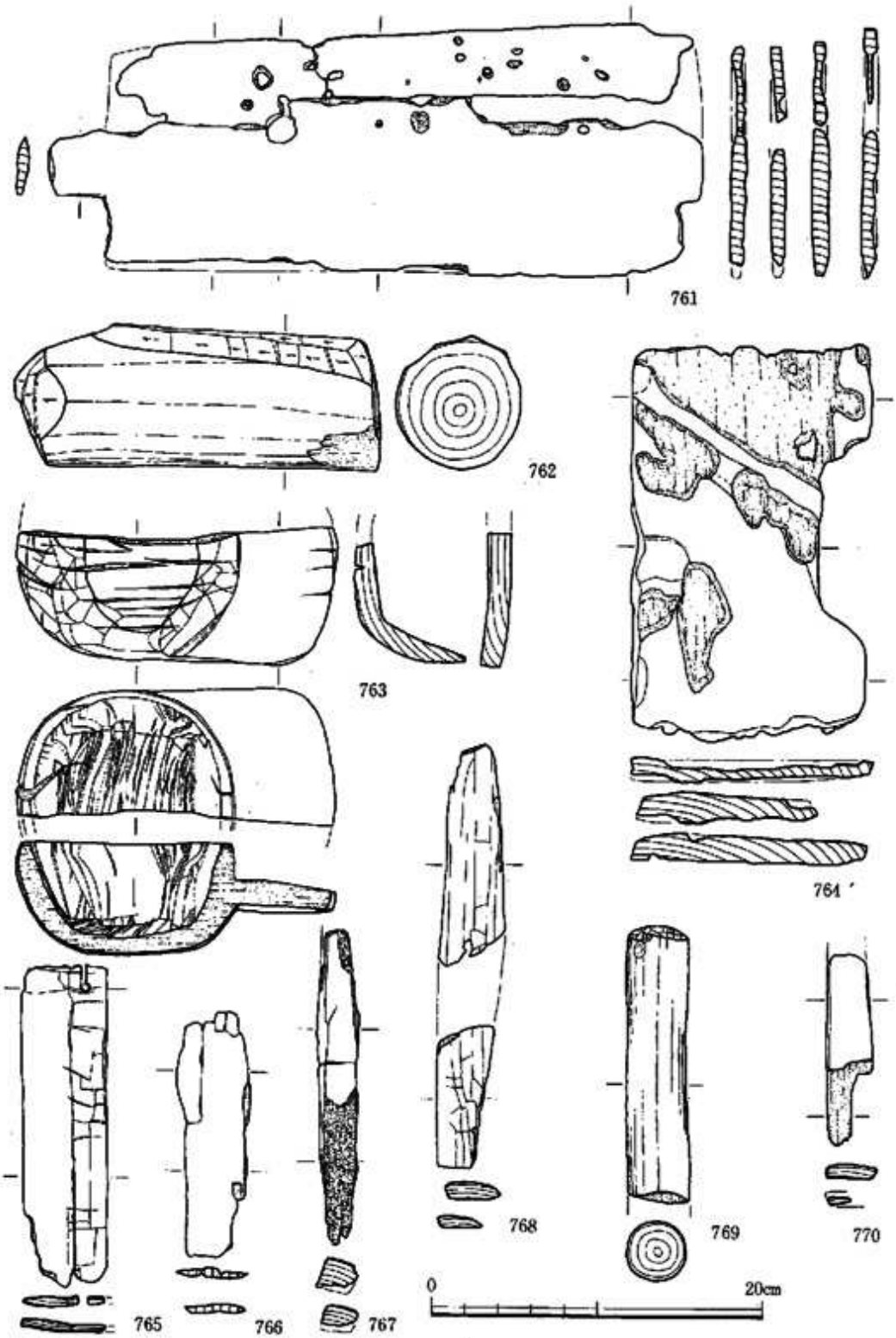


Fig.60　第２号溝出土木製品実測図

Tab.6　第２号溝出土木器一覧表

遺物登録番号	報告書掲載番号	図版	器種	樹種	木取り	法量 (cm) A	B 1	B 2	C	D	E	F 1	F 2	G 1	G 2	H	I	J	K 1	K 2	L	M	N	O	備考
10053	Fig.59 759	PL.15	鍬	カシ	板 目	30.6+α	11.04+α		2.2							30.6+α									破損後、柄側を再加工している 柄部にコの字の造り出し部があり、一木造りか
10054	Fig.59 763	PL.16	把手付容器		芯持ち	19.05	8.25+α		6.5	5.7	12.5	11.3		6.1		5.5	6.8	8.05+α			6.1		1.4	1.5	
10089	Fig.59 758	PL.15	鍬鋤柄	カシ	(柾目)	19.85+α	2.65+α		2.05+α		2.4										2.2				
10090	Fig.56 756	PL.15	三又鍬	カシ	柾 目	29.7+α	2.3		1.6	0.4	2.5			8.8		14.4		135°							基部から中央刃のみ遺存
10091	Fig.60 762	PL.15	未製品		芯持ち	22.05	8.6		7.55																丸太の側面を切断し、切断面は割り加工痕が残る
10109	Fig.58 755	PL.15	二又鍬	カシ	柾 目	31.3+α	17.0		2.5	7.2	2.45	12.7		9.0		9.5	20.9	110°	110°						
10110			割 材	カシ	柾 目	93.8+α	9.3		2.85																
10111	Fig.59 757	PL.15	二又鍬	カシ	柾 目	13.45+α	6.35		3.2					8.3+α		5.4+α									
10134	Fig.60 767	PL.15	角 材		板 目	19.5+α	2.55		1.75+α																火を受け炭化している。
10135	Fig.60 766	PL.15	板 材		柾 目	14.9	3.4		0.65																
10136	Fig.60 764	PL.15	板 材	スギ	樹皮に近いナナメ	24.1	14.6		1.9																横穴材 ワイド継時、要目出は樹皮に近いナナメ 一端に「コの字状の造り出しあり 1号溝出土材4と同型のもの
10140	Fig.59 760	PL.15	鍬	カシ	芯持ち	27.4	8.1			7.7				13.05		24.35	2.7				3.6 x3.45				柄部断面は方形をなし、柄部表面に刃物痕があり、工作台か
10142	Fig.60 761		人 足	カシ	柾 目	39.3	15.15		1.13		35.95	3.35	1.5	4.1	9.6										
10143	Fig.60 765		転用材	スギ	板 目	19.4	5.25		0.6																
10145	Fig.53 708		建築材		芯持ち	40.2+α	2.2×2.25																		樹種等は割り加工を加えているが、ふれていない。一部に割り加工がみられるほか、枝部を除去している
10151	Fig.60 770		板 材	スギ	板 目	11.5+α	2.8		0.9																
10152	Fig.60 768		加工材		板 目	13.3+6.9+α	4.0		1.1																
10272	Fig.60 759		建築材	シイ?	芯持ち	16.7	3.8		3.6																端部は面取り加工を加えている

8．その他の古墳時代遺物（Fig.61）

277は須恵器坏蓋である。頂部の破片である。外面の回転ヘラケズリの範囲は狭く、肩部には浅い凹線が残る。内面は回転ナデ。灰かぶりが一部に認められる。278は須恵器坏身である。受け部径13.0cmである。かえり部は内傾し、端部内側には沈線が巡る。底部の回転ヘラケズリは狭い。内部底面には同心円タタキの痕跡が残る。外面灰かぶりである。２点ともⅢＡ期に位置付けられよう。

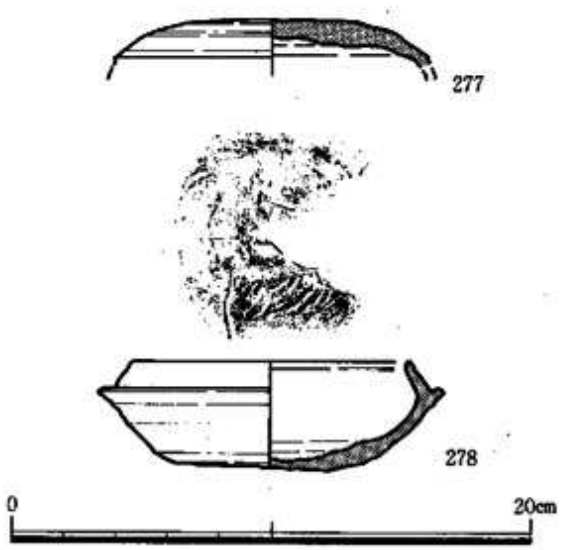


Fig.61　その他の古墳時代土器実測図

9．その他の遺溝と出土遺物

本調査地点では、第１～３号溝のほかに３条の溝（ＳＤ－４～６）、土坑１基（ＳＫ－７）が検出された。第４・５号溝は、現代の地割に沿った幅60cm前後、深さ10cm前後の溝である。この２条の溝は、60cm～１ｍの間隔をおいて平行して走っており、須恵器・土師器の磨耗した細片と染付のある磁器が出土しており、近世以降の畦畔の側溝と考えられる。第６号溝は、第１－３号溝に平行して北西に走る幅50cm前後、深さ20cm前後の断面逆台形の溝である。この溝からは遺物は出土しなかったが、茶褐色の粘質土からシルトを埋土としており、第２号溝よりは新しく、第４・５号溝よりは古い溝である。中世か。第７号土坑は、径２ｍ前後の平面円形を呈し、深さ50cm前後の皿状をなす土坑である。この土坑は、青灰色粘質土を基盤として、灰色粗砂から細砂を覆土とし、６世紀後半の須恵器片が出土した。

本調査地点では、第３号溝から先土器時代の台形石器１点、縄文時代の土器片３点（Fig.62）、石鏃２点が出土した。台形石器は、黒曜石製の寸づまりの剥片を素材とし、剥片基部・先端を切断し、切断面に刃潰し加工を加え、台形に整形している。280は、棒状工具による連続刺突紋が施され、器表は灰黒色を呈している。縄文時代前期の轟式土器と考えられる。279・281は器表面が磨耗しているが、後者は、沈線の特徴から後期の北久根式土器と考えられる。279は、後期後半から晩期の深鉢と考えられる。

Fig.62　本遺跡出土縄文時代土器拓影図

Fig.63　本遺跡出土土器編年図

第6章　結章

1．本遺跡出土土器について

古式土師器の編年的研究は、地域の編年の確立から平野ごとの変化を追求する段階に至っている。福岡平野では、那珂川流域の春日市、那珂川町周辺での進展はめざましく、弥生時代終末から須恵器出現までの編年もほぼ完成している[1]。一方、御笠川中流域では積極的になされていない[2]。本地点の分類にあたっては、那珂川流域の成果を援用して、各溝の時期幅を考えてみたい。

Ⅰ期　第3号溝の土器群が相当する。器種構成は甕・壺・鉢である。高坏など器種の欠落がみられる。57・59は、内外面に細いハケ目を施し「く」の字状の口縁を持つ在地系の甕である。53・54は、外面ハケ目、内面ヘラケズリで、尖った丸底を持つ。口唇部を抓み上げるものと、丸くおさめるものとがある。壺は、弥生土器からの系譜を持つ長頸壺（26）があり、胴部に突帯を持つ。短頸壺（36）は、球胴に立ちぎみに外反する口縁を有す。26とともに、外面ヘラミガキを施す。広口壺（31）は、偏球状の胴部に直立する口縁を持つ。21は外来系の二重口縁壺である。擬口縁は外面では強く稜をなすが、内面は緩やかに屈曲する。鉢は台を持ち口縁近くで外反するもの（111）と、大形で器壁が厚く口唇部が直立するもの（101）、小形で浅く丸底から口縁まで内湾して広がるもの（87）がある。小形のものは、柏田遺跡[3]の7号住居跡のものと共通する手捏ねとも思えるナデがおこなわれる。

Ⅱ期　第1号溝下層出土の土器群が相当する。器種構成は甕・壺・高坏・鉢である。甕は在地系の底部片資料（264）である。尖りぎみの丸底を持ち、胴部に細かいハケ目、底部付近には粗いハケ目を使い分ける。262・263は外来系でⅠ期に比べ球胴化が進む。口唇は内側上方へ抓み上げる。調整はⅠ期の手法を受け継ぐが、外面肩部への波状沈線、口縁内部へのハケ目など新しい手法も現れる。地余遺跡[4]3号住居跡に同様なものがみられる。壺は、肩部にヘラミガキを持つ長頸壺（248）、中国から山陰地方に出自が想定される波状文を持つ二重口縁壺（268）がある。高坏（249）も在地のものに系譜を求められない。内外面とも細かいヘラミガキを施している。鉢はⅠ期と近接した時期に考えられる252・254がある。Ⅰ期に比べ調整が異なるが、形態は口縁がわずかに開いているだけである。253はやや古相を示すが、255とともに大きな形態変化をせずに存続するものと思われる。その他、特殊なものとして脚台付の片口を持つ鉢（257）が挙げられる。個体数としての外来系と在地系の土器比率は不明であるが、外来系土器が目立ってくるのは確実である。

Ⅲ期　第1号溝上層と第2号溝出土の土器群が相当する。器種は、甕・壺・小型丸底壺・高

坏・鉢・手捏ね・鼈形土器、須恵器の甕が確認できる。時期幅は広く２期に細分可能であろう。甕（220・228）は球胴化が進む。口縁も立ちぎみになり「く」の字状を示す。調整はII期を受け継ぎ外面ハケ目、内面ヘラケズリであるが、ハケ目が粗くなり口縁部内面へのハケ目が定着する。小形の壺（216・218）も同様な傾向を示し口唇部は上方へ尖る。小型丸底壺（155・160・169）は粗雑で量産化が進んだ段階のものであろう。160はやや古相を示す。二重口縁壺は退化する一方、別系譜のもの（227）も存在する。172はやや特殊で丸底を持つ小形の二重口縁壺である。類例として板付遺跡Ｄ－10ａ地点[5]のＳＤ－１、門田遺跡辻田地区[6]の第６号住居跡にみられる。本地点のものは精製であり、器壁の極端な薄さが目立つ。273は鼈の形態を示し、初期須恵器を模したものと考えられる。また、172・175との関連も考えられる。高坏は、多数の個体が識別可能であるが、完形復元できるものは１個体である。口径が15cmと18cm程度のものに分かれる。いずれも、坏屈曲部に明瞭な稜を持ち口縁に向かい直線的に開く古相（200・215）と、屈曲部を失い内湾する傾向の新相（205・210）がある。脚はラッパ状に開くもの（200）と「ハ」の字状を示すもの（192・274）が同時期に存在する。鉢は丸底化が定着し口縁は内湾する傾向を示す。小形のものは深くなる傾向がある。須恵器はいずれも破片資料であるが、調整の状態から陶邑Ｉ型式相当である。

以上のように、遺物を遺溝の層位をもとにして分類をおこなった。Ｉ期は、布留式土器を新古に分けると、古相のものを最新のものとする。今光遺跡[7]のIII期の１に相当すると考えられる。

II期は、布留式の新相にあたり、畿内地域だけでなく各地方の特徴を持つ土器の流入が目立つようになる[8]。これは、今光遺跡III期において在地系土器の減少がみられるのに一致する。また、松木遺跡[9]では当該期の遺物は欠落していることも合わせて、何らかの地域的変動が起こったことが窺える。Ｉ期とII期の時期差は、外来系の甕では明瞭であるが、鉢はほとんど同一時期とも考えられる形態を示す。

III期では、甕は布留式的な要素を残すが、胴部のハケ目は粗くなり口縁の抓み上げも消えていく。小型丸底壺の出現は、III期より溯ることは確実であるが、点数の多さは他時期を圧倒している。この傾向は他遺跡でも認められ、粗雑化することから、量産化が進んだと考えられている。高坏もIII期において急増する。これらの定形化した高坏はII期に系譜を求めるのはむずかしい。しかし、本地点でII期まで高坏がほとんど出土せず、III期になり急増するのは、小型丸底壺の出土傾向と一致する。本地点では、この２器種を何らかの祭儀に多量に使用したものと考えたい。

III期で問題となるのは鼈形土器である。類例として、比恵遺跡６次調査地点[10]の第１号古墳周溝内出土のもの（Ａ）と松木遺跡祭祀遺構出土のもの（Ｂ）がある。Ａは種々の時期幅を持つ土器と共に出土しているため時期決定はできないが、Ｂは祭祀遺構の一括として捉えられる。

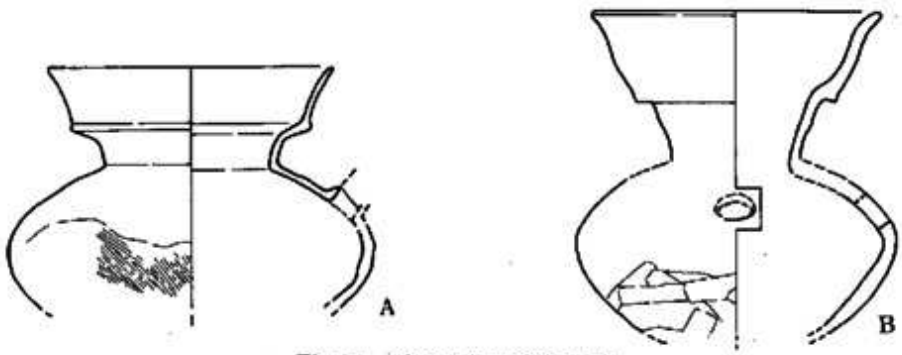


Fig.64　越形土師器参考資料

共伴するものに、池の上Ⅰ式相当の広口壺がある。形態的にA、Bを同系譜と考えて新旧を述べるのは困難であり、別系譜としたい。273は、調整技法はAに通じるが、形態はBの系譜に当てはまりそうである。いずれにしてもA、Bより後出するものと考えられる。畿内では須恵器模倣土師器が知られており、また近年では、土師器を模したと思われる須恵器も出土している。[3][4] このように須恵器生産の初期において、土師器と須恵器の器形の交錯が認知されつつある。福岡地域では出土例も少なく、どのような形で出現したか不明であるが、今後の資料の増加に期待し、産地同定、工人の動向などとともに、出現の背景を探る必要を感じる。

各期についての解説と若干の問題点を示した。最後に、各溝についての時期幅を述べておきたい。第3号溝は、壁に包含層を持ち、他時期の遺物の流入は避けられない。土器は縄文時代の3点に始まり、弥生時代後期から終末に急増している。これより、第3号溝の開始期を弥生時代後期と考えたい。終焉は、布留式の古相であろう。

第1号溝は、上層、下層の文化層に区分できる。下層は第3号溝が埋没してほどなく形成されたと考えられ、時期は布留式の新相があたえられよう。そして、上層は陶邑Ⅰ型式相当と考えられる。

第2号溝は、遺物量が極端に少なく、第1号溝上層と明らかな時期差は見い出せない。これも第3号と1号溝下層との関係と同様、埋没後直ちに掘削されたと考えられる。この埋没と掘削の繰り返しは、この周辺に継続的に水路が必要であったことを思わせる。

註

(1) ①井上裕弘編「山陽新幹線関係埋蔵文化財調査報告」第3集　1977　福岡県教育委員会
②小池史哲編「山陽新幹線関係埋蔵文化財調査報告」第4集　1977　福岡県教育委員会
③井上裕弘編「山陽新幹線関係埋蔵文化財調査報告」第7集　1978　福岡県教育委員会
④佐々木隆彦編「今光遺跡・地余遺跡」　1980　東急不動産株式会社
⑤沢田康夫　佐々木隆彦編「松木遺跡Ⅰ」　1984　那珂川町教育委員会
(2) 時期が降ると御笠川東岸の編年が行なわれている。
酒井仁夫編「九州縦貫自動車道関係埋蔵文化財調査報告ⅩⅦ」　1977　福岡県教育委員会
(3) (1)－②に同じ
(4) (1)－④に同じ

(5) 横山邦継　柳沢一男編「板付周辺遺跡調査報告書(6)」　1980　福岡市教育委員会
(6) (1)－③に同じ
(7) (1)－④に同じ
(8) 田崎博之「古墳時代初頭前後の筑前地方」「史淵」第120輯　1983が参考となった。
(9) (1)－⑤に同じ
(10) 横山邦継編「比恵遺跡－第6次調査・遺物編－」　1986　福岡市教育委員会
(11) 村上年生他「小阪遺跡（その3）－調査の概要－」　1987　大阪府教育委員会、(財)大阪文化財センター

2．出土木器について（Fig.65・66）

本調査地点では、弥生時代終末期の農具2点、汁器類1点と柱材などの建築材が第3号溝から、5世紀前半から中頃の農具37点、工具18点、紡織具3点、儀器4点、武器3点、汁器類2点と板材・角材・ねずみ返しなどの建築材・削り屑などが第1号溝上層・第2号溝から出土した。本調査地点検出の第1号溝上層・第2号溝の延長部と考えられる高畑遺跡10次調査地点の第26号溝からは、農具56点・工具7点・紡織具1点と柄類などが出土している。第4・7次調査第1号溝からは、農具・工具・紡織具・汁器類・儀器・建築材などが出土している。以上のように本遺跡では、弥生時代終末期と5世紀前半から中頃と、二時期の農具を主とした木器が出土している。ここでは、出土木製農具について、北部九州での各時期の様相についてみていくことにする。

本地域を中心とする北部九州（以下、本地域という）では、板付遺跡・唐津市菜畑遺跡などで、縄文時代終末期の突帯文土器期に水稲耕作が開始されており、同時期から農具が出土している。農具は、起耕具、整地具、収穫、脱穀具、補助具に大別できる。起耕具としては、鍬類・鋤類とナスビ形木製品類がある。起耕具のなかで最も出土量が多いのが鍬類で、鋤類の出土量は、各時期の低湿地遺跡で

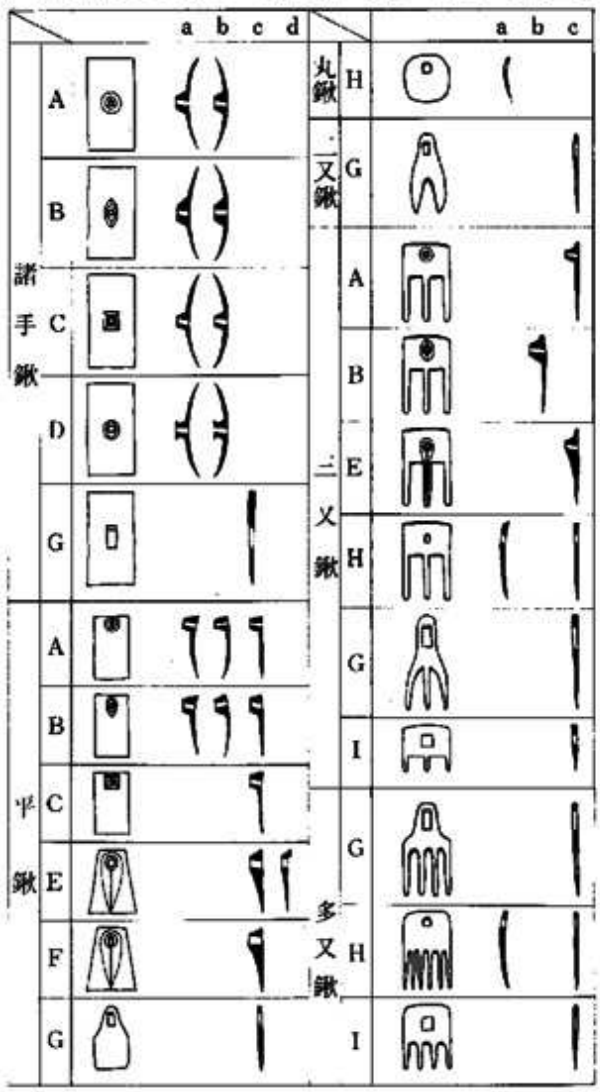


Fig.65　鍬類形態分類

の出土量をみる限り10%以下である。農具の総出土量からみても鍬類は、他を凌駕している。鍬類は、形状によって、諸手鍬・平鍬・丸鍬・二又鍬・三又鍬・多又鍬があり、柄孔の形状から9型に細分できる（Fig.65）が、本地域では丸鍬の出土例はない。鋤類は、一木造り鋤と柄を組合わせる組合わせ式鋤に大別でき、刃部形状から、丸みをもったり平になっているものと、三又などフォーク状になるものに細分できる。ナスビ形木製品類は、組合わせのためのナスビの等状の造り出し部をもつものともたないものに大別でき、刃部の形状から、丸みをもったり平となるもの、二又となるもの、三又をなすものに細分できるが、二又のナスビ形木製品は本地域にはない。整地具は、刃部が平になる杁、又状になる耙、組合わせ刃をもつ代掻き（馬鍬）がある。収穫具としては、杵類・臼・穂摘具柄・一部の槌類などがある。補助具としては、大足・田下駄・槽・一部の槌類などが考えられる。

突帯文土器期から弥生時代前期前半の農具は、板付・鶴町・拾六町ツイジ・菜畑・柏崎田島遺跡から出土している。起耕具としては、諸手鍬のAa型・Ab型があり、整地具としては丸柄孔をもつ杁があり、収穫具として竪杵、補助具として槽・槌がある。起耕具・整地具は、クヌギ・カシなどの柾目取り材を用材としている。竪杵は、カシなどの割材を用材として、握部にそろばん玉状の造り出し部をもっている。

弥生時代前期後半から中期前半の農具は、三筑・那珂君休・比恵・四箇・拾六町ツイジ遺跡などで出土している。起耕具としては、諸手鍬のA・C・D型、平鍬A型、三又鍬・多又鍬のA・H型、組合わせ式鋤・一木造り鋤があり、整地具として杁、収穫具が竪杵、補助具として槽・槌がある。この時期になると三又鍬が出現し、諸手鍬のAb型がなくなる。竪杵は芯持ち材を用材とするようになり、中期前半になると割材を用材とするものがなくなる。

弥生時代中期後半から後期前半の農具は、板付・那珂君休・比恵・田村・拾六町ツイジ・吉武・今宿五郎江遺跡などで出土している。起耕具としては、G型の平鍬・二又鍬・三又鍬・多又鍬・平鍬F型・鋤類・ナスビ型木製品類があり、整地具として杁・耙、収穫具として竪杵、補助具として槽・田下駄・槌がある。この時期になると、鍬類は諸手鍬など丸柄孔をもつものがなくなり、方形柄孔をもつものが出現し、二又鍬があらわれる。平鍬F型が比恵・田村遺跡でそれぞれみられるが、この型は、基本的には本地域にないものと思われる。また、鍬類柄孔部の方形化に伴い、断面円形をなす棒型の柄から、本調査地点出土の527・534にみられるような二型の柄が出現し、鍬類組合わせ着装具もあらわれる。鋤類に、肩部に張り出し部をもつもの、刃部がフォーク状となるものが出現する。鍬類や鋤の刃部に金属刃（鉄刃）を着装したと考えられるものが出現するのも、この時期からである。しかし、低湿地遺跡での出土量は極端に少なく、比恵遺跡出土の平鍬・鋤が約10点出土しているが、すべて金属刃着装と考えられるように、台地上の井戸出土のものと好対称を示している。このことは、金属刃着装の平鍬・鋤

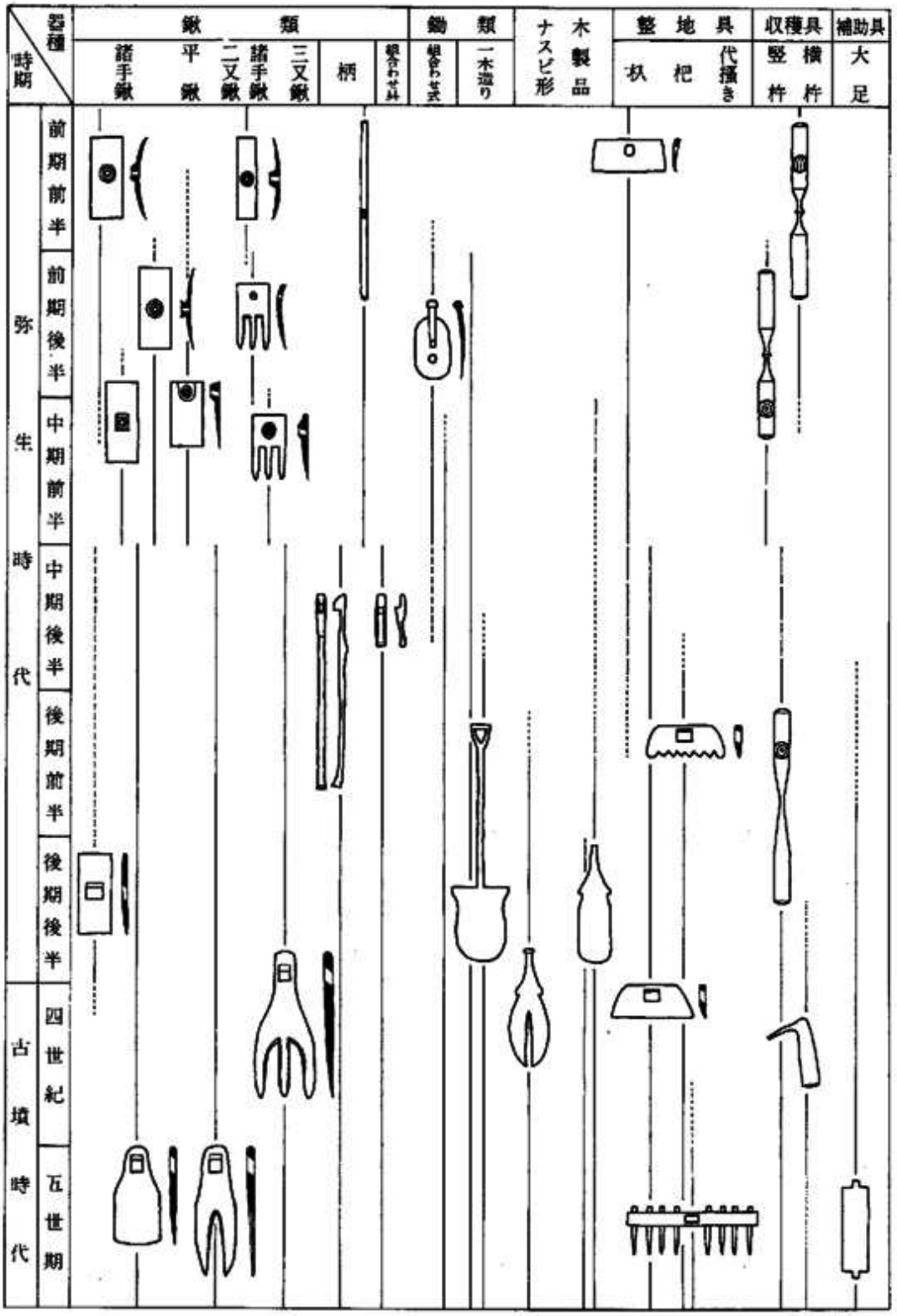


Fig.66　農具変遷模式図

は、農具というよりは、土木耕具とみるべきではないだろうか。ナスビ形木製品は未出土であるが、板付遺跡で柄が出土しており、この時期には少なくとも出現していたとみられる。杷は後期前半から出現し、竪杵は搗部と握部の境が不明瞭となり、握部の造り出しがなくなる。

弥生時代後期後半から4世紀の農具は、本遺跡をはじめ、那珂君休・比恵・湯納遺跡、辻田・赤井手遺跡（春日市）などで出土している。起耕具としてG型の鍬類・鋤類・ナスビ形木製品、整地具として払・杷、収穫具として穂摘具・竪杵・横杵・臼、補助具として槽・大足・槌などがある。ナスビ形木製品はこの時期になると出土例があるが、少ない。穂摘具は、前時期まで石製品：石庖丁に頼っていたが、この時期になると鉄製摘鎌が出現する。鉄製摘鎌に木片が付着しており、木質部の存在は知られていたが、実体が分からなかった。那珂君休遺跡第4次調査で、カシの柾目取り材を用材とした鉄製摘鎌の木質部が出土し、鉄製摘鎌に紐掛用穿孔のある握部をもつことが分かった。横杵は、マンサクの枝分かれ部を用材として、この時期から出現する。臼はこの時期から出土例があるが、前時期からあったと考えられる。この時期の他の木製品としては、工具・紡織具・漁撈具・汁器類・祭祀具・建築材などがある。

5世紀の農具は、本遺跡をはじめ、三筑・那珂・四箇・田村・拾六町ツイジ遺跡などで出土している。起耕具としては、G型の鍬類・鋤類・ナスビ形木製品類があり、整地具として払・杷・代掻き、収穫具として竪杵・横杵、補助具として槽・大足・槌類などがある。代掻きは刃部を約8本組合わせたもので、この時期に出現する。この時期の他の木製品としては、工具・紡織具・漁撈具・汁器類・武器・祭祀具・建築材と多岐にわたっている。

以上、簡単に木製農具を時期別にみてきたが、ここでまとめてみることにする。木製農具は突帯文土器期の水稲耕作開始に伴って、起耕具である諸手鍬、整地具である払、収穫具である竪杵が出現する。弥生時代前期後半になると、三又鍬・鋤類が出現する。このことは、貯蔵穴の増加および炭化米の出土量の増加と期を同じくしており、水田域の拡大を示していると考えられる。中期後半になると鍬類柄孔部が方形化し、二又鍬が出現する。この時期は、石斧柄がなくなり、袋状鉄斧柄が出現することと期を同じくしており、木器製作工具の鉄器化を示している。中期後半から4世紀にかけては杷が出現するとともに、起耕具の各器種の出土量比が異なってくる。例をあげると、標高が高くなるほど時期が後れて、三又鍬が多量に出土する一時期がある。また、逆に低湿地遺跡では新しくなるほど三又鍬の出土例は少なく、二又鍬・平鍬が多くなる。このことは、三又鍬が開墾起耕具で、二又鍬・平鍬が水田管理起耕具と考えられ、水田化が谷部へ上がっていったことを示しているといえよう。5世紀前半代になると、整地具に代掻きが出現し、日本における水稲耕作用農具の各器種のセットが揃い、水稲耕作道具および技術が確立した時期であるといえよう。なお、7世紀に入ると、木製農具としてナスビ形木製品・鋤・代掻きなどがあるが、出土量は極端に少なくなる。ただ、農具柄と考えられるものは

一定量出土しており、起耕具・整地具が鉄器化したと考えられる。

3．まとめ

本調査地点では、弥生時代終末期・5世紀前半から後半の大溝を検出し、多量の土器・木器が出土し、多大な成果を得ることができた。成果と課題をまとめると、以下のことがいえよう。

(1) 第3号溝の検出

弥生時代終末期の大溝および堰の検出は、当時の土木技術を知ることができるとともに、本地域における水稲耕作の定着化を示しているといえよう。また、柱材など建築材の出土は、当時の建物を考えるうえでも貴重なものであるといえよう。

(2) 5世紀中頃の2条の大溝の検出

この大溝は、第4・7次調査地点と第10次調査地点検出の古墳時代大溝の中間部で流路決定に一役を果たすとともに、当時の水利施設を考えるうえで貴重であるといえよう。また、第2号溝は第1号溝の改修と考えられ、小形模造船をはじめ、第1号溝上層の遺物出土状態は、水利施設に対する祭祀行為、漆塗布の敷類柄の出土は、農耕に対する祭祀行為を考えるうえで貴重である。

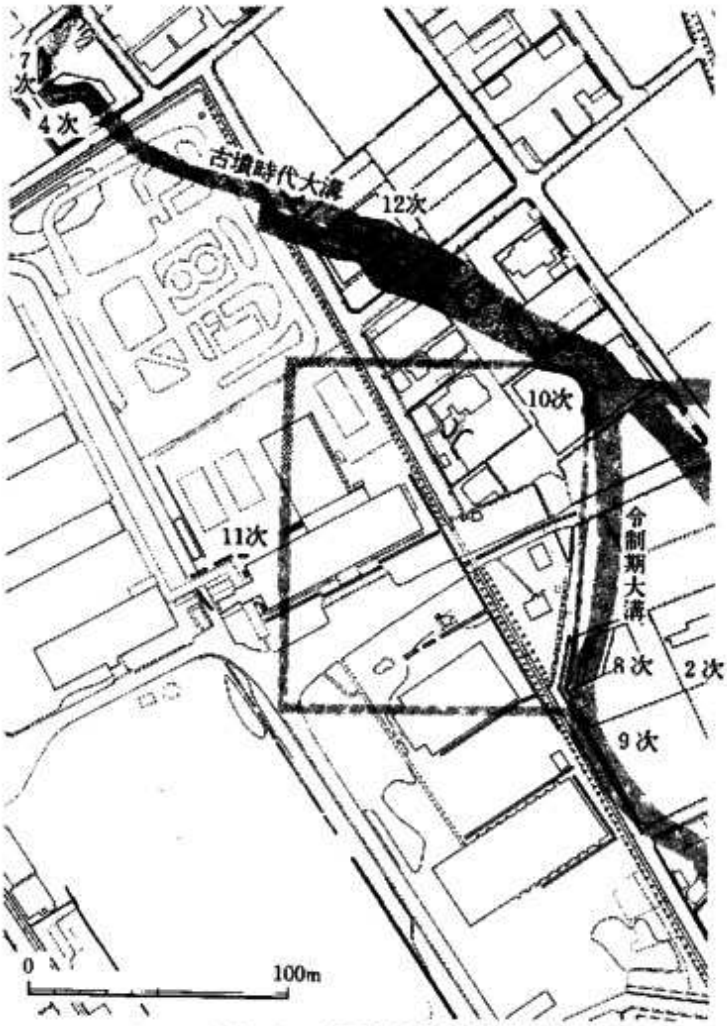


Fig.67 高畑遺跡各調査地点検出遺構関連図

図　版

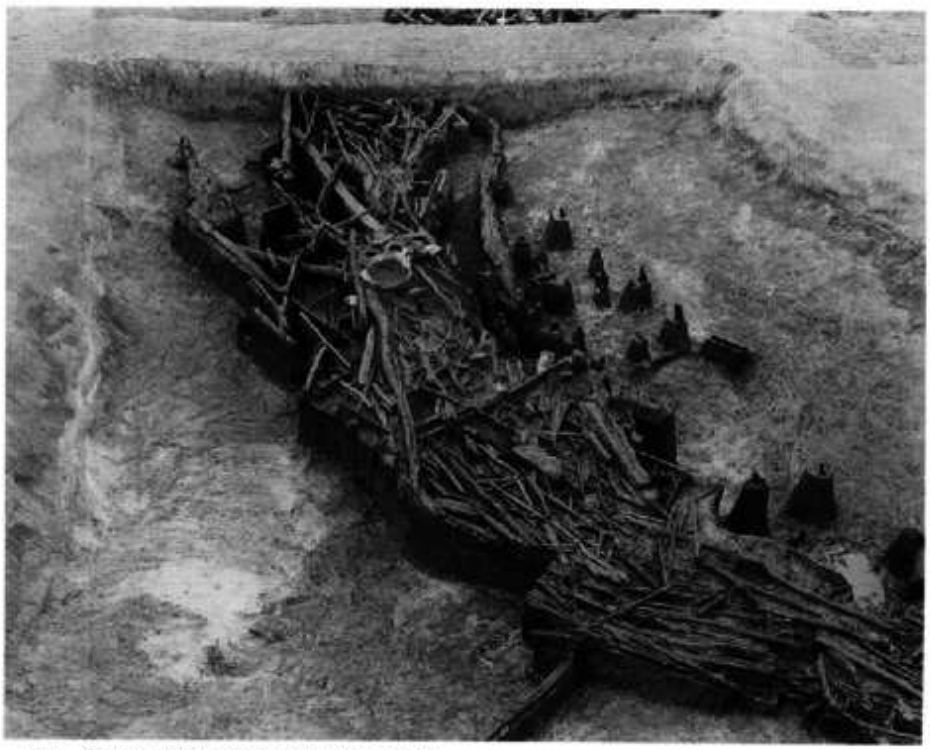
PLATES

(1) 周辺現況（東から）

(2) 調査区全景（西南から）

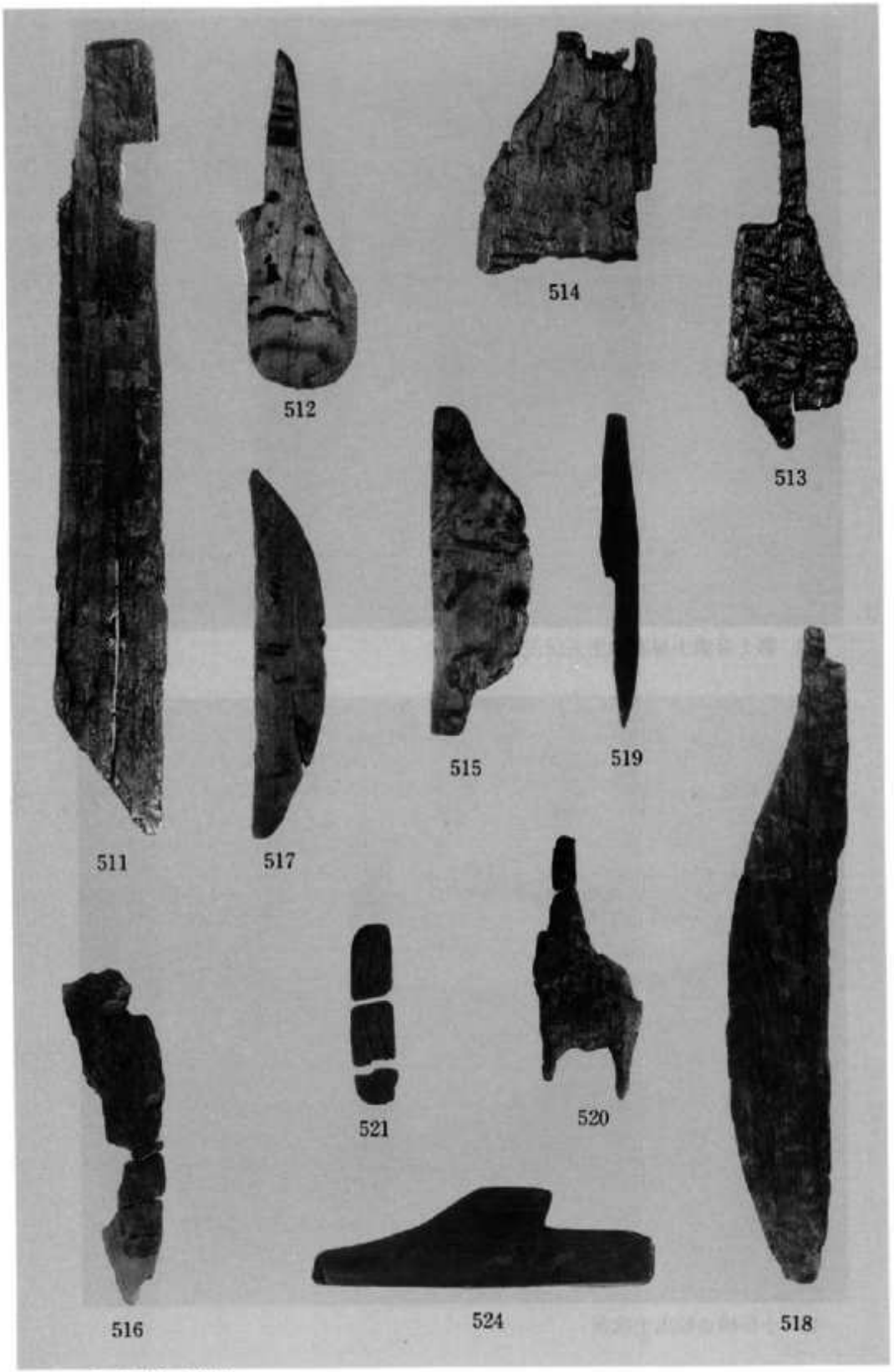
(1) 第1号溝上層遺物出土状況（南から）

(2) 第1号溝上層遺物出土状況（北から）

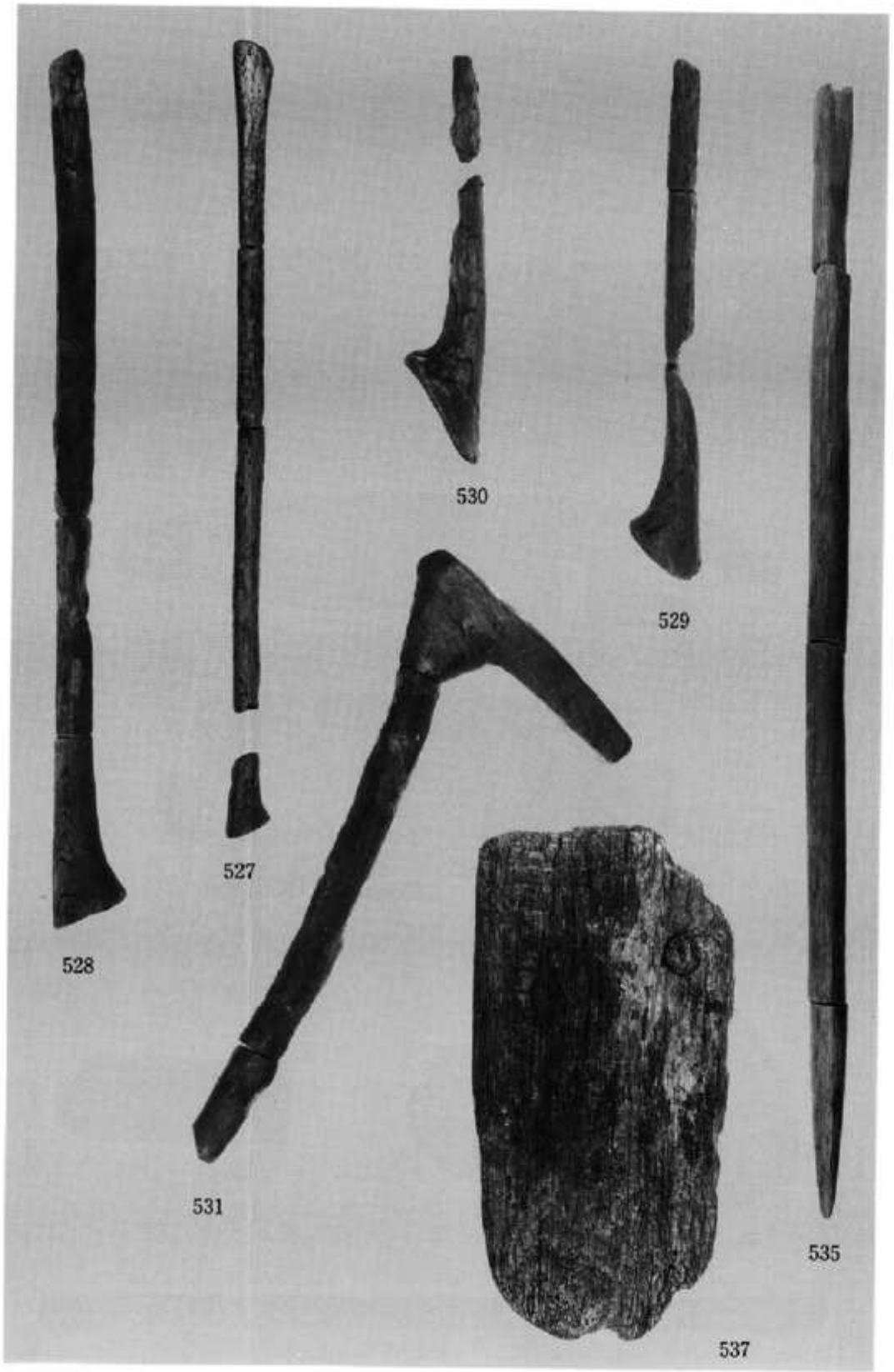


(1) 第1号溝上層遺物出土状況近景

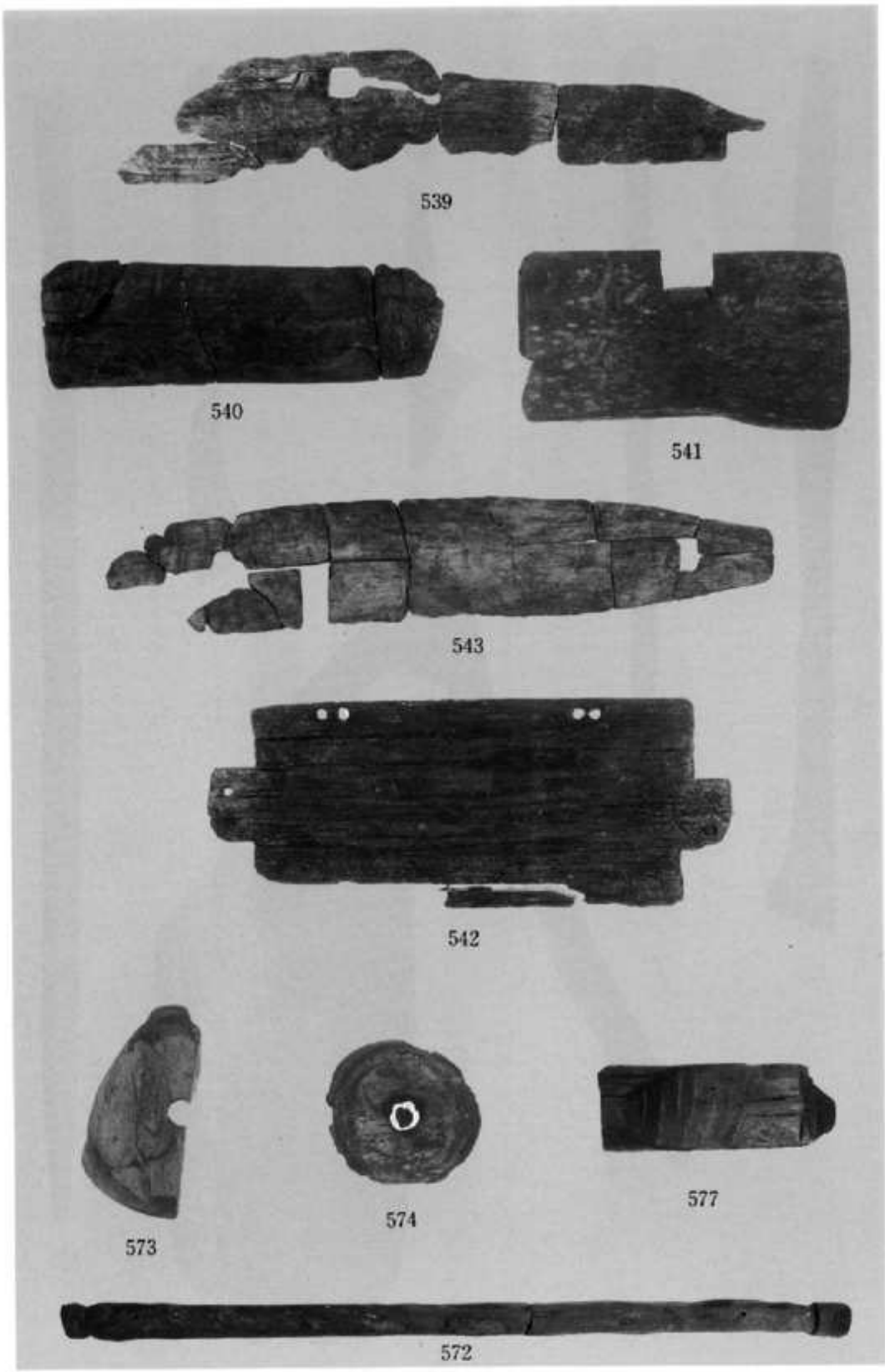
(2) 小形模造船出土状況



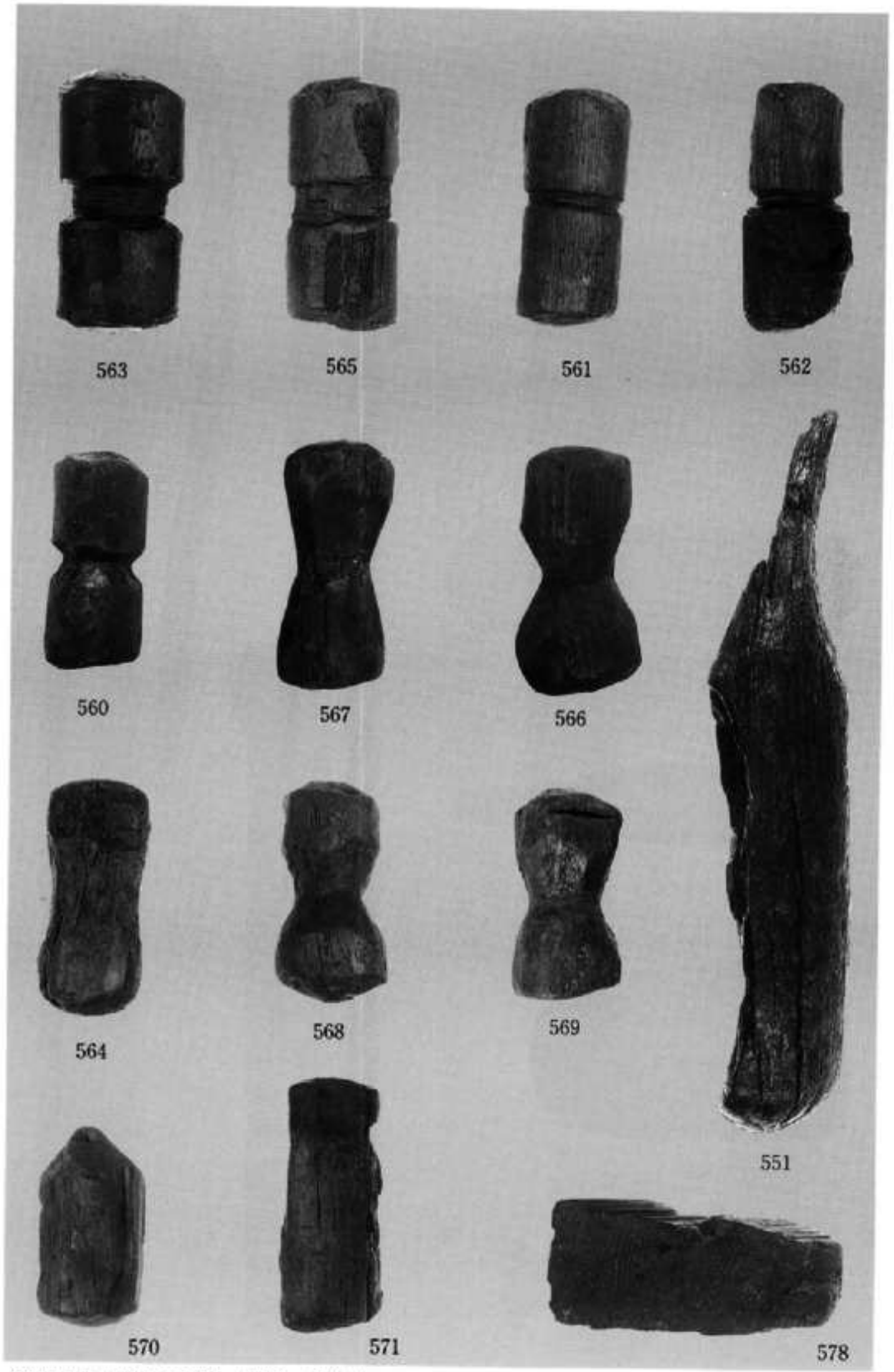
第1号溝上層出土鏃類



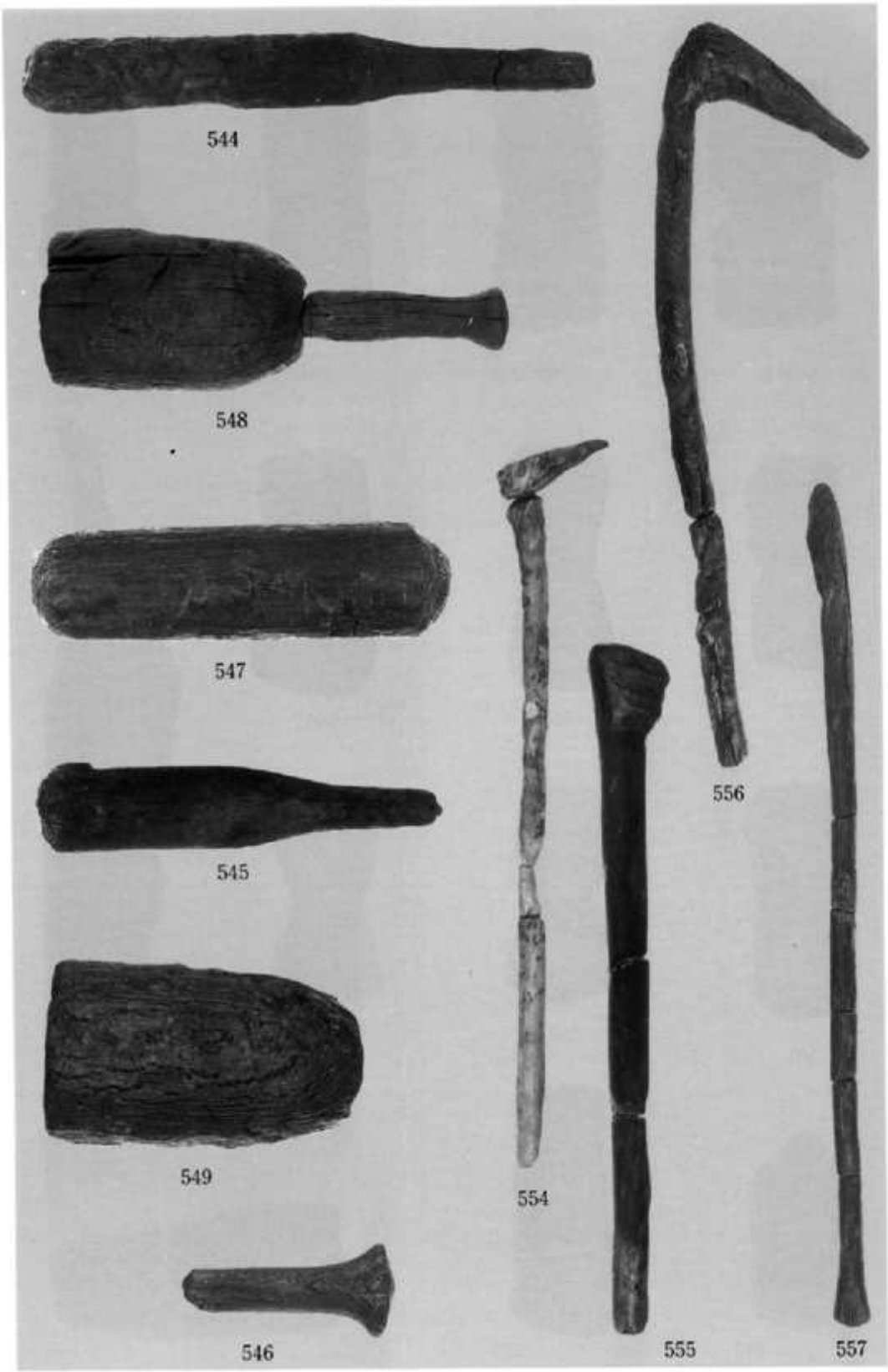
第1号溝上層出土鍬類柄および鋤類



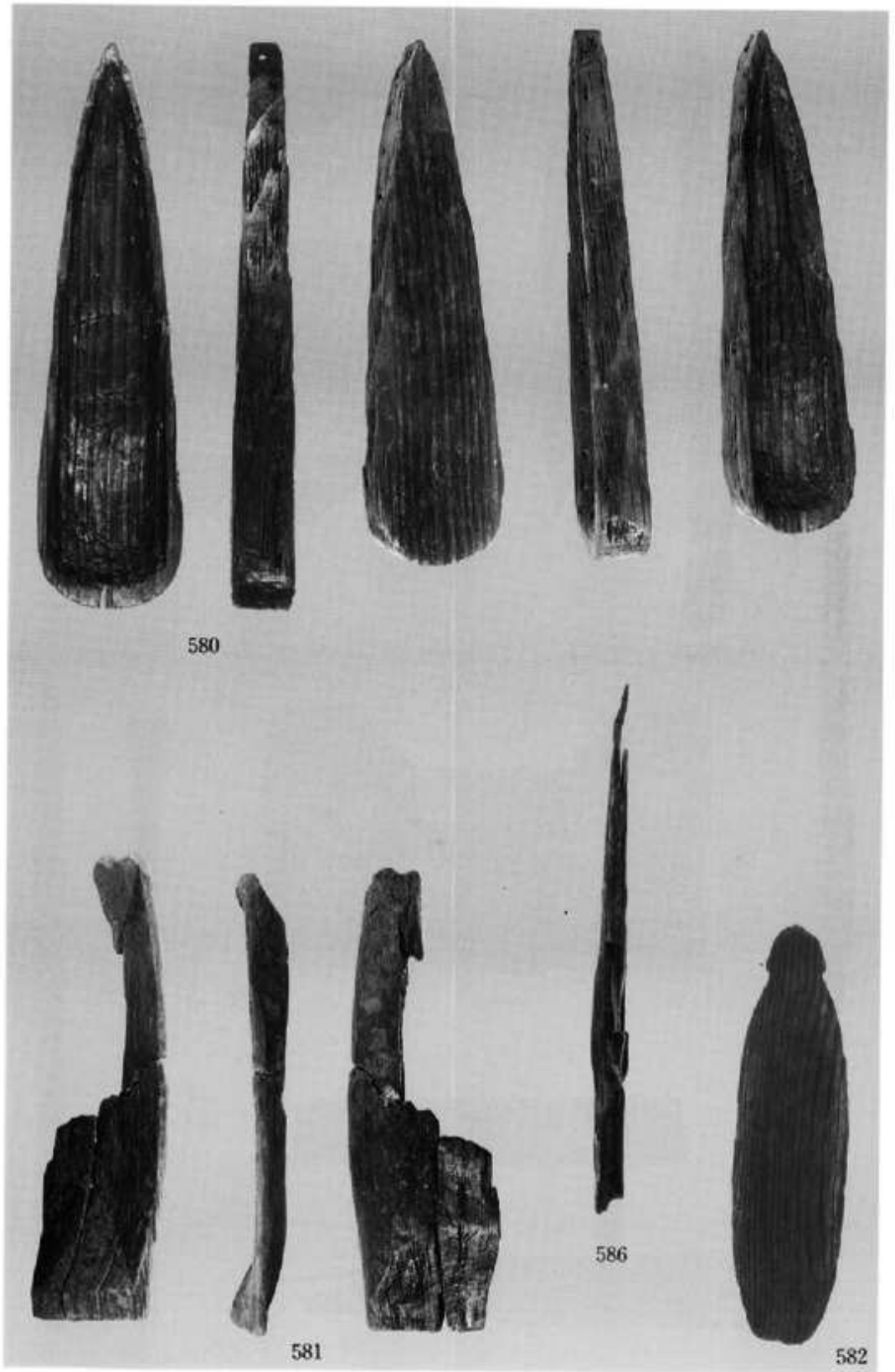
第1号溝上層出土杁・大足・紡織具



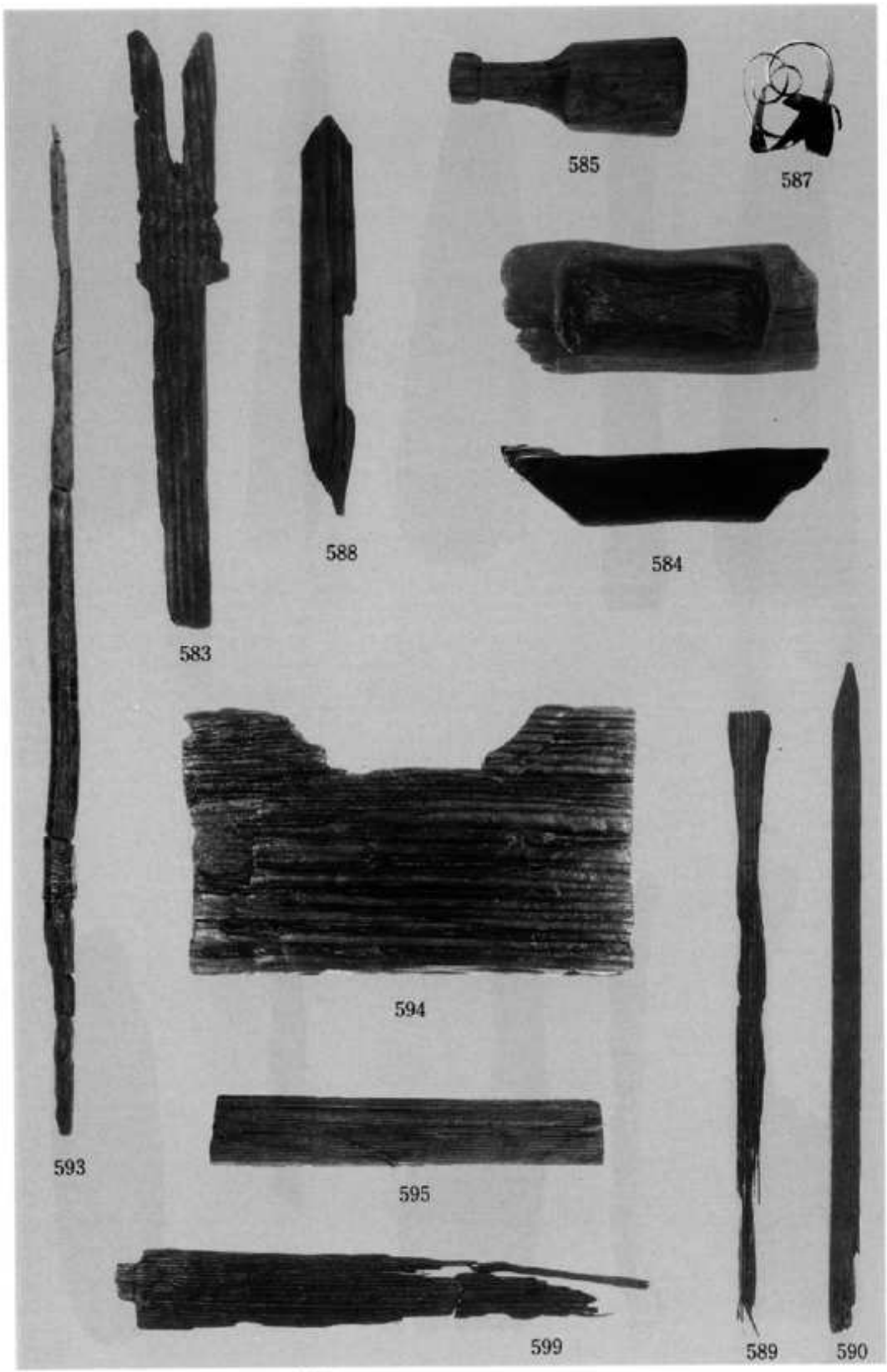
第1号溝上層出土編錘・竪杵・工作台



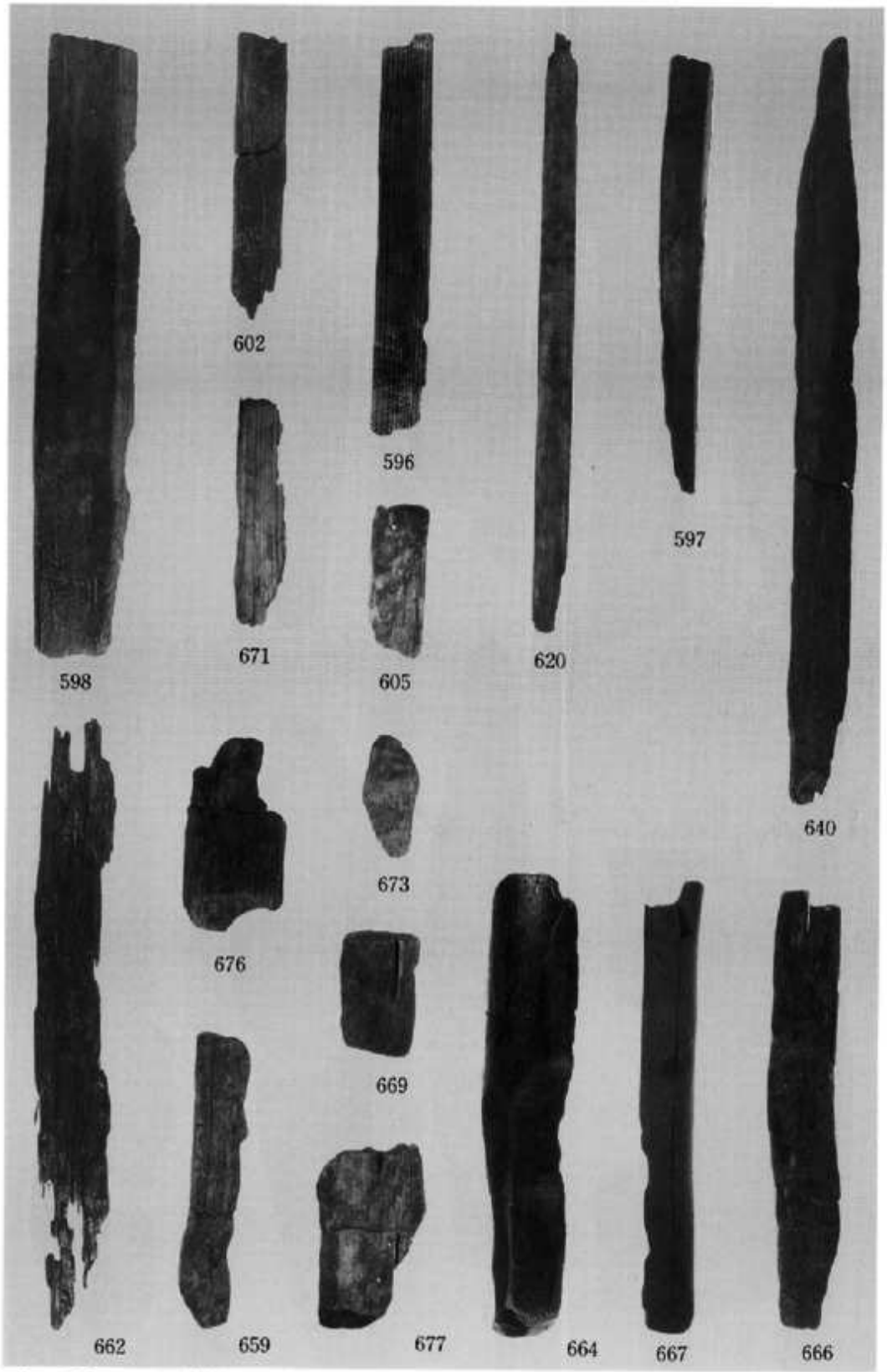
第1号溝上層出土鎌・鉄斧柄・鉄鎌柄



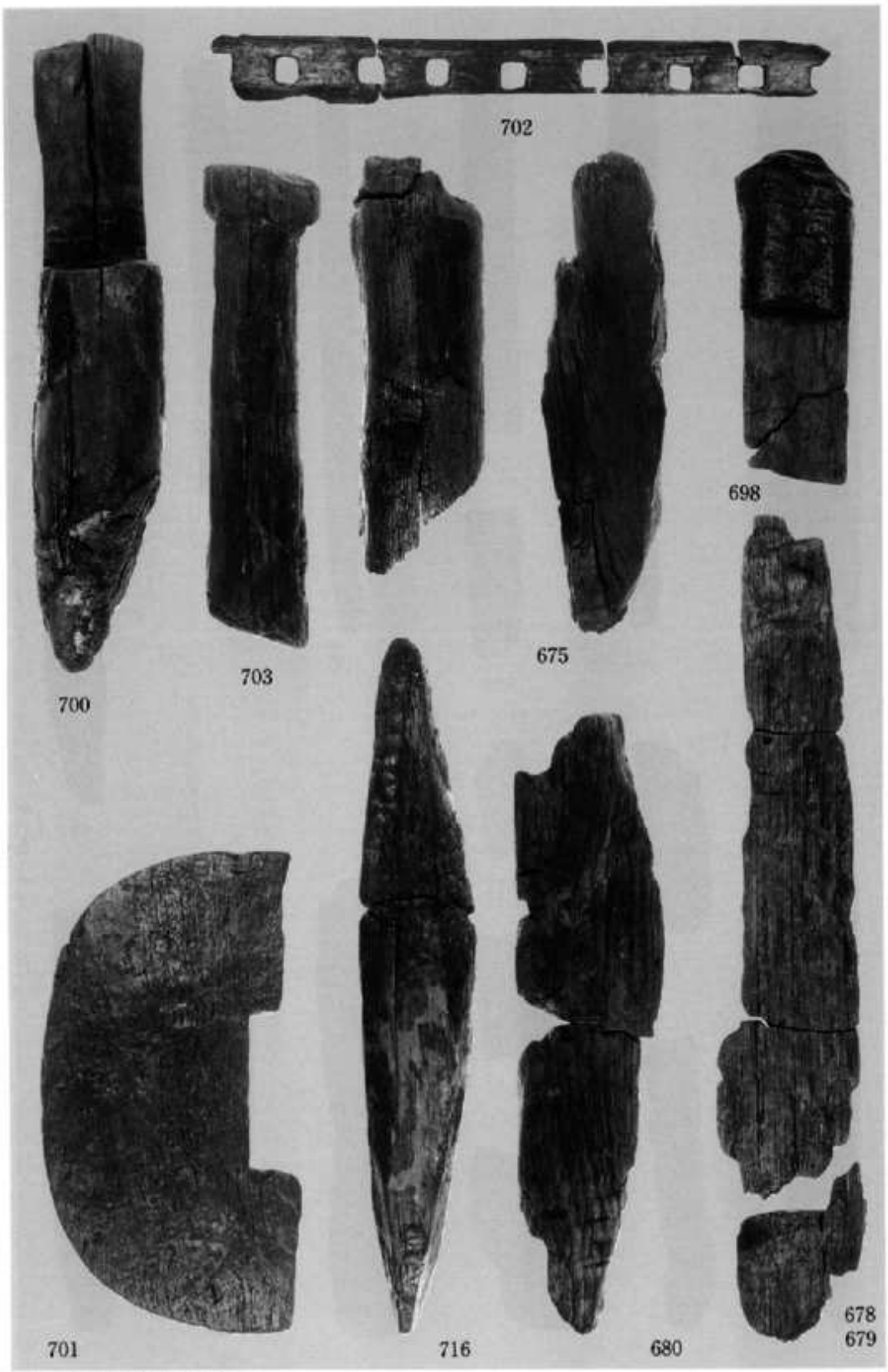
第1号溝上層出土小形模造船



第1号溝上層出土武器・槽・板材



第1号溝上層出土板材および加工材



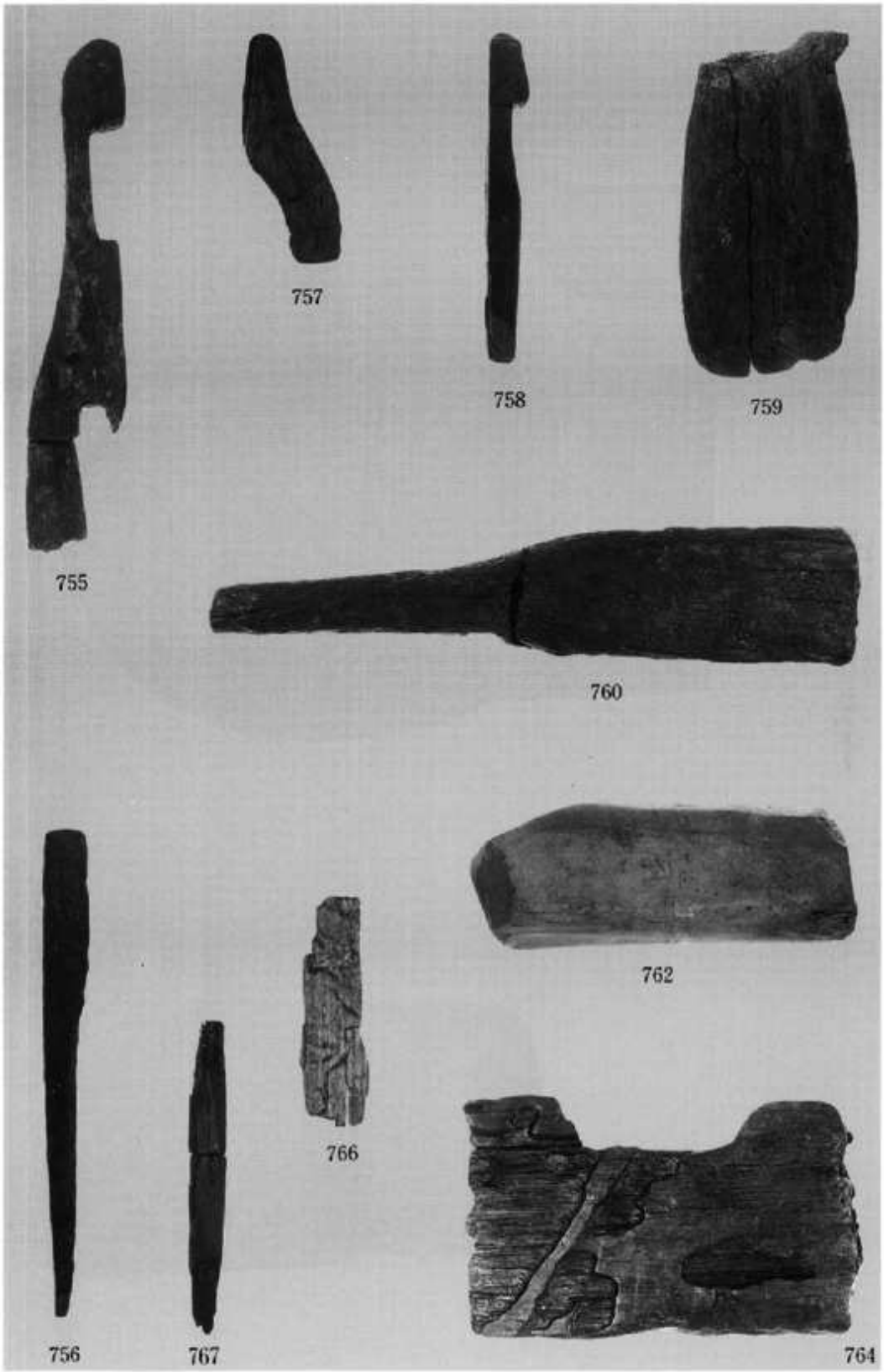
第1号溝上層出土建築材

(1) 第1号溝上層完掘状況（北から）

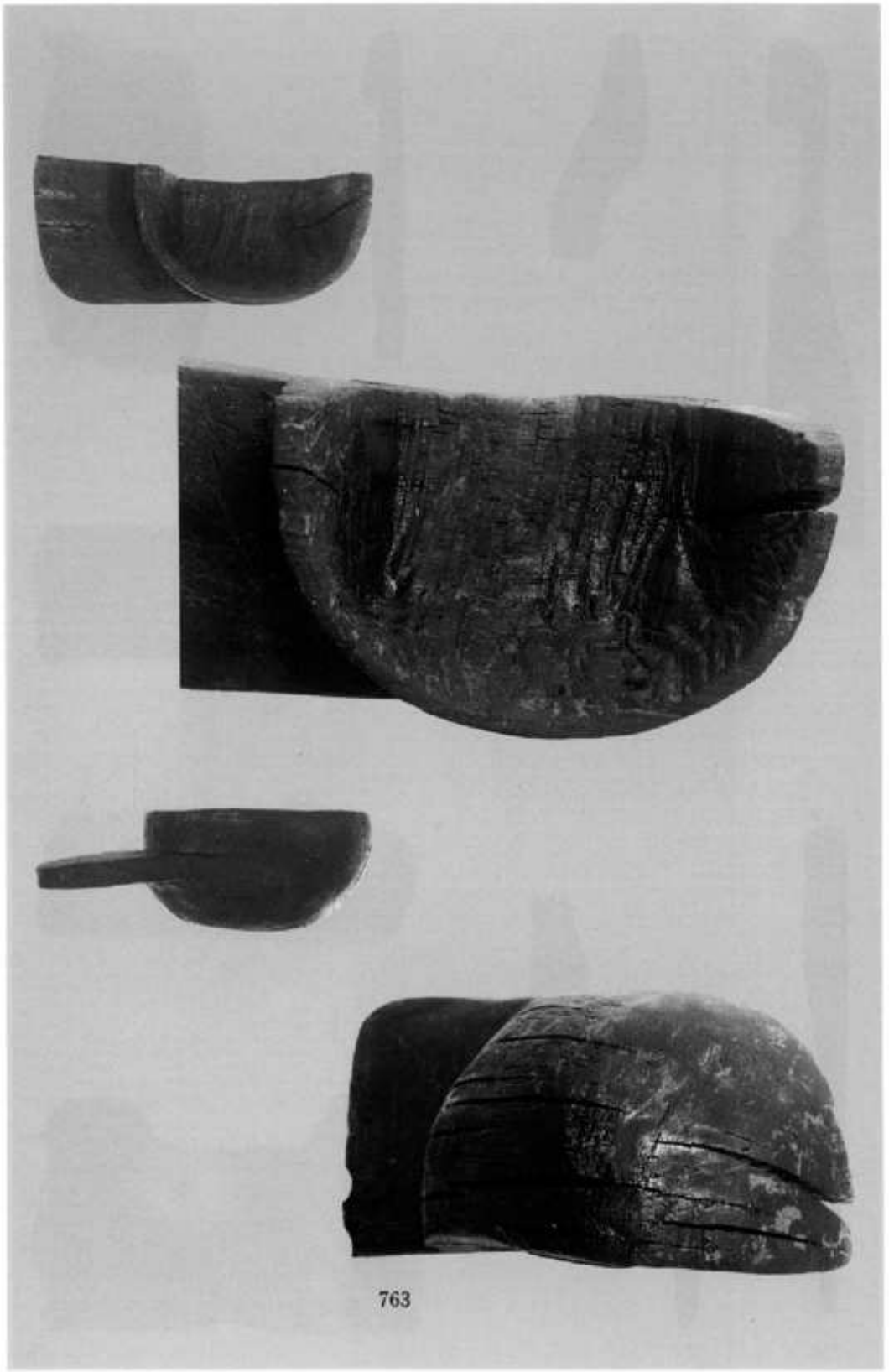
(2) 第1号溝上層完掘状況（南から）

(1) 第２号溝遺物出土状況（北から）

(2) 第２号溝完掘状況（北西から）



第2号溝出土木器



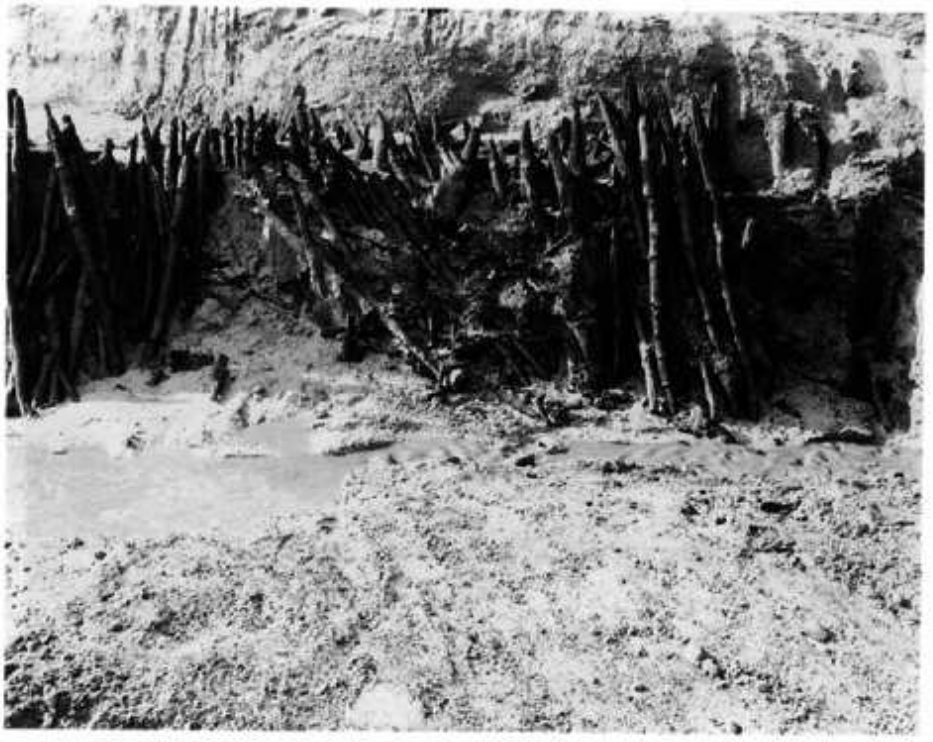
763

第2号溝出土把手付容器

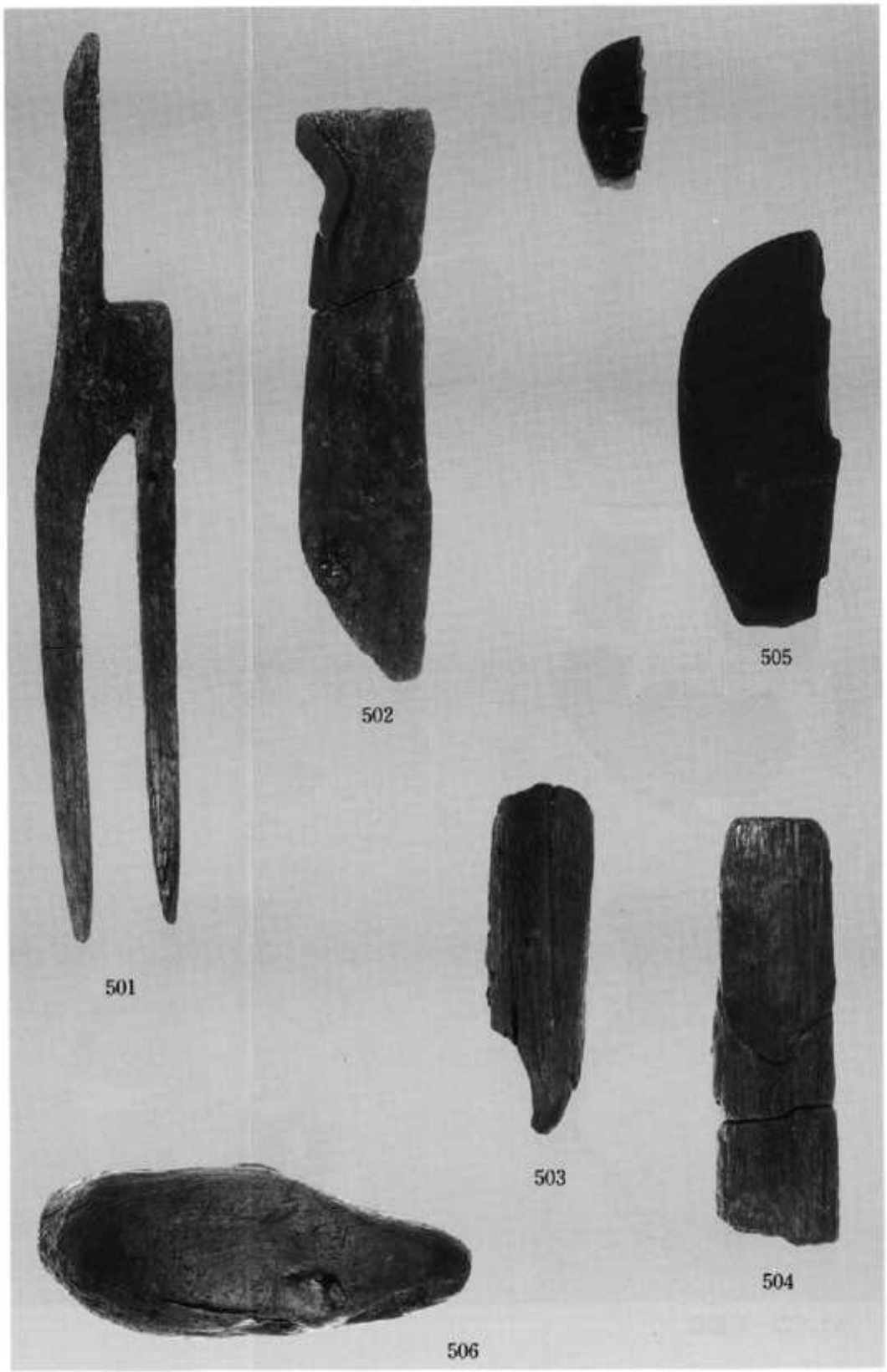
(1) 第3号溝護岸および堰検出状況（南から）

(2) 第3号溝護岸および堰検出状況（東から）

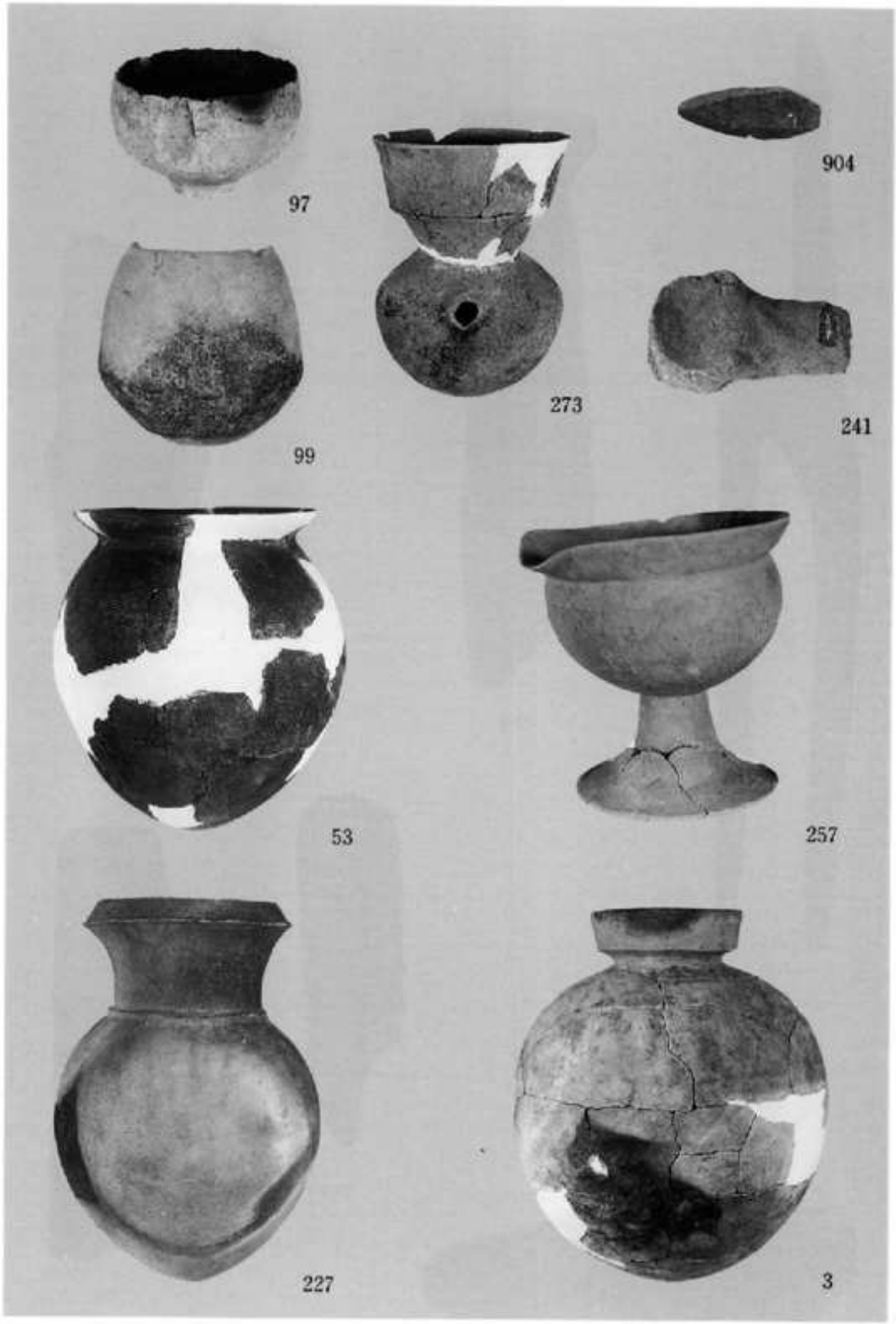
(1) 第３号溝護岸施設状況（東から）



(2) 第３号溝堰杭群状況（南から）



第3号溝出土木器



出土土器・石製品

板付周辺遺跡調査報告書（15）
－高畑遺跡第12次調査地点－

福岡市埋蔵文化財調査報告書　第210集

1989年（平成元年）３月31日

発　行　福岡市教育委員会
福岡市中央区天神一丁目８番１号

印　刷　祥文社印刷株式会社